

奇譚クラブ

1957年 11月号

11
月
号

體驗告白
架空小說

ダイアナ夫人
殘虐芸術展覧会

伊藤晴雨

昭和三十三年十月三十日印
昭和三十三年十一月一日發行
（第十一卷 第十一號）
（第十一卷 第十一號）
（每月一週一日發行）
昭和三十三年四月二十日第三版
（每月一週一日發行）

奇譚クラブ

昭和三十三年十一月号

11

奇譚クラブ

昭和三十三年十月三十日印刷 十一月号 (第十一卷第十号)
昭和三十三年十一月一日發行 (每月一回一日發行)
昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

定價二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

探偵小説新考……………東 一郎
蜂胸完成……………藤間 洋子
とりこの白人娘……………藤木 仙治

○九月号(復刊第八号)
定価二百円(〒8円)

口絵 美しい飼育物の調教……………四馬孝・画
吊り加味したアイデア北原純子・画
緊縛フット二題……………須川 花坂・画
ナイフ投げの的……………B I R A R Rより
女学生……………北原純子・画
欧米式新スタイル二題……………(?)
洗滌とおむつ……………月岡 映子
文学に現れた同性愛……………藤見 郁子
私の「ふんどし」……………松原 三千代
「被虐哀歌」其の後……………真金 銀十郎
マニアの女生徒の手記……………池田 金三郎
奈子の恋愛について……………門田 奈子
沼正三の手帖……………沼 正三
お灸を据える女性雑誌……………松原 正三
映画に現れた拷問場面……………左 巻
現代マゾヒズム芸術時評……………東 一郎
探偵小説新考……………原 忠正
芝居の責め、紅皿欠皿……………本 田
最近の映画から……………白石 春夫
悦庵に関する一考察……………菅 原
「切腹の歴史」……………松 原
私のコレクシヨンのより……………角 間
玉稿落穂集……………編 集 部

○十月号(復刊第九号)
定価二百円(〒8円)

口絵 北原純子十月集、壊れ易き獲物
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎
現代マゾヒズム芸術時評参考資料……
引廻し……………春日 三郎
米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル……
サディズム・シオン詳察……………藤木 仙治
お灸の女王コンクール……………岩瀬 祥一

○十二月号(復刊第十号)
定価二百円(〒8円)

口絵 大衆雑誌と貴族……………青山三枝吉
私の洗滌プレイ……………ラブマン
受刑生活の思い出……………福村 光治
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正
「ますらお派」の犯罪……………青山三枝吉
泥棒に縛られた話二件……………池田 正一
エスキモー娘の切腹……………本 間
ある夢想家の手帖から……………沼 正三
「洗滌」に関するレポート……………東 一郎
締めつけられた女優達……………古 留
泥棒に入られた南田洋子……………古 賀
責め絵の今昔……………伊 藤
「一男色者の手記」……………矢 野
私のアイデア「晒し台」……………千 葉
緊縛映画速報……………東 一郎
探偵小説新考……………藤見 郁子
サジスチンの半生記……………藤 野
読・乗馬スポンの女腹切……………藤 山
口絵 新着フット紹介(一)……………北原純子・画
「いであ」より……………(雲井久子)
拘束服とマスク、欧米式新スタイル……
或るポーズ……………(雲井久子)
現代マゾヒズム芸術時評……………滝見 子
文学に現れた責めの描写……………藤見 子
私のふんどし(二)……………松原 三千代
異性より同性に興味……………畑 村
コルセット・マンボ……………林 一
スカルトへの魅力……………東 一郎
牢獄の花嫁……………真 木
黄色オラミ誕生……………岸 本
和装女の縛り責め展覧会……………岸 本
美女決闘場面のアイデア……………小 西
腋毛礼賛……………南 秀夫
女武者自刃……………藤 山
ある夢想家の手帖から……………沼 正三
醜態への幻想……………淡 美

昭和三十三年
○一月号(復刊第十一号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵 玉稿落穂集……………編 集 部
魂を病む人……………北原 純子
私の告白二題……………青 葉
家畜人ヤブー……………沼 正三
女性化願望と女性ホルモン……………古 井
糸姫の体験……………高 橋
美とワイセツの限界……………柳 沢
緊縛映画速報……………千 葉
防具使用による窒息死……………近 藤
マゾ・クラブの結成を望む……………山 田
告白「責めとフエチの自画像」……………越 野
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正
昭和三十二年
○一月号(復刊第十一号)
【定価二百円】(〒8円)
口絵 新着フット紹介(アメリカ)……………北原純子・画
花嫁受難二題……………(2)
「ボウニ」分岐点……………一場 面
鳴門の妖鬼(水戸黄門漫遊記第十話)……………須川 令子
ADESUGATA……………北原純子・画
お灸を据える……………(5)
欧米式新スタイル……………(5)
文学に現れた責めの描写……………藤見 子
花と朝風……………北原 純子
フエチに関する切抜きから……………阿 川
黄色オラミ誕生(第二部)……………木 真
大奥女決闘……………京 洛
電気責めに関するノート……………甲 斐
ある夢想家の手帖から……………沼 正三
女性切腹例抄記(上)……………田 谷
ある女給の体験……………日 下
ある女給の体験……………青 葉
遊女八重路の責め……………本 田
女性化願望と女性ホルモン……………古 井
特異な角度から(折檻と拷問)……………長 門
続々・乗馬スポンの女腹切……………藤 山
女性化願望と女性ホルモン……………古 井
家畜人ヤブー(第二回)……………沼 正三

○二月号(復刊第十二号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵 舞踊女師匠の責めの実験……………岸 本
戦地での同性愛……………東 一郎
サジスチンの半生記……………藤見 子
児童雑誌にみた惨虐性……………東 一郎
玉稿落穂集……………編 集 部
ヴェールを脱いだ肢体美……………畑 村
ムチ打ちと緊縛……………千 葉
緊縛映画と雑誌の挿絵……………千 葉
○三月号(復刊第十三号)
【定価二百円】(〒8円)
口絵 新着フット紹介(アメリカ)……………北原純子・画
洋面スチール名場面集(四場面)……………(3)
北原純子責め集「捕われの令嬢」……………「庭
先でのお仕置」狼煙を噴きまされた女優
たち……………(6)
「欧米式新スタイル」……………(6)
我が異常性の記……………南 秀夫
オット・スタイルの女腹切……………藤 山
お灸の研究……………須 藤
ある夢想家の手帖から……………沼 正三
マゾヒズム見たり聞いたり……………春 木
サジスチンの半生記(三)……………藤 野
秀緒の告白……………藤 山
家畜人ヤブー(第三回)……………沼 正三
サディズムの芽……………岸 本
女教員の責め折檻……………本 田
異人屋敷の裸女……………白 金
お灸の歴史……………原 忠正
現代マゾヒズム芸術時評……………辻 村
話の肩籠……………阿 川
フエチに関する切抜きから……………(2)
「スロース・クラブ会則」……………並 木
私の「縛り美五原則」に就て……………月 岡
洗滌とおむつ(二)……………松原 三千代
私のふんどし……………(二)



奇譚クラブ

復刊第二十号 目次
十一月号

責絵拘 東 服 四馬 孝・画
淹れい子画集 — 淹れい子・画

口 舞 妓(まいこ) 予 後(よこ)

頭 緊縛写真 猿ぐつわと縄目 (伊吹真佐子嬢)

巻 縛られた女優たち (場面集) 楓 月太郎提供

サジスチツクな洋画スチール二題
伊映画「カルタゴの女奴隷」 米映画「異教徒の旗印」

口責めと幾何学図形……………久留木 栄…18

悲しきはマゾヒストの告白……………三根耕二…22

性倒錯の男と女……………山下真一…26

美容病院……………久留木 栄…28

体験記 つばきの沼……………椿 秋二…36

『秘蔵の黒髪』……………白金紅次…40

ある夢想家の手帖から……………沼 正三…46

「苦しみを求めて」(完結)……………近藤 一…50

私の好きな女靴……………波路 洋…55

女性ホルモン服用の実験報告……………古井真哉…56

再映画化作品について(2)……………阿部 秀…59

私の本箱から……………星光一…60

ダイアナ夫人……………乗杉貴代子…64

妙齡美人の吊責め……………岸本青柳…71

ジエームス・デインの事……………黒岩縄一…75

残虐芸術展覧会……………伊藤晴雨…76

私のキタ・セクシユアリス……………山本節夫…78

創作 東京自殺クラブ……………南方 純…84

「跪いた勲爵士」の物語……………菅 道夫…90

告白アヌス自虐体験記……………保月定吉…92

あらびやの奴隷市……………泉 かよ子…91

不良グループの私刑……………本田由郎…97

アブ・モード・オール・スクラップ……………矢桐重八…110

女はらきりの夢……………藤山秀緒…115

雑報と雑感……………沼 正三…118

終戦奴隷(後篇)……………雪俊 遙…121

マゾヒズムへのいざない……………天野哲夫…135

下着通信……………山下真一…133

特異な角度から(3)……………九雅節夫…143

「演 出」……………牧 高志…143

家畜人ヤプー(第十二回)……………沼 正三…154

通信 最近号の感想と批評……………近藤 一…164

読者通信……………161

スクリーンで縛られた女優たち
幽霊の悲劇……………四馬孝・面
習作……………栗原伸・面
浴槽の新妻……………栗原伸・面
森の小径……………(秋千恵子嬢)
大映映画「魔の花嫁衣裳」より
我が異常性の記……………南 時夫
髪と絵……………荒尾 謙介
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木 俊三
あふり責め奇聞……………本 田 由三郎
エチフに關する切抜きから……………阿 川 正三郎
ある夢想家の手帖から……………沼 田 正三郎
悪魔の勝利を夢みる男……………佐々木 信一
或る女装マニヤの記……………森 本 信一
流暢レポート……………島 本 信一
特異な角度から……………九 雅 直樹
私のふんどし……………松 原 三 郎
燃ゆる男……………藤 山 秀 緒
或るアブ・マニアの告白……………東 本 秀 緒
女同志の吊り責め……………岸 本 秀 緒
輝美悲願……………加 藤 千 春
ある女給の体験(2)……………日 下 絹 子
サジスチンの半生記(4)……………鷹 野 め 子
「流暢」に關する告白……………島 野 め 子
虐待された女中……………佐 原 直 樹
少女の切腹……………中 康 弘 樹
電気責に關するノート(続)……………甲 斐 弘 樹
続・潰滅の前夜……………土 路 草 一
スクリーンで縛られた女優たち……………千葉 栄 市

○四月号(復刊第十四号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵
女体運動機能測定器……………四馬孝・面
縛られた女優たち……………極月 太郎
緊縛映画名場面集(一)……………極月 太郎
スクリーンで縛られた女優たち……………極月 太郎
縛られ拷問を受けるシナ・ロロブリジ……………南 時夫
我が異常性の記……………南 時夫

縲とブリーフ(二)……………池田 幸子
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木 俊三
探險服姿の女腹切……………藤 山 秀 緒
スロースT.C……………並 岡 金 吉
女優を縛る監督達……………甲 斐 弘 樹
木馬責に關するノート……………原 正 三
現代マゾヒズム芸術時評……………滋 賀 雄 二
女装愛好者の手帖から……………沼 田 正三郎
ある夢想家の手帖から……………本 田 由三郎
緊縛の趣劇……………武 田 源 助
インナーベルト責め……………法 谷 四 郎
続・切腹曼陀羅図……………法 谷 四 郎
緊縛映画名場面集……………土 路 草 一
続・潰滅の前夜……………土 路 草 一
縛り責めを好む男と女……………岸 本 秀 緒
大衆文学の責の描写資料……………館 地 佐 渡

○六月号(復刊第十五号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵
クツワの装置……………四馬孝・面
地下室の拷問二題……………極月 太郎
振袖狂女……………極月 太郎
縛られた女優たち……………極月 太郎
「ある夢想家の手帖」(二)……………極月 太郎
緊縛映画名場面集……………極月 太郎
我が異常性の記……………南 時夫
おしめと流暢の幻想……………月 岡 秀 緒
ある女給の体験……………日 下 絹 子
私のキタ・セクシユアリス……………山 本 秀 緒
続・飛行服姿の女腹切……………藤 山 秀 緒
緊縛映画名場面集……………藤 山 秀 緒
マゾヒズム見たたり聞いたり……………春木 俊三
探り責に關するノート……………甲 斐 弘 樹
ある夢想家の手帖から……………沼 田 正三郎
切腹随想……………須 藤 正 三
ふんどし幻想……………松 原 三 郎
責給師の話……………青 木 由 一郎
加藤送別会……………本 田 一 夫
流暢器具考……………本 田 一 夫

続・潰滅の前夜……………土 路 草 一
女サジストの記……………鷹 野 め 子
「和装教室」……………白 金 紅 次
玉穂落穂集……………編 集 部

○七月号(復刊第十六号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵
地下の拷問室……………四馬孝・面
縛られた女優たち……………極月 太郎
花坂道子嬢艶姿集……………北 原 純 子
石抱き算盤責め……………藤 山 秀 緒
緊縛映画名場面集……………藤 山 秀 緒
「愛は惜しみなく」……………藤 山 秀 緒
私の本箱から……………星 光 一
幻想の娘……………館 地 佐 渡
重屏……………館 地 佐 渡
ある女性から編集長への手紙……………月 岡 秀 緒
水責に關するノート……………甲 斐 弘 樹
マツトに生きる夢……………近 藤 仁 一
続・切腹曼陀羅図……………法 谷 四 郎
南支那の鬼……………本 田 由三郎
現代マゾヒズム芸術時評……………伊 藤 忠 正
女血たるま……………池 田 幸 子
縲とブリーフ……………池 田 幸 子
一揮筆雑記……………内 田 武 夫
黒いベチコート……………山 田 津 子
那津子の流暢日記……………山 田 津 子
仏、米の婦人ふんどしに就いて……………飯 田 靖 子
防衛服と私……………飯 田 靖 子

○八月号(復刊第十七号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵
美への冒険……………四馬孝・面
加賀利江子嬢艶姿集……………加賀利江子
花魁「美吉野」の折檻……………加賀利江子
映画写真「夕立勘五郎」……………極月 太郎
洋面スチール「聖衣」……………岩 窟 野 獣

旅廻り劇団の賣場面から……………星 光 一
恋する夫人への手紙……………日 下 絹 子
ある女給の体験……………甲 斐 弘 樹
青い流暢器……………久 利 須 雄
魔女裁判に關するノート……………藤 山 秀 緒
「乗馬スポン」への憧れ……………藤 山 秀 緒
残虐な女性……………森 本 信 一
「腰巻のアンケート」……………牧 由 貴 志
おむつカヴァーと私……………矢 崎 高 一
灰色のノート……………矢 崎 高 一
「和装教室」……………本 田 由三郎
花魁「美吉野」の折檻……………本 田 由三郎
続・潰滅の前夜……………土 路 草 一

○九月号(復刊第十八号)
【定価二百円】(〒8円)

口絵
女体屈伸測定器……………四馬孝・面
いけにえの町娘……………須 藤 正 三
新緑の陽を浴びて……………秋 川 幸 子
「括られちやつたり」……………秋 川 幸 子
緊縛映画名場面集……………秋 川 幸 子
縛られた女優たち……………秋 川 幸 子
洋面スチール二題……………秋 川 幸 子
病棟の線草……………柳 沢 吉 子
ある夢想家の手帖から……………柳 沢 吉 子
探偵小説に現れた地獄絵巻……………高 崎 正 三
和装教室……………白 金 紅 次
人身御供の美女……………本 田 由三郎
魔女裁判に關するノート……………本 田 由三郎
「苦しみ求めて」……………近 藤 仁 一
水兵生活と輝……………内 田 武 夫
医学幻想……………古 井 武 夫
女体屈伸者の夢……………古 井 武 夫
切腹随想……………兵 頭 伸 哉
美少年処刑の図「笑い」……………山 口 幸 二
赤い下穿き……………高 木 栄 一
痛められし桃の実……………高 木 栄 一
続・潰滅の前夜……………土 路 草 一

四馬 孝 アイデア
並に画



拘束服

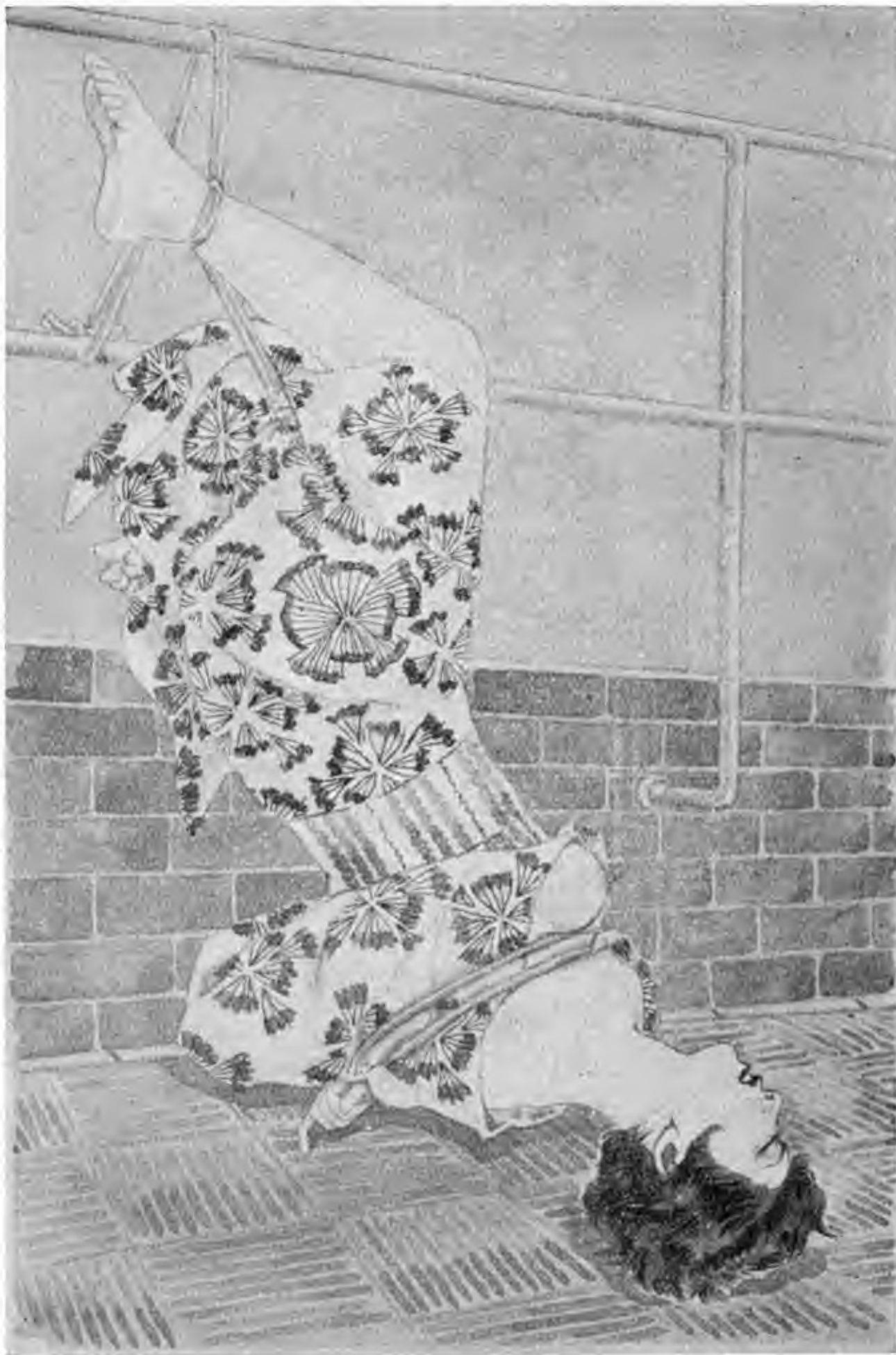
黒光りのする柔軟な革の縫ぐるみは女の全身にぴったりと寸分のすき間もなく密着する。女体の線をそのままあらわしたこの拘束服は緊縛しても鞭撻しても肌にしらの傷も与えることはないのだ。それでいて被虐者に対して与える苦痛は裸体と何ら変りはない。

滝れい子画集

舞妓 (まいこ)

『冗談せんと、はようほどいておくれやす。こんなところお母さんに見られたら、きつう叱らはりますがナ。』





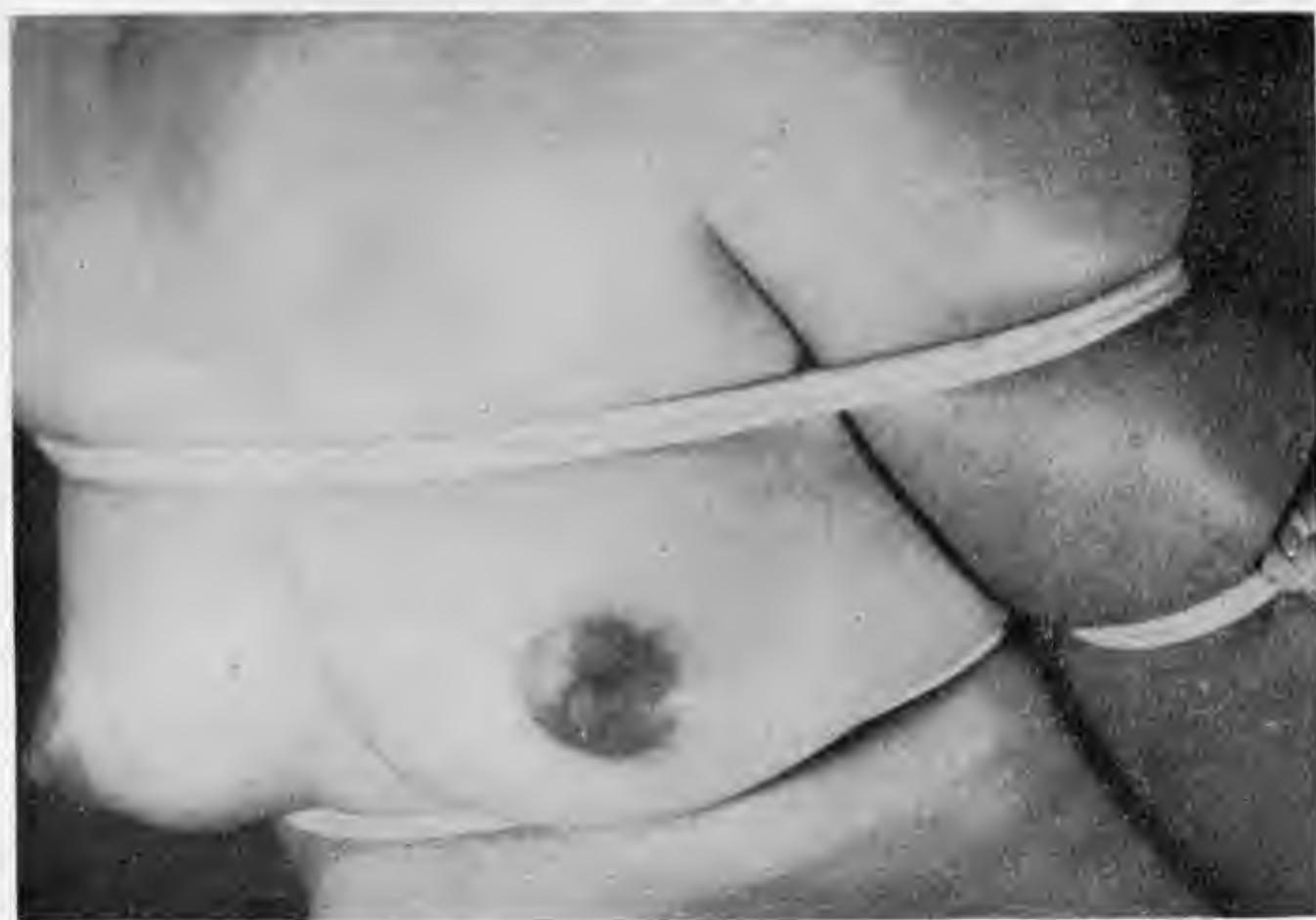
豫 後 (よご)

一年間のサナトリウム生活は生れつき色白の久子の肌をぼってりと肉づかせ綿ロープが小気味よく喰い込んでゆくのであった。

モデル：（伊吹真佐子嬢）



猿ぐつわと縄目







東映「朝焼け富士」後篇 (三浦光子)



宝塚「題名不詳」 (尾上さくら)



伊映画「カルタゴの女奴隸」より J・Mカナル
ホルヘ・ミストラル 主演
奴隸の身に堕ちた処女(マリーサ・アラシオ扮す)は、今や觀念して、高々と
十字架に縛りつけられた。破れたスカートから見える肌もあわれ。



米映画「異教徒の旗印」より J・チャンドラー
J・パランス(中央) 主演
衣が破れ肌があらわになろうとも掩うことも出来ぬ縛られた捕われの美女。



(お尻を鞭うたれようとする少女)

……厳格なオジさん……

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1957年 11月号

(第十一卷 第十号 通刊第百号)

責めのアイデアについて

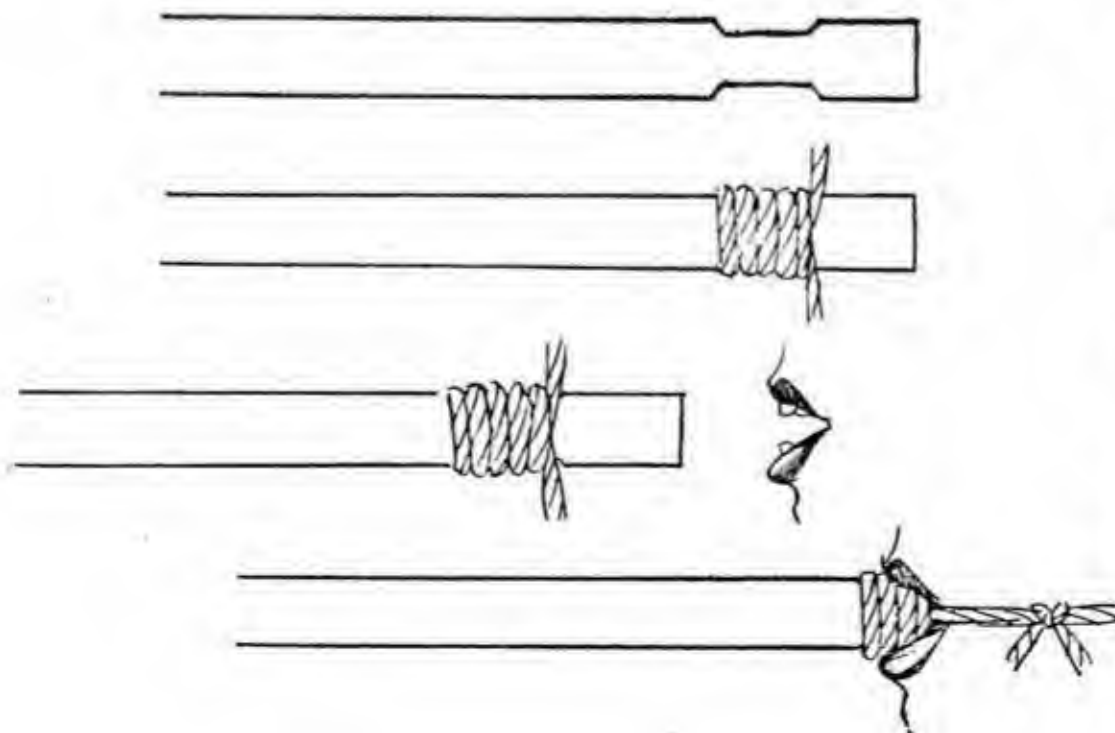
口責めと幾何学図形

久留木 栄

縛りによる責めのアイデアとしては、従来いろんな方法が発表されているが、ほとんど故人の跡を追ったものが多い。独創的なものは案外少いように思う。人間の体の形が手足胴体と限られているせいでもあるろうか。私は古くからあるところの責めの中から新しい型を探し出すというのではなく、まだ自分がそういうものの中から、発見できなかった責めを考えてみた。もし、こういう責めを古文書の中に発見された方があったら教えてもらいたい。

口責めの場合

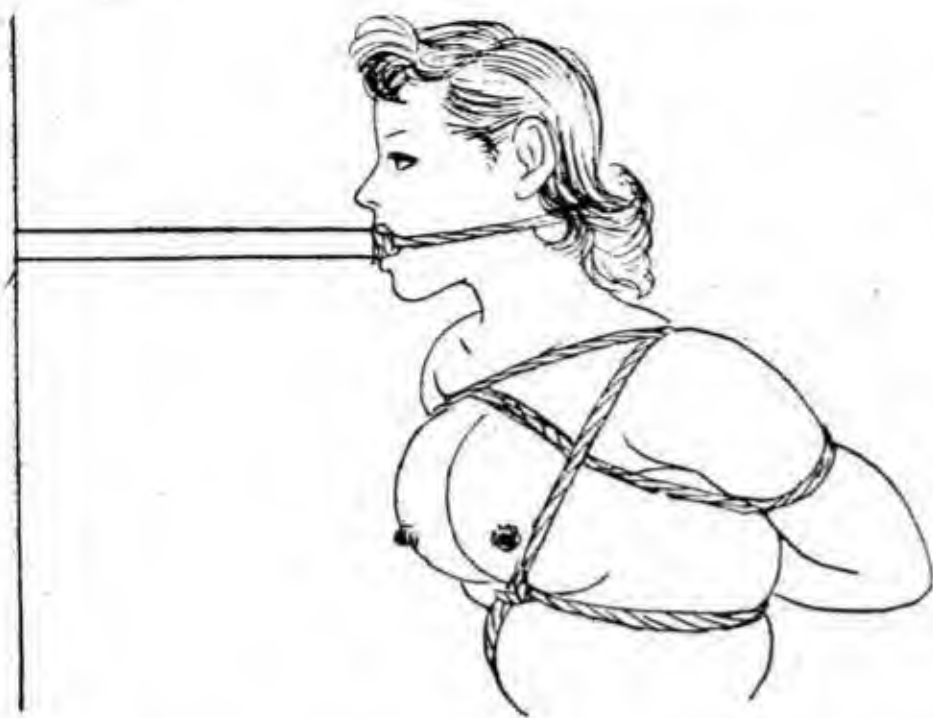
口に対する拘束は普通サルゲツワといわれるもので、その方法は、かつて吾妻新氏が本誌に発表されたものをはじめとして沢山のやり方がある。またポニテイル式の馬のくつわもある。しかし、それは本来、言語機能を奪うもので、そういう意味では土路草一氏が「潰滅の前夜」で発表されたものはたしかに新機構といえよう。しかし果して土路氏のギヤグが実現できるか、どうかは別として、私という口責めというのは、こういうものでは



なく、棒を使ったサルゲツワといったもので、それも従来のように棒を横に使わず、縦につかったものを考えてみた。棒はどんな型のもでもよいが、ここでは比較的シンプルなものを取りあげてみた。(わかりやすくするためである) 太さは口がやっと入る程度がよい。(歯の機能を止める

ので)はめる時は必ず歯で噛ませることが必要である。従ってはめられる人の協力がいる。口の先の縄は細いものより稍太目のものを用い、縄の足は一本より二本の方がよい。棒をくわえさせてから、この縄で顔に廻し、顔のうしろ、又は横でくる。これでは出来上りだが、この効果はどんなものであるか。

この効果として考えられるものは二つある。一つはさらし責めと一つは遊戯としてで



ある。

・さらし責めの場合、三つ考えられる。

- 1、棒を壁に固定した場合
- 2、棒を天井に固定した場合
- 3、棒を床に固定した場合、

いずれも写真に使用して効果を

挙げ得る題材と思う。棒を喰わせ

た上は、手足は自由にしておいても高手小手に縛り上げて、そこは適当に変化をもたせるとよい。但し、手足を自由のままにした際は、口に食ませた棒を勝手に取りはずすことの出来ない工夫が必要である。

遊戯の場合

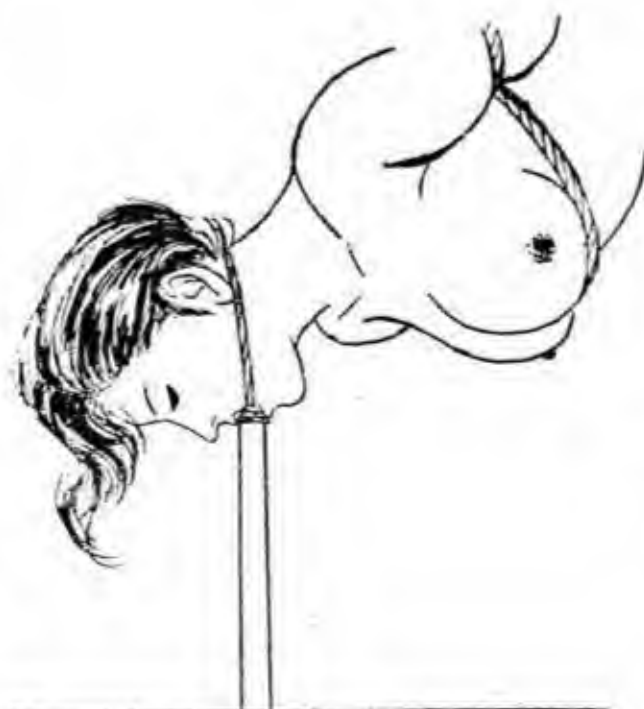
- 1、一本の棒の時
- 2、二本の棒の時
- 1、口で棒押しの要領である。

遊戯のルールは

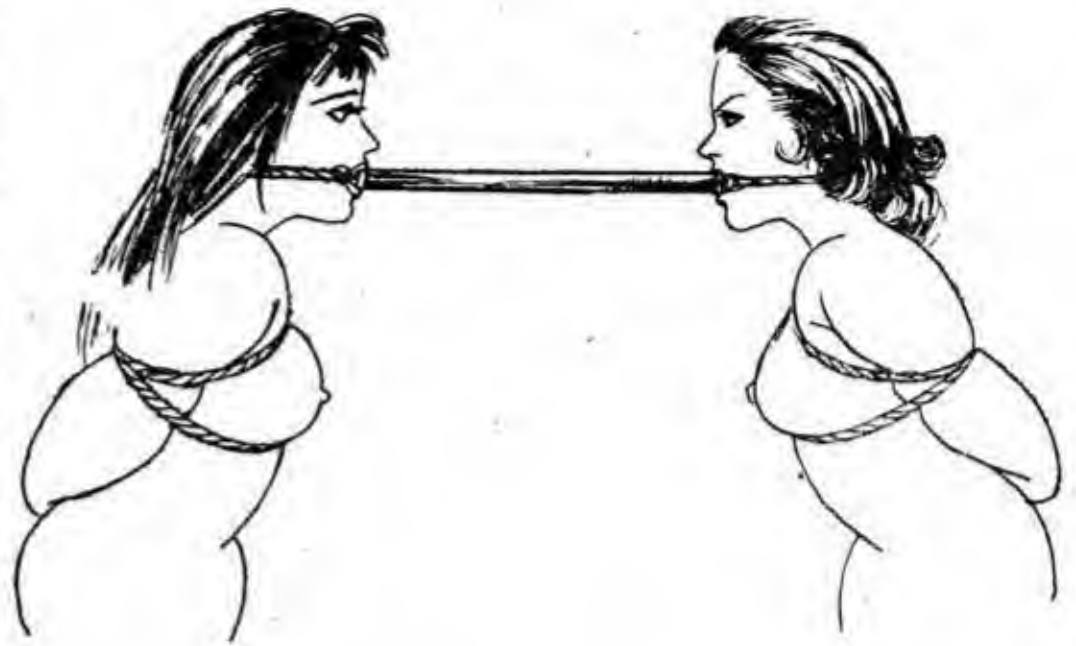
- イ、境界線より相手を押し出した場合
- ロ、相手を倒した場合
- ハ、相撲に準ず

の三つの場合が考えられる。

遊戯する者の服装は、2の場合と同様、裸でも或は衣服に制限をつけてもよく、芸者にこれをさせたりするのも一興である。また使用する棒も種々と工夫して、口に入る部分は



ゴムとかプラスチックを用いたり、また全体をプラスチックとし、口のところにツバ(刀のツバのようなもの)をつけるのも面白い。座らせたり、あぐらをかけたりして遊戯させるのも変化があって良い。いずれの場合に於ても両手を後で縛りあげておくのは効果的である。或は両手を水平し伸ばして一本の棒



に固定しておいても面白い。

2、棒のはめ方は棒責めの際と同じ要領だが、口と反対側の棒の先に

(イ) タンポ槍の先のようなものをつける場合、

(ロ) 毛筆の先をとりつける場合、

(ハ) 小刀をつける場合がある。
したがって、これは、1の時と違って遊戯

する者が、自由に動けるといふことが必要で（但し足だけ）そのため姿態に動きがあつて、後手に縛られた女体の種々のポーズが見られる得点がある。例えば、競技中、顛倒したりした時の動作は観戦者にとってきつと興味あるものと思う。勝者には高額の賞金をかけて、競技者が真剣になつて戦うと尚一層の興がある。若し億万長者のサディストがあつたら賞金十数万円位でやらせれば、きつと多数の志願者が出てくるだろう。

タンポ槍のようなものをつけた時は、これで相手を突くわけであり、小刀の場合は切るわけであり、毛筆の場合は相手の肌にスミをぬった者が勝ということになるわけであるが、毛筆をつけた場合が一番よいのではない。総じて、これは「人間闘鶏」となすけて種々のルールを細部に亘つて規定するとよい。後手に縛られた美少女が二人、口にくわえた毛筆をふりかざして、相手の身体にスミをつけようとして争うのは考えただけでも愉快である。

又、お互いに相手の乳房にスミをつけたら勝ときめて競技をしても面白い。勿論、両手は後手に縛っておくことを忘れてはならない。土俵四股平氏の女斗美のように、後手に括られた全裸の美女が、相争うシーンを想像されると、この「人間闘鶏」も満更捨てたアイデアでもないと思える。

幾何学図形のポーズ

責めの画若しくは写真のアイデアとして、幾何学図形というものを考えてみた。例えば一、直線図形 この場合は棒しぼりである。撮影方法としては、テーブルの上に黒布をかけ、被写体をあおむけ、もしくはうつむけ



にしてのせ、両手首、両足首をロープで、しばって、これを部屋の両端の柱にむすび人体だけをうつす。



幾何学的図型というのは、人間の体の線を整理した型で捉らえようとするところに意図があり、新しいものではないが、古来云われた大の字縛りとか、棒しばりとかいうのを近代的表現に置き換えたと考えて貰っていいだろう。

これに類似したもので、二人を組合した階段型、三人を組合した円型がある。円型とは三人を交互に肩車にして、反らして連繋したもので、これも横からでないと実写は困難のようだ。応用型式として、三角型、立方体、円筒形など、それにふさわしい型の責めのアイデアは当然生れてくると思う。

人間特有の型を誇張するのも一案だが、これを逆に一定の型に納めるのも一法と思う。たとえば球体となすけ、エビ責めを写すのもよい。もっとも、このエビ責めには次のような特殊のものがあることをつけ加えておく。

手足のくみ合せ方が違っているので、エビ責めというより「手足がらみ」といった方がいいかもしれない。足の縄を解けば、体の発達している女の人だったら歩くことが出来るので、これこそ本当のカメノコ競走となる



う。こういった縛り方で数人の若い女の子を一列に並べて板の間か畳の上で競走させたらどうだろう。前述の「人間闘鶏」と共に、この「カメノコ競走」も新しい遊戯用のアイデアの中、秀抜なものの一つとして挙げられるだろう。もちろん、ここでのいう形は両手足を一緒にしぼる形式である。幾何学的な縛りの時は、ストッキング、ブラジャー、パンティ等がアクセサリーとなりこれが発展して流動的な図形、たとえば、渦巻、伸開線、懸垂線となるとポニー・ダンス等の絵に発展してゆくと思う。

これが基本型で、応用としてはロープを肩のところからかけて巻く、このかけ方はいろいろあると思う。同様に足も腰の部分からかけて巻くことができる。次は、手には片手もしくは両手を一緒にした手袋、足は足袋（一種のズボン）を穿かせる場合で、これには白、黒、その他の色、透明なビニールなどをはめさせてよい。その上から縄をかけ、直線とすることが出来る。この場合、ビニールを使つたとすれば、袋の中に顔が入り窒息する恐れがあるので、特に注意を要する。

二、折線 この場合は一の直線図形の応用でL字型が簡単に考えられる。たとえば一、の棒しばりの場合の胴体を固定して、足だけ九十度にあげれば、これになる。

三、半円形 これも簡単で一のうつむきの姿勢をそのまま、手と足を斜め上に引きあげるとよい。

四、応用型としては、手足の各端にロープをつけてXTY入型など自由に考えられる。

世の中にはアブノーマルな自らの性ゆえに悩み苦しんでいる人々が意外に多い。その大多数の人々に共通の悩みは相手が得られないことではないだろうか？、一人では満たし得ぬ此の欲望に日夜悶々としていられるのではなからうか。それは私にはよく分る。自らもマゾヒストとして今日迄悩んできたからこそ



悲しきは

マゾヒストの告白

三 根 耕 二

よく分る。
奇クの読者通信欄や告白、或は読者交歓欄を見ても分るのである。若しかしたらという淡い希望から投じられたその数多い呼びかけがなされているし、今後それは絶えることではないであろう。その一つ一つが真実の訴えであり切々たる呼びかけとなっているのだ。

私もそうであった。毎月毎月投書をしたけれど、それは決して気紛れではなく真実の訴えであった。若しかしたらと思つて書いては送つたのである。ひよつとしたら多くの読者の中から誰か私の呼びかけに応じる人があるかも知れぬと思い願つて、せっせと投書をつづけていたのである。こうして私の投書は奇クの一月号に始めて掲載された。それから毎日は期待と失望の連続であった。一日の勤めが終わると私はわき目もふらずに貧しい間借り人の三帖へと飛ぶようにして帰る。

今日は来ているかも知れないぞ、と胸を期待にふくらませて……でも、それはいつでも満たされぬ。帰ってくるると自室の襖を開ける。手紙類が来ていれば投げ込まれているのである。手紙を発見して手にすると友人からであったり、ひどい時には税金の督促状であったりする。そうして私は失望の溜息をつきながら心弱くも締めようかと、考えてみたりする日が多いのであった。

所が一月十二日、いつもの様に仕事から帰つてきた私の目に一通の封書が目に入った。しかしそれは奇ク編集部からのものらしかったので大して期待もせず封を切った。と中からポトリと落ちたのはノートか何かを破つて書いたと思われる手紙である。ハツとしてよく見ると封じ目に差出人の名らしいものが書かれているではないか!!見ると静岡県〇〇

郡〇〇村窪田譲二と書かれてある。つまり奇クよりの手紙ではなく奇クから廻送されてきた手紙なのだ。

私は早速封じ目を切って読み始めた。やはりそうだった。私の呼びかけに応じた手紙なのであった。ノート破って認められたその手紙は切々として訴える次の様な文章であった。

自分はサジストであること、相手を求めて苦しんできたこと、満たされぬ苦しみを味わいつくして今は責絵を描くことによって気を紛らしていること、貴方の投書を見て希望が与えられたが私の年来の夢を叶えてくれないだろうか、若しそれが不可能ならば文通だけでもして欲しいがどうだろうか

ノート三枚に、ぎっしりと書きつづられた丁寧な文字は人柄を示すような美しさであった。真実がこもっていた。此の静岡の窪田譲二氏の手紙は私の心の中に妖しい灯をともした。私の全身で血が妖しく沸き躍った。そう、是非共窪田氏と会おう。そうして縛られ辱められ、血のにじむほど打ち据えてもらおう……。

私はその夜、早速返事を書いた、躍り立つ胸を押さえ下手な字を気にしながら書いた。

一月二十一日が公休だから二十日の午後の汽車で行く。但し貧しい私であるから旅費は負担出来るが宿泊等については配慮願いたい。又二人丈の秘密としての万全の注意をして欲しい。宜しければ、此の手紙着き次第に下車駅や時間等を指定して欲しい。

そういった意味の手紙を書き終えると、翌朝私は直ぐにポストへと投げ込んだ。こうして私はもうどうにもならない方向へと自分を押しやってしまったのである。又翌日から帰りを急ぐようになった。しかし返事は来なかった、二日過ぎ三日経っても返事は来ないのだ。ああやっぱり駄目だったか、と私の胸には淡い失望の思いが湧いてくる。こうして私の公休である二十一日もいよいよ明後日という十九日の朝、仕事に出かける時はすっかり諦めてさえたのである。張合いのない仕事を終えてトボトボと帰って来た私の自室の襖を開けると思いも掛けぬものをそこに見出したのだ。

速達と赤い字が先ず目を惹いた。取上げると裏を返して差出人を確かめる。ああ来た、待っていた私の脳裡を去らなかつた窪田譲二という名を発見して私の胸は躍った。私は逸る心で封を切った。かなり急いで書かれたらしい字が便箋の上で跳ね躍っているのである。

待ち兼ねたお返事を手にして余りの嬉しさに身体がぶるつと慄えました。私の永い年月求めて得られなかつた相手を今こそ恵まれ念願が叶えられるかと思うといった書き出しでそれから自己紹介があった。それによると、譲二氏は地方公務員であり年令は二十九才で私と同年である事が分った。その後に細かい指示がされていたが要点は――〇場所 熱海駅待合室 〇時刻 後、七、三〇 目印 茶色オーバに紺色背広、黒手袋でエンジ色ネクタイ、格子縞マフラーで行くから貴方は手に白い紙包みを持っていること。その文章の最後に「必ず貴方に大きい満足を与え得る自信を持っています」と書いてあった。

その夜、私は仲々寝付けなかつた。起上つては何度もその手紙を繰返して読んだ。今迄自分が頭の中で描き楽しみ、そして最後には物足りなさを感じていた、あのすばらしい幻想の世界が今や現実の悦虚図となろうとしているのである。これがどうして睡れよう。私は血の妖しく躍るのを押さえることが出来ないのだった。しかし悦楽への期待と同じ大さきで不安の影も心の中に拡がる。見ず知らずであった人、今迄何の繋りもなかつた人、私は未知の否、初対面の同性に此の全身を無条件で預けると約束してしまったのである。縛られてしまえば、後はどうにもならぬ屈従

の運命におかれてしまう。若し殺されても私は抵抗すら出来ないだろう。不安はじつと私の心の中へ大きな頭をもたげてくる。それでも駄目だった。私の悲しい宿命は、それでも被虐を求めて止まないものである。エエどうなってもいいから行こうと私は床の中で一人決心するのであった。そして疲れ果てて泥の様に睡った。

いよいよ廿日、朝から私は落付かない。仕事をしながら幾度もミスをして同僚から変な顔をされる。それでも割に早く仕事も終り三時になると私は用事と称して早引することにした。さあ忙しい。先ず床屋に行き頭をサツパリとして家へ帰る。すぐに新しいシャツと真白なパンツを身に着ける。これは貧しい私のせめてものエチケット、茶の背広に着替えると横浜駅へと急いだ。私は熱海へ遊びに行ったことはないで、切符を買いホームに立つても不安が亦胸の中で拡がる。——ほんとうに行くのか大丈夫か？止めるなら今だぞ——心の中で誰かがささやく。ホームには大勢の人々が立っていた。此の人達は私が熱海へ何をしに行くのか知らない、縛しめを求めて行くなどとは夢にも思ってもいないだろう。自分で自分がいとおしくなってくる。何と悲しい性よ。でも私はそれでよい、誰が何といおうと蔑すもうと持って生れた性質なのだ致し方あるまい。

十七時廿四分発の浜松行に乗込んだが車内は勤務帰りの人で身動き出来ぬ混雑である。私はゆっくりと座って行きたかった。自分をいたわってやりたかった。向うに着いてしまえば私は被征服者の立場である。休息も許されぬかも知れぬ。休みなく鞭打たれるかも知れない。そう思うと、せめて途中丈でも此の身を休息させてやりたかったのである。幸いにして平塚を過ぎると座席にありつけた。私はクッションに身を任し後に凭れて窓外を眺めた。暮れるのに早い冬の空は重々しくどんより曇ってチラチラと人家の灯が点滅している丈でも何も見えはしない。隣りには六十余りの老人が座っていて絶えず謡曲らしいものを唸っている。向側の席の中年の紳士は手帳を睨み乍ら計算に夢中である。ああ此の人達は私の事をどう思っているだろう。きっと勤務帰りの青年位と見ているに違いない。此の人達には私はこれから熱海へ縛られに苛められに行くのですよといったらどんな顔をするか、私を気遣いと思うだろう。そんな事を考えるとおかしくなってくる。ハハ……と大声をあげて笑ってやろうか、それとも何もかも喋ってやろうかと奇妙な衝動にかられる。私の心は此の疾風の様に走る電車よりも劇しく動揺していたのに違いない。波の様に胸の中が立騒いでいたのだ。電車がのろくさを感じて私は気が気ではなかった。約束は七時半で

ある。此の電車はそれ迄に間に合うだろうかふとそんな不安が湧いてきたけれど今更どうにもならないと思うと気が静ってきた。小田原を過ぎた辺で私は空腹に気がついて横浜で買って置いた稲荷鮎の折を取出して喰べた。電車は湯河原に着いた。サア、熱海は次だぞと思うと不思議な緊張が身を包む。何だか体がガタガタ武者震いする様である。五分余りで電車は熱海駅のホームにすべり込んだ。私は飛降りるとすぐにホームの大時計を眺める。何のことアない七時五分である。ホッとしながら改札を出て待合室に入る。如何にも出湯の街らしく駅前にはタクシーと土産物店と旅館の客引で一ぱいといった感じ、私は誰も座っていないベンチを選んで腰を下ろした。暫らくそうしていたけれど、何となく落付かない。私は立上って売店の方へ行ってみることにした。夕刊を二、三枚買ってきて再びベンチに座った。しかし新聞を拡げたものの少しも頭に入らない。本当に彼は現れるか？どんな人だろう？そんな事を考えている内に時間は経つ、七時廿五分、私は指定通り白い紙包みを膝の上に置いてキヨロキヨロしていた。廿八、九才の年輩の人は幾人もいるが服装が違っている。私は又もや不安を感じる。もし来なかったらどうしよう。八時頃迄待つて現れなかったら諦めて帰ることに心の中で決めてふと眼を上げるとアッ来ている。茶色

のオーバに紺のズボンの人が五、六歩先に立っているではないか!! もう一度打合せの手紙を思い出してよく見るとオレンジのネクタイも黒い手袋もピッタリである。私に気がついていないのかい、向うを向いて腕時計のネジを捲き始めた。私は立上るとツカツカと傍に寄って行った。もう夢中である。「窪田さんですネ、僕三根です」彼は一寸笑顔を見せた丈で「サアすぐ行きましょう」と私を促してタクシーに歩み寄り「バンガローまで」と命じた。私も彼も無言のまま座席に腰を下して窓外を眺めた。いつの間にか細い雨が降っている。熱海の街の赤い灯青い灯は雨に濡れてにじんでいた。賑やかな海岸通りを過ぎると此の奇妙なカッブルを乗せた車は急カーブを幾度も切り乍ら坂道をヘッドライトで照し乍ら走っている。二人共無言だった。私は此の場合はこれが一番ふさわしいと思った。それでも車が断崖の上へ出ると「此処が錦ヶ浦ですよ」と教えてくれる。そしてその儘、口をつぐんでしまう。きつと二人共一寸照れていたのに違いない。雨に濡れた坂道を幾曲りかしている中に遙か下の方に点々と灯が見え小さな建物がポツポツと見えてくる。どうやらあれが目的地らしい。彼は運転手に事務所前に着けるようにと命じた。今度は車はウネウネとした坂道を下へ下へと降りる。車はバンガロー事務所へ着けられた。車

の音で飛出して来た二、三人の女中達は直ぐ傘を差かけてくれる。彼は女中達と顔馴染であるらしく二言三言何か話していたが、決つたらしく二人はバンガローでなく旅館の方へと案内される。松、竹、梅と三室あつて皆空いている。此れは私共に執つては好都合で二人きりを樂しめる訳である。一番奥の室に通され、女中が丹前やらお茶や菓子を運んでくる。火鉢にはカンカンに炭火がつがれたが之は私が風邪気味なので彼の心使いなのであった。室は玄關があり四帖位の次の間と八帖、南向きに広い縁があり円卓に安楽椅子などが置かれてある。八帖には大きい床の間やラジオがあり、ふと私は貧しい三帖の下宿を思い泛べた。彼は女中に後は、こちらでやるから明朝ベルを押す迄来なくともいいといて早々に追出してしまった。やつと二人丈で相對した訳である。「よく来てくれましたネ」と彼は私に笑顔を向けた。「エエもう夢中で飛んできました」二人はそれから茶をすすり乍ら語り合つた。讓二氏は奇巧で私の投書を發見した時、夢かと思つたそうである。そうして手紙を出して返事を受取つた時には身体が慄えてきたと語つた。やはり昨夜は深更迄睡れなかったともいつた。「貴方が今日で懲りてしまえば良いと思う」そんな事もういふのである。理由は之で懲りて私がもう来なくなれば止むを得ず自分の病気の進行が押さえられ

る。そうでないと益々自分の病勢は進むといふのである。「さあ恐らく懲りないでしょうヨ僕は」私はそう答えて笑つた。ラジオがいつしか十時を報じた。「サア、一風呂浴びてきましょう」私は讓二氏と共に浴室へ行つた。二人入れば一ぱいという家族風呂に温泉はこんこんと湧いて湯気が立ちこめる。二人は一瞬の遑らひの後湯に浸たる。讓二氏は私よりは小柄である。もっとも私は身長一米六十九糎体重六〇キロで標準以上ではあるけれど。彼は私のそんな身体をしげしげとみめるのである。獲物なのだ。今宵は彼の願使のままに仕えねばならない奴隷は私なのだ。そう思うと私の身内で妖しく血が燃えるのだった。室に帰つて来てみると床が二つ並んで敷かれていた。讓二氏は室に帰ると直ぐに鞆から真新しい細引を取出した。私も何もいわずにどてらを脱ぎすてシャツも取り去り真白なパンツ一枚になった。すると讓二氏はパンツは駄目だからといって晒木綿を取出して私に褌をさせた。つまりパンツでは駄目の線が出ないというのである。すっかり仕度が出来て私は無言で手を後に廻した。讓二氏の激しい息遣いが背中として手首に繩がからみつく、此の時の気持は今でも忘れられない。多年の念願であつた被縛が今実現しているのである。手首に捲きつく繩はキュッキュッと締められてやがて首に廻つた繩で後手に吊上げられて更

に二の腕から胸へと縄がかけられて私はそこへ転がされた。「あ、夢みたいだ」讓二氏のつぶやく声が聞える。ああ、それこそ私も同感である。今こうして自由を奪われ浅間しい姿を晒すことを私はどんなに熱望したことだろう。そして私は現実には腕から手首から固く縛しめられた無抵抗の姿で転がっている。讓二氏が思うままに私を苛み責め辱められる様に奴隷は横わっているのだ。身を俺うは僅か六尺の布のみである。讓二氏は仰向きになっている私の身体にまたがって腹部を圧迫する。後手の手が背中の下でポキポキと音を立てる。とても痛い。暫らくそうしている中に私の口から唸え切れずに呻声が洩れてくる。そうすると彼は今度は私の身体に足を掛けてくるりと引繰返して俯向せにした。かれこれ三十分も経過したか私は寒くなってきたので訴えた所が中止された。

縄を解いて貰う時には手首に灼ける様な痛みを感じた。すっきり解き終ると二人で又風呂に入った。手首には二重三重に縄の喰込んだ痕が残り血の通わなかった手先は痺れて紫色になっていた。風呂の中でそれを撫で乍ら私は自分がいとおしくてならなかった。こんな苦しみを自ら求めて止まない私の性質を悲しんだ。その夜は、それで二人共床に就いた。だが仲々寝付けなかった、その夜はいろんな夢を見た。

翌朝、ザアッザアッという波の音で目が醒めた。ラジオのスイッチを入れて見ると十時過ぎである。外は薄暗い。雨が降っているからだろう。起きてベルを押して朝食を運ばせる。浴室で洗面の時、讓二氏は眩しそうな顔をした。昨夜のあの数々の行為を思い出すと人間というものは激情に憑かれるとあんなにも野性を発揮するものかと思つて一寸可笑しくなる。朝食を終え風呂で温まってくると又私達はプレイに取掛つた。しかし今度は責めよりも写真を取るのだという。私は一寸躊躇

雑誌通信

性倒錯の男と女

△男性の女装、女性の男装▽

山下真一

サンデー毎日六月十六日号に高木卓著「むらさき物語」の、双生児の性倒錯について、高橋義孝氏の所感が述べられているが

男性の女装、女性の男装という特異な行為を客観的に見て書かれているので、ここにその一部を書き抜いてみよう。

およそ人間は誰でも可性的で、男女の別はからだの構造上からははっきりしているが、からだという地盤になされた「心」となると、心のはたらきには男性的なものもあれば女性的なものもある。そういう意味では、男の中には女が住んでおり、女の中には男が住んでいる、といって差支えない。

したけれど、絶対他へ公開しない約束で妥協してしまふ。フラッシュの用意がないので戸外の明りを利用することになったが、カーテンを全部開放する訳には行かない。うっかりして外から覗かれてもしたらという訳でシーツを引張り出して窓の下側に張り外から見えない様にしてから取掛る。私は又、縛上げられて、そこに転がされポーズをつけられる。之は思つたより苦痛である。撮影し終る迄動くことが出来ないからである。もうこうなると奴隷という言葉がピッタリする。彼の意志

「い。これは正直に自分の心の中をのぞいてみさえすれば誰にもよくわかることだと思う。」

男の中の女、女の中の男が、本来の男、あるいは女を圧倒して、とくに性愛生活の上で発言しだすようになると、いわゆる倒錯が始る。同性愛は男と男との間のものにせよ、女と女との間のものにせよ、性倒錯であることにちがいはない。また、同性愛という風に対象を持った性愛ではなく、男が赤い腰巻をしめたり、女が髪を短かくして粗っぽい言葉遣いをしたりするのもやはり倒錯である。

のままにあらゆる凌辱的ポーズを取らされるのである。前から後から或は柱に縛られ吊られ椅子に括られ、そんな浅ましい姿を貪欲なカメラは執拗に舐め廻すのである。途中二、三度休憩し乍ら二時頃迄カメラの餌食になってフィルム三本に私の被縛図は収められた。私達はベルを押して昼食を運ばせたけれど二人共余り食欲はなく又、二人でいろいろ語り合った。讓二氏は若い人ではないやだという。二十七、八才以上のマゾヒストを求めているのだそうである。私は一寸不満だった。私は十七八才位の少年達二、三人に辱しめられ苛められてみたいと思うのである。でも現実には希っても不可能だろうと考えると讓二氏と廻り会った丈でも幸せであろう。又、讓二氏は夏になったら海中で岩の上に縛つけてみたいという。私も夏になれば人の来ない海岸の岩や、或いは山中の太木に縛られてみたいと思うのである。宿の支払を済ませて事務所前からタクシーに乗った。女中が四、五人送っている。此の人達の眼には私達が何と映っているだろうか？ まさか昨日からあんな事をやっていたとは露知らぬであろう。雨はいつしか止んでいた。自動車は快速で熱海駅へと私達を運んでくれた。列車の時間があるので駅前の喫茶店でココアを呑んだ。讓二氏は此の次は二月廿七日から廿八日に又、逢いたいといっていたので大体その予定で約束して待合室

男がなよなよとして女の役目をつとめ、女が荒らかに男の役目をつとめて成立するサディズムなどは、恐らく性愛倒錯の少しこみ入ったケースなのであるが、そういうケースはわれわれの周囲にはそうひんぱんに生ずるものではない。しかし男の中の女、女の中の男は、男女ともに少し注意して自分を観察するならばすぐに見つけ出すことが出来るはずである。

………(中略)………

男は女々しいといわれるのをきらい女は男みたいだといわれるのを恥に思う。だから自分たちそれぞれのの中にいる男や女のほうを、平素はなるべく見ないようにしている。しかしながら人生の重大な危機に臨んだりするとき、平素そんな風に男の中で虐待されている女、女の中で虐待されている男が、平素の虐待の仇を討ってやろうとい

に入った。これで東と西に別れるのである。一寸別れは辛い様な感傷に襲われる。私の方の電車が先に来た。私達は奇妙な感情で別れを告げた。讓二氏は鞆を振っている。あの鞆の中には奇クと氏の書いた責絵とそして私の身体にまわりついた縄が入っているかと思うと顔が火照ってくるのである。帰りの電車は直ぐ座れた。もう私はぐったりと疲れ切つてシートに身を凭せたきりだった。眼を閉じているとあの状況が臉の中で蘇える。私は横浜迄の二時間をそうして過ごした。その夜か

わんばかりに、その人間の行動や考え方に妨害的な作用を及ぼして、人生の大失敗をさせることがあるようだ。

それも無理はない。百パーセントの男性というものもなければ、百パーセントの女性というものもなく、男も女も、それぞれ自分の中に異性的なものをふんだんに持っているというのが現実らしいのだから。そうかといって男がいきなり女性の肌着をつけてみるわけにも行かないし、女があぐらをかくわけにも行かない。

問題はいつも、男が自分の無意識面に立っている女のきげんを、女が同じく自分の無意識面に立っている男のきげんをどんな風にとるかということにあるだろう。

—後略—

以上、本誌読者の方々の御参考になればと書抜いた次第である。(おわり)

私は発熱して今日に至る迄病床にある、風邪気味を無理して行つたのがいけなかったのである。しかし私は満足である。私の夢と希望は実現したのだから。そして之は悲しいマゾヒストの宿命なのかも知れない。

△追記△ 本稿の人名、地名、其の他殆ど事実通りです。尚、発表については窪田氏の同意を得てあります。同封の写真は当日のものの一部です。誌上に掲載されても差支えありません。(おわり)

美容病院

久留木 栄

(四) 入院患者木村愛子の経験 その三 (写真撮影の巻)

河野副院長は愛子をしばらくそのままの状態ではっておいた。一つの苦痛のつぎに第二撃を加えるには二つの方法があると彼は考えた。矢つぎばやに加えれば、相手を倒すことはできるが苦痛を充分味あわせることはできない。苦痛をよりよく味あわせるには相手をいびる、すなわち苦痛と恢復の連続でなければいけない。そう思つて彼はしばらく愛子をはっておいたのだ。しかし全然なにもしなかったのではない、著々準備は進められていた。河野は二人の助手にドイツ語でなにか命じた。すると池田フジは戸だなからカメラをとり出し、フィルムを装填しはじめた。また小野は戸棚から十数本のパイプの棒をとり出すとそれを組立てはじめた。少年のころ誰でも遊んだことがあるあのジャングルジムを作るように小野の表情はいきいきとしていた。しかしできるものはジャングルジムでなく似て非なるものであった。壁の前に二メートルほどの間隔を置いて天井から床まで二本のパイプがとりつけられ、そのパイプに自由に上下できる横棒が二つとりつけられた。これが組立てられたパイプの一つで

ある。そしてその横に組立てられたパイプは、これこそジャングルに似たもので、五十センチ間隔のパイプの立方体が床から二段、一メートル四方を占領した。池田フジはカメラを河野の机上におくといつしかその組立てを手伝つていた。愛子はかなりの時間、床に放心したようにすわつていたが、いつしかそういう男たちの仕事をみていた。彼女は幾分氣をとりなおしたらしかった。そこで河野が愛子の前に進んできた。

「木村さん、これわかりますか？ これが問題ですよ、木村さん協力して下さいね、いよいよ最初の一週間の最初の仕事のはじまりですよ」

「……………」

愛子は河野副院長の言葉をきくと、はじかれたようにちよつと体をふるわした。

「そう心配しなくてもよいですよ、まだ縛ったり、叩いたりするには早すぎますからね、私はなにもあなたをいじめようというんじゃない、私は貴女を美しくしようとして居るのですよ、その準備ですよ、ほら小野君がパイプの向うに黒い幕を引いたでしよう、貴女はあの前に立つてもらう、それだけでいいんです、さ、どうします」

愛子はそういう河野の表情をみていたが、屠所にひかれる羊という姿で幕の前に立った。

「そう、物わかりがいいですね、それじやききますが、なにするために黒幕があるかわかりますか」

黒幕、黒幕、そういえばカメラが出してある、私はカメラにうつされるのだ。愛子は彼等の意図がわかった。彼女はふらふらと二三歩よろめいたが、すぐ立ち直った。カメラでうつすにしても、それでどうなるものではない。彼女はそう思った。その途端、河野の声がした。

「あはははは、わかりましたか……御名答、あなたの御存じのようにはカメラで貴女をうつすのです、あなたの体をすみずみまで、というのには美しくなった貴女といまの貴女とくらべると美容の効果は百%わかりますからね、もちろん全裸ですよ。それは貴女が願わくせうではない、全身美容をのぞんでいるからです。わかりましたか、ちやんと貴女の要望におこたえしただけです。さあ、着物をぬぎなさい」

彼女はそういわれても着物をぬぐ気にはなれなかった。もし彼女に与えられる刺戟が苦痛といわれなかったなら、もし口にはめられた絨口具を歯並みを直す道具だけとしてしか知らなかったら、彼女はなるほどと思ひ、或いは柔順に親にも見せたことのない娘の成育した姿を、処女のけがれのない誇りを、三人の目の前にさらしただろう。だがいまは、彼女の中には反抗の芽が生えている。それは三人の男女たちによつて計画的に芽ばえさせられたものである。そしてその芽が生長すればするだけ彼女の實際にうける苦痛の度はますますということになる。彼女が少しも知らない。むしろ反抗は当然のことと思ひ、そこにやすらぎすらおぼえるのである。だから彼女はそういうわだかまりも身じろぎもなかった。いかに弱い弱い女といつても、まだ手も足も自由じやないか、着物もきている、そこに彼女の安心感に

ゆとりがあつたといつてもよい。

「ほおら、おわかりにならないのですか、御返事できない？返事できないことはないでしょう。口をもっているのだから、ははは、声がでないだって！これは、どうしよう、そうだ賛成なら頭を下げる、いやならふるんですね、木村さん、わかりますか」

愛子はかすかに頭を横にふった。

「おや、否定ですね、困ったお嬢さんだ、でも私たちにはその方がうれしいんですよ。それじや、そのまま、では」

愛子は仕方なくうなずいた。

「ほう、それならよい。じや小野君、台を、ちやうどカメラの調子を見るのに一枚むだ使いしてもよいと思つていた。木村さん、その台の上にあがつて」

愛子は出された台にすごすごとあがつた。台は高さ五十センチ程度の板のパン（縁台）みたいなもので上に赤色の毛布がしいてあつた。黒のバックに黒の台（赤は写真では黒くうつる）白い作業衣の愛子の姿はさぞ美しくうつるだろう。そして裸にしたらどんなに素晴らしいか、河野はそう思ひ舌なめずりしたい気持だつた。

「そう、ハイヒールは脱いだ方がよいですね、ちよつと横むいて、ハイ笑つて」

そういつた時、フラッシュが閃いた。愛子はフラッシュが大嫌いな稲妻のようにみえた。

「さあ次にしましょう、愛子さん裸になりますか」

「いやですか、困りましたな、私は無理はいいたくない性質でして小野さん、どうしましょう」

「一思ひに、はいどうぞです」

「いや、私はなつとくずくじやないと」

「そうですか、副院長、それならこのバンドと禪とどちらかを選ぶか聞いたら」

「そうですね、それは名案だ」
二人は大声でそう相談すると愛子のそばに近づいた。河野はいっ

た。
「木村さんどうします、小野君がどちらを選ぶかきいてますよ。一つは全裸になること、一つはこのバンドです。このバンドの用法が



M. K

わからないって、これは叩くためのものじゃないんですよ、いうことをきかない人にちよつと注射をしてやる、その程度の刺戟です。痛くもかゆくもない苦痛です。そうですね、ちよつと説明しにくい、このパイプに関係があるんです。わかりませんか、池田さん例の写真を一枚」

「はい」

池田フジが写真をもってくる間河野は巾一センチ長さ三十センチ程度の皮のバンドを愛子の目の前でちらちらさせた。愛子はいま自分のうしろにあるパイプは立っているのは二メートル間隔だし、横棒は足の下の床の上にかたまっている。一体このバンドとどんな関係があるのだろうとどうせよくないことに違いないが——と思った。その時池田が写真をもってきた。河野はゆっくりした動作で写真を見た。それを見て彼女はわなわなとふるえた。し、しぼられている。そこには彼女と全く同じ服装の女が肩のあたりの高さにした横のパイプにバンドでしばられている。そして足の高さにも横のパイプがあり、それに足がのり全体重がかかっている。そののった足首も横のパイプに

バンドで縛られている。愛子はその女が自分であるかのような錯覚がおこって再び体がこきざみにふるえた。

「じゃ裸になりますか」

河野はきいた。愛子はそれでもかすかに首をふった。裸になるより縛られた方がよい。写真の女はそう教えているじゃないか。あの女が縛られたのは裸にならなかったからだ。

「じゃバンドの方を求めますね」

愛子はわびしくうなずいた。

「じゃ手を横にあげてポーズをとって下さい、小野君用意」

「はい」

横のパイプがするすると愛子の肩の高さにあげられ固定された。

そしてもう一本足の高さにも、

「さ、のって下さい」

愛子は河野にうながされる、とまるではりつけにされたキリストのような姿でパイプにのり、手を左右にひろげ手のひらでパイプをにぎった。

「フ、フ、フ、すっかり観念したね、木村さんいい恰好だ、小野君台をのけて、そう」再びフラッシュがとんだ。

待っていたように河野が進み出た。

「さ愛子さん、裸になりますか」

河野はきいた。愛子はそれをきいて絶望した。縛られたからそれですむのではなかった。彼女は思わず涙を一滴こぼした。なんとしてつっこい奴だろう、この上自分から何を求めようというのだろうか。彼女はそう思うと憎らしさが矢面に立った。愛子は頭をふった。

「ほう、強情ですね木村さん、さて、どうしましょう小野君、だめだよ、君のバンド作戦は、ぼくらは完全に失敗したんだ。もう少し考えなそう。木村さんの姿をみていると心を動かされて同情したくなるからね。向うの部屋で、新たな研究法でも考えよう。木村さ

んもどうするか、その間に決心をつけるんだね。まだ序の口だからいつでも帰してあげますよ。さあ、じゃしばらく失敬」

そういうと河野は二人をつれてさっさと出ていった。三人は研究室を出ると、すぐとなりの部屋に入った。そして顔を見合せてニヤリと笑った。彼らは愛子がうなずく自信があったのだ。三人は隣の部屋に行くとき今出た部屋との壁の中央にのびのび黒い四角な正方形の穴のところにいった。なんとそれは一つはのぞき穴、一つは八ミリの映画の撮影機になっていた。小野と池田の二人はここに入る時、愛子の知らぬ間に木村愛子の足をのせている、パイプの止めを少しゆるめるのを忘れなかった。愛子はやがて苦しみ、はじめるだろう、そして諾というにきまつている。そのものがく姿をうつしておこうというのだ。

愛子は一人にされることが、いたたまらなくつらかった。というのは憎む対象が目の前になくなるからである。彼女はいきおいこの日の出来ごとを反省して見た。どこか私のいたらなかったところはないか、そう思うと、いたらぬことだらけだった。その一つは叔母をだましたことだ、その二つはつまらない恋争いをしたことだ。だがそんなことより問題は根深いところにある。もし自分が自分以上の美しさを欲しなかったら……そうだ、それが間違いのもとだ。父や母からもらった自然のままの美しさ——その美しさ以上のものを求めようとした、すなわち自分は神への冒険をしたんだ。それならば苦しむのは当然だ。だがそれにしてもあの悪魔のような男たちは許しがたい。弱い女をだましこんで、すべてをその女の責任にしてなぶるなんて！ ああ一体どうなるのだろうか、救いを呼ぼうにも、地下二階の穴ぐらと同じところだ。それにさるぐつわは完全に近い、手も足も自由にならない。いっそのこと自殺すればいいんだ、だが自殺もできない……どうしよう、絶食すればいい、彼女とはつきにそう思った、絶食すれば死ねる、そう思うと落付きが

出た。彼女はその時まで絶食なんて簡単に止めさせうることをしなかった。水をのませる刑があることを知らなかったんだ。

あれこれ考えているうちに彼女は次第に体が少しずつ目に見えないほどずりさがっていくのを感じた、それと同時にずりさがらない手首、肩、ひいては胸、乳房から肋骨にかけ、ひきつるようにならなみだした。その痛みはもろくも彼女の決心をくつがえした。彼女はずり落ちていくのを彼等のせいだと考える余裕はなかった。しかしそれは我慢のならない責苦となってきた。とても二本の手首だけで人間を宙釣りにできない。そんな簡単な原理を彼女は知らない。だからずり下れば下るほど苦痛が倍加し、さらに身をくねらしてうめけばうめくだけよけい早くずりさがること知らなかった。彼女の口から思わずうめきごえが洩れた。脂汗が流れ悲鳴ともつかないさけびがきこえ、そして次第に意識がうすれ、もうこの上は彼等のいうのに従うほかないという気持がふっと湧いて、すぐまた消えた。その時三人が入ってきた。

「木村さん、決心はおつきですか」

河野が近づくとすぐいった。だが愛子はその言葉もようきこえないくらいだった。彼女は全身でもがくのを止めなかった。

「おや、この人は、ま、抜けようとしているんじゃないのかしら、強情な！ 副院長さん、こんな人は徹底的に叩きのめしてやりましょう。」

突然池田フジが口を切った、小野茂夫もそれに同意した。「だが待て」と河野は二人を止めて、

「ごらん、ほら、足の横棒が少しずれているよ、あれがずれちゃ、だれだってもがくのが当然だ。こりや又失敗だ、小野君、すぐもとにもどしてくれ」

「はい」

河野はどういうわけかそういって愛子を救った。しかしこれはや

はり彼等のワナだった。パイプは再び少しあげられた。すると愛子は少し楽になったのか、身をふるわせると、もがくのをやめ、顔を二、三度横にふった。悲しい、腹のそこから出るような低いうめき声もやめ、ぐったり二つのパイプに身をなげかけていたが、やがてパッチリ目をひらいた。河野がいった。

「やあすまん、すまん、こんなに早くから苦しめるつもりではなかったんだよ、木村さん、勘弁して下さい。いまこいつらをひどく叱ったところです。パイプの止め方がゆるかったんですね。でも美しくなるためにはその方が良かったかもしれないね。どうです苦しかったあとの気持は気持ちいいですよ。とにかく、苦痛にたいする研究はまだあと回しだから……さ本論に研究をもどしましょう。どうです愛子さん、裸になる決心はつきましたか」

ああ悪魔はこのことを少しも忘れてはいなかったのだ。愛子はこの畜生と思つたが、体はいうことをきかなかった。彼女は涙を流してうなずいた。

「それじゃ、裸になって下さい。ええ、そのままの姿で……ハハハ、縛られているからなれない？。しかし縛られるのも貴女が願ったんでしょ。貴女がといて下さいというまではとけないんですよ。じゃ私たちが手助けしてそのまま裸にしてあげましょう。その方がいいでしょう、貴女がわざわざ脱ぐ必要もないし、おや、それはいやですか、心配しないでいいですよ。ほらこの写真みてごらん、さっきの縛られた女の人、あの人もここで裸にしてもらったんですよ。木村さん、貴女のきている作業衣はちやんとそのことを計算に入れて肩のところがホック止めなんですからね、安心していいですよ。体が疲れているようだからちよっと休息してして下さい。私もその間休息しますよ、池田さん、貴女は女性だからひとつ木村さんに力をかしてやって下さい。じゃ木村さん失敬」

そういうと河野はその部屋を出ていった。なんのことはない例の

秘密のカメラで八ミリにおさめようという魂胆なのだ。河野はこういうフィルムを沢山とっておくことによって、やがて行う心理的苦痛を与える最後の三週間目の準備をしているのだ。どうやら池田フジが行動を開始したらしい。河野がカメラを動かしながらのぞき窓からみていると、木村愛子の腰が左右にゆれ、首がはげしく左右にふられているのがみえた。肩のホックが池田フジの細いしなやかな手で一つずつとられて行くのがよくみえた。その斜め前の椅子に小野茂夫がすわって、焼けるような目を愛子にそそいでいる。愛子の羞恥心を高めるために絶好の配役だ！と河野は感心した。フジの手は服をはぎながらときどき故意に脇の下などにふれる。こういうとき、女の心理状態は男よりはるかに微妙ではるかに残酷だ。虫もころさぬ顔をしている池田フジにしてこれなんだから……：河野はそう思う。その時彼はアッと声をのんだ。白い作業衣はひらりと落ちたのでその下から現われた愛子の裸像の何と素晴らしいことだろう、のびやかに発達した四肢、豊かにもりあが



った胸、たしかに運動選手だけのことはある。肥満型といったけど、たしかにそれらしい丸味は体のいたるところにみられるが彼女の場合、それが少しも苦にならない。苦にならないどころか、発達した筋肉に丸味をつけ、アクセントをつけ、より一そう彼女の体を美しくみせている。実際これ以上にどうして美しくすることができようか、河野はそう思った。

M.K

これ以上美しくできるとすればただ肌のつやを増すとか、もっと女性味を出すということだが処女のまま、はたしてそんな成熟した女性が出せるだろうか。彼は毛頭木村愛子の処女性を奪おうという気はない。だがこの素晴らしい姿を見ていると自信がなくなるような気がする。この体を傷けずにそっと磨いてみたいものだ——こう願わない男がどこにしよう。してみると俺はこの世で一番の幸福者だ、副院長稼業の冥利につきると思った。とその時池田フジの手が胸のブラジャーにかかった。ブラジャーは白いブロードのありきたりの型のものであったが、ナイロンのレースのふちどりがしてあり清楚で美しかった。それが容赦なくとられる。河野は見えていて残酷な思いがした。しかしフジは平気な顔だ。あの女には羨望というものはないものだろうか——と思った時、ブラジャーが蝶のように舞い落ちた。その途端池田フジの右手がサッとあがるとその手をまるめて乳房に近づけ、まだかたそうな、こんもりとした丘陵の突端をピーンと中指のつま先きではじいた。「アーッ、アッ」と、となりの部屋まで聞こえてくる程度の悲鳴を出して愛子の胸がゆれた。そして愛子はフジをにらみつけた。なんと気が強い女だろう。これならいくら責めても大丈夫だと、とっさに彼はそう感じた。そしてこの女なら責め抜いた挙句には、責められることを愛する女、マゾヒストに成長するのではないかという予想がした。それと同時にあの池田フジがやはり一人並みの平凡な女であることを発見して、その喜びが胸につかえていたしこりをおろしたように安堵感を誘った。小野はその瞬間どうしていたろうか、河野は小野の体が前のめりになったことを見逃さなかった。可成り多くの女性を裸にむいて楽しんできた男であるあの男ですら、あんなに動揺するのだから、俺が動揺しても俺の罪じやないと河野はひとり胸にいきかした。

だが、なんと素晴らしいブロンズだろう。褐色のマリヤは微動だもしないではないか、そして最初の布の一片がやがてとられるあの体

の中ではどんな感情の嵐が渦巻いていることだろう。怒りか、憎しみか絶望か……。

河野はカメラ操作をやめて部屋の中に飛込みたい気がした。しかし彼は自分という人間の限界を知っていた。ここまで発展し、築いた自分の地位を、名誉を家庭生活を放棄し破壊することはできない。いまとびこめばそうなりかねないかもしれない。だから河野は自分を抑えた。この美容病院というサジスト天国の中で一番といわれるサジストの自分でもそうなのだから、若い小野は、あいつはただ独身なのだ……失恋の痛手が、これで恢復するかもしれない。するとあれもサジストとして人間としてもう一步前進するのだが。河野の考えは飛躍していく。

やがて池田フジの右手がのびで小野から小型のたちバサミをうけとった。パンティのゴムがブツンブツンと切られ、レースのついたパンティがハサミを持たないフジの左手によって邪慳に引出され、パツと部屋の中央に投げ出された。その瞬間こちらを向いた池田フジの顔が少しゆがんでみえる。そうだろうと河野は思った。そして一つ大きな深呼吸をするとカメラの操作をやめ、乱れた心を完全におしかくすよう頭のかみのけを二、三度なぞつけると、再びさきほどの冷酷な男、副院長の顔になり研究室に入って行った。

木村愛子の顔をみると頬はうっすら紅潮し、鼻の穴はあうむいて太くひらかれ、くちびるは上下にわずかふるえていた。しかし目だけは、依然大きく見開かれ、強い決意を秘めて燦然と光っていた。河野はゆっくりと近づいた。

「どうですか木村さん、すっかり裸になっても良かったですね、気持ちいいでしょう。飾り気がなくて、人間はこれが一番綺麗な姿ですよ。貴女の一番好きな、尊い、そして貴女の希望している姿ですよ。

このすべ／＼した肌、褐色のうぶ毛、だれもさわったことのない清らかさ。素晴らしいじやないですか、ほんとに貴女は罪ですよ。これ

以上美しくなろうとするのは。これじや、余程念入りに写真をとっておかなければ、あとでとても効果の測定は困難ですね。このまま一枚とって顔、手、足、肩、胸、乳房、という順で、別々に接写いたしましょう。そうすれば貴重な資料になりますよ。もちろん研究資料にも、金もうけの資料にもなります。高くうれますからね……それから御存じでしょうが、これも美しくなるために行うのですから、心の美容には是非必要なのですから、いろんな角度から写しておきましょうね。じやこれから実行してもらいます、ポーズは小野と池田さんがつけてくれます。それから貴女にはそのポーズが充分なつくいくように先輩といいますが、ほらさっきの女、あの研究協力者がうつされた写真をお目にかけますから参考にして下さい」

河野はそういうと、無造作にカメラを構えてシャッターをきった。愛子はすでに恥しきで身も心もすくむ思いであったのに、これから身体の間々まで限なく写真にとられると宣言されている。愛子は思った、美容にそんな写真を写す必要があるか。何のために、それは私をはずかしめるためだろうか。そうじやない、そうすると後でくいかえし眺めて楽しむためだろうか。金もうけの資料になるといった。すると後で自分を脅喝するためだろうか。いやいや、いっただったかデパートで課長や男の社員たちがそんな写真を回覧して喜んでいたが……あれは買ったのだ！　こうしてとられたのを買ったのだ。それにちがいない。いまそのモデルに自分がされる。多くの人に裸の体がさらされる。しかも無理にそうされるのだ。口実はあくまで全部お前を美しくするためにしたんだとできている。みんな自分の責任なんだ。そんなににして多くの人目に裸をさらされるのが美しくなるのなら顔は胸の乳房より美しいはずだし、美しくなるということは人目にけがされることなんだ。しかもそうしてけがされる力を防ぐことはない。力がないどころか進んで自分はそれ

に協力すると宣誓をとられている。実にとんでもないことだ。いくら考えてもどうにもならないことながら、いろんな考えがめまぐるしく明滅し、この境遇をのがれるため、なんとかしたいと思う。どうにもならない。だがせめてこれまでと思いい気をとりなすと、その先がまっている。忍耐と凌辱のいたちごっこである。一寸きざみ五分きざみだ。これからのがれるみちは、発狂するよりほかない。発狂することができないうとすると、彼女のような意志の強い女は、泥沼に呻吟すると知っても甘んじて受けるより仕方がない。彼女は苦痛を少しでも軽くするためには、彼等のいいなりになるよりほかに抜け道がないことがやっとなかった。………といってもこの苦しみはまだほんの序曲にすぎない。これから日、一日と強く、深くなるのだ………ああ………愛子はとめどなく涙が出た。

それからしばらくの間、愛子はいわれるまま写真撮影に追われた。愛子はもうさからわなかった。それをよいことに三人の研究者たちは無理無態なポーズを要求した。このポーズをとらず際、シャングル・ジムのように組立てられた例のパイプがなんとすばらしい偽きをしたことか。愛子は様々の形でこのパイプで翻弄された。くの字なりにくくられ、逆様に縛られた。こうして木村愛子は形の良いい半円弓を皆の目の前に突出され、彼女の意志とは反対に彼女の体は彼等の好むポーズを自由自在にとらされた。そして悪魔の目とともにレンズの目をおして、フィルムの上に豊かな、名状しがたい印象を残した。

彼女は撮影が終るのがひたすら待ちどうしかった。そのつぎにはすでに別の苦痛が準備されていることを知りながらも未来に希望をかけ一つの責苦から逃れるのにせい一ぱい努力しているのであった。



体験記

つばきの沼

椿

秋

二

(一)

真実というものは、妙に穢らしいことが多いものだ。どんなにロマンチックでありたいと思っても、人間には生理的作用を営まない訳にはいかない。しかも人間には、誰にも云えない秘密の願望が心の奥底に潜んでいる。こいつが頭をもたげると、どうも人間はロマンチックでなくなってしまう。私は恥しさをこらえて、これから甚だロマンチックでない物語を記して行こうと思う。これを読んで眉をひそめる人は幸福である。これを読んで云い知れぬ妖しい魅力を感じる人は、私と同好の士である。どちらでも私は構わない。

人間が生れた処は、何かドロドロしたもののなかからだったそうだ。いや、人間ばかりではない。古事記や日本書記によると、国なんかも、ドロドロしたもののから生じたらしい。そのためでもあるまいが、私は子供の頃から妙に、ドロドロしたものが懐しく思わないではいられなかった。鮎、トロロ、ライスカレー、トロロコブ等は、見ただけで口の中に唾が溜ってくる。食物ばかりではない、深い深い泥のようなものの中へズブズブと吸い込まれるように、全身を没してしまふ光景を見るのも、又、自分で実行することも好きだった。ぐいぐいと何ものかが呑み込まれて行く姿を見ると、私はむず痒い快感に奇妙な官能

の刺激されるのを覚えた。シーンと頭の隅まで伝っていくような快感美だった。

角田喜久雄の探偵スリラーものに「底無し沼」の恐怖が描かれている。又、東映時代劇に「毒殺魔殿」という旗本退屈男の活劇物があるが、これも底無し沼に落ちる場面が出てくると、思わず興奮した。

腕けば腕くほどズルズルと身体が沈んでいく、そして遂に全身が泥の中に全く没してしまふ。この様に人間の命を奪うものは、刃物のように血を出す兇器ではないのだ。それにも拘らず、刃物よりも恐ろしい力を持って人間を呑み込んでしまふ。その圧倒感をどうすることも出来ない焦燥感が好きだったのだ。

中学三年生の時、私は思いもよらぬ素晴らしい映画を見た。余り素晴らしいので、其の映画の興行が終るまで数回も、その場面を見るためにのみ通ったものである。確かメトロの作品で、やたらに猛獣、毒蛇が現われて、血みどろの斗争を演ずるのである。題名は「ジャングルの恐怖」だったか「吠える密林」だったか忘れてしまったが、或は「タイガー」だったかも知れない。色々な猛獣が現われて喰うか喰われるかの死斗を展開するのだが、中でも圧巻は、二匹の巨大な蛇の妖斗である。私はこれを敢て妖斗というのは、斗争等という生優しいものではなく、巨大な二匹の蛇がスクリーン一杯にのたうち廻って、素晴らしい妖気を発散するからである。二十年も経った今日でも尚、鮮明な記憶が残っていて、冷たい蛇の白い腹のウロコが一枚一枚思い浮んで来る程だ。その妖斗絵巻をここにくわしく描いて見よう。

大きな白黒のマダラの蛇と、更に一廻り程大きな錦蛇との一騎討ちなのだが、錦蛇は異常な怪力の持主で、マダラ蛇は恐るべき早業の達人であった。錦蛇の動く処、木の枝や幹がポキポキと折れて、圧倒的な威厳に満ちていた。又、マダラ蛇の動きは電光石火、目にもとまらぬ速さで、何かが閃めくような凄味があつた。戦いは非常に長引き、マダラ蛇は稲妻のように素早い攻撃を相手に加え徐々に圧

倒していった。しかし錦蛇の力強い動きは、至る所を噛みつかれ血を流しながらも、頑強に抵抗して相手の進出を頑としてばんでいた。前半は、マダラ蛇六分、錦蛇四分の判定だった。からめ合ったかと思えば振りほどき、振りほどいたかと思えばもつれ合い、縄のようによじれ合い、バネのように弾み飛び上つての乱斗である。二匹がのた打つごとに小石や砂が吹き飛ばされ、草木の葉が飛び散った。側の樹上では、二匹の狼が逃げもせず魅せられたように、地上の激斗を見守っている。戦いは一進一退、仲々勝負がつかなかった。しかし持久戦となると、矢張り体軀に於て勝る錦蛇の方に歩があり、さしもの速いマダラ蛇の攻撃も、だんだん鈍くなっていくのが感じられた。その時、錦蛇が思いがけない早さで突如として攻勢に転じ、サツとばかりに襲いかかっていった。その動作は、とてもマダラ蛇の閃めくような早さには及ばなかったが、疲れ切ったマダラ蛇は、かわすことも除けることも出来なかった。思えばこれが致命的な打撃だった。ガツとばかりに口の横を噛みつかれてしまったのである。それは巨大な万力の如き力だった。マダラ蛇は狂気のようには頭を振り廻したが、錦蛇の口は、こゆるぎもしない。のた打ち廻るマダラ蛇の胴体からみつく錦蛇、同時にガブツとマダラ蛇の小さな頭を口の中に喰え込んだ。マダラ蛇は

文字通り死物狂いであばれ出した。しかし錦蛇は刻一刻、確実に相手を呑み込んで行く。そして、やがて尾部、一尺四五寸残すのみになった。最後の痛ましい蹴き……はかない抵抗……それも束の間、全くその姿は敵の体中に没してしまつたのだ。

私の隣席には、でっぷり肥った年配の奥様風な婦人が両手をしっかりと握りしめ、膝の上で小さな風呂敷包みが下へ転げ落ちたのも知らない風情で、釘づけになったスクリーンへの目は、まばたきもしないでいる。私もこのシーンに異常なまでに魅惑を感じてしまった。そして何度もこの映画を見るために来られずに居られなかった。いよいよ今日一日限りでお別れの日、ふと、そばを見ると少し離れた処に例の婦人が来ていたのである。やはり私と同じ好みの人もあるのだなあと大いに意を強くした次第である。

(二)

それからの私は蛇に吞まれる夢を見たり、巨大なものに吞まれる空想を逞しくしたりするようになった。甚しい時は、自分より大きな女性に頭から吞まれている夢を見た。その時に出てくる女性は、きまって近所の肥った女の人である。現実の彼女は、ひどくジュンボクで礼儀正しく義理堅かった。だが幻想の中の彼女は、かの錦蛇よりも貪慾で暴虐だっ

た。夢の中の彼女は、ニタニタ笑いながら私に襲いかかった。私は激しい敵意を抱きつつも不思議に甘美な刺戟に麻痺されて、ろくな抵抗もしないうちに物悲しも彼女の口の中に呑み込まれて行った。自由のきかない身体でする抵抗そのものも、又、どうにもならない怪力に圧倒されて征服されてゆく過程も私にとつては、たまらない恍惚感だった。やがて彼女の口からは錦蛇のように粘々した唾液が溢れ出て私の全身を包んだ。私は一晩に何度、何度と同じ夢を見た。

思うに人間の感覚程、不可思議なものはない。正とか邪とか、美とか醜とかを遙かに超越する事もあるらしい。たとえば唾について考えて見ると、恋人や愛人の口から出た唾であつたなら、口移しで飲まされても平気な若者達も、自分の唾は一度外に出せば、もう二度と口に入れる気持にはなれない。しかし本当は素性も知れない恋人の唾の方が、もっと穢い筈なのだが。私も幼い時は、自分の唾でも他人の唾でも考えただけでむかつく程であつた。ところがどうであらう。其の私が、愛人でも恋人でもない世にも醜い女の唾を、平気で飲むようになったのだ。

僕の家には牛女というニックネームの女中がいた。本名はお利喜というのだが、皆は「牛」と呼んでいる。本人も始めは怒っていたが、終いには諦めてしまった。無智で愚鈍で何ん

の取柄もない女だが、健康なのと綺麗好きで働き者なので、割合に皆に好かれていた。しかしこの女が、たった一つ皆にひどく嫌われているのは、いつも涎を流すことだった。少しオシヤベリをするともう唇のまわりが濡れている。だからいつもハンカチを手から離さない。その上、体重十八貫というのだから、どう見ても白い乳牛を思わせるのだ。しかし私だけは「牛」と呼ばなかった。「お利喜」と本名で呼んでいた。というのは、私は人と同じことをやるのが何かにつけて出来なかった。人が相手を馬鹿にしているなら、自分は尊敬してやろう。人が怠けるなら自分はいとんと働いてやろう。と云うように、いい方へではあるがヒネクれているのだ。私がお利喜と呼ぶのもそういう訳からで、別にお利喜をかわいそうだからという意味ではなかった。ところがお利喜にして見ると、この事が余程、有難かったに違いない。彼女は私に好意以上のものを寄せるようになった。「ウシ公が秋二さんに惚れているらしい」こんな噂が立つた程である。私はこんな噂を聞いても一向に平気だったが、お利喜に全く無関心であつたかという、そうでもなかった。私は空想上でお利喜に吞まれる幻想を描いたこともあった。しかし、これは飽くまで空想上のことで現実ではやはりあの涎を見ただけでうんざりしていた。

或る日のことだった。いやもつと正確に記そう。今から二年前の（一寸日記を調べよう）八月二日の夜、家族の者が映画に行つて偶然に私とお利喜の二人だけが残ってしまった。もとより始めからそうだったのでなく一人減り二人減りしてついに二人きりになったのだ。私はいつものように自分の部屋で読書をしていた。すると、お利喜が私の部屋へやって来たのだった。

「そんなに御勉強ばかりしていなさると肩が凝りましょう。私が少しもんで差し上げましょう」

お利喜は私の背後に廻つて、片膝をついて肩に両手をかけた。

「いいよ、肩なんか凝らないから按摩に及ばん。お利喜は私に構わずお休みよ」

私は、そつと彼女の手を振り離れた。彼女も湯から上ったばかりと見えて、若い女の湯上りの肌の匂いが強烈に鼻を襲つて来た。びんつけ油の安っぽい俗悪な匂いがそれに交つて、何だか惨じめな感じで一杯になった。空想や小説に出て来る女は美しくてロマンチックだが今、私のそばにいるこの女は、そんなものとは凡そ縁遠い存在である。しかしこんな女でも人並に美しい清純な愛情を燃すこともあるかと思つて、ちよつと惨じめな気持ちになったのだ。

「遠慮なさらなくてもようござんすよ」

お利喜はウキウキしていた。しかし誰がこんな女に遠慮する主人があるう。

「いいんだよ」

それでも私は幾分優しく云った。

「でも」

「何がでもだよ、お前こそ遠慮はいらない。

早くお休み、朝、早いんだらう」

私は笑を含みながら一層優しく云った。彼女は素直に「お休みなさい」と云って出ていった。しばらくして又もトントンと階段を踏む足音がして、お利喜は私の部屋に姿を見せた。

「あのう、秋二さん」

「なんだよ、まだ寝ないのかい」

「すみませんが、蛾が入りましたのです」

「蛾？どこへだね」

「私の部屋です」

お利喜の部屋は階下の台所の次の間で、裏の畑に面していた。この近くの藪と田圃から蛾がやってくるのだった。ところがお利喜の部屋には、蛾らしい虫は一匹も見当らなかった。

「いないよ」

「逃げたのでしょうか」

「開け放った窓から、しきりに小虫が入ってきた。」

「あそこを閉めた方がいいよ、暑いだらうけど。」

お利喜は「はい」と言っただけで小窓をしめた。そしてその手で側の電燈をひねった。

「暗いよ、明りをつけろよ」

しかし私の言葉にお利喜は答えなかった。途端、背後に彼女のすうと擦寄る気配を感じて、はッと思う間もなく首筋に手がふれた。

「な、何をするのだ」

「お礼に肩をもませて下さい」

お利喜は小声でささやくように云った。そして私に寄り添って、首すじからやわやわともみ出した。自分から云い出すだけあって、マッサージュは中々堂に入ったものだった。

「上手じゃないか、女中なんかやめて女マッサージュ師になった方がいいや」

私は闇の中で笑った。私の耳元でお利喜もフーンと鼻で妙に甘ったるく笑った。その時である。私の襟元にタラリとねっとりした生温い液体を感じた。私が思わず首をすくめたのと同時に、彼女が何かわけのわからぬ事を叫んで私を抱きすくめた。

「何をするんだよ」

私は跳ね起きようとしたが、お利喜は無言で私を両手で押えつけ、私の顔に唇を押しつけた。

「い、いやだよ」

跳ね起きようとしたが、楔を打ちこまれたように不思議に動けなかった。私は丁度、大蛇に見込まれた小羊のようだった。そしてお

利喜の例のよだれを口中一杯含まされてしまつて、半ば夢のような気持になった。

(三)

不思議なのはそれから後である。私は彼女のことを誰にも口外しなかった。いや出来なかったのだ。それは私自身にもとても恥しいことだった。

その後、二度目に彼女が私の部屋を訪れた時、私は彼女に肩をもませていた。明りが消え彼女の粘っこい唾とも涎ともつかぬ液体が私の口を濡らし口中一杯に満ちあふれ、やがて咽喉の奥へ流れ込んで来たのも前と全く同じであった。

牛女、醜くくて無知な女、牛のように後から後から、とめどなく涎を流す年上の女中お利喜。私は何故彼女が私の部屋を訪れるのを拒もうとしないのか。死ぬ程の不快感に嫌悪しながらも、尚、あのマダラ蛇のようにねばねばとした白い泡立ちの中に埋れてゆこうというのか。私の日常を知る者にとってはこれは想像も出来ないことである。

空想と現実とは、私にとって、このように駆け離れたものであった。私はこれからも牛女のつばきの沼に溺れてゆくことだろう。

『秘藏の黒髪』

— 或る三文画家の悲恋余話 —

白金紅次文・画

『ねえ、とつてもいいお話申上げましょうか、耳よりの哀れぼくて、涙ぐましくて、ちよっぴりお色気があって、先生のお気に入りそうな』

『よせよ、先生だなんて云うのは。君のはいつも信用が置けそうもないね、かつがないのなら一つ承つてもいい。今日は暇にまかせて御覧の通り道楽ゲテ物の整理中なんだ』

『アラ、随分お蒐めになって、この写真とは川田芳子って昔の映画女優のじやありませんか、こちら早川雪洲、あの——中里介山原作大菩薩峠のお芝居なんでしょ、これ、何んですの？ 亡くなった栄三郎の雪姫かしら？ そうでしょ』

『存外君は識っているんだね、驚いたよ、今時の娘さんにしちや、何んで覚えてんだい？ こんな人達を』

『勉強してますの、お嫁に行つて苦労しないように、専ら主力を古典物に集中して、フフ、だっていつどんな旦那様にめぐり当るかも知れないから、そうなんでしょ、君！ 僕はしおらしいウエットな女性が好きなんだよ、例えばこんな——って云われて三十娘がびっくりしないように、ホホホ、今から前以て覚悟するようにつとめてますの』

『凄くまた早手廻しだね、恐れ入りました。じゃ、これはどうです？ 浅山鉄山下館の場有名な狂言皿屋敷、松蔦のお菊かな、刀を抜いて見得を切っているのが鉄山居士、力一杯つるべの綱を曳いてほくそ笑んでいる役得が岩淵忠太と云う名トリオだ、こんな芝居はもう演らないかも知れない、都会のと真ん中じやね』

『でも演れば結構見に来るんじゃないやありませ

ん？ 映画よりは迫力があるんだし、今時の連成のワイドと違って真正の天然色ワイドは昔からずっとだし、やっと今頃映画の方が騒ぎ出すなんて、それこそ時代遅れじゃありませんか』

『若しそのワイド映画でスクリーン一杯つるべが映ったらどうします？』

『驚かないわ、事詳かに拝観させて頂きます。一番安く上つておまけに勉強になって、フフフ、男性方の心理が判つて、それこそ一挙兩得』

『いや、そう割切っちゃ今更云う処はないね、誠に御殊勝な心懸けで、何処かにいるあなたの旦那様がさぞお待兼ねで御座いませうね、アハハハッ』

『まあ——失礼、ではありませんわ、そう仰言る先生も、そのお一人なんでしょ、何処か

にそんな女性の方がおってお待兼ねでしたらホホホ、それはそうと、ねえ、先生、男の方が女の人のするお腰巻や着物のほころびを縫ったりお洗濯をして呉れて頼み込まれて来たとしたら、どうすればいいんでしょう？」

『どうしたらいいかって、また急に藪から棒だね、男が女の物を女の人に頼んだんだね？』

いつ、何処の太郎兵衛が何のため、何して、こうと来なくちや困るよ、そんな飛っぴな御注文はさ、耳よりなお話って云うのは、それ？」

『だったら涙ぐましいでしょう、ちよっぴりお色気があつて。さる歴つきとした男の方なんです。頼まれ役はアパートのマダムさん、あたしは又聞き、近頃は男性の方が至極ドライになちやったわ、フフフ』

『方でボンボン水爆が破裂するから男だつて割り切らざるを得ないんだらう。そんなテーマを小説に書くとしたら面白い、どうせおかしな世の中なんだから。』

で、——その男の人って何んだい？』

『その前に先生、推理工学的想像説があるんですのよ、マダム先生のお言葉を拝借すれば、ホホホ、あたしも見ちやった、とっても素晴らしい物件を、フフフ』

『いやにまた思わせ振りを効かせるんだね、いい加減な処でつるべを操り給え、まさか白

昼お化けが出た訳でもあるまいし』

『それがお化けそっくり、ダラリっと、顔は見えなかったけど。怖いでしょ、真実黒髪の女のお化けなんです』

『それと推理学とはどんな関係？ 話を怪談化する前に矢張り確めるものは確めておかないと筋が立たなくなる、謎のどうか場末のミーチャン映画で沢山だよ』

『ねえ、先生、商売が、アルバイトから知れないけど——画を描いて売ってらっしゃるようだから普段いろんな事があつたってかまわないんでしょ？ お洗濯だの、つくろい物だの。ただそれがみんな女物なんです、だからあたし真先きにマダムさんに聞き直おしたんですの、何んですって、どうもその一件があれらしいの。外からモデルさんも来るし——モデルさんと云つたって何んだか判んないけど、そうらしい女の人が二、三人、それが色の褪せた緋縮緬のお腰巻に古ぼけたお召まがいの着物を男の方に渡すって手はないで

しょ？ 推理学のお講義はここから始まりますの』

『有料講義は前置きが長いね、ワイドでお気毒だけと思ひ切つて隅から隅まで公開するんだね、画面を溶離させて情景を一つ映写して呉れ給え』

「アパート内の立話」

『美沙さん（これはあたしの名）、三号室の広瀬さんも仰言るのよ、ホラ、二階の押川さんのこと、あのお部屋からゆうべは飛拍子もない声がしたんですって、ううん、例のモデルさんはとくに帰っちゃったあとなの、方々で今しがた抗議が出たりして困っちゃってるのよ、人騒がせも程々でなくちやねえ。そしたら今朝になつて僕これから一寸上州の方へ行つて来ます、これ、済まないが洗つて呉れませんか、この包み物を。見ると変な女物でしょう、どうにもこうにも、妙な間貸人だナンテ笑えもせず、そうなの、眼を真赤にして、きつと一晩中描き通したったんでしようよ。見ちやったって何を？ あんたがそう、二、三日前に、へえ——驚いた、何んでしよう？ 女の恰好した、モデルさんは最近滅多に泊らないだけだね、おかしいわね、何かしら？ どうせ独り者なんだし、汚ない煎餅布団にお茶飲み道具、洗いざらしの寝巻の一つ二つはあつてもどうと云うことないのね、そう云えばいつか、あれは夕方だったかしら、ひどく青ざめた顔をしてハイヤーで帰ったことがある。妙なお琴を包んだような長い物を持って、画の材料ですかと聴いたけど、笑つて部屋の中に入っちゃったけどさ、あれなのね、きつと、ええ、外ならぬあ

の人の物だとすると頼まれたあたしだって洗濯しない訳には行かないし、ほころびにしても男の人は無理でしよ、つくろいはい向かまわないんだけど、あなたが？ いいですよ、どうせ暇なんだから、そうお？ ホホホ、誰のか判りもしない汚れ物ですよ、まあ、嫌やですね、そこまでお手伝い下さらないでも、さあ、何かの勉強になるかどうか、御奇特が過ぎて押川さんと奇妙な関係になっち困りますよ、念のため、フッフ、変り者と云えば一方の旗頭で通っている方なんですものねえそれは止めて下さいよ、管理人のわたしが掃除したっておかしくないんだから。さあ？ いつでしよ？ 出た切り雀の鉄砲玉だから気が向いたらその中帰って来るんでしよ、そう、風采に似ずあつさりはしてる、画描きさんってあんなものでしよね。いつかも僕、嫁さんが欲しいなあって、わたしに向って云った事があるけど、若いモデルさんをきちんと帰えす処を見ると何か考えがあるんでしよ。さあ、どうですか？ その点はうんと推理をきかせて御覧なさい。じゃ、これだけあなたにお願いして置こうかしら？物は良きそう、きつとモデルさんに着せて何か描いたんでしよよ、そう、よくカレ

ンダーの下描きを頼まれたりして、一、二枚わたしも見せられたことがある、かと思うと妙なタイコ持ち見たいな薄っぺらな男の人が乗り込んで来たりして案外忙しそうね。普段飲む訳でもないし夜遊びも聞かないから大方

立たせようと思えば
そのまゝ立つでしよし……

お金も貯っているんでしようけどさ、じゃ出来ましたらわたしの部屋へ放り込んでおいて下さい、御迷惑さんでしようけどね、ホホホ……」



推理の余り引受けた

私の始末記

『さて、どうしようかと、恐る恐る包みを開いて見ると一件の物が出たんです。これが何処かの彼氏の汗にまみれたシャツかパンツなら三十娘ならずとも喜んで洗いもし、つくろったことでしょうけど同性の、しかも少々くたびれたお腰巻や着物であって見れば、興味なんぞ今更湧く筈もなく、ただはずみでやったことがお部屋代の延滞に少しでも役に立つならと思つて品がいいなりに丁寧に丸洗い、落ちない処はベンジンで拭き取るなど花嫁修業の一課目を演つた訳ですが廊下を通つた時、ほんのチラッと見た黒い髪の女の姿が女の私にどうにもこびりついて気になって仕方なかつたことは白状致しますが本当なんです。嫉妬とか三十娘のあせりとか云うそんな高級なものでなく、多分半分魔がさして半分好奇心にズルズルつと曳きずられたのではないかと自己弁護したい気持ちでした。マダムさんなら、美沙さん、そんな時が一番危い時だわ。』

——とうとうその晩、悪い事とは思つたんですがその危い事を演つて了いました。隣近所のお部屋の寝静つた頃を窺い偶数の鍵（このアパート内、火災と万一の場合の仕組み）で押川さんの部屋を、さも未来の奥さんかの

ように、だから娘も齡を取ると怖いでしょ。呉々も御用心、御用心の程を。さてブーンと男の方特有の匂い、六畳一間に取り散かした絵具皿や筆の数々は独りで商売なすっている方です。それから当り前のこと。万年床も驚きません、垢に汚れたお腰巻は蹴散らかそうとたたまれていようとこまいませんわ。私はもう一段と魔にさし込まれたように手が押入れの襖に自然と掛つてさつと開けて了いました。一種異様の匂いは私の鼻のせいだったでしょう、栗の花が過ぎて白粉の花だと申し上げたいが真実男の匂いに間違ひはない筈。そこで私は……とうとう黒髪の女を発見したので。行李の蓋を逆さにして折つたように裏向きに上半身を現わした和服姿はまるで生きた女を想わせるようと思わずドキッとしたが、毒を喰らわば皿までの三十娘は遮二無二いとも勇敢に、バックシヤンの女性ににじり寄つて怖る怖る背中から前の方に眼と転じた途端、ふつくとした胸から二の腕にかけて縄が掛かつているのにびっくりして了いました。道理で襟から下の袂が合わさつて帯一つに見えたのはしつかつと両の手が縛られていたためなのです。若い女の等身大の人形、まさかこんな物が男の方のお部屋の中に、どうして、何んのために、しかも植毛を結つた島田髷の飾元結、紅白三枚がけの前飾りも鮮かに、と帯から下を抱くようにしてそつと取り

出す首から上の花嫁人形の精巧さ、何さま名工何某が精魂込めて作り上げたものに違ひありません。私が文庫結びの帯を曳きずらないように右手で女の両脚持つたその感触、いや、そればかりじゃなくって身体全体がふんわりしたゴムのような弾力性なのにぞつとする位の肉付の良さ、いえ、本当なんです、です。それから立たせようと思えば立つでしょう——それでいて芯が効いてそのまま歩き出すかも知れません。

髪に似合わず地味な秋の露草模様に黒地白雪の帯、袖袂からこぼれる緋無地の襦袢の色は色っぽいと申上げた方が無難でしょうが、行李の蓋底に放り込まれた豆絞り手拭を想えば、何んと云う哀痛に満ちた眼差なのでしよう、などと煩ずりしている様を誰かが御覧になれば何あーんだと笑われるかも知れません。がその時は推理学が何処かに飛んでただ目茶目茶にその娘人形に惚れ込んでいたんです。から可愛いじやありませんか、三十娘は。私は等身大のその人形を万年床の上へそつと横に寝かせて見ました、画の素養がまる切らないから色良いポーズは出来ませんでしたけど、今度はお澄ましに座らせようと思つて膝を曲げた途端、緋無地の長襦袢の裾があいて真赤なお腰巻が出たのには一寸びっくり、いえ、微笑ましくなつて、いやもつと残酷になつて捲くつて見て本當にびっくりして、

思わず顔が真赤になっちゃいました、何故って、でしょ？　ここまで来れば時たまに脇鉄砲を喰わすモデルなんか永久に要らない訳です。よくまあこんな物を、どう云う理由であの画描きさんが、それにしても後手にきちっと縛ってあるなど何かの画の材料に使うことは判っていても何んだか変な気持ちになっちゃって、まるで——」

『そいつは見たかったね、惜しい人形だ、是非とも見なくっちゃ』

『一寸待って下さいまし、混ぜ交わさないでお静かに願います。だから、ホホホ……このあとがあるんですの、要点だけ申上げて見ましようか。あたしって真から、心の底からその人形に惚れて了ったんです、勿論今まで見たどの人形よりも生きた女性そっくりでもあり、また人間と何ら変らない、いえ古今東西絶世の美人がハッと出してしばし息を停めたものと思う位でしたから、理由は兎も角その自由を奪われた姿は振いつきたい程の魅力を持っていました。女の私がこんなに惚れる位ですもの、世の多くの殿方は千万金積んでも手に入れたいと思ひになるのは無理からぬことでしょう。腰に巻いたお腰巻、下着の長襦袢が着物と不均合なのは最近替えたものと思われ、マダムを通じての洗濯つくろい物とは尾を曳いたようにびったり合うではありませんか。その結果推理が当らず押入った私の

始末記は深夜に忍び足無言劇で男の部屋で無断人形と戯れるの大胆さにとろ／＼溺れて了ったのです。私が桂庵の女房なら彼女は借金のかたに曳き立てられて売られる娘でありましたように、見破られた敵方の間者が彼女であつたとすれば、きつい責め折檻の鞭を振うお局が私だったかも知れません。でも……女が女を目茶目茶に縛る力だけは、どうしても出ませんでした。よしんば人形に似せて私が私の身体を縛って強盗に襲われた二人娘の哀れなシーンだと見立てて下さるうとも緩んだ縄目であれば、興味は相殺されるんじゃないでしょうか。ではどうして精巧をきわめた世にも珍らしい等身大の花嫁？　人形が何んの理由があつてこんなに酷く後手に縛り上げられたのでしょうか？　私はサイレント映画の駒のように口をバクバクさせて、ああでもない、こうでもないと言つて壁にもたれてうなだれている縛られた人形の姿を見つめながら、とう／＼夜の明ける頃まで考え込んで了いました。女の心理学の浅さはかさ／＼ミイラ採りがミイラに魅せられての尻切りトンボ、ワイドの隅々が堀り尽くせなくて、ホホホ……、御免なさいね。精一杯申上げたつもりでも言葉が足らなかったかしら——』

ではどうして何んの理由があつてだナンテ生温るさ加減は流石にウエットな三十娘を代表して貴女らしい。それはそれとして、世にも稀れな、花嫁人形だったね、その縛られた、縛られた理由か、成程ね、そして何から何まで完備された女性そっくりの装置、装置はおかしいけど、まあ早く云ってダッチワイフ見たいな和風人形が独り者の画描さんの処に秘められていた、となると悪いようだが、いろんな事が考えられるねえ、例えば……さ』

『失恋かしら？　その押川さんって方、貧乏臭い無精ひげを落すと一寸二枚目に見えそうですものね、もう少し、だとすればあたし、結婚申込んだかも知れない、嫌やだわ、すぐ先生ったらそんなにお笑いになるんですもの』

『笑い処か同情してるんだよ、僕がその押川某君なら、こうありたいね、よく聴いてい給え、つまり僕にさ、或る名家のお嬢さんが何かのはずみで惚れたとする、勿論、そんな格式の均合わない嫁入りは御法度でお流れ、彼氏の僕はお定りの破れかぶれから路頭の似顔描きや寄席の下足番に身を落してすねた世間を渡るさ、その内にお嬢さんの百合子さんの方は』

『百合子さんかしら？　だって、人形の入ってた行李の中には何んとか圭子って手紙がありましたもの、一つ美沙ではいかが？』

『百合位の処がいいとこだよ、で——愈々、諦め切れないままに親が取り持った処へ型の通りお嫁入りすることになったんだが、これは忘れずによく見るんですよと件の一物をそつと長持の中へ入れた処から察すると母親は詳かに説明したに違いない』

『嫌やだわ、先生、恋をする娘さんならとつくに知ってますわよ、あたしだって』

『それなら、なお更結構、処が不幸にしてその娘さんは肺を冒されて婚儀の直前に没くなったんだ、気の毒だね。取り分け母親にしてみるとこの世の不幸を一身に背負ったようであるに、たった一つの代々母から譲り渡された形見を古道具屋へ売却したと想い給え』

『アラ、勿体ない、あたしなら死んでも手放さないのに』

『僕だったら息を引取る前に一緒に抱いてお棺の中へ入っちゃう、それ位に人形と思えない代物を抱え込んだ道具屋は困ったろう、いや、大いに珍重したかも知れん、して見ると道具屋になればよかった』

『随分勝手ね、だから殿方って生来浮気の塊見たいに思ってた丁度いいんだわ、先生もお仲間の一人、フフフ……』

『おお、冗談はあと廻わし、大切な推理性的想像説を君がやらないから浮気の一つ二つは見逃して貰わなくっちゃ。処でどうなったんだい？ 道具屋はと、勿体なくも持て余ましてモデル代りに押川某氏に売ったとするか、その間のことは折を見てゆっくり彼氏に聴いてみるんだね、どうせまた、お腰巻や長

襦袢の一枚や二枚は、ひよっとすると人形の身体まで君が洗わなければならぬんだからアハハハッ』

『そう問屋が卸すといいでしようけど、ホホ、これは内密のお話し』

『で——これからが女を縛る処に話の筋がつながる一応推理性は満点で合格するんだが何んともこころもない次第さ。』

貫一お宮さん見たいに月を相手取ってセリフを云い合おうにも肝心の恋人はこの世にいないんだ、へよくも僕を振ったな。この恨は僕が生きてる限り、果さずに置くものかな。云う処で百合子女史を後手に縛ってどうとかしたんだらう。でないと黒髪の花嫁人形のテーマは生きて来ない。どうです？ この甚だ以て実用的で悲しくも色っぽい三文画家押川某氏にまつわるの一篇は、納得がつかませんか？

『何んだか、先生、それじゃあちこち利用した見たいで、一寸おかしいわ、だって等身大の娘人形を後手に縛ったなんぞして、さっきの写真見たいに酷めたり、責めたりするんなら判るんですけど、何もその百合子さんが確かにあの人形を渡された証拠はないんですよ、だったら、あたしだって、縛られて結婚が出来んなら喜んで、提供しますとも、ホホ、それこそ無条件降参で』

『で、その微笑ましい女の人形は今でも彼の処にあるの？ 一度拝見したいねえ、話は話としてこりや珍らしい掘出し物だよ、何処を探したってそんな人形はやたに見付かるも

んじやないし第一荒縄なんぞで縛ったりしちや勿体ないよ、飛切り上絹の細引位のところを使わなくっちゃ困る、何処かの先生がしきりにそう云ってた、と云つとき給え』

『ホホホ、存分申上げて置きますわ、序でにそのお人形も是非先生とやらに御披露なすつて下さいってね、でも無断拝観で、あたしの方が後手に縛られりやしないかしら？ こんな事になったのはあたしが張本人なんですものね、ねえ、先生、話は余談ですけど女を縛って絵になります？ 芸術美溢れる』

『さあ、どうだかね、君見たいに初めっからこのお話は哀れっぽくて涙ぐましいなんてひた向きな同情を寄せる娘さんだったら、きつと絵になるだらう、何も押川君でなくも今すぐ、絵になっちゃうよ』

『そうかしら？ 縛るって、ここで、先生がお縛りになるんですよ、じや着物着て来ればよかった、あの人形とそっくりな、ホホホ……』

『まあ、早く云えばそれも出来ると云う訳さ、特別美しき君なればこそ、そんな事より一日も早く何処かでお待兼ねの彼氏を探し出すことだね、彼氏待ってるぜ、大いに首を長くして。アハハハハハ、そしてこれはと思う脚本でも出来上ったら二人揃って毎日のように僕んちに遊びに来る、今度は僕の方が大いに首を長く伸して待つ身になるんだから、じや、それまで御機嫌よう、元気でい給え』

ある夢想家の手帖から

第二百二十 白痴を使つて

夫の目の前で情人と接吻する
その方法をラブラは発見した。

自分の白痴に数多たび接吻をして、

その唾液でびしょ濡れの奴に（附記一）

情人が飛び附いて心行くまで自分の接吻、

そして微笑む貴女の手へお返し申す。

何と、夫は図体の大きい白痴じやわい！

手段化法則の例証に引いたこの短詩は、第二十二項「ヘクトルの馬」の所で数行引用した時に紹介した紀元一世紀のローマの諷刺詩人マルチアリスの作である。短詩形だから、この七行で全文である。

モリオ morio というのが白痴である。生来の白痴と後天的の白痴とあるが、後者にはクレチン病の犠牲者が多い。アルプス山間によく見られるそうで、甲状腺の機能低下によって内分泌異常になる。子供の時発病するから發育不全で侏儒の矮人を生ずる。そして白痴だ。こういう連中が愛玩動物として珍重されたのである。侏

沼 正 三

儒と道化について述べた第五十四項でも触れたことだが、シドロヴィッツの「無産者の風俗史」（風俗史叢書）からフリードレンダーのローマ風俗史の一部を引用しておこう。

婦人達は小さい子供達を素裸のまま走り廻らせ、その罪のないお喋りを聞いて楽しんだ（附記二）。だが、中世の宮廷における如く、矮人、巨人、巨女、「真正の」白痴、いわゆる男女双生、その他の異形な畸形児達も飼つてあつて御前に引き出されるのだつた。ローマ市にさえ「珍奇物市場」が開かれ、ここでは「脛なし児、腕短か児、三ツ眼児、尖り頭児」（附記三）などを買うことができた。矮人は人工的装置によって作り出された。そして色々な五体の不具や彎曲の様を示す当代のグロテスクな青銅細工の数々は、この物凄いベット愛玩の風が広く流布していたことを物語っている。……

右の引用で、特に「真正の」白痴と云っている所に注意された。肉体的畸形と異つて白痴かどうかは外見からはすぐには分らないので、往々偽物があつたのである。再びマルチアリスを証拠とすれば、

奴は白痴という触れ込みで、俺は二万両も出して買ったんだ。ガルシリアヌスよ、俺の金を返せ、奴は賢いぞ。

この二行詩は、当時いかに「真正」白痴が珍重されていたかを教えてくれる。外にも「白痴」と題する即席の二行詩 XIV, cxx があって、やはり伴りの痴鈍かどうかを問題にしており、関心が那邊にあったかを示している。

ところで、この七行詩の白痴は、先天性白痴ではなく、クレチン（原義はクリスチャンで、洗礼してあるだけが人間並という意味である）即ち、矮人の白痴である。これは末行で夫を大きい白痴といっているのから逆に推してそう解釈できる。（morio maior は白痴の度が深いという意味にも解せるが、私は取らない）英訳が natural inferior の語を用い dwarf fool と訳しているのも、そう解したからだろう。

ラブラ Labulla は女の名前。貴婦人（第五項）である。情人といっても、この場合は家庭に客として迎えられているわけで、忍ぶ逢瀬といった日本的なあり方より、ルイ王朝のサロン風な恋愛形態に近い。二人は姦通している。夫の前でだけは神妙にしていたのだが彼女はうまいことを考えた。手飼の白痴を仲介にして、接吻をしようというのだ。白痴は愛玩動物だから、丁度現代の婦人がスピッツに煩うたり、小鳥に唇から餌を与えたりするのと同様、これに接吻しても怪しまれない。すると、直ちに情人がその跡に接吻して直接唇と唇を合せた時のような接吻の感じを出す、という段取りだ。夫は何も気附かない、何と巨大な白痴なこと、というわけである。

肉交以外に性的満足を知らぬ段階から見れば、接吻を以て代用する段階は一段上であるが、その接吻をさえ、このように間接的に想像を以て代用しうるに至った段階は、恋愛感情において極度に洗練された、頽廃というに値する文明の産物である。古代文明が没落せんとする前の帝政ローマ極盛期の文学作品にふさわしい内容といえよう。

然し、この間接な接吻は、仲で往復させられる白痴の完全な手段化なくしてはあり得なかった。「また逢う日まで」という映画で、ヒロイン久我美子が恋人と窓の硝子越しに接吻する場合があつたがこれは硝子の持つ透明な無機物性によって接吻の感じを出すのに比較的無理がなかった。然しここでは二人の唇の間には、人間——彼等にとつては勿論「人格」ではなかったが、少くとも「人類」の形態ではあつた——が存在するのだ。ここに接吻を有効に感じるためには、この白痴が硝子のような無機物性を獲得する所まで手段化が徹底していなければならぬ。ほんの僅かでも、白痴に人格即ち主体性を認める心が残ったなら、微妙な接吻の喜びは消えてしまうだろう。詩人萩原朔太郎は閨房に犬を入れることのできる人々の羞恥心のなさに驚いている（『港にて』の中「犬と寝台」）が、犬さえ純粹に手段化できず、無機物視できないのが、近代人である。

然るにラブラ達は、二人の間にある白痴の肉体を全く無と評価しつつ直ちに接吻の喜びを感じることができた。寝室に彼がいても、彼等は何の恥しさも感じなかったであろうことは云うまでもない。犬以下なのだ。……彼は決して虐待されてるのではない。愛玩物として可愛がられているのである。しかも私がこの短詩に強いマゾヒズムを感じるのには、けだし、女主人ラブラに対するこの白痴の存在の完璧な手段性に羨ましいものを覚えるからである。ここでは苦痛の契機はマゾ的效果に何の役割も演じていない。

この詩を手段化法則の好例証として引いたのはこんなわけからである。

附記一 私はラブラの唇が触れる場所としては例えば額などを考えている。然し、接吻で「濡れた」(wet)と訳した madentem は、ある英訳の様に Slobbered (涎れを垂らした)とも訳せる。（逆にあつさり、接吻に full of (満喫させられた)とも訳せる——そうすれば濡れることと無関係だ——が。）これならラブラは

この白痴の唇に自分の唇を合せただけで、彼の唇から涎れる彼女の唾液に情人がとびついたことになる。訳解としてはこの方が正しいのかも知れぬが、私にはこういう接吻は不快極まるので採らなかった。私のヤブーは舌人形(MV結合)唇人形(MP結合)足美容器(MF結合)になり得ても、原寸の儘では遂に白人と接吻(MM結合)し得ず(ヤブー第六章第一節参照)、極小畜人としてその有機的生命性を極小化して始めて白人の口と交渉しうる(同第十章三末尾)。私の口に不純な有機性の残る中は、それが主人の唇を汚すことを恐れて、特殊接触(MV、MP、MF等)以外主人の肉体に触れ得ない。それがヤブーに反映してるのである。つまり空想の上でさえ、私はローマの貴人達程には人体の無機物視に徹し得ないのである。

附記二 本誌二十七年七月号野溝草兵「世界奴隷艶情史」は、それと断りのないシドロヴィツの抄訳である。この部分を

女達は美少年の着物を脱がせて罪のないおしやべりに時を送ったと訳しているが、誤りだ。これでは美少年と性的交渉した見たいだが、そうでなく、奴隷の幼児を裸のまま手許で愛玩しているのだ。愛の神クビド(キュービー)が裸の幼児で現わされる、丁度その様なものを愛玩動物として飼っているのである。子供達に家畜意識はなくても、着物を着せずに置くドミナの眼には家畜以上のものでない。総じてこの訳は珍訳誤訳が多い。

附記第三 野溝訳でも、又雑報一四七で紹介した高山洋吉訳も、ここを

「ふくらはぎがなく、腕が短く、三つ目で、とがり頭の、」人間と、一人で各畸形を兼ねた様に解しているが、それなら独乙文の構造としては、最終の形容詞 spizkopfge の前 und が入るべきで、ここは、そうでない唯の列挙だから、別々の畸形を意味する。

第二百二十一 チベリウス帝の小魚達

前項附記二の野溝草兵氏の訳文では、更に、チベリウスのことを述べたところでひどい誤訳がある。

この王は小魚と云われた自分の嬰兒を、鞭で叩いたり、甜めたり噛んだり、風呂の中で膝の間に挟んで泳ぎ廻らせたりした。

とあるが、いくら放埒なチベリウスだって自分の子供にそんなことをするものか。この部分の前後を詳しく原文から訳出して見よう。

奴隷達はその目的の為に奉仕せしめられた淫蕩な非行がどれ程深いものであったかを示すのは、多くの場合全然無害なつもりで書かれた古代作家の無数の物語であって、この中で語られているのは、決して単に主人が女奴隷や男奴隷相手にやらかした淫行ばかりでない。女主人の淫行もその重要な部分を占めている。即ち彼女は男奴隷を選ぶ際にその能力について特殊な要求をしたのである。財産のある地位の高い貴族の家には、最も内密な私用を足すのに奉仕するための奴隷の大部分が養われていた。そして、汚猥なことだとされているある種の倒錯行為をなすことは、それをさせられるのが奴隷の特別の仕事であつたが故に、自由人にとっては直ちに恥多き行為となるのだった。放縦な乱倫の一番凄惨な例証は自分の獣慾を刺戟昂奮させるために(右の野溝訳は無論だが、前項附記三の高山洋吉氏訳さえ、ここを「野獸的な鞭打欲をみたすのに」と誤訳している、これでは文脈も通じない。——露程の道徳的抑制もなしに——奴隷の赤ん坊を濫用した事実であつて、スエトニウス(十二皇帝伝、チベリウス四十四章)はチベリウス帝について、次の如く報告している。

『話すこと聞くことさえ憚られる様な、ましてとても信じられぬ様な、恥多き悪行を彼はしたと伝えられている。というのは、彼は「小魚」と名附けた、年端の行かぬ男児達を仕込んで

入浴の時……泳ぎ廻って遊び、舐めたり咬んだりして彼の感………する様にさせたのだ、いや、更に進んで、身体は大分すっかりして来たが未だ乳離れしていない子供達に××や乳房を吸わせたのだ——全くの性的嗜好で、彼にこの傾向を与えたのはその体格や年齢であつたのかも知れぬ。』

多少解説しておく。ドミナの男奴隷に対する要求というのは、性能力だが、後文も考え合せると、それだけでなく、例えば舌の長さなどということにも及んだらう。最も内密な私用というのは、本来は身の廻りの普通は人にさせられぬ用事、即ち入浴や上廁の世話などを指すが、ここでは文脈から、性的倒錯行為の受動的強制特にF技巧C技巧A技巧を指すと見てよい。つまり一種の性具として用いるのだ。こういう奴隷仕事として理解されたから、これら特殊技巧を自分で施すことを自由人がいやがったというのである。

チペリウス帝の事蹟についての野溝訳の誤りはもはや明らかだろ。『小魚』とは自分の子ではなく、奴隷の子供達だったのだ。このローマ皇帝はこうした一群の「生きた性具」(私のいわゆる唇人形)を飼育使用していたのである。尚第五十二項矮民主義を参照されたい。

附記一 チペリウスはアウグスツスに次ぐ二代目ローマ皇帝である。その皇后ユリア(アウグスツスの娘)の淫乱も有名。第五十一項で扱ったネロの妃ポッペアの一時代前である。この時代を扱った小説ではロバート・グレイヴスの「余クラウディウス」が面白い。尤も本文のような所は省筆している。キリスト磔殺はこの王の治世であつて、ユダヤのヘロデ王や娘サロメ(ヨカナンの首を切つて接吻する淫虐女性)も同時代人。戦後訳刊された『太陰の娘サロメ』という本には、チペリウスやヘロデの宮廷の乱淫不倫が細々描かれ、美貌の後妃へのC技巧や男子間のF技巧——

ユダヤ迄監察に來たローマ元老議官が受動的同性愛者で全裸で立つ美青年の後に跪き「自分の舌を雑巾の代りにする」場面——などがある。然し現在の情勢では紹介は遠慮する方が無難であろう。附記二 最も内密な私用については、既に第二十七項で紹介した素晴らしい手紙の筆者が述べている。あそこで「古典的な原則と模範とに則つて」彼女の側近に仕えて身の廻りの世話をする様仕込まれたい、とあるのは、本項で云う様な古代世界の奴隷使用風俗を踏まえての表現である。唯そこでは奴隷が男性でないという点が強調されているのに対し、本項では奴隷の男性能力が重視された様に読めて矛盾を感じられる向があるといけなないので、一言費しておこう。

矛盾してはいないのである。「彼等は女主人を美しく愛らしい女性として見ることを畏れ憚る様、その魅力ある容姿に男性の視線を注ぐなどいうことを敢てせぬ様充分仕込まれていた」が一方「その唯一無二の使命は、自分の所有者たる女性のために、可能と考えられるあらゆる仕方、欲せられたあらゆる方法を以て、彼女の福祉健康を図り、彼女の氣随氣儘の希望や要求に応じ、彼女の安逸に、又当然のとこながら彼女の情欲や悦樂に奉仕することにあつたのであつて、云いかえれば、自分からは男性たるを主張することは禁ぜられたが女主人から男性たれと要求されればそれに応ぜねばならなかった存在である。即ち「奴隷は一般にみじめな無であり、しかも他方全てでもあつた。女主人は奴隷に対して自分が女性であるからということでは何の遠慮も要らなかつたが、その奴隷を何かにしたいと思う時には、その欲する所のものに——従つて彼女の性慾充足の道具にも——してしまふことができた。一言でいえば、性能力が問題になる時にも、彼は要するに「生きた性具」たるに止まつたので、能動的男性では決してあり得なかつた、ということが云えるのである。

苦しみを求めて (完結)

— 縄への憧憬を持つ女性の手記より —

近藤

一

東京での第二夜も明けて、恵以子は、がらんとした家の中に独りでベッドに繋がれている。素肌に纏った男のガウンの上から前手縛りに縄をかけられ、足首と膝の上を括られて、いるだけなので苦痛は少しも無く、恵以子自身は意志でベッドの上に身を横たえているのである。青年は留守だった。出勤の際、すべての出入口には錠を下して行った筈であるから、恵以子はこの清潔な家のベッドに捕われた幽閉者であった。

恵以子は眼の上まで毛布にもぐり込んで、暗い中で昨夜言った青年の話を思い浮かべてみる。

M氏が恩顧を受けた人の一人娘がさゆりであった。さゆりはM氏に対し、十数年の年齢の開きや父の部下という隔りを越えて慕情を抱いた。M氏もまた清純な少女を愛しく思っ

たものの、当時二人の間には、就中M氏の前には障害が多くあり過ぎて、遂に二人は結ばれなかった。M氏がさゆりから逃れるようにして結婚した相手が青年の姉であり、そしてM氏は妻に対して、秘かに持つ性癖を暴露した。妻は快くM氏を受け容れ、夫婦の和合は他の羨望の的にさえたものの、或る日の自動車事故は一瞬にして助手席にいた妻をM氏から奪い取ってしまった。奇蹟的にかすり傷程度で救われたM氏は、やがて事業も拓け、そして既に逝いた恩人の娘さゆりを引取ったのである。青年はこう云った。

「僕は亡くなった人を傷つけたくはない。まして自分の姉だ。然し正直な処、姉はさゆりさんに劣っていたと思う。現在の義兄の地位や環境から観れば、義兄がさゆりさんと結ばれるのは少しもおかしくはないし、むしろそ

の方が自然だと誰でも思う。それが義兄にできないのはね、男心とでもいうのだろうか、どんなにすぐれた女、例えばさゆりさんのような激しい恋愛の相手よりも、男にとっては初めて妻と呼んだ女の方が心の暖味というよなものを感じるんだね。恐らく義兄だって姉よりはさゆりさんの方が優れた女だと思っているだろうが、男って、全部とは云えないけれど、こんな気持があるんだよ。」

——男心、あゝ何んて激しいものなのだろう。初めて妻と呼んだ女、何んという温い響き、あゝ男、男、男。——

恵以子は生まれて初めて人間の、暖かい血の通った男の話を聞かされたように思った。身動きをして初めて知れる縛しめの身で、恵以子は静かに夫を思ってみる。



夫から見れば、恵以子は上役の縁続きである。然し恵以子を可愛がつてくれる伯父の堀川専務が、仕事の上では上役にすら真向から正論を説いて行く非凡の才を見込んで、恵以子の夫と決めた男が、妻の罪をなぜ叱らないのだろう。恵以子は青年の言葉を思い出すと胸が痛んだ。

「貴女は今までに御主人の妻になろうと努めたことがあるでしょうか。」

ただ妻であるだけの女は夫に叱られることも許されないのだろうか。苦楽を共にする筈の女が苦しみを与えられる資格を持たないのだろうか。

第一の男の許から帰った当座、恵以子は夫に物を云わなかったし、夫も口をきこうとしなかった。物を云わずにいることのやりきれない思いが、満されなかった欲望に絡んで、恵以子を鎌倉へ追いやったといえよう。

鎌倉から帰った恵以子は暫くの間、床に就いたまま起きられなかった。高熱を發し頻りに悪夢に悩まされた。波の音が始終耳許で鳴っていた。そんな恵以子を夫はやさしく見てくれた。女中が居ながら、時折は食事の世話もしてくれ、下の世話は「他人じや恥しかろう」と云って女中にさせなかった。

た。

第三の男の許で傷ついた恵以子の姿は見るも無惨であった。目は限られて窪み、頬はこけて血の氣が失せていた。一週間足らずの日々に、頸から肩にかけて重い枷がえぐり、全身を刻んだ突き傷、切り傷、裂傷、擦傷の多くは既に化膿していた。夫は女中に手伝わせて恵以子を抑えつけ、全身の傷をオキシフルを浸ませた脱脂綿で血の出るまでこすって膿を拭いた。女中が顔をそむける程に恵以子は血達磨になり、ひい／＼泣いた。この荒療治で癒った恵以子を、夫はさも汚れたもののように払いのける日が多かった。九月が過ぎるというのに、夫は夜の床でさえ無言で済ませた。そして恵以子は第四の男の許へ出かけたのである。十月初旬だった。

第四の男は恵以子をただ／＼弄んだ。固い狼轡に口を襲われ、足首を括げて括られたことが余分な怪我を防いだことは不幸中の幸だったろうか。三日目の朝、男の留守中に押入から転げ出て縄を切って逃げ帰った恵以子は翌年の七月九日に女兒を産んだ。夫には余り似ていなかったが男にも似てはいなかった。恵以子の妊娠が判ると、夫は以前にも増して寛大になり、只管赤児を可愛がった。

「男が唯一人の女に一生想いを捧げ続けるように、妻は夫以外のものであってはいけないうのじやありませんか。」と青年が云う。

昨夜の甘美な陶醉に代えて、今夜の苦痛に心に残る苦澁があった。青年は優しく横暴であり、恵以子のマゾヒズムには最適な演技を見せてくれたのに、それを受け容れるべき恵以子の心には、マゾヒズムの歓喜が無軌道に走ることを抑える何かが芽生えていた。否それよりも、妻の心、が目覚めたと云うべきかも知れない。

——私が妻ではなく、只の狂った女の肉体に過ぎなかったとは——

恵以子は今夜も泣いている。しかしその涙は昨夜のそれではない。縛しめを快く想う肉体が、柔肌が恨めしくて流す涙なのだ。青年には恵以子の心が判っているらしい。今夜の涙を流させたのは青年の言葉と肉体であり、心と匂であったのだから。

「泣きたいだけ泣いたらいい。貴女には初めての涙ですからね。貴女は今まで、妻の涙を流すことを知らなかった人だ。お泣きなさい。そして夫以外の男から受ける縄目の苦しみを心から怖れる女になるのですよ。」

青年は過ちの妹をたしなめる兄であった。

「貴女はまず今日までの罪を償わなければいけない。幾つもの大きな罪を犯した貴女が許される日は遠いかも知れません。御主人の心に容れられるまでの途は苦しくて峻しいに違いないありません。それでも僕は貴女にその途を行けと云います。敢えて云います。他の女じ

やない、貴女だから云うのです。苦しんで苦しんで苦しみ抜いて傷つき罪を犯した貴女には、この途の苦しみ位必らず耐えられる筈だ。いつか御主人の胸に抱かれる日まで。貴女の前には幾つもの途が門を開いているように見えて、その実、貴女が安心して進める途は一つしか無い筈です。御主人の許への途は最も安全であって同時に最も苦しく、そして貴女はこの途以外を選んではいけないのですよ。」

恵以子は後手の身を青年の胸に預け、肩を暖く抱かれたまま、子供のよう大きくくつきくりをした。潤んだ瞳はじっと一点を見ていた。もしも瞬きをしたら、湛えられた涙がこぼれそうで、そうなればまた堰をきることは本能が知っていた。

——夫の許へ帰ろう。妻になるのだ。妻に、夫の妻に。そして愛されるのだ。どんなに苦しくても、歯を喰い縛って許しを乞おう。もう決して、男、をあさるまい。肌の上だけの安易な歓喜に引きずられまい。私のマゾヒズムは夫だけのものなのだ。——

青年はこう云った。

「正直な処、僕はもっと、度々貴女に逢いたい。然し貴女は人の妻だし、しかも貴女には僕に誘惑を躊躇させる清純さがあった。柄にもないお説教も悪魔の仏心かも知れない。貴女は僕と逢わない方がいい。どうしても逢い

たくなったら手紙で話をしましょう。然し、くれぐれも貴女は御主人の妻だということを忘れないようにね。」

——有難うございます。私、嬉しいわ、本当に嬉しいわ。貴女はまるでお兄様のように、決して忘れません。私を忘れないで。でも、もう二度とお逢いしません。お便りも差上げません。私は夫の許へ独りで帰ります。

恵以子は青年のアドレスも知らぬまま、汽車に乗って東京を離れた。

——恵以子は今、貴方にお手紙を差上げようとして、何と書いたらいいものか迷っています。貴方は逢いたくなかった時は手紙でとおっしゃいましたけれど、東京を離れる時の私は、一途に夫の心に帰りたく、もう決してあなたにもお便りを差上げまいと何度も心に誓ったものでした。でも、今私は自分の心で誓いを破ります。貴方のお住居を存じあげませんのでM氏宛にお出し致します。

——何から申し上げましょうか、いろいろの想いが一時に迫って来て、頭の中が一向に纏らないのです。

——帰りの汽車の中で、私は、家に帰ったから夫にこうも云おう、あゝも云おうと詫びの言葉を幾度も心に繰返しておりました。

——表からははいることができないで、何度もためらった挙句、そおっとお勝手の戸をあけました。

——私が見たものは、女中に手伝わせて、赤ん坊に乳を与えている夫の姿でした。私は胸がふさがれた想いで、あれ程練習した筈の言葉が一言も出ず、敷居の処に膝をついてうなだれてしまったのです。夫の顔を仰ぐことができずに、そのままの姿勢で断罪を待つ気持でした。心の中では夫の唯一つの慈悲を希って、死刑だけは許して、どうか殺さないで、と祈っていました。妻でなかった妻、母でなかった母の恵以子なのに、妻を、母を追われることだけは死の恐怖だったのです。夫は無言でした。許してくれる筈もないのです。

——私は努めました。夫の肌着はもとよりハンカチ、靴下に至るまで細心の注意を払うと共に、私自身もまた地味ながら清潔であることを片時も怠りませんでした。そうすることによって恵以子の体に染みついた汚れを少しずつでも拭い取って行きたいと思ったのです。靴磨きやワイシャツ、ズボンのプレスは欠かしませんでした。



——恵以子はひたすら夫から叱られる日を待ちました。だって、もし夫が私に口をきいてくれる日があれば、その時は恵以子を叱ること以外にはない筈ですもの。

——夫は初め優しい憐れむような眼差まなざしでした。それがやがて冷く変わり、険しくなっていました。私は必死の思いで夫への希いを表わし続けました。辛く苦しい途でした。毎朝夫を送り出すと、すうつと気が遠くなるような日々が繰返され、鏡台に向うとやつれが目

ました。なぜなら私はまだ夫からの懲しめはおろか叱責を受けることも許されていなかったのですもの。

——夜も幾度か過しました。それなのに、私も主人も二人共全くの無言でした。破廉恥な女とお思いでしょうけど、私には一番大切なことですし、本当のお兄様にきいて頂く気持で申し上げるのです。真暗な寝室で泣きたい心を抑えて私は努めました。翌朝、夫を送り出してから感じるあの眩暈をも覚悟の上で

に立って写りました。

——十余日も経った朝、夫は食事をしながら「君は食べないのか」と云いました。

——なぜ？ 恵以子が御一緒にお食事をしてもいいの？

見上げた夫の眼は、夫と共に食事をしない妻をなじる色を見せていました。私は、「はい」とだけ答えて食膳に向いましたが、これが夫の許へ帰って初めて交わした言葉だったのです。

——私は有頂天になりかかる自分を懸命に抑え

夫の嵐の前に全身を曝していたのです。

——二十日以上も経った夜、夫は煙草を一本喫い終ったあとで云いました。「スタンドをつけよう。」私は闇の中で光る煙草の火をたよりに夫の瞳を求めました。「暗いと君の顔が見えない。」ピンクのシエードをかけた淡いスタンドの光の中で、私は初めて安らぎの心を以て夫の顔を見ることが出来ました。

——夫は私が、「どうかお気のすむようにお仕置をして」と詫びても、「いいよ。」と云うだけでした。

——私は努め続けました。夫の気持を傷つけないようにしながら、機会ある毎に、償いをさせてと頼みました。充分な償いをしないうちは私の心は許されないのだと何度も申しました。それでも夫は、「君を痛めるのはいやだ。」と云うだけなのです。

——私はとうとう泳えきれないで、夫に真実を打明ける決心をしました。私がどんなに罰を望んでいるか、どんなに夫のお仕置を待っているか、それが私の性向に由来し、そしてそのためにこそ、恵以子が罪の通歴を重ねてしまったことを。

「S子の嘘つき！」夫は私のお尻を平手で一つ、びしやつと音のする程叩きました。

「今の言葉は忘れないよ。」

——夫は私に、自分への償いより先に子供への償いを課しました。一週に一度、夫の指

定する日に、私はおむつを当てて押入へ入れられます。

両手は胸を抱くように縛られ、足首も括り合わされたまま、丸二十四時間、狭い真暗な中で、饑けさと淋しきを味わせられるのです。正味一日、押入の近くには誰も来ることが無く、時々赤ん坊の泣き声が聞こえるだけなのです。私の頸にかけられたネルの柔い感触に、そして汚してしまったおもつの気味悪い肌ざわりに、母としてのS子の心を取り戻して行く想いがするのです。

——そしてとうとう一昨日、夫は私に夫への償いを始めさせてくれました。

「君があんな変った性癖を持っている女だ」ということは、僕にとって非常なショックだった。然し、よく打明けてくれた。夫婦とは云え、さぞ勇気が要ったことだろう。君は結婚以来、ずっと僕に罪を重ねて来た。君が自覚しているもののほかにも無数にある。それを今から残らず償うのだ。いつまでかかるか知らないが素直な気持ちになって罰を受けるのだ。そうすれば君は僕が君の夫だと云うことを身にしみて知るだろう。」

——その通りでした。貴方へのお手紙を書くころとして、気持ちを整えるために先刻、女中に頼んで縛って貰ったのです。女中が、主人である私に加えた本当に軽い縛しめの一時間が私の心にどんなに大きな苦しみを与えたこと

とでしよう。

——私は嬉しいのです。有難いのです。貴方のお蔭で、私はS子に還ることができました。もうどんなことがあっても、命を賭けて妻の座を守って努力します。そして貴方へのお手紙を書き終えた瞬間から、永久に森宮恵以子はいなくなるのです。苦しみに耐えながらも平和に生きようとするS子が復活するのです。さようなら、恵以子。

恵以子は長い瞑想のあとで、此の世の最後の手紙をM氏の義弟という青年に宛てた。

『前略御免下さいませ。』

上京のお目もじの日は何かとお世話様になりました。心から御礼申し上げます。恵以子は、お蔭様で夫の膝下に帰ることができました。有難うございます。M様やさゆり様に、くれぐれもよろしくお伝え下さいますように。

ごきげんよう

Y 様

恵以子』

この短い文章の手紙が投函されたあと、森宮恵以子宛の手紙には必らず附箋がついた。

(終)

× × ×

× × ×

私は女の靴に対するフェチシストである。私は美しい女性の足に履かれる赤いハイヒールになりたい。私は死んで再び此の世に生を得られるとしたら犬になって生きたい。犬位マゾ的な動物はない。喜んで女主人の足にし



☆ 私の好きな女靴 ☆

(2)

波 路 洋

靴にして見ましよう。

私は床の上に上向きの姿勢で横たわった。そして両膝を立てた、そして両手で両腿をつかりたく様にもった、最後に私は口を大きくあけた、これで私の空想した女靴が出来上

やれたり、一晩中門番をしたり、終いには殺されて、その皮は御婦人用の赤い靴になる運命が待っている。そうしたら私は自分の皮をよく手入れして靴になったとき上等の靴になって美しい婦人に履いて貰おう。私の皮で出きた赤い靴が高貴な女性に履かれて、その美しいおみ足を更に美しい曲線美に仕立てて銀座の舗道を歩いて貰いたい。苦痛を身を感じてもおみ足の垢の甘酸ばい味とゆでたそら豆の中味の様なめらかな肌ざわりと香りは私をうっとりさせるにちがいない。そうだ空想をめぐらし生きた私を

った。すなわち立てた両膝の上が靴の踵の部分で私の脛がハイヒールの部分で男性の表徴は本部(ヒールの骨格)を意味した。私の腹から胸にかけては靴の中底で、大きくあけた私の口は爪先の部分である。又私の両眼両耳は靴の甲の部分のアクセサリのための切りとり孔で鼻は靴先の甲のリボンと化した。私の皮膚全部は黒いピカ／＼光るエナメル細い繊細なハイヒールのパンプスと化した。突然十八歳位の美しいお嬢様が靴になった私を見つけた。

「まあ! とても素敵、型のいいパンプス」
駆け寄り私の前に立ったお嬢様はすんなりしたおみ足を出して私を履くべく差込んだ。アクセサリと化した私の眼の上におみ足の裏がせまるのを感じ汗ばんだ肌色のうすいナイロンの靴下につつまれた足裏は私の胸にのつた。そして赤い爪をもったつま先が私の口の中にギューと入って来た。リボンになった私の鼻は甘酸っぱい垢と汗の香りが感じられた。私の口は左右に大きく足先まで拡げられた。

「此の靴少し小さい様ね、でも小さめの方が型がよく見えるわ」

お嬢様は独りつぶやき指を動かし爪先をグイ／＼と靴先と化した私の口の中に押しこんで来た、拇指の先がのど仏に到したとき私の腹部はお嬢様の踵の重さをギューと感じた。

「やっと入ったわ、とても素敵！」

お嬢様は両足をばた／＼して私の履き心地を調べていたが、そのまま歩きだした。颯爽として大またで歩く度に私の背中中は床に踏みつけられ、又臀部はヒールの底として床の上をコツ／＼と音を立てている。太腿骨と男の表徴はヒールの木部で私のお腹はお嬢様の踵に踏まれてやわらかく支えて居る。私の鳩尾は、お嬢様のおみ足の土ふまずの下で比較的に重量と圧迫は軽い、胸はトーの部分で爪先は私の口である靴先に完全に入り爪先はのどに到達して居る。これらの私を踏んで居る足は歩く度に靴の中で微妙な収縮と伸びる運動をして居る。特に踵と爪先の運動は私に強

烈な苦痛を与える。その一例は爪先だ、私の舌はお嬢様の爪先で踏まれて激痛が甚だしく、そして指の間の垢が私の唾液に滲み出て来てその味のおいしいのに蕩然とする。お嬢様はグン／＼歩く、その苦しみに私はウン／＼うなった。これは驚いた事に私はウン／＼うなっているのに私の耳にはギュー／＼と聞える。あゝ私は靴になつて居るのだ。つけ。

「あらギュー／＼鳴るわ、この靴。でも、足にピッタリしていて履き心地満点よ、うんと馴れるまでどし／＼歩きましょう。ギュー／＼なるの、とても愉快！」

あゝ何んたる苦痛！ しかし、お嬢様は私のうめき声をきいて愉快でいられるのだ。と

思うと苦痛の中に湧出る快感が私の全身をひきしめお嬢様のおみ足底を奉持する。口中はお嬢様の爪先の味を賞玩し、胸、腹、にはお嬢様の足裏のぬくみを感じられる。腰骨はコツ／＼とヒールとしての音を立てている。苦痛に耐える私の靴もお嬢様には無感覚な無生物でしかないのだ。コツ／＼と云うリズムカルな音に和して私の苦痛に耐えるうめき声もお嬢様にとっては単なる皮の鳴る音なのだ。やがてお嬢様は戸をあけて初夏の街へ散歩に出て行った。微笑を浮べて、私のうめき声を足下に無感動にききながら……。

――終り――

《手記》

女性ホルモン服用の実験報告

古井直哉



急に頭にカーッと血がのぼり、すぐさまみるみる血の気が引いて真青になり、ウエスト

を腋の下からこぼれ落ちる冷汗にびっしり濡して、猛烈につきあげてくる吐気をこらえ

ます。そして又、或る時には目を明いているのに、みる／＼目の前が真暗になり、くら／＼

らとその場へ崩れ折れ、体中の力が全部抜け
てしまつて立ち上れないまま、じつと人通り
の中でしゃがんでしまいます。喫茶店でコー
ヒ茶碗を持ち上げようとすると、キューツと
胸をしめ木でしめ上げられるような痛みと呼
吸も出来なくなり、体中がガタ／＼震え出し
下腹から脳天をつきさすような鋭い神経の痛
みが、癪のような苦しみを伴つて訪れます。
そして次の瞬間には、ケロリと普段とかわら
ないのです。一日に二回か三回、思いがけぬ
ときにやってくる、このような医学の本にも
書いてないような症状に、あたしは心あたり
がありました。

そういう時にかぎって、しばらく後まで胸
のほてりが続くのでした。あのお乳がふくら
みはじめる前の陣痛、——そうさせまいと必
死に逆らう男性ホルモンの根強さが、憐れに
もひしひしとあたしにはわかるのです。その
男性ホルモンの抵抗があり／＼とわかるだけ
に、あたしは必死で女性ホルモンを体の中に
そゝぎ続けました。前に一度、女性ホルモ
ンを使って途中でやめた経験が、その後で女性
化の願望にとりつかれて色々な文献を漁った
理論が、この場所も時間もわきまえずに襲つ
てくる物凄い苦しみを、かえって女性の生理
時の有様とか、つわりの時の気持を思いし
のばせ、むしろ、あたしにとっては好ましいも
のでさえあったのです。しかし、あたしが希

つて遂にどうしても得られないものは、メン
スそのものを得ることです。この点について
あたしは、やはりあせりすぎていました。女
性ホルモンがあたしのお乳をふくらませて呉
れたと同様に、好ましい生理的現象をもたら
す作用があると誤解していたのです。理屈か
ら云つても、卵巣や子宮を持たないで、どう
してメンスそのものを得ることが出来る筈が
あるでしょう。H・エリス等の本には、尿道
から代謝性月経を洩す男性の記事があります
が、せめてあたしにもそれがあつたらと、は
かない願いをこめたウーリー・ナイロンのパ
ンドなのですけど——。

こうして、女性ホルモンの服用は楽しい苦
しみだったのですが、最初、頑強に抵抗して
いた男性ホルモンが譲歩しだすと共に、皮膚
が男性のものとは反対の、しっとりとした湿
みを帯び滑かさになり肉がついてきたので、
ホルモンの服用を少し加減した頃になって、
お乳がふくらみ出してきました。一時、ホル
モンの服用を止めて暫くすると又、男性ホル
モンが執拗に目覚めてくるものですから、少
しも警戒は止められません。その中、二つの
ホルモンの戦いの時に現われる症状は、更年
期障害のそれによく似ていることに気がつき
ました。だから、この症状をよく覚えておけ
ば、女性ホルモンに体を浸しおく最低量が症
状的にわかります。つまり、更年期障害その

ものが、男性ホルモンの不均衡にあることか
ら起る当然の話なのです。

はじめにお話したように、男性ホルモンの
抵抗は執拗ですから、女性ホルモンを男の体
の中で優位に立たせるには、最初は多量に飲
むことが必要です。しかし限度を越えて多量
に女性ホルモンを体の中に注入しても、嫌な
重くるしい苦しさが続くだけです。メンスの
時のありさまもツワリの気分も、たまにか或
は月に一度位なら、楽しい気分をもたらして
呉れるかもしれませんが、しょっちゅうは刺戟
が強過ぎていけません。それに、お乳も女性
ホルモンが多過ぎてはふくれけないのです。丁
度、男性ホルモンが頭をもたげてくるのを、
ぐいと押さえてやるだけの女性ホルモンを補
給し続けければ、目に見えて腰やお尻に肉がつ
き、お乳がふくらんでくるのです。その補給
の目安になるのが例の更年期障害の症状なの
です。ですから女性ホルモン服用の際の作用
に、二つの種類があることがわかります。一
つは、男性ホルモンとの均衡に於ける女性ホ
ルモンの優位、もう一つは、女性ホルモンの
過剰によるメンス様症状です。勿論、女性ホ
ルモンの中にも種類がありますから、その影
響も調らねばなりません。一般的に男性
ホルモンとの対比に於ては以上のようなです。
むしろ女性ホルモンの中の種類は、女らしさ
の週期に変化を与えるものとして、研究して

見ようと思つていますが、まだ御報告の段階には至つて居りません。

さて、このようにしてあたしは一つの経験を得ました。先ず、男性ホルモンの適量によつて、男のあたしの体を女の精の中にひたらせておくこと、そして、そうすることによつて女になりたい気持を、体の変化と共に満たしていくこと。第二に、週期的に多量の女性ホルモンをとつて生理的にも女体を知ること。現在は、女性ホルモンの助けを借りて、お乳をふくらませメンスに似た症状を体に出すことによつて、女になりたい気持を満たしています。

それでは、一体何んのために女性になりたのか、この事について少し書きましよう。あたしが女の人になりたいのは、男に愛されたいためじゃないのです。女の人の仲間に入れたて戴きたいからなのです。男の人でも、おかまさんやゲイ・ボーイなんていう男の人に愛されたい人がいますけど、あんなのは身憚りがする位、ぞーっとします。あたしは男なんて大嫌いです。ヤニ臭い呼吸、ごつごつした体、薄汚い皮膚、男なんて好い所が一寸もありません。それに比べて、女の人の体の素晴らしいことはどうでしょう。柔くしつとりと肉づいた皮膚、香くわしい息——女の体のことを褒めていたらきりがありませんが、その上、女の人はお化粧をして柔い肌を着、ス

トッキングやハイヒールを履いてトイレに入る特権があります。ブラジャーだって、平べったい胸にいくら巻きつけたって、そんなもの、なんの意味もありません。ふくよかな胸の隆起をぐつと支えてこそ、ブラジャーが生きてくるのです。パットでふくらますにしても自分のお乳じゃないし、それにパットを支える高まりがなければ全く感じが出ないのが実情です。あたしはブラジャーだけは、女の人と同じ気持でつけることが出来ますから、そういえるのです。むっちりふくらんだ乳房にブラジャーが喰い込み、ストラップレスの黒いレースのスリッパが、ナイロンブラウスの胸をくつきりふくらましているし、ショーツ・カットに刈り上げた髪に香油をつけて、キスミーフアンデーで下拵えすると、すっかり女の人と同じです。あたしは自慢じゃないけど、一寸顔立ちが愛くるしいので、普通の女の人なら体でも負けない自信があります。ルーージュは、女性ホルモンの御蔭で唇がツやつやしているのにつけません。むしろ、つけない方があたしにとって効果があると思うのです。ストッキングをコルセットで吊つてハイヒールを履く時の気持なんて、言葉でなんかいいあらわせません。ホルモンの効果で脛毛もすっかり薄くなつてしまつたけど、肌をすつきりさせるためにエバクレームで脱毛しアストリンゼンでひきしめて、コールドで艶

を出す、黒の薄いストッキングが一層引立つのです。ナイロンの薄いつりコットが脚にまつわりついて滑るあの気持って、ゾクゾクする位たまらないものです。本当に、羽根で足全体と太股の上をこすり上げられる様で、思わず呻きをじつとこらえる位です。殊に、ハイヒールで爪先立ちしてお尻を振って歩く、一層そうなるのです。

あたしがすっかり女になつてしまつたら、女の友達を沢山こしらえたいと思います。女の人の中に入つて、何でもかんでも女の人と同じ事をしたいです。ドラック・ストアでメンスバンドを買つたり、——そうそう、あのルテナックスというのをつけてみたい——小間物屋さんでルーージュを選び分けたり、ボタンを選んだり、お茶やお花も習いたいわ。洋裁学校へも入ろうかしら。仲の良いお友達を誘つて一緒にトイレに行くなんてことが、不可能なことじゃなくなるのです。

マゾヒズムの空想に浸り乍ら、女性ホルモン（黄体ホルモン）の注射液を太股にズブリと差込み、重い液体を体の中に送り込むのです。針先の伝える鋭い痛み、液の肌を拡がる鈍痛——それに女性のホルモンを体の中に取り入れていこうという精神的な悲痛のため、思わず溜息が私自身の口から洩れてくるのです。

（おわり）

戦争前、新興映画で嵐寛寿郎、森静子主演で製作され終戦後、東宝映画で長谷川一夫、山田五十鈴主演で「甲賀屋敷」と云う題名で再映画化された文豪、吉川英治の名作「鳴門秘帖」が今秋、大映映画にて長谷川一夫、淡島千景で封切される。それに加えて（お米）には、艶麗、山本富士子が扮する。原作通り映画にされれば、二人の美女の他に（千絵）の縛りもある。三人の美人女優が縛られるこの映画を、今から期待しているのは私だけではないであろう。

吉川英治原作のものに今一つ「無明有明」がある。これも戦争前日活映画で月形竜之助大倉千代子で製作され盲目の人妻に扮し何回も人質として捕われ責められる彼女の美しさは今も忘れられない。それが矢張り今秋、東映映画にて市川右太衛門、長谷川裕見子にて封切される。これも原作通りに映画化されれば、緊縛マニア垂涎の映画になるであろう。今年のシルバー・ウィークは、緊縛映画オンパレードになりそうである。

またその前に矢張り戦争前、新興映画にて甲斐世津子、日高梅子（現在の喜多川千鶴の

子役当時の芸名）の縛りを見せてくれた「本所七不思議」が新東宝で再映画化され近々封切の予定であるが、可憐な北沢典子の縛りが楽しみである。

先日「白蠟城の妖鬼」の試写会の時、偶然の機会から彼女に逢えたのであるが、余りの可愛らしさと凡そ映画女優らしからぬ控え目な態度に、筆者は忽ちファンになってしまった。「関八州大利根の対決」でデビュー以来

再映画化作品について (2)

△並に最近の縛り映画から▽

阿部 秀

続いて縛られている彼女は、またこの映画でも縛られる。

新東宝「白蠟城の妖鬼」

秘宝「黄金の鷹」の隠し場所を知る娘千世（北沢典子）は白昼、白蠟城の一味に後手に縛られた上、手拭の狼ぐつわをされ駕籠に乗せられ拐わさされる。丁度、町角で自分に逢いに来る小次郎（和田孝）の姿を垂れの間から見て、必死に呻き声を上げて自分の急を知

らせようとするが、小次郎は気付かず擦れ違ってしまう。呻き声まで聞かせる映画は珍しい。それにアップの美しい顔が印象的であった。B級。

東映「大菩薩峠」

机竜之助は、明日の御岳神社の奉納試合の内談に来たお浜（長谷川裕見子）の美しさに魅せられ、水車小屋の与八に命じ彼女の帰途を襲わせる。橋の上ではお浜に飛びかかる。与八。そこで場面が変わると、前の水車小屋で灯を手に土間を見下す竜之助の視線をカメラが追ってゆくと、そこに荒縄で後手に緊縛され鼠色の古布で狼ぐつわをされたお浜の姿がある。……ちなみに以前、日活映画のお浜（入江たか子）は豆絞りの手拭であった。……しかし長谷川裕見子のアップはそれだけで、カメラは竜之助の後姿ばかりスクリーン一杯に写し、折角の縛られ姿がよく解らなかったが彼女は二役でラスト近くお豊の役で山男にかまり、やはり鼠色の布で狼ぐつわをされ肩にかつぎ上げられ山小屋へ連れて行かれる。但しそれもワンカット、更にこの映画では、日高澄子の長襦袢一枚で桃色の布の狼ぐつわ姿もあるが、これもカメラの位置が悪く、通行人の肩越しや何かでチラチラ見えるだけである、この映画はこれだけ多くの縛りがあるにもかかわらず採点はB級である。（以上）



私の本箱から

— 単行本の責め場面 —

星

光 一

昭和二十七年頃発行されていた、りべらる連載の富田常雄作『猿飛佐助』の後篇から、船の中で玉垣が鞭打にあう場面が一部、当時の本誌にも紹介されたことがあったが、今回は、その前篇で、同じく玉垣が室賀信賢に責められるところがあるので、その場面だけを書き抜いてみよう。

富田常雄著「猿飛佐助」前篇 春陽堂

文中『おかめ』とあるは『玉垣』のことである。

山伏に身をやつした室賀信賢は藤蔓の鞭を片手に、びようびようと吹き渡る山の夜風のなかに突っ立って居た。

彼の前には、樹をもれる星明りに、女の裸像がほの白く浮かんで居た。

琴鳴山の山頂に近く、樵夫小屋になぞらへて作った、伊賀者の密会所の小屋外にある松の木におかめは両手を縛られ、上半身を裸にされた姿で吊り下げられて居た。

真田幸村の机の上に展げられてあった図絵が、塞の絵図面であつたか、と問い訊す信賢の言葉に玉垣はあくまで戯れ絵であつたと言ひ張る。然し、信賢は玉垣が佐助を秘かに恋慕うと知って、激しい嫉妬にかられて、玉垣の身体を責め抜く。あの図が塞の絵図だと洩らしたら、大阪へ旅立った恋しい佐助への

追求は一層激しくなり、彼が持参したという推定だけで、その命が奪われるかもしれないと覚った玉垣は、あくまで言うまいと決心する。どの様な責め折檻に皮が破れ、肉が裂けても口を割るまいと覚悟する。こういう設定のもとに、信賢対玉垣の責めが展開する。

「言わぬか、玉垣」

信賢の声が憤怒に慄えてきた。

「言わして見せよう」

びようびと鞭が唸り、おかめの豊かな背の、白い肌に陰惨な響きをたて、藤蔓が下ろされた。

玉垣の肉体には続けさまに鞭が下りたが、彼女は苦痛に全身をくねらせながら歯を喰いしばってこらえる。信賢は尚も鞭を揮う。玉垣の額から、こみかみから脂汗が流れ、ふくよかな乳房へしたたり落ちてゆく。やがて、皮膚が破れて背中から血が流れる。しかし、それでも佐助のことで嫉妬する信賢は鞭の手を止めようとはしない。

「ふふ恋しいか、恋しいか」

その囁り泣きは信賢の妬心を嵐の様に掻き乱した。彼は半狂乱に近い兇暴さを見せて、鞭を揮っては打ち、その速度は次第に速まっていた。

一方、玉垣の方は悶絶寸前の一瞬に、佐助の姿を臉に描いて、返って苦痛が遠ざかり、峰を渡る夜風の音だけが、遠い世界からの呼び声に似て耳に残って居た。という境地にあつて一向に音を挙げようとはしなかった。そこで鞭を揮う信賢の心境は？

信賢は鞭を揮っている裡に、次第に嫉妬の快感にひたり始めた。くねりのた打つ女の姿と鞭を伝わって手にひびく、打擲の手応えが云いようもない恍惚に誘った。

ここで、いみじくも、女を折檻する男の心

理を描き得ている。月並みではあるが、右の文に引き続いて、痺れる程だった快感が遠ざかって行った。という文章が見える。「猿飛佐助」はこの位にしておいて、次には、山手樹一郎著『変化大名』後篇の中から、二ヶ所ばかり縛り場面があるので紹介する。但し、これは、以前の本文に一度紹介されたことがあるかもしれないが（記憶がたしかでない）重複をいとわず書いてみる。

山手樹一郎著『変化大名』後篇、講談社

最初は、松平家の澄姫が家老の件、小弥太に襲われる場面からである。

低い造り声を造って脅しながら強引に躍りかかって行くと

「あれえ、誰か——。若さま」

悲鳴はあげたが、それも手で口をふさぎ、濡縁へ捻じ伏せるようにして、たちまち手拭で猿ぐつわをする。

その間に安川が、用意の紐で両手をうしろ手に縛りあげる。

やがて姫君は舟にうつされ、定吉の手で舟は次第に上流へと漕ぎのぼってゆく、灯を消されて青い月の光が障子に明るい船房には、澄姫と小弥太の二人つきりである。ここで後手に縛られて口には手拭の猿ぐつわを噛まされてゐる澄姫を目の前にして、悪鬼のような

小弥太の振舞が描かれている。この場面は相当に長い。定石的ではあるが、むしろ、くどい位に刻明である。悪鬼のたわむれに宇頂点になった小弥太が、遂に姫の長襦袢の紐まで解きかける。高貴な姫君の全裸の姿を見ようとする小弥太、自由を奪われながらも必死に抵抗しようとする姫、その極く一部を抜書きしてみよう。

……小弥太は太々しくなつて右手がぐいと姫の胸乳を着物の上から驚づかみにする。むっちりとした弾むような掌の感触がいやが上にも男心を掻き立てて、身もがきする姫の肩を押えつけ、荒々しく襟を押しはだける。白々とした乙女の胸が、乳房があらわに青い月かげに濡れて、羞恥と恐怖が波うっている。

……中略……

姫の世にたぐいなき白絹のような素肌の隅々まで、この眼で見たい。この衣類を剥き取つたら、それはどんなに素晴らしい裸身が、この夢のような青くただよう月光の中に浮き出すことだろう。

水の上の船房にゐるのは姫と自分と二人きりだ、どんな真似をしても、絶対に人に邪魔される心配はないというので、悪鬼は更に暴虐をほしいままにする。乱れる黒髪、掻きむしられる衣紋、むっちりとした円やかな肩が喘ぎ

やがて、腰紐、下締め、と一筋一筋解かれてゆく。さて、この本の終りに近く、鉄火の女「お咲」というのが、同じくこの小弥太に鞭打たれる場面がある。

納屋の二階は、四方板壁の一方に、高い明り取りの窓が一つあるきりで、その牢獄のよな板敷の真ん中に、後手に手足を結わかれたお咲が、手拭で猿ぐつわをされたまま転がされていた。

という具合に猿ぐつわに後手という、お定まりの場面だが、ここで小弥太はお咲から、復讐鬼のかくれ家を白状させようとして責める。お咲が素直に白状しようとしなくて、まず弓の折れで鞭打ちをやる。

小弥太は容赦なく弓の折れを振りあげて、びりりと背中へ一打ちくれる。

餅を引っ叩くようなにぶい音がして、「ううむ」

さすがにお咲は体中へ火の走るような激痛を感じて、思わすのけ反りながら、苦痛の顔を歪める。

いくら叩いてもお咲が白状しないので業をにやした小弥太は三人の若侍に命じてお咲の縛しめを解き全裸にしてしまう。無残にも雪

なす肌の肩から背へ、今うけた弓の折れの痕が、三筋、血を噴かんばかりに真っ赤にふくれ上っている。まる裸にされたお咲は改めて後手に縛り上げられ、ぐったりと俯伏せに床へ倒れる。あたりには剥ぎとられた衣類が花のように散っているといった光景。三人の若侍を退けた小弥太は？

小弥太は浮彫りのように白々とあざやかなお咲の俯伏の全裸の女体を、じいっと睨んでいた。むっちりとした肩のあたりが切なげに息づきながら、それは月明りの青い海にうかぶ人魚のように、美しくも妖しい光沢をたたえた女盛りの裸身だ。

復讐鬼のかくれ家を白状させるつもりで責めた小弥太も、お咲の余りにも美しい肌を見ている中に気が変ってきた。そして、ごくりと喉を鳴らした小弥太が、そのまま、うしろざまにお咲を押し倒そうとした、あわや危機というところで救助の手が伸びるというのは小説の定石であるが、この作者のものも必ず救いがあるようだ。それに、同じ縛りにしても角田喜久雄氏の作品と比較すると、何か明るい感じがするのは、私だけの読後感であろか。

次に、少々変わったものを一つ挙げてみることにするが、これは縛られた男女二人のラブ

シーンともいうべき場面、(もっともラブシーンといっても女の方からの片思であるが) 講談社版 野村胡堂著「銭形平次捕物控」の中から『お部屋様御退屈』より、

銭形平次が捕えられて抛り込まれた牢獄の中へ、相客として一人の若い女の因われ人を迎える。平次の横三尺ほどのところへ投げ込まれた女は、気絶していたのが投げ込まれた激動で気がつき、二人は縛られたまま暗闇の中で会話が運んでゆく。この女の名はお歌の方、旗本唐沢丹後守の思ひ者、平次と秘かに逢ったことを告げ口されて、打ったり殴ったり散々な目にあった上、縛られて、ここへ抛り込まれたという始末だった。ここで事件に關して色々とお話のやりとりがあるのだがそれらは一切省略して、ラブシーンともいうべき場面だけ抜書きしてみよう。

平次はもう一度黙ってしまいました。事件は益々わからなくなるばかりです。

「あ、ツ ツ ツ」

お歌はいさなり苦悶の声をあげました。

「どうしたんです、お部屋様」

「痛い、私はもう、先刻から我慢をし続けているけれど、手も足も千切れてしまいそうなんですもの」

お歌は尚もこらえ性もなく身をもむのです「そいつは私も覚えがある。一晚縛られたま

ま転がされていると、一度は我慢のならないほど痛むが、それが過ぎると五体がしびれて不思議に痛さもなくなる——」

平次はそんな事を云って慰めるほかはなかったのです。

ここで再び会話のやりとりがあるのだが、捕物帖特有の間のびした、くどくどしいものなので一切省くことにする。

お歌の方は、蜘蛛の巣の虫のように縛られた身体を、どう動かしたか、平次の方に摺り寄せて、声をあげて泣くのです。

「親分、私は死にたくない、私は、私は、」

「死ねならせめて、親分に抱かれて、このまま死んでしまいたい——親分」

二人共、この上もなく嚴重に縛られているのです。抱くも引寄せるも、全くままにならぬ二人ですが、お歌はどう摺り寄ったものか平次の上へのしかかるように、その肩と肩と胸と胸をふれると、こればかりは乱れに乱れたまま、掻き上げもどうもできなかった女の黒髪が、平次の頬へ、顎へ、首筋へと、執念の蛇のように絡みつくのです。

ここでお歌は、どうせ明日は、唐沢丹後になぶり殺しになるのだから、いっそ一思いに

自分の舌を噛みきって殺してくれとせがむ、平次の耳に口を寄せて、お歌の際限もない口説きは続く、珍しく、この濡れ場は二人の会話を混えて長々と繰りひろげられる。四半刻ばかり。そして文中、グミの赤い唇、とか、不思議なホルモンに匂う酸酵した蜜の舌先、とかいう、三文エロ小説の中の文句のようなものが飛び出してくる。

明らかに女も縛られているに違いないのですが、芋虫と芋虫、俵と俵のような恰好に、嚴重に縛り上げられた二つの肉体が、荒々しい板敷の上を、必死と迷廻り、必死と追廻す努力は大変なものです。

「ね、親分、どうせ死ななきゃならない二人でしょう。私はもう、唐沢丹後になぶり殺しにされるのが眼に見えていて、このまま、明日の天道様を拝む気がしない。お願いだから殺して下さい。思い切り、私の舌を噛み舌つてくれさえすれば」

この被虐的な望みに燃えて、お歌の方は、若さと情熱と、そしてハチ切れるような体力を発散させるのです。

といったいきさつがあつて、平次がお歌の手首の縄を噛み切るということになる。だが此の期に及んでも、お歌の方が遊戯気分を捨てないで、手首の縄を噛みきっている平次の

唇や頬のあたりを、縛られたままのお歌の方の手が、愛撫しようとする。という条りは、お歌の方もお歌の方だが、それよりも作者の方が、大分、この描写に熱を上げすぎているようだ。惜しむらくは、マニア的センスに欠けていることだ。

「いけませんよ、そんな事をしちや、細引ではなくて、お部屋様の手首に噛み付いたらどうします」

平次は首をあげて、時々息をつきます。「嬉しいわ——序に指の二、三本噛みきつて下されば」

そう言い乍ら、世にも華奢な手が、五本の指が、男の顔から頬へ搜り寄るのです。

小説はじめ、芝居や映画に於ても普通は縛られた女を男が折檻し、仕置し追廻すという場面が多く見られるのであるが、双方共嚴重に縛られた姿で、女が男を追うというところが一風変っているといえは変っている。

中でも、このような危急の場合でも、自分の縄を噛み切ってくれる男の顔を女の指が愛撫するという場合は、現実ばなれしているがそれだけにより小説的で面白いと思う。

ダイアナ夫人

未亡人期(一)

乗杉貴代子

四十を幾つか越えての女一人の生活は財産に恵まれたとはいえ、寂しいものです。僅に二、三年前から趣味がいつしか本職となって服飾雑誌の記者を始めるようになったのがせめてもの張合で、此頃はなんとか楽しく過しているといった次第です。幸い親や夫の遺産もあり、運用に注意して使えば先ず一生食べて遊ぶに困ることはなさそうなのが何よりも力強く、このため過去の生活様式を整理するため古い家は売払い、一年ほど前から多摩川を眼下に見下す京王線の沿線に二十五坪ほどの新居を建てました。女中と二人では寂しくもあり、女学校時代の友達に頼まれたということもあって新居に移ってから間もなく慶子ちゃんという若い女性と三人ぐらしですが、まことに運がよいことにはこの慶子ちゃんは

短大を出て間もない才気煥発の女性であることです。明朗で、スポーツは私の若い頃と同様万能選手といってよいくらいでスキー、スケート、水泳、乗馬とどれもよくこなし、健康とセンスにも恵まれた感じの良い子です。特に美人というほどではないのですが愛敬のある顔はなんということなしに人を惹きつけます。

ところがかくいう私は馬齢？四十余を加えまごまごすればお婆あちやま扱いにされかねない年頃、かつての色白健康美人もこうなつては売出すによしなしますが、それでも長いこと食事と運動、特に乗馬に精出したせいか年より七ツ八ツ若く見られるという有難い身分です。ですが年は争われず、からだも十代二十代の頃のようなやわらかさは望めず、若

い子を前にして昔を懐しんでは五尺三寸、十三貫五百のこのからだを証拠物件のようにして

「私が慶子ちゃんぐらいの時にはね……」

というのが精いっぱいです。けれども人生到る所青山在り、とでもいうのでしようか、年を経た未亡人といわれる女性にもそれなりに人生愉樂は泉のように湧いてきてくれます。年をとってくると気持だけは若い時と同様に積極的でも、その気持ほどにからだは動いてくれません。いきおいスポーツでも積極的意志を必要としながらからだは受動的に動かし、ておればよいといった乗馬のようなスポーツが一層好ましいものになります。ただそれには若い頃に経験がないと無理で、四十ぐらいになってから始めて乗るのでは無理と思いま

す。

現代の都会人は無暗やたらと神経の緊張のみ要求され、それだけで疲れ果て、全身的な軽い肉体の疲れが裏打とならないためとかくノイローゼ症状を呈してくるようです。自分の意思や時にはわがまま、きまぐれな着想などを他に押付けたり、命令したりすることができず、ほとんど全部といってよい人々が、何者かによって一種の圧迫下に仿かされています。その「何者」かは上役であることもあるし、顧客であることもあるし、配偶者であることもあるでしょう。このようなわずらわしい人間関係からひとときでも脱け出して思う存分に自分の気持——それは悪魔的なものでもよい——をさらけ出し、欲望や行為をぶちつける対象を求めても、現代人が心理的にここまで追詰められてきた以上造物主も反対は致しますまい。私にいわせれば、それゆえにこそ跨がり、鞭うって支配、征服の喜びを味わえる同じ哺乳動物の馬のような動物がなお存在するのだともいえます。人間と生れたからには女でもそう年中「何者」かに支配されてばかりいては気が滅入ってしまいます。思い切り征服者の快感を味わうことこそ機械的に追回される私たちがしなければならぬ「人間復活」への努力だと申せましょう。

とても気分が高度に刺激高揚されることです。夫婦生活には年のせい、あるいは少々冷感な症候味なのか興味を失った現在では嗜虐による心のせいたくを満たすことが何よりの楽しみとなりました。ゴムローラーにかけたり、震動木馬に打跨がったり、臀の先までマッサージュさせてもある種の満足は得られますが独り身の健康体の中にたぎる独占慾、征服慾、嗜虐慾などもろもろの慾求を十二分には満たしてはくれません。これが満たされないところ種の慾求不満——劣等感にも見舞われ易く、いきおい創造力を必要とする服飾記者の仕事にも響いて参ります。そこでこのほど思い切った十分楽しめる馬を一頭買うことに致しました。間に入ってくれる人があり十万円ほどの余り上等とはいえませんが黒色に近いサラブレッド系雑種の七才牡馬で少々カンが強く皮膚が光って薄いのが私を喜ばせました。腰のひねり一つでどうにでも動くような馬はどうも私の性にあいません。反抗気味に暴れるくらいのを透きとおるようなこの脚で締め、騎座（膝より上の鞍と密着する部分）を固め手綱をしぼり、銀色に輝く拍車で蹴りつけ、細身のよくしなるムチで脅かすといった動作が私の健康と若さを保持し、精神の発場を助けてくれるのですからむしろ御しくいくらの馬が楽しくもあるというわけですね。

この愛馬に「黒いツバメ」という意味を含めて「ツバクロ」という名を付けました。自宅では飼うにはとても手が廻りませんので近くの農家に預け、週一、二回の乗る時以外は農耕に使うことを条件としましたのでほとんど維持費というものもかかりません。乗馬を利用する仕方にはいろいろあつて逆に農家で農閑期に遊んでいる馬を借りたり、友人と共有にしたりするやり方もございます。武蔵野の中でも奥まったこの辺は乗馬散策には春秋を問わず快適なので慶子ちゃんとの遠乗にはこのような馬を借りて行を共にしているわけです。

そうそう忘れていましたが慶子ちゃんとはなかなかチャーミングな女性です。身長一メートル六二、バスト八九センチ、体重五五キロと自称していますがスポーツで鍛えた四肢はほどよく美しく発育し、少々おかめの面影の中にも知性を深くたたえているようで恐らく同年輩の異性にはさぞ持てることと思われまふ。勉強や仕事に取り組む時は真面目そのものの彼女がひとたび遊びとなれば人が変わったように遊びに徹底するといった変化の妙も心得ています。休日などは人通りの関係もあつてひかえています。ウイークデーなどには裸馬にシヨートパンツで跨がって歩くぐらいの茶目気は持合せています。いわゆるドライとでもいうのでしょうか、私にこんなことを聞いて

たことがあります。

「ライド Ride」という英語を字引でみると馬乗りをする、跨るといった意味のほかには支配する、圧迫する、苦しめるといった意味もあるわね、またマウント mount という言葉も支配者になる、王位に就く、乗馬するといった意味があるわね、学生時代から心理学的にみて面白いことだと思ってるの。東洋では乗馬と支配者という言葉は語源的には別のようない感じがするけどオバさまはどう思ってる……」

といいますので

「そういえばそうね、きっと東洋の政治の理想は、無為にして化す」というのにくらべ西洋は、征服に重点があったからじゃないかしら、人民を牛馬のように圧迫支配し、敵国人は奴隷にするといった考えが強かったし、それだけに人民の抵抗も強く早くから人権とといったことが強く叫ばれるようになったと思うの。つまり東洋の政治には比較的人情があったからかえって人権などというものが意識されなかったのかも知れないわね……」

とまあ私なりに適度に答えたつもりでしたが、それに続いて慶子ちゃんも

「いままではずかしくていえなかったけど……」

と聞かされたのにはグツとききました、実のところ私などは、このためにどうしても馬を

責めることが止められないのですから

「私だって同様よ」

と笑いながら答えました。すると慶子ちゃんも少しばかりモジモジしながら

「私、いままで乗馬が終ったあとは道端に捨ててしまうのよ、そうすると必ずそれを拾う人があるらしいの、それがまた楽しみなの、この間なんか拾いあげて、においをかいでいる中年男を見た時などはからだのなんとなくジーンときたわ……」

ときも嬉しそうでした。私も同じ感じに打たれましたが何もいわず軽く笑って同感の表情だけにとどめました。恐らくこの感じは数多い女性の乗馬愛好者に共通の気持ではないでしょうか。ましてその女性が自信と誇り高い精神の持主であればなおさら。……

ではここらで乗馬の術科、特に御している間の心理状態に触れてみましょう。十代、二十代、三十代、四十代、男女とそれぞれ馬上の心理はその人の生活、経験によって大いに違うことと思います、恐らく体力さえ伴えばむしろ経験豊富な中年以後の方がより楽しみが大きいのではないのでしょうか。また自分の所有馬と借馬でも大分違います。借馬では調教といわれる加虐行為にも限界があります。心ゆくまで跨って気分を高め、乗り潰すほどいじめぬくことはできません。自馬ですとそ

れが思う様にできます。潰れるという大変なようですが人間でも千メートルほど全速力で走ればアゴを出してゴールインすれば立っていられないでしょう。馬の重さは大体百貫前後ですから人はその七、八分の一、十四貫の人なら二貫ぐらい背負っている感じだろうと思います、ですから野や坂を小一時間おおりながら責めたてれば大汗を流して泡を噛むようになり軽いビッコを曳くようにもなります。映画ジャイアンツでテキサスの乗馬好きな女牧場主がカンの強い新馬を調教する場面があります、御覧になった方もあろうかと思えますがこの映画でも乗馬というものは乗り手の意志と馬の反抗との絶え間ない斗争です休憩を許した時以外は寸時といえども乗り手の意欲に逆うことを許しません。手綱は口が曲るほど引きしぼられ、蹴り込まれる拍車で腹から血が流れ、ミミズばれができるほど尻を打たれても背中にいる女主人が満足するか女主人が落馬して乗馬不能となる以外責めから逃れられません。ジャイアンツでは女主人が落馬して死んでしまいましたが、あんなことは先ず皆無に近いことでしょう。普通なら百パートセント蹴り得、打ち得の楽しい調教に終ります。また懲らしめるのが目的でなく、ただ拍車や鞭を使いたいとか、気分の高揚をはかるために馬の生理的要求をも一時停止させることがあります。例えば歩行中、騎

手の気分が上りつつある時であれば馬が小便したり、脱糞したがつても、拍車で蹴り飛ばしながら歩行や駐足を続けさせるのです。これなどはなかなかサデイスティックな興趣を誘ってくれます。

また馬上の自分はほのかに汗ばんだ膚を春



風に吹かれながら馬に汗をだらだら流させるのも気分のよいものです。大体皮膚の薄い競走馬のような馬は発汗し易く、坂を駆け上らせたり、馬体を収縮させるような（人間でいえば物を背負って小さくなって歩くようなこと）になります（動作を強制したり、苦しい

馬場馬術をやるとじきに汗を流し泡を噛むようになります。他人の汗と脂をしほる階級の楽しさもこんなことかとも思われます。そして疲れてくれば温い血の通った動物ですから動作は当然鈍くなりますがここで気を許したら騎手をナメる馬が出来上ってしまうので、ここまではやらせたいと騎手が決心したら鞭でも拍車でも乗り手が満足できるまで使います。大体馬がサボる急所は運動中にも分りますからそこへ来たら機先を制して拍車で痛い思いをさせるか「ピシリッ」思い切り打すえてやれば面白いようにサツと緊張して動作を続け、心地良い震動を起してくれます、しかしそれでも動作が不十分なら後は同じ動作を強烈に実施し、肩とか尻の要所要所を鞭で乱打し、拍車を馬腹に立てるようにして蹴りまくればよいわけです。鞭音がピシッ、ピシッと響き、拍車がドス、ドス、ダツと蹴り込まれる音は股下でもかく馬体の触感と共になかなか痛快で、どうしてこのエクボのあるやさしい手や、やわらかいすんなりしたふくらはぎが、こうも荒々しく機敏に動くのかとわれながら不思議に思います。そしてこの快適音が発すると同時に股の下では巨大な肉塊が新たな動作を始めるのですから鞭の清々しい音と全身へ伝わる美妙な振動とはほとんど同時というわけです。牛馬と同様の“とよくいわれる奴隷でもこれほど確実な連鎖反応は示

さないことでしょう。

鞭と拍車の効用もさることながら一層デリカシーな興趣を誘発してくれるのは鞍です。跨って気分の良い鞍と適度の長さのアブリは乗馬の楽しみをいっそうかきたて、鞍がよいばかりに馬の背からどうしても降りる気になれないこともあるくらいです、気持の良い鞍とは跨った時、内股をはじめとして人体と馬体との接触面積が広く、吸付くようにはまってくる鞍です。ですから競馬用のくぼみの浅い鞍などはその点全く感じが悪く、鞍の前揚（前の高い所、西部劇に出てくるものでは投縄がかけられるようになってる）が比較的高く、後揚もお臀の肉を棒け包むように彫りの深いものが気分を高めてくれます。このようになくぼみの深い鞍に跨ると腰の安定がよい上に馬の律動に伴う震動がやわらげられて人体に伝えられるので婦人、子供鞍や、馬術用として好かれます。

元来馬の背骨は人が乗ることにより二、三寸しなるように出来ており、また（セミネという）は都合よく適度に盛上っており、内股で抱く肩の部分は山形状に薄くなっているの

でしよう。ですから、たとえ可弱い女性でも自分の美容のためや慾求充足のために、僅かな御術を学ぶ努力によって心ゆくまで優越感や征服感や嗜虐本能を満たすことができるわけです。いい遅れましたが手綱についてみて

も小勒と大勒があり、小勒だけでいうことを聞かなければ蹴って、打って大勒で締めつけられ馬は口の痛さに耐えかねて大てい不本意ながらもうこと（現実には騎手はなにも言わないのですから乗り手の意思や気まぐれですが）をききます。それがまた可愛くなる

ところでもありません。これを馬術教科書から重々しく？ 引用すればちよつと長くなりますが次のようなことになりす。

馬は元来低級な知能を持っている。労力を要する作業を課せられるとこれを嫌い服従を拒否しようとする性情を持っている。もしこのような傾向を馬が表わした時これを看過したり、或は懲戒は加えたがその方法が不徹底であったり、或は馬がより以上の抵抗を表わし騎手がそれに負けるようなことがあると馬はますますその服従拒否の本能を発揮することになり懲戒に對し馬が勝つような事になると馬は増長して騎手を馬鹿にし、どうにもならぬ癖馬になってしまう。故に、馬に對しては「騎手というものは強くて偉いものである。その要求は何事によらず服従しなければなら

ないものである」という考えを徹底的に植付け、それが大切で、服従するまではいかなる手段に訴えてもその目的を貫徹させるのである。——後略——今村安著「馬術」京都和敬書店十一頁より。

これをみても馬に跨るといことが貴婦人の遊びスポーツとしてなんと適しているかということがお分りになるかと思ひます。よく乗馬すると痔になるとか申しますが、その人は乗馬しなくてもなる人が、肛門をすりつけるようにして乗るからで跨ったら脚を自然に垂らし、つま先を上げ、踵は下げ、内股で馬背をしかりしめつけ、アブリ革は十分に伸ばして跨れば股の肉はひきしまり、背骨は真直ぐになり、便通は整い、ということでは美容上の効果は見出しても悪影響など少しも考えられませんか。古来支配階級の「三楽」として女上、馬上、厠上（トイレで便通する快感、とその跡始末をさせる快感も含む）という言葉もあるくらいでレデイの場合は男上、馬上、厠上と交えてもよいでしょう。またSと称してセックス、スポーツ、スクリーンが挙げられていますが、西部劇がいつになってもすたらずスリラー残虐シオンが観衆に受けるのは、道学者がなんといおうと人間の心の奥底に生々と脈打つ本能が喜ぶからではないでしようか。似而非ヒューマニズムがはびこり、見当違いの動物愛護運動家が巾を利か

す昨今では世のダイアナ夫人たちは心ならずも世流に迎合して一方では馬上の快をむさぼりつつ他方では動物愛護週間などの発起人や賛同者になっていますが、この際もつと大らかに馬上、男上の快を味わい、デカメロンのように、アラビアンナイトのように心ゆくまで人間生活を喜び楽しんだ方が激しい変化の機械文明に押流されることなく人類の発展に役立つのではないでしょうか。温血動物に跨る快味を知らず、鞭と拍車の楽しみを知らずに人生を終るとすればその人は支配され、服従することを覚えただけで支配者としての王侯貴族の心理も理解できず、まして神と悪魔の共同作品といわれる「人間」を知らずに一動物として終ってしまうのではないかと私は私なりに思っております。それだけに馬を始めとして人間をも含めた動物に跨って過すことは狂咲きの年令ともいわれるいまの私にとって何よりの楽しみです。

いままで述べましたように乗馬だけでも相当な楽しみですがまだまだ私の官能がすべて満たされたわけではありません、まして娘たちも嫁にいたり、親元を離れる生活をするようになるとかつて「前編ダイアナ夫人人妻期」でも記したような人間馬に跨りたい欲望が強くなって参ります。戦後五年間ほどは乗馬を始め娯楽らしい娯楽はすべて衣食不足のために圧殺されたような状態になっていまし

たが、ここ二、三年來の娯楽、慰安設備の発達普及は目をみはるようなものがあることは皆様も御存じのことと思います。フランスでもルイ王朝末期、わが国でも徳川中期以後のように平和が続けば人間の本能と生産力のおもむくところ当然豪華爛熟の雰囲気がかもし出されるもののようなのです、それだけに最近では私が若妻の頃、催された山中湖畔の人間馬調教パーティーといったものが強く心を惹き着々準備と実験につとめております。それにはやはりカクレみの的的なものが必要のため趣味と実益を兼ねた服飾記者にもなったというわけです。私のデザインが誇り高く優雅な、悪くいえば高慢な復古趣味であるため一部の人々には高く評価されているのも女乗馬者特有の心理が露出したものと思われまします。そしてそんな関係から銀座並木通りのバーなどにも顔を出し、有閑おしやべり夫人たちとつきあううちにいつしか女学生時代の同級生がマダムをやっているバーを見つけ出し、さらにそのマダムの所に通ううちに、ひとり身の淋しさから話が咲き人間馬の発掘に成功したという次第です。この種の馬はひとたびそのツルをつかめば後はいもづる式にあるというのも妙味のあることで、それは売買、契約、紹介といった事よりも目と目がカチツと確認しあえばそれで良いといった微妙なものを含んでいるようです、後はお茶でもお酒でも飲みな

がら趣味を話合っていれば自然と馬になりた

い人間であることが分るもので、それが分らないような人は乗り手にも馬にもならない方がつまらぬ問題が起きなくて良いかも知れません。

これらの乗用馬適格者は大てい表面は肉體精神、生活力とも健全で感受性も優れているのが普通です。私はここで二匹の愛馬候補者を見つけました。マダムの「私のお友だち、乗杉さんで良い方よ」といった程度の紹介があった後、六十年輩の半白の紳士といつしか相当深い中となりました、一昔前は商工省の局長でその後紡績会社に入り、いまは監査役という閑職でヒマを持て余している生活だそう、本宅は大阪の郊外にあるそうですが、妻は戦後間もなく世を去り、一男一女はそれぞれ親元から巣立った生活をしているのでいままでは全く気楽な独り暮らし（といっても女中と二人ですが）ということでした。忘れました、名は佐竹良隆といい、マダムの話では東北の旧大名の血を引くともいっていました。確かに品が良く、気の弱そうな口から洩れる述懐は「わしも長いこと謹直な生活を続けてきたがここ一、二年來えらくバカらしくなり、ここらでジョーキル博士とハイド氏になってみたくなった、いままではまあジョーキル博士だったからこれから時々ハイド氏になりたいのさ」

……」というわけでした。そしてこのハイド氏の希望は

「要するに年増美人の馬になっていじめられてみたいのでね、いままで大分ひとを泣かせた罪滅しも兼ねてね、条件としては乗り手が美しくあることと秘密を守ることだけさ……」
とちよつとテレ臭さそうですが楽しそうに笑いながらいました。

そして何回かお客に呼んだり呼ばれたりしているうちに良隆氏の趣味はなかなか奥深く感情もデリケートに出来ていることがだんだん分ってきました。健康で背は五尺五寸、十六貫の体格なので跨って責めたてるのにはほどよい肉付です、少々骨が硬くなっているのが玉にキズで私の騎座の軟かさに対するにはいささか感触が落ちますがこれも年が年だから致し方ありますまい。跨った時の姿勢、服装についても注文が多く、そのために相当多額の小遣までよこして赤い乗馬用の上衣や軟かい布地で腰や太股の線のよく出るジョーブス（婦人の乗馬用ズボン）ナイロンの肌着、下着から、引ずるような乗馬用ロングスカートのまで作らせます、特にジョーブスの上にはくズロース（ズロースは本来乗馬用のもので十八世紀ローマの貴婦人が乗馬中股ずれを防ぐためヒザのあたりまである長いものを着用したのが初まりといわれます）についてはぬいとりやレースのついた優美なものを望みます

ので淡い色のついた相当凝ったものを着用します。乗ってしまうまでは一応人間扱いにするので細かい打合せをしますがひとたび跨ってしまったら言葉の使用は許しません。私が十分気分が出るまで馬なみに乗り廻すだけです。指示するための腰のひねり、内股の締め具合、蹴り方、鞭の使い方すべて馬なみです。がまあ相手が老馬ということも考慮に入れてそう乱暴には御したりしません。ワルツをか

けながらボヴァリー夫人が馬上豊かに静々と緑の林に馬を乗入れる様子とか、腰や脚の僅かな動きで後退、斜行、半立ちハネ上りといったことをさせるわけです前足（手）は短かいので補助三輪車を握らせてあるので動作は小動きながら軽快に動きます。このころでは骨の硬さを補う意味で泡ゴムのマットを背中に敷いておりその吸付くような摩擦は私の脈搏を高めるのに役立つ

くれます。まだ相手を恐怖に戦かすような専制女王と奴隷の関係にまで進展していませんが何べんか乗り慣らし、女王の鞭の味を有難く頂く馬に仕立てるのもそう遠いことではありませんまい。ミミズばれの鞭味を知らない馬なんて一人？ 前とは申せませんが一人前にするためにも一、二カ月のうちにヒイヒイ泣かせて感激の涙を流させてやろうと思ひます。まあ馬としては高等馬術用とでもいうべきでしょうか。（以下次号）

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	一枚	五枚	十枚
	一三〇円	六〇〇円	一〇〇〇円
			(送共)

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)
G3	海老晒し (萩千恵子)
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)
G5	量感の帯 (伊吹真佐子)
G6	アイデア (萩千恵子)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し (村田那美子)
G9	優すがた (花坂道子)
G10	開股一番 (萩千恵子)
E組	(9×13cm印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)

ES2	三枚一組 全裸悦虐集 (須川)
ES3	四枚一組 腎蓋 (佐賀)
ES4	三枚一組 酒宴の弄者 (佐賀)
ES5	二枚一組 脱がされる娘 (須川)
ES6	五枚一組 あわや寸前 (佐賀)
ES7	二枚一組 剥れたズロース (佐賀)
ES8	五枚一組 乙女のすべて (花坂)
ES9	七枚一組 女学生の縛り (須川)
ES10	二枚一組 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
	六枚一組 三五〇円

妙齡美人の吊責め

《女責め写真撮影競技会から》

岸 本 青 柳

新緑滴る薫風爽やかな五月晴れの第二土曜の晩。奇談倶楽部の臨時総会が長汀曲浦の雑賀ヶ浦の奇巖の上に建てられた太陽閣で開かれた。この観光旅館は青松に取囲まれた千数百坪の広い庭園の東北隅に位置して、遠州流の大きな泉水を築き数個の春日燈籠や雪見燈籠に点々と燈火が恰然螢の光のように青白く淡い光を泉水の清らかな水面に浮かべている。老松の生い茂った中に設けられた贅^{ぜい}ぶき屋根の東舎がある。総会は予算、決算、本年の事業計画、役員選挙などの諸議題を型の如く決定、楽しい晩餐会が和氣霽々裡に終わったのは夜の八時過ぎであった。引続いて小丘の東舎で十数名の男女倶楽部員が思い思いの奇談、怪談を一しきり語り合い相当の賑いを呈した。木村隆という薬剤師が突然、

「明日正午ごろから、この裏山で女責めの撮

影をやる。そして第三位までに懸賞金を出そうではないか」

と云い出した。これに呼応するように四、

五名の男女が賛成々と異口同音に叫んだ。そこで大多数の意見が一致したので、愈々あすの日曜日に撮影会を実行することに決めた。何分にも突然のことであるので半数ほどは相手の女モデル選択に顔を見合わせたものだったが、意中は兎も角一旦賛成した以上卑怯な真似も出来ないというので口先では相当力んで見せた。それから二時間余も雑談に耽り、盛況裡に夜の十一時ごろ散会、三々五々帰宅の途に就いた。

翌朝早く私はモデル探しに意中の人々を訪ねて見たものの、日曜日のこととて何れも映画観賞、美粧研究会への出席、子供伴れの遠足等々の理由でモデルを断わられた。止むな

く某事業場の電話交換手に、低身低頭して頼み込んだ。僥倖にもこのお嬢さんはサンデープランもなかったので快く承諾して呉れた。特に和装を注文して置いた。この撮影場は私宅から四キロ余もあるので、昼餐を早目にこの山の麓までタクシーでお嬢さんを誘って勢よく乗り込んだが、その車中でお嬢さんに予め撮影方法を説明した。だがお嫁入り前のお嬢さんを縛るということだけは躊躇して一寸云い出し兼ねたが、いよいよとなれば何とかなるだろう位で些か安堵していた。云い残したが、このお嬢さんは林雅子という二十三才の中背中肉、面長で色白な優しいお嬢さんである。

撮影場へ乗り込んで見ると既に十六名が何れも女モデルを伴れて撮影を始めていた。私も亦遅れ走せながら早速撮影に取りかかった。先ず最初に雅子さん好みのポーズを二枚写して一寸一服する。雅子さんはご丁寧にごコンパクトから粉白粉を出して顔に塗り、更に口紅を塗って手鏡を元通りコンパクトに。その間私は「いこい」を二本も喫った。それから雅子さんの側に寄り、いろいろ世間話をしてから、さて私の注文を切り出した。

「雅子さん、一寸軽く縛らせて呉れない」

「縛るんですの……」

「痛くないようにするから」

「でも痛いでしょう」

「いいや決して痛くないようにする」
「でも……痛いんでしょう」

彼女はうつ向いて考えて直ぐ良い返事をし
て呉れないので、私は悞ったくなつて、そつ
と彼女の背後へ廻った。すると彼女は顔を上
げ少し後ろ向きになろうとするところを、私
は白い両手をギューツと握るや否や後ろ手に
縛り上げようとした。すると彼女は可愛い眼
を丸くして、

「まア……待って頂戴、どうしても私
を縛るんですか」

と半ば怨めしそうな顔付きで、私
の方を睨んでいる。その顔はまた何
とも云えない表情であり、よく映画
に出て来る縛られた女優のような顔
付きである。

「雅子さんが、ウンと承知して呉れ
ないからよ」

「では一寸だけ縛られて上げるワ、
痛くないようにしてネ」

やっと縛られることを承知したの
で私は始めてホツとした。そこで私
が知人のあるカフエーの女給さんか
ら借りて来た紫地に白の荒い格子縞
で袖裏の赤い、裳裏の黄色な袴の長
い袂の着物、黄地の濃茶菴番の帯、
水色の帯揚げ、真紅の扱帯、白襟の
かかった赤地に桜の花を散らした長

縞絆（裏は淡桃色）などの衣類を携えた皮の
ボストンバッグから取り出して笑いながら
「この着物を着て下町風の娘さんになって下
さい」

「ハイ」

今度は素直に返事すると、一間ほど離れた
後ろの巨松の下で、自分の着物と着替えた。
「これでいいんでしょうか」

「ああ、結構、結構、上出来だ」
と追従笑いすると、釣り込まれた彼女も微
かな笑顔を見せる。黒襟の付いた着物はまた
素敵によく似合う。その後で私は蝶々髻の「
かづら」を冠るように頼むと、早速これを頭
の上にのせる。その前向きの立姿をパチリと
一枚撮影してから、雅子を小高い丘の松林の
中に誘った。



「その大きな松の木に凭れて前向きに立ってみてくれませんか。」

「ハイ」

その艶麗な優美な姿を暫らく凝視していた私の胸の鼓動は急激に狂わしくなってきた。

「では両手を後ろに廻わしなさい」

「ハイ」

と返事をしたものの容易に両手を後ろに廻わさないで、私は少しく焦慮気味となり、

「こうするんですよ」

と彼女の両手を後ろに捻じ上げた。

「あゝッ痛い！」

「少しの辛抱ですよ」

否応なしに麻緒の縄で彼女の柔かな身体を四重に縛り上げる。その間、うつ向いた儘少しく身体を前かがみに動かすところを、後の松の木にその縄の端を括り付けた。そして前方約六尺のところへカメラを据えて、

「顔を左斜めに上向いて、身体を右寄り斜めに立姿になって下さい」

半ば命令的に要求すれば、彼女も私の云いなり、その姿勢を整える。この縛られた妙令の美人の艶な姿を二枚撮影してから、縛った縄を解いてやると、彼女はホッと溜息を吐いて、縛られた両手の縄目の跡を凝って視入っている。そして小ない声で

「コンナに縄の跡が付いたワ」

「お気の毒にネ、痛かった？」

「エエ、一寸痛かったワ」

そして半時間ばかり、奥まった松林の涼しい草の上に座り込んで、彼女を混えて他の会員達の撮影競争模様などを話合ってから、今度は改めて、今一度縛り写真を取りたいと頼めば、彼女は渋々ながら、承諾するよう首をウンと下に首肯して呉れたが、多分彼女は先刻のような縛られ方だろうと誤解しては困ると思ったので

「今度は雅子さんを吊り責めして見たいんだがネ、承知して呉れる？」

「まア、吊り責めに？それは痛いんでしよう！」

「僅か五分間ばかりだがネ」

「息が詰らない？」

「ソナナことなんかあるもんか」

「あんだ、余ッ程変ったことがお好きなのネ」

「今彼所、此所で撮影している連中はみな変った人ばかりだよ、早くしようじやないかネ」

「エエ、でも何だか怖い見たいだワ」

「恐ろしくも怖くもないサ」

「でも？」

「雅子さん、頼むよ、ねえウンと云って呉れよ」

「私、吊り責めだけは勘忍してほしいワ」

「厭でもあろうが是非頼むよ」

「ねえ、ほんとうに五分間よ」

「パチリという瞬間だけだよ」

「なら可いけれど……ねえ」

茲ぞとばかりに私は勇を鼓して、再び彼女の柔かな身体を縛ることを許された勢で雅子の両手を帯の上まで後手に強く縛り上げる。

「あッ、ほんとうに痛いワ、強く縛って」

これには目も呉れず傍らの太い枝振りの良い松の木に、別の太縄を放りかけその下まで両手に縛った彼女を伴って行った。そしてその附近から木の切株を拾って、その上に抱き乗せると切株は腐敗していたのか、中間からボキリと折り壊れた。止むを得ず他に高さ六尺ぐらいの松の太枝を見付け、これに改めて太縄を放りかけ、その端を彼女の帯と縛った両手の間に差込み、緊縛して他の一方の太縄の端を両手で握り締め、徐々に吊り上げその剩った縄った太縄の端をその松の木に括り付ける。雅子は苦しそうな顔付きで、頭を胸の当りまで前かがみに傾向け白い両足をブラリとさせている。

「痛いワ、早く写してよ」

早くも吊り責めに悲鳴を挙げる。その哀れな濃艶な姿を一瞬ばかりの手前からパチリと撮ったが、その時は両足をバタ付かせたため先ず失敗したと思ったので二度目には慎重に構えた。

「ああ、もう苦しい、痛い……」

今度は見る見る両眼を釣り上げ、口をへの

字型にキリツと結び、怨めしそうに私の方を横目で睨み付ける。額から冷汗が滲み出して来る。両手両足を微かに動かすので容易に撮影が出来ないので

「両足を膝の上まで曲げなさい」

完全に吊られた雅子は、両足も不自由と見え、一脚ずつ上げたり下げたり極く緩い動作であるが、私は美女の吊責めを恍惚と眺めていた。

「早う早う……もう許して……」

と遂に泣き出したので、ハッとした私はこの吊責めされた苦痛の姿を写真に撮った。最初に失敗したので、続いて二枚を写し終るや否や彼女を抱き下した。勿論松の木に括り付けた太縄を解き、更に身体を縛った麻緒の縄を解いてやると、彼女は涙に濡れた顔を拭いもせず、其の儘その場にどっと崩れた。

「痛かった？ 御免なさい」

「あんた、随分だワ」

「まあその泣き顔を拭きなさいよ」

「随分苦しかったワ、もう死んで終うんじゃないかと思つたワ」

云いつつ扱帯を解きその端で泣顔を拭うと両手を前に出して、

「こんなにミミズ腫れになってしまったワ」

「済まんナア」

「ソナナことじやないのよ、お家へ帰ったらお母アさんに叱られるワ」

「そこを見せないようにするんだネ」

「でも直ぐ癒るか知ら？」

「すぐ癒るから心配要らないよ」

「そうならいいんだけど……」

そう云う彼女の身体からは白粉の匂い、かづらの油の香、そして異様な体臭とが一時に私の鼻をついて来る。その甘味な香に私は暫らくは武陵桃源の境を彷徨するような、何とも云いようのない気分になられた。雅子も亦稍々疲れた身体を私の膝の上に凭れかかり、そして人形のような美しい可愛い顔で、私の顔をジッと凝視する。その星よりも美しい両眼、可憐な口許を綻ばせ微笑を含んでいる。

その間に他の会員の方を見ると、夫々撮影も終つたらしく、声高らかに昨夜の太陽閣へ続々と歩を運んでいるのが判つたので私らもその太陽閣に行こうと雅子さんを促がした。漸く立ち上った彼女は、撮影用の下町風の娘姿の着物をチャンと畳み、自分の着物と着替えて化粧直しも丁寧に白足袋にゴム草履を履きハンドバッグを左脇に抱えて私と並んで歩くのであった。その途中で私は彼女に向つて、責めの感想を聞いて見た。

「私、縛られるなんか始めてなので、随分恐しかったワ」

「それから……」

と次ぎから次ぎへと聞き質して見ると、彼女は重たそうな口振りで「始めて縛られた両

手は後ろの松の木の粗い皮に触れて痛かったこと、次ぎの吊り責めされた時には、僅か五分間位ではあつたが、痛い苦しい、息詰りなとで泣くにも泣けない強い苦痛を受けたので一時間も二時間も経った地獄の責苦に会つたやうで、映画や芝居で観た後ろ手縛り吊責めされる女優達の苦痛はどうであらうなどと考へたこと、お嫁入り前の身体に直ぐ癒るにしても縛り縄目の醜い根跡を付けたこと、お母アさん達に叱責せられはしないかと心配していること、初めは痛かったが最後には、幾分苦痛もやわらいで軽い気分になつたことなどを物語つた。そして最後にはもう吊り責めされることは真ッ平御免を蒙り度いとの考へである」との真意を述べたので、私は近く御礼に行くと云うと、この責め撮影の話の誰にも秘密にして欲しい、また撮影した数枚の写真も亦何人にも見せないで欲しいと幾度か念を押して哀願するのであった。従つて折角撮影した数枚の珍奇写真はこれを公表することとを遠慮せねばならなくなつたことは誠に遺憾とする。

だが之等数枚の写真は各々キヤビネ型に仕上げたが、何れもその真に迫つた緊縛感、その写真を取り出して見る度に当時を追憶して、今もなお肌身離さず秘かに所持しており会員同志が相互に、彼の写真撮影とその結果を誇示し合っているのであるが、私は出品



もせず、従って懸賞から洩れた訳である。
 だが多数の会員の中には、可いモデル女と妥協したのか、或いは無理強いかどうかはハッキリ知らないが随分相当な写真を見せて貰った。棒縛り、横転、寝業、立木縛り、海老責め、吊責め、逆さ吊責め、磔付け、石抱き立膝、半裸体等々千差万別の女縛り責めの逸品揃いであった。近々の内三度びこの太陽閣の一室が松林内で写真真展示会を催す予定であるが、会員間の審査の上優勝第一位から第三位までの入賞者には賞金を贈るほか、入賞

モデル女をその一週間以内に全会員が招待して、其の労苦を憐れむと共に、三人モデル女の実演を観せて貰うことにした。この展示会へは私は雅子さんに内緒にして、立木縛りと吊責めの二枚の写真を展示して批評を乞う考えを持っており、また責めに使用した衣類をもその会場に提供して、改めて他のモデル女に依頼して、心ゆくまで吊責めの研究写真を撮影しようと思っていた。万一にもモデル女が見付からなかった場合、私自身が女装して他の会員に頼んでも、私の吊責め体験を撮影

して貰うとも考えているのである。
 何れにしてもモデル女を使つての責め写真の撮影よりも、自分自ら女装して吊責めの苦痛、妙味を味うのは到底モデル女使用よりも何倍か勝るものがあるのは、幾度かの研究、体験に徴しても明瞭である。だが時々モデル女を使つての責め研究も亦大いに意義があるということ、今回の雅子さんの吊し責めによつて十分諒解した次第である。

(終り)

〔雑誌通信〕

ジェームス・ディーンの事

〔「スクリーン」32年2月号の写真より〕 黒 岩 縄 一

ディーンが死んでもう二年たった。その間色々な伝説が生れたが庄巻は何んといつても『週刊東京』に発表された。ジェームスディーンは交際であつたの記事だろう。こんな写真から生れた伝説であるが事実であつたかも知れない。

この写真は「ジャイアント」撮影の余暇に世界一の美女スターと云われるエリザベス・テイラーとたわむれるディーンである。縄でしばられ、その上に横倒しにされ上から押えこまれそうになつていながら、それでいて嬉しそうなエリザベス・テイラーの顔は何んとも云えない。

それにしても、もう少しシャッター・チャンスが遅かつたらもつと、おもしろい写真になつただろうとおしまれてならない。

殘虐芸術展覧会

伊 藤 晴 雨

会場の入口でまず第一に度胆を抜かれるのは大人形である。高さ十五間もあろうと思われる籠製の大人形は女が裸体で縛られた形で見物はその人形の中へ這入る様に作られてある。これには最初当局との間に折衝が相当あったが、結局有力者政党の幹部が待合政策で漸く許可されたという事が新聞で素ッ破抜かれたので人気を呼んだ事は事実である。それよりもその奇抜なのは場内に掲げられた一種のクイズで、当選者には祇園の芸妓を一人提供する。彼女は縛って責められるのが大好きだという条件つきだが、近頃の物価が高いので乞食が馬を貰ったのと同様、喰わせて贅沢三昧をされては普通の家庭では堪らないので折角当選しても女を受取りに来るものがなかった。そこで女は又候抱え主に逆戻りをして大笑いになったが、笑えないのは彼女の情夫(?)であった。某という青年画家である。

画家の名を仮りに青嵐^{アヲ}とっておく、もし同名異人の方があつたら謝っておくが、此青

嵐という青年画家が此女と親しくなったのは日展に出品する「責められる女」のモデルに使った時からである。

一体モデルと画家との関係は全く他人から見れば深い関係が有り相に思われるのが世間普通であるが、併しその中には例外がある。此青嵐先生は一つの主義があつて、先輩の人々がモデルと盛んに肉体的関係のある事を非難攻撃をして、或は文芸欄に自己の意見を發表したり、責と芸術という論文を發表してその責めは芸術であるという事を当局に向つて吐露した事があつて、此度の責められる女の作品が日展審査員間の大問題になる迄には相当の迂余曲折があつた。それは審査員と其モデルとの関係が特別な情実があつた事だ。日展の審査員も人である以上情の人が多い。特に昔の御殿女中の腐った様な根性の多分にある審査員が自分達の内幕をイヤと云う程知り抜いて居る、青嵐先生の作品に対して迫害を加える事は当然過ぎる程当然の事である。

青年画家、横内青嵐先生はK市の市長から依頼されて特に政刑史料として切支丹絵巻の横巻を描いた。長さ七間三尺上中下二巻、横山大観先生の燕山楚水より遙かに長尺である。

K市々長の意図は、初めは都会に出て来る地方の女に云い換えれば都会に集中する人の数を間接に緩和するべく、都会の恐るべき事を絵に依つて表現しようとしたのだが、これがイケない、結果は反対で或る種の猟奇的趣味を觀衆に与えたに過ぎなかった。

其絵巻物に表れたのはこうである。まず最初は、ある河の辺に自殺したと思われる女の溺死体が引上げられて、巡査が此死体の女の懷に秘められた長い長い書置きにそれは、自分が出京してから貧乏に困っている間に、或る男に誘惑されてある魔窟に売り飛ばされ、其処で散々残酷な責に遇つて責め殺される迄の話を一巻の絵巻物にしたもので、偶意もあり世相の深酷さを如実に表現したものであるが、其中で火野葦平氏の糞尿譚とは違つた、女が便所の中へ縛られて監禁され淫売屋の主人に糞便を食わされる画面が問題となつて、これを芸術として取扱う可きや否やこれを公開して差支なきや否やという問題が生れて甲論乙駁、火の出る様な議論を生んだ。甲は云う、石山寺にある円山応挙の筆難福絵巻は強盗に入られて女房が亭主の前で凌

辱されて居る処を絵いても、円山応挙が有名な画人であるが故に芸術品として公開されるならば、我模内青嵐画伯の作品も亦芸術品として取扱う可きであるという見方と、否々青嵐氏はまだ一個の、未完成芸術であるから応挙の絵巻物とは一に論ず可きでないという人と両派は別れてしのぎを削った。

洋画界の耆宿小山正太郎は、書は芸術に非ずという議論がそれが正当であるか否やは別問題として、廿年頃の「日本及び日本人」等に依って盛んに論議された。現代では書も亦芸術になつて居るが、兩者の論ずる処はどちらにも根拠があつた。質屋の番頭の書いた字も、一膳めしやの「めし」と書いた看板も、等しく芸術でありとすれば、書も亦芸術なりと云い得べく、以て姓名を記すに足ると喝破した古人は愧死すべきであろうが、惨虐な絵画や彫刻も亦芸術でありとすれば、之れを圧迫する事は芸術を且外する事になる訳で、之を延長すれば悲鳴も亦芸術なりと云い得ると思う。俳優が舞台での悲鳴、賣場の泣き声等々々も亦芸術であつて、賣場で泣く女の悲鳴が永く見物の頭脳に止つて居る様ならば、それが立派な芸術でなくて何であらう。泣くのも笑うのも芸の内でしたならば責められて泣く程に見られるなら立派な芸術であると思うのである。

扱、其絵巻は淫売屋に落ちた女が、最初は

売淫を強いられてもウンと云わないので、吊し責に遇つたり散々に責められるので店へ出る様になつたが、余りの虐待に堪え兼ねて朋輩の一人と謀し合せ一夜闇に紛れて窟を忍び出る、窟でもそれと知つて八方へ人をやり漸くにして女を捕え、再び逃走せぬ様折檻を加えられる。今度は以前に増した最悪な責場へ入れられ、惨酷な責に遇つた結果書置を書いて死んだのを、死体になつた帯の間から発見されて一味の悪漢が警察の手に捕われるという、因果応報的な教訓的な絵巻で、K市長は之を以て地方の少女を訓戒する目的であつたものが、結果は顧客の好奇心をそそいだに過ぎなかつた、というより賣場の裸体が興味中心となり、司法警察の出品物たる昔使用した伝馬町(?)の牢屋の責道具や十手などは顧客からは客観されて居た。

人形を並べたパノラマの「責られる女の一生」の中に、まず最初の明烏浦里時次郎の人形はいつもの雪中でなく火事になつて居る。責場は普通の責場になつて居るが、最後は雪責の場で約束通りだが悪番頭と山名屋四郎兵衛が鯉魚の一軸を持って浦里を責めて居る処と、敷島の責場で源四郎が遊女敷島の咽喉を短刀で刺す処が呼び物になつて居り。此場は活人画風に敷島は人形でなく、生きた人間を使つて居るで迫真心が出ていて昔の吉原をしのぼせる。賣場の内部は売春制度の参考品と

して、至極いい参考品になるので地方からの顧客にはいい刺激を与えていた。

月岡芳年の安達が原の二枚続きの図を、其儘人形に造つた「一つ家の腹烈き」は、処々人形の腰巻きが紛失するので、刑事が夜中巡視していると或る変態性の男が公衆便所の中に夜迄忍んで居て、巡視の看守の隙を伺つて盗んだものと判つたが、此男は大阪市天王寺区勝山通一ノ五十六町田正太郎(八六)という男と判つた。

今期中の窃盗事件はこれ丈けに止まらず、全裸体で雪中で責められている中将姫の人形が紛失した事だ。此人形は東京都台東区豊中初音町二十五、人形師面六事横山六太郎の作で、一面に皮膚を縮緬で張りつめて伸縮自在に屈曲する人形で、これは毎日縛り方を換えて見せる為に特殊に造られた人形で、此人形は最近フランスの巴里から輸入された、或る特殊の装置を施した(身体の或る一部に微温物を注ぎ込んで体温と同じに出来る仕掛になつて居る人形)ものの模倣であるから、これを盗んだものは劣作者か或は若い男に限るだろうという見解で、八方へ刑事を派して調べると、ナントそれが京浜間に転々として巡業している新派の俳優で若山吉郎という剣劇役者で、毎度これを携えてまるで恋人と同様に扱つて居た事が判つて、開演中に引致されたが窃盗罪として送局された。



体験告白

私のキタ・セクシュアリス (その三)

山 本 節 夫

とかくする中に世の中はますます緊張を加えて行き、大学の過程も半年間短縮され、従来認められてきた徴兵猶予の特典もなくなる様になった。私は最後の夏休みを蓼科高原の宿屋の一室に閉じこもって卒業試験の準備に没頭しなければならなかった。しかし運よく試験に通っても卒業と同時に入営という運命は定まっていることとて、何とも云えない不安と焦燥に私の心は落ちつかなかった。そして滞在の期間も残り少なくなった或日、勇を決して東京のK子の所へ誘いの手紙を出したのである。返事も来ないまま半ば締めてヤケ気味になっていた頃、彼女は前触れも無しに山に登って来た。八月も末に近く高原の避暑客はぼつぼつ帰りがけて、短い山の生活の間に親しくなった人達が毎日毎日バスの停留所まで見送り見送られるという閉山近くの光景がみられる時分であった。

スーツ・ケース一つの軽い身なりで、たまたま宿の前のベンチに腰を下ろしてぼんやりしていた私に向って手を振り上げた彼女は、相変らず颯爽として美しかった。私は母親を待ち兼ねた子供の様に彼女を迎えた。

「節ちゃん、何をメソメソしてるの。すぐ来ようと思ったんだけど、ゴタゴタといろんな用事があって。」

彼女はテキパキと宿の一室を契約すると——勿論今の時勢と異って未婚の男女の同室などは思いも寄らず、仲間同志と一緒に行動すること自体が大変な冒険であった時代である。同じ旅館にK子と一緒にいるなどという事は二人以外には誰にも知らせ得ない事柄であった。——散歩に行こうと私を誘った。人気のなくなった高原は薄が穂^{ススキ}に出て、岩つばめが声をあげて飛び交っていた。ふと宿の横につないであった貸馬を見つけると彼女は嬉しそうに歓声を上げた。

「馬があるわ。早速遠乗りよ、節ちゃんも乗らない」

勿論私の悲しい性癖は之を拒否する以外になかった。「意気地なし。じゃあ一人で乗るからいい。」



彼女は一人で駆けて行くと馬子呼び出して馬を引き出させた。片足をあぶみにかけて、馬子にお尻を押させて馬上に跨った彼女の顔には一寸不安の様子も見えたが、やがて腰の位置を定めると馬子にもらった木の枝を鞭代りにハイシハイシと馬の尻をたたきながら「一寸のつてくるわね」と私に笑いかけながら高原の途を登っていった。白いブラウスに黒いスカートをなびかせ、素足に短靴のいでたちは多少女騎士としてはおそくないが、それでも悠々と馬背に跨る彼女の姿態は私を興奮の極に押しやった。

三十分位して彼女は帰って来た。少し馴れたとみえて今度は馬子に轡もとらせず、一人で揚々と背をそらして馬腹を蹴っている。私の前迄くると「手伝って」といいながら右足をまず馬の背から跨ぎ越し、やがて全身を私の腕の中にもたせかけてきた。上気した額の辺りには汗が染んで、心持よい運動の後の気分を楽しんでいた様であった。

「ずっと待ってたの、可愛い子。あとで、お馬にして跨って上げる」

風呂に入って薄化粧をした彼女が私の部屋を訪れたのは夕方近くであった。昼間本ものの馬に心ゆく迄跨ったこと。高原の宿に一人でできていること。そして以前にも増して私の無気力さが彼女を一層大胆に振舞わせた。

「さあお馬になれ。よし。跨るぞ。ハイシハイシしっかり歩け。ヤセ馬め。つぶれたりしたら承知しないぞ」

実際の馬に跨っている積りか、いつもより股の締めかたもきつく、細帯の手綱の引き方も強かった。六畳の部屋を十二、三回這い廻されると私はすっかりバテてしまった。

「どうした？ ヨタ馬。もうつぶれちゃったの。役にたたない

ならもうこれから乗ってやらないぞ」 そういいながらK子は、その豊かな御尻をすらすらと私の首の上にとっかかると馬乗りに跨り「どうだ。参ったか。降参といえ」と得意気に首をしめつける。私は潰されまいとして懸命に両手を踏張りながら蚊のなく様な声で降参した。

「よし、じや許してつかわす。その代り仰向けになれ」

仰向けに転がされた私の顔の上にK子は情容赦なくそのふくよかな太ももも露らわにびったりとはさみ込むと、にっこりと笑いながら私を見下して、

「子供の時とちっとも変らないわ。この感じは一寸ほんものの馬でも味わえないわね」

そういつて、ぐいぐいと私の顔を潰しにかかる。

私は直観的に、之が一生の中の、最後のチャンスだと感じた。

「K子ちゃん。僕の顔の上に跨って。御願いだ。最後の頼みを聞いて」

K子は一瞬ためらっていたがやがて

「よし」というと乗りかかってきた。私は遂にK子の御尻の下に完全に敷かれた。あの大きな馬の背中に跨った豊満な御尻に敷かれながらぼーと一切のものがかすむ様な気がした。

その中に急に身が軽くなったと思うとK子はスカートの前をつくろいながら部屋を出て行く所であった。翌日は一日中K子は馬に跨って遊んでいた。そしてその次の朝、彼女の姿は宿屋に見えなかった。戦後のいまに至るまで彼女の消息は判らない。

山の貸し馬に関連して之は戦後のことだが山中湖畔に会社



の旅行があった時、素晴らしいアマゾンがいた。ブラジヤーとシヨートパンツのいでたち故背中は殆ど丸出し、のびのびとした姿態は西洋人と間違える程で、白面に鼻すじも通り、サングラスがまたよく似合った。この勇ましい女性が素足にサンダルをつっかけて、湖畔を悠々と馬に跨って散歩していたのである。周りの人々も立ち止って振り返っていた位だから、感動を覚えたのは私だけではない様だ。しばらく附近をブラついて貸し馬屋の溜りの所迄くると、さっきのアマゾンが帰ってきた所にぶつかかった。ひらりと馬から下りると馬子にいう文句がすばらしい。

「何よ。今日の馬は。全然老いぼれじゃないか。いくら鞭でたたいてもちつともシヤンとしないなんて面白くもないわ。毎日お前んとこで跨ってやってんだから、もう少し元気のいい奴を御寄越しよ」

手綱をとって地面にしゃがんでいる馬子はまだ若い男だったが、横で半裸体の姿で突立っている女性を見上げると

「奥さん。そんな俺の背中にでも乗ってみるかね」

「なんだって？ 生意気いうと……」そういいながらアマゾンは馬子の肩に跨る様な素振りをしかけたが、まわりの人々の視線を感じてさすがに実行はしなかった。

「あしたい馬を出さないと承知しないよ」

それだけいって大股で歩み去った。私はよっぽどその人の後をつけて、馬にして貰おうと思ったが勿論出ることではなかった。この頃ますます盛になった貸し馬に跨る女の子達をみるにつけてあの時の光景が目につく。

K子との最後の馬ごっこで私の学生生活は終わった。東京に帰ると卒業試験、そして卒業式の翌日はもう頭を丸坊主にし

て宮門をくぐったのである。

ここで、この章は終るのであるが、ただ一つ胸中に秘める憶出を書かない訳にはゆかない。私には美しい年上の一人の従姉があった。伯父の社会的地位から、彼女は学習院に通い私の人見知りも手伝って殆ど交際はしなかった。ただし新年とかクリスマスとかの機会に、はるかにいまみては、年が増して行くその美しさに小さな胸をときめかしていたのである。美しいだけに噂もいろいろあり、シーズンの葉山逗子界限では当時の軟派達の女王として振舞っていた様である。

卒業も間近い或る日、彼女も結婚式を目前に控えていたので、それやこれやの挨拶かたがた勇を鼓して訪問したのである。美しい彼女はしとやかに姉らしく迎えて呉れたが、来客でもあったのか、暫らく彼女の部屋でまつ様に云われ、写真帳などがあてがわれた。写真帳は美しいポーズで、いろいろな場面がとられていたが、その中、海水着姿で馬にのっている写真にぶつかって思わず目がくららした。海水着の美人が馬に跨る図は私の夢に画いていた一齣であったからである。あかずながめている所へ彼女が這入ってきて、

「あんまり見ちゃいやよ。恥ずかしいから」といいながら覗きこんできたので

「お姉さま。御馬に乗れるんですか？」と顔を赤らめながらも聞いた。

「ああ、それ。それは葉山の時。だって私、馬術部なのよ。障害位平気よ、ほら」

といいながら写真帳の先の方をくると、乗馬姿に身を固めたりりしい馬乗り場面のスナップが沢山出てきた。

「節夫サンは乗れる？」



それから話題が乗馬のことになって、結局馬乗りのコツは跪座でしめることだということになった。美しい人の口から「馬」とか「跨る」とか「鞭」とかの言葉が吐き出され、私の胸は高鳴りをつづけた。

とうとう「跪座でしめる」という仕草を実際にやってみせて呉れることになり、彼女ははじめ椅子に馬乗りになって、自分の腿の内側をさし示してこの部分がどうこうといったが、やがてもどかしくなったか

「節夫さん。一寸ここへ四這いになってよ。」

私は椅子に手をついて馬にさせられた。

「一寸ごめんなさい。背中に跨らしてね」

跨る前にも私の顔の横で手綱のさばき方、タテガミのにぎり方、あぶみのかけ方を教え、そしてひらりと私の背中に跨ると、実際に跪座でしめつける動作を何回もくり返した。

「どう、判った。乗ってみると馬って可愛いものよ」

私はこの美しい御主人様にいつ迄も跨っていて欲しかった。それで馬になりながらいろいろな質問をして出来るだけ「馬乗られる」時間をかせいだ。彼女は私の背に跨ったまま、鞭のあて方や拍車の蹴り方などを教えて、ようやく下馬されたのである。

(この章の終りに)

イタ・セクシュアリスといっても、それは結局終始「美しい女性に馬乗りされる」ことにつきた様だ。興味のない人にはしつこい、くだいものとうつるであろう。しかしマゾ男の身にとっては全てが真剣そのものである。ここで軍隊生活という異常な世界を経て戦後の荒れた社会での経験に移

ることになるのだが、それに比べては何となく初心な、夢見心持のある日のことどもの記述を終るに当り、その頃空想した二、三の事例を思い起して終りの言葉としたい。

現実の行動がそうそう常時簡単には行えない為に、勢い空想がその穴うめをすることになるのは見易い道理である。少年期から青年期への移行の時代の私の空想を御紹介すると次の様なものである。

(その一) 黒人奴隷と白人の美女

いつの頃であつたか、少女雑誌の附録に、ストー夫人のアンクルトムスケピンの抄訳がのつたことがある。その中で金持の少女が老奴隷トムを哀れに感じ父親に買って呉れとせがむ。父親は「あいつを買って馬にでもして乗ろうというのかい。馬にするなら、もっと若くてたくましい奴を買った方がいいじゃないか」と答える。どうも之は原文にはない様で単なる翻案であろうが、しかし空想の糸口にはなった。美しい女主人は数多くの男奴隷を従えてその生殺与奪の権を握っている。退屈になると適当な奴を引ずり出して四這いに這わせて御馬のけいこを始める。人前もはばからず素裸に長靴拍車のいでたちでハイシハイシと乗り廻す。馬がバテると首の上に跨り直して御仕置きをする。もっと馬らしい気分を出す為に肩車に跨って馳らせる。奴隷は沢山いるから御庭で御馬のけいこが終わると別の馬に乗りかえて室内を乗り廻す。どこへ行くにも馬の背を使う。時には勿論仰向けにひっくり返して顔の上に跨って息の根を止めたりする。

(その二) 室内乗馬倶楽部



ドーデーのサップオーなどを読むと昔のパリ辺りでは室内の競馬（勿論馬は男性・乗り手は女性）が行われた様である。戦后のある風俗雑誌の記事によると、室内馬場で豊満な美女が全裸体で白馬に跨る見世物がある由。そしてシヨの後、多額の金を払うとその美女に馬にして貰えるという。

会員組織の秘密倶楽部。男馬は各所につながれて女騎士の御出でを待っている。時間に、なると女騎士達がつれ立って現れる。そしてブラジャアー・シヨートパンツ・長靴の身軽い乗馬姿に着換えると馬の前に来て品定めが行われる。

「あなたどれに跨る？」

「あたしこいつにするわ」

「一寸跨って乗り心持を試してみようか。」

こんな会話が交わされた後、それぞれの馬には女騎士達がひらりがつきと馬乗りになり打跨ってハイシハイドーと賑やかな馬乗りごっこが展開される。

一区劃では二人組の人間馬がいる。一人の肩に手をかけてその背中に女が跨る。これだと本ものに一層近い。

御馬のけいこにあきた人々の為には逆さ馬の用意がある。

短い縁台に寝かされた男の上に女騎士が腹や胸や首の上に足を開いて馬乗りになりいる奉仕をさせながら、冷い飲物などにのどをうるおす。

「あんた、いつ迄顔乗りやってんの。早くこっちへきて馳けっこしようよ」

馬に跨った仲間にさそわれて顔乗り、首乗りをたのしんだ他の一人は立ち上り、その男をひき起すと馬にして跨り又馬場の方へいそぐ、あちこちで男馬の悲鳴。むちの音。女騎士の嬌声。

（その三）くらべ馬。

それは白人美女と男奴隷の関係でもいいし有閑令嬢とその家来でもいい。友達同志でそれぞれ愛馬一頭をひきつれて集合の上、競馬をやる。賞金や罰金がかかるので一同は真剣である。やがでスタート。男馬に跨った女騎士達は鞭を振り、拍車をけりつけ手綱をひきしぼってハイシハイシと馬をせめつける。中には倒れる馬も出てくる。すると騎士は倒れた男の背に跨り立ったまま半殺しになる迄鞭を振う。よろよろ立ち上る奴に再び容赦もなく跨って先を急がせる。ゴール。勝ち馬の背に騎士は背中から下りるとツブレた馬の顔の前にしやがみこみ、頭を自分の股の間にかかえこむと御褒美のキスを太ももに許してやる。一方負け馬の騎士は御仕置をしなればならない。長靴をぬぎすてると馬に跨ったまま池の中に乗り入れる。水面が馬の顔スレスレの所で騎士は首の上に跨り替えて水中に顔を押し込める。水責めである。苦しんで許しを乞う奴を失神する迄いじめた後、やっと開放してやる。

（その四）野球の賭け

その頃はまだプロ野球は盛んでなかった。中心は学生野球、就中、早慶戦が華であった。ラジオの前。お嬢様は慶応びいき。書生は早稲田びいき。二人の利害はことごとくに喰い違ふ。慶応のエラーに書生が拍手するとお嬢様が手を振り上げる。慶応のピンチ。いらいらしたお嬢様にイジメられたくて書生はわざと毒づく。「こいつめ。」といいながらお嬢様は書生の首根っ子を押さえると四這いにさせ、背中に馬乗りに跨る。馬乗りのまま放送はつづく。やがてラッキーセブンで形勢一転。「どうだ。勝ったかどうか。覚えてろ」お嬢様は興奮しながら馬上で身体を動かしお尻でギユウギユウ押え



つける。一点はいる度に頭をゴツンゴツンとなぐりつける。サイレン一声。慶応の勝。「どうだ。参ったか、馬め」書生の首つ玉にがっしりと跨って太ももでしめつけながら得意気にはほえむ。

(その五) 女親分

M型の美人女学生。今日も河原で男奴隷を従えて御馬のけいこ。二人組にさせて本ものの乗馬気分。一の子分はニキビ面の不良。腕力はつよいが親分には、すっかり参って猫の様におとなしい。「おい三吉、あいつをやっちやえ」向うから一人の中学生が歩いて来る。「へい」三吉はその前に飛び出して因縁をつける。「野郎」取組みが始る。女親分は馬上ゆたかに決斗をながめている。三吉の力にかなわず中学生は組みしかれる。デンと胸の上に馬乗りに跨った三吉は首をしめながら「家来になれ」と強いる。降参して半泣きの中学生は女親分の足にひきすえられる。「女王様の奴隷になれ」三吉は威張って肩を怒らす。馬から下りると女王様は捕虜の前に立ちはだかり、「やい、股をくぐれ」中学生は前からひろげられた股をくぐる。「もう一度くぐれ」今度はお尻の下から頭をつっこむ。そこをすかさずぐいとお尻をおろして跨ってしまう。

「おとなしく馬になるか。なればよし、ならないと命がないぞ」女王様は股の下の中学生の首をしめつけながら見下す。新しい馬の背にどっかりと馬乗りになってお馬のけいこが始まる。

(その六) 女山賊

山の奥の隠れ家から道に下りて待伏せる女山賊。尻切れ褌に脚絆ばき。腰には一本山刀。そこへヨタヨタやってくる二人連れの旅人。パツと飛出し目の前に刀をつき出すと「生命が惜しけりや金を出せ」二人は腰を抜かすと「生命ばかりはお助け」とガタガタ震えながら手を合す。若い方の男はあきらめよく有金を前に投げ出すが爺の方は欲を張って逃げようとする。「野郎待ちやがれ」四這いになって逃げようとする奴の背中にパツと馬乗りに跨る。「あたいの馬になるってえのか」

「へい。何事も言う事をききますから、このお金だけはおゆるしを」「よし、じゃあ馬にしてやる」

「お馬はいどうどう」女は爺を乗り廻す。やがて馬がつぶれると仰向けにして太ももも白々とぐつと開いて顔の上に跨り思い切りいじめる。だらりと伸びた爺の胸に跨りかえると首にぐつと一太刀。財布を奪い取ると今度は若い方。目の前の殺人に歯の根も合わぬ奴の肩にぐいと跨ると「やい歩け」よろよろと男は首に女山賊を跨らせたまま立ち上り山の隠れ家の方に歩いて行く。久し振りの馬乗りには女はすっかりいい気持になり鼻唄を歌いながら太ももで首をしめつける。山道の肩車はいくら若い男でも参ってしまう。生命がないぞとおどかされてもとうとうへなへなと腰を折ってしまう。「よし今度は四這いで勘弁してやる」女は肩から下りると男の背に馬乗りになる。最後に隠れ家の近く迄来ると「往生しやがれ」といいながら馬乗りに跨ったまま男の首を切る。

x x x

x x x

創作

東京自殺クラブ

——女体切腹実見記——

南

方

純

クリスマスもあと四五日に迫った十二月の第三金曜日の夜、ネオンの輝きもまばゆい銀座通りに程近い三原橋の川沿いのNビルに、オーバーの襟を立てた男女が、いずれも何か物を憚る様子で、一人二人と吸い込まれていた。Nビルは焼ビルを改装した小さい四階建て、ひどく安っぽく陰気に見えた。一階にはビルの事務所の外にもう一室あって、「SS出版社」「TO商事株式会社」など二三の木の名札がかけてあった。入ってきた客は必ずこの出版社の看板のかかっている室のドアをあけた。五坪位の薄暗い部屋で、後の方は背の高い書棚が並んでいて、その前の机で六十近い白髪の男が眼鏡をかけて何か印刷物に書き入れをやっている。校正をしているらしい。客は無言で直径三センチ位のニッケル鍍

金をした金札を出して老人に見せる。それには男ならX何号、女ならY何号と番号が刻まれている。老人はちらっと見て又前通り仕事を継続する。それがO・Kの意思表示だ。客は、ずかずか入って書棚と書棚の狭い間隙を後に抜ける。そこは地下室に降りる階段の入口になっている。客はそこで一度立ち止まり仮装舞踏会でするようなマスクをかけさっき出した番号札を胸につけて階段を降りていく。地下室の廊下は、都会の河に特有な臭気をはらんだ混った空気が一ぱい淀んでいる。寒々した裸電球もわびしく、監獄を連想させる光景だ。

だが一度その廊下の右側にある一見、物置の入口と思われるドアをあけて入った瞬間人はきっと自分の眼を疑うに違いない。もうもうと立ちこめた煙草の煙を通して、ほの暗い緑色の照明の中で、男女の姿がシルエットのように浮び上ってくる。防音装置のせいであらうか、外では全然わからなかったが甘美な音楽が流れてきて、華やかな男女の笑い声が響いてくる。正面より右手よりカウンタ―があつて、一ぱい洋酒のびんが並んでバーテンがシェーカーをふっている。左手にはちよつとしたステーキ風の一段高い場所が出来ている。中央には食事をするように長いテーブルに白い布がかけてあるが、それには誰も座っていない。その代りカウンターで一杯やっているグループ、ステッブを楽しむグループ、それから別におかれた丸テーブルを囲んで語り合っているグループとそれぞれ好むままに人生を楽しんでいるといったところだ。

婦人の上品な化粧品香り、紳士連中の整った服装、これはかなり上流社会の桃色クラブの一種に違いないと人は早合点するかも知れない。

だが、それにしては少し様子が変だ。もう少し観察して見よう。人員は全部で二十名たらずで大体男女同じ位だ。顔は、そうだ、光線が薄暗いせいばかりではなく、皆マスクをしてゐる為よくわからない。それでも頭髪の具合、肌の色艶等で年齢、美醜も大体は判明しようというものだ。男にはふとった、頭のはげ上ったどう見ても六十がらみと思われる重役タイプのがいて、丸テーブルで盛に気焰を上げているが、中には二十そこそこの学校を出てまもないと思われるすんなりした青年がダンスの組にまじっていた。それにひきかえ、女には年よりは見当らず、化粧しているとはいえ四十をこしたと思われるのはいない。そうだ、変といえはこの雰囲気そのものが普通でない。ちよつと見たところ何の変哲もないバーのようなものだが、重々しい「何物」かがある。酒は盛にあけられるが、殆ど酔った様子が見られない。ダンスも一向にはずまない。楽しむよりも苦しんでいるようだ。時々聞えるかん高い笑い声もニヒルな余韻がつきまといっている。それから、さっきから気になってゐるのだが、どのグループからも離れて深くいすにもたれて、思いに沈んで

いる。長い黒髪をゆるやかにウェーブし、胸の開いた白いドレスをつけた女の様子はどうかだ。すき通るような肌の色、豊かな肉付、ギリシャ彫刻を思わせる端正な鼻筋、年は二十四五でもあろうか、細い指先にはさんだシガレットを深く吸い込むと、濃い紅色の唇からゆっくり吐き出される煙の行先をうつろな瞳が追っていく。ドレスの胸にはX三四号と刻んだ金札が光っている。踊る為でもなく、酔う為でもなく、又誰かと恋をささやく為でもなく、何の為にこんな地下室へわざわざやってきたのであろうか。

急に低い鈴の音が響いてくると、音楽がびたりと止り、ダンスの組はばらばらに分れカウターのグループも、丸テーブルのグループも、それから長い黒髪の女も皆立ち上って中央の長テーブルの席についた。順序は別にきまっていらないようだが、何の混乱もなく全部が席につき終ると、今までカウターの中にいたマネージャー風のかっぱくのよい紳士が六十センチ位の細長い箱をもってテーブルの中央に進め出た。この男だけは例のマスクをかけていない。世俗の智慧と学識とが適度の調和を保った病院長といったタイプ、五十五六とも見えるロマンスグレーの何とも堂々たる紳士だ。

「皆さん、長らくお待たせ申しました。それではこれから儀式に移りたいと思います。そ

れに先立ちまして、私が常に考えておりますことの一端、いわば本会の目的といったものを、蛇足かと存じますが、お話ししたいと存じます。御承知の通り、戦後わが国ではあらゆる面における自由が認められるようになりしました。宗教、言論はいうに及ばず、すべての享樂も時には悪徳までもが自由の名で許されている現状であります。生を楽しむこと今日の日本位、恵まれた時代はありません。われわれはこの自由な舞台で毎日の道化芝居を演じつづけています。何をやっても、どんなことをやっても自由な不思議な舞台です。だが皆さん、困ったことがあります。それはこの舞台からは中々退場が出来ないことです。勿論寿命がくればいやでも引き込まなければなりません。しかしただ疲れたからとか、道化に嫌気がさしたからといって自由に退場は出来ないのです。道化芝居をやるのと同じ位の自由さではわれわれはこの舞台から退場出来ないのです。そうです、自殺、それは自由でしょう。しかし、そう思ったからといって誰でも自由に自殺出来るといったものではありません。それはなぜでしょう。理由はいくつかあります。一つは死の恐怖です。死ぬ間際の苦痛、それを想像することは大きな恐怖です。又もし仕損じたらと考えることも恐怖の一つに違いありません。又一つは、妻や夫や親や兄弟に醜い屍を見せて悲歎

にくれさせたくないとか。社会の非難を受けたくないとかいう念願もありましょう。流れ星のように闇の中に消え去って一切痕跡をとどめないような退場の方法はないものかという希望もあるに違いありません。本会はそのいった自由を、即ち自由な退場を求める人の為に作られたものです。その目的の為にあらゆる便宜を与えるのが本会の任務です。手段については、その希望によりどんな種類のものでもたちどころに供給出来ます。多種種類の薬物は勿論備えてあります。その他ガスによるもの、縊死、溺死、シヨック死の方法を取るもの、銃器、刀剣によるもの等凡そ考え得るすべての方法が可能です。しかも更に重要なことはどの方法をとるにせよ、究極は安楽死によってその目的を完遂させるよう準備しているということです。次に死体の処理について一言いたしましょう。退場を完成された会員の体は特殊な薬物を充填した棺の中で最期の姿そのままに永い眠りに就くのです。誰の眼にもふれず世界の終りの日までそのまま安らかに眠り続けるのです。かの古代エジプト王の死体完全保存の夢が今や会員諸君に実現されるのです。」

紳士——今度から会長と呼ぶことにしよう——の長談議が終った。会員には恐らく何回か話された当り前の事なのだろう。別に大

きな感動を与えた様子もなかった。だが未知のわれわれには何という驚歎すべき事実であろう。さっきから感じていた不思議な重苦しき道理、ここは恐るべき秘密結社『東京自殺クラブ』だったのである。

「さあ、それではいよいよ、本日の儀式をはじめましょう。」

会長はそういつて自分の前に置いてある細長い箱を取り上げ金具をはずすと、箱の胴に当たる所が開いて中から象牙色をしたぜい竹のような棒が何本も出てきた。それを手早く数えて、

「今夜の出席者は十八名ですから、印のない棒を十七本、下に赤い印のついた棒を一本い



M.K

れます。赤いのを引き当てた方が退場者となります。」

十八本の棒を又箱に入れ金具をしめると二三回かたかたと音をさせて振ってから、会長は左方に座っている女の前に箱を立てて、「どうぞ引いて下さい。」といった。

一瞬緊張した空気が流れた。人間の心理程不可解なものはない。希望して自殺クラブに入会した会員たちがいざその運命をきめる段階になるとためらいの気持が湧いてくる。これは強烈な本能の致すところでもあろうか。

一番目にくじを引いたのは、和服を着たマダム風の女でちよつと考えこんだ末、箱を取り上げ、かたかたと音をさせて、みくじ箱のように逆にしてさつとふると穴からすつと白い棒が流れ出た。ばらつと白い布の上に落ちた棒に皆の視線が集まった。棒には赤い印がついていなかった。ほつと安堵の感情が皆の胸に湧いた。

重役風の六十男、令嬢風の女、学生風の青年、画家のような男、順々に箱を取り上げては白い棒を振り出した。息づまるような重苦しさが室内にみなぎる。半分程廻って、ついに例の長い黒髪の女の番になった。

女は無雑作に箱を両手で上げてさつと逆に振った。ばらつと白い布の上に落ちた白い棒の末には、ああ、血のような赤い印がついていた。はつというため息が誰からともなくも

れる。運命を祝福する気持からであろうか。不思議な儀式、いな生命をかけた恐るべき賭はかくして終ったのである。運命のくじを引き当てたY三四号の長い黒髪の女は冷静に座ったままであった。恐怖の叫び声もあげなかったし、興奮の身振りもしなかった。

「Y三四号さん。」会長が呼びかけた。

「今夜はあなたの番になりました。マスクをおはし下さい。」

番に当たった者はマスクを外すのがきまりになつてゐるらしかった。Y三四号がマスクを外すと、「ああ」という感歎の声が皆の口からもれた。何という美しさ、勿論マスクをしてさえその豊艶な肉体は充分その美人であることを証明してゐたし、顔について見ても、整った鼻筋、新鮮な果実を思わせる唇、そして特に美事な長い黒髪は天の恩恵を誰よりも多く受けた造化物であることを疑うものはない。かたがたのあろ。ああ、しかしそのマスクを取った顔の美しさは想像の何倍といったらよからうか。だが今皆の口からもれた「ああ」という感歎は唯、彼女の美に驚いた為ばかりではない。彼女を実は全員が前からよく知つてゐたからだ。彼女こそ数年前慧星の如く映画界に登場し圧倒的な人気で銀幕の女王と騒がれた露木小夜子だった。幾多の真偽取りまぜてロマンスの末、元伯爵の次男でKY工業の取締役をしている園城寺正通と結婚し、銀

幕から姿を消して一年、世人の記憶からようやく薄れかかった彼女が、こんな場所に忽然と現われて、しかも今夜限りこの世界から本当に永遠に姿を消してしまうことになったとは何とも驚歎にたえないことではないか。

会長が事務的な調子で「手段は何にしますか。」とたずねると、小夜子は低いがはっきり通る声で、「私は切腹して死にます。日本古来の法式通りに立派に切腹して死にたいと思います。」と答えた。

会員に又感動が起つた。近代的教養を備えた女性の身でなぜことさら苦痛を伴う古めかしい死の手段を選んだのであろう。

「手段については。」と会長がいった。「各位の御希望にまかせるのが本会の趣旨ですから、それで結構と思いますが、余程の克己心がなければその苦しみには耐えられないと思います。」

「いいえ、私はぎつとやり通すつもりです。見苦しい最期をお目にかけるようなことは決してないつもりです。」

「いや、その覚悟があれば大丈夫と思ひますが、日本の切腹は世界的に有名で歌舞伎や小説類に多く出てきます。それも必ずしも直実を写したもののばかりでない為、いろいろ誤解もあるらしいのです。それに切腹では完全な自決が極めて困難です。乃木大将のような例もあるにはありますが、大体下腹部を一セン

チか二センチの深さに切っても致命傷にはならないのです。多量の出血に伴う衰弱死には長い時間が掛ります。その内精神が錯乱してくる。苦痛がはげしくなる。生への欲求が頭をもたげる。そして失敗する。そういう例が多いのです。」

「私もそれを思っております。ですから古式通りに介錯していただきたいのです。」

「結構です。それでは誰か会員中にこの役を買ってでる方はありませんか。剣道の心得それも相当にある方でなければなりません。」

「僕がお引受けしましょう。」会員の中から頑強そうな体躯のX二七号という金札をつけた三十位の男が進み出た。ダブルの上衣を着たちよつとやくざ風の男であった。

「剣道は五段、自称ではありませんよ。据物斬りは自信があります。戦争では実際に人を斬った経験もあります。もっともこんな美しい女性をはじめてですがね。」

「それでは介錯人はX二七号さんにきめましょう。会場の準備をします。あなたも御用意下さい。」

会長はそういうとカウンターの奥にいるバーテンに命じ隣の倉庫から必要な道具を運ばせ、設営を始めた。その間に小夜子はカウンター奥の奥に入って、女の会員に手伝ってもらい、白無垢と着換えをし、髪をすき、少し濃い目に白粉をぬり、紅をさした。

設備といってもそう法式通りには出来ないが、例のステージの中央に畳を二枚裏返しに敷いて、その上を白い木綿で覆い更に血糊のよごれを防ぐ為赤い毛布を重ねた。

小夜子は静かにステージの階段を上り、定め場所の所にびったりと端座した。荘厳な祭典を司る巫女のように落着きはらった態度だ。

白袴の日本刀を持ったX二七号が同じくステージに上って小夜子の左斜後方一メートル半位の処に左膝を立て、右足を折敷にして座を構える。ボーイが短刀を三方にのせて、小夜子の前方一メートル位の処に置く。服装のアナクロエズムも怪奇だが、ひどく芝居がかったお膳立だ。小夜子は右手を延し三方を引よせる。三方の上の短刀はその切っ先を二センチ程残して奉書でしっかり巻き、二か所を元結でくくってある。小夜子は白帯をほどき側に置き上着をはねて、袖を膝の下に敷いた。取乱して後に倒れることのない用心だ。仰むむけに倒れるのは見苦しいこととされている。腰紐をぐっと下に押しさげ、両手ではじらいをもつて下着の前をくつろげる。円く盛り上った乳房、肉づきのよい下腹の豊かな曲線、目に痛いばかりの白い肌が青い照明の中にくっきりと浮び上る。

小夜子は短刀を取り上げ、じっと切っ先をみつめる。一瞬の後にはこの切っ先が自らの肌を切り割くのだ。緊張に満ちた数秒間、会員はぐっとつばを飲む。小夜子は左掌で下腹

を静かになでる。ああ、いよいよ最後の時は来た。少しのび上るような姿をとったかと思える一刹那、切っ先は左脇腹にぐさっと突きささっていた。切っ先が全く見えなくなる程刀身は深く彼女の皮下脂肪の中に喰い入った。右手で一思いに突きさし終ると、小夜子は左手を右手に添えて短刀を引き廻し始めた。余り深くつきさした為であろうか、腕の力が弱い為であろうか、一気にさつとかき切ることは出来なかった。十センチ程切って刀身がへその下まできた時、もう刀は動かなくなつた。どつと溢れ出た血潮は白無垢を鮮かにいろどった。肩は波立ち、息使いは荒くなり、苦痛は全身を占めてゆくが、彼女はじっと耐えている。恐ろしい程の精神力。

江戸時代に行われた切腹について見ると、介錯の時期は第一は三方を引よせる時、第二は短刀を取り上げる時、第三はまさに腹につき立てようとする時とされていた。即ち大部分は切腹する前に首をはねたのが実情であったようだ。勿論切腹人の希望により、我慢の強い者は充分腹を切らせてから介錯することもあったが、そういう場合は仕損じることが多かったのだ。時期の見はからい介錯人が自分の判断でやってよいことになっていた。この場合X二七号はもう介錯の時期と判断したが一瞬躊躇した。そうだ最後まで充分切腹をとげさせてやろう、と考えをきめた。

小夜子は思い直したように、両手に満身の力をこめ、さっと短刀を引き廻した。美事、右脇腹まで二十センチ余りも真一文字に切りさいた。血の気の引いた彼女の顔にはじめてほっとした表情が見られた。一文字に切り終ると短刀を取り直し、刃を上に向けあばらにかかるまで切り上げた。そこで短刀を抜いて下に置くと、ややもすれば前に倒れそうな体を気丈にも支えながら、刻々せまる最後の瞬間を待っている。

傷口は大きく開いて、ふき出る血潮の中から白い脂肪層や鼠色の腸管が露出して見える。その上身もだえしたはずみにうねうねした小腸の一部がだらりと体の外にはみ出した。苦痛は刻一刻烈しくなる。小夜子は両手で体を前に支えるような形になり、後を振り返って、X二十七号に「どうぞ、早く切って。」と声を掛け、首筋をのぼし、観念の眼を閉じた。

X二十七号は、その時はもう白鞘から刀を抜いて陰に構えていた。折敷していた右足を一步左足の前に踏み出すと同時に刀を取り直して大上段にふりかぶり拝み撃ちに切っておろした。ちょうどふみ出した右足の拇指の先と彼女の左耳たぶとを結ぶ線を定規として、髪のはえ際を狙って振りおろした刀の影が、いかなるような早さで小夜子の白いうなじに光った。さっきの化粧の際に例の長い黒髪を

振り分けにたばね肩から前にたらしめたものこの用意であろう。

恐ろしい瞬間であった。さっと血しぶきが上って、ばさりというすさまじい音と共に、小夜子の身体は自分の首をいやくようにして前にのめった。

X二十七号は余程腕の出来る人であろう。介錯の法に「気皮をかけて打つ」ということがある。ひと息に首を切断すると、一、二メートルも先まで首がふっとんで見苦しいのでわざと咽喉の皮少しを残すように切るのである。今度の場合がそうだ。X二十七号が死体のそばに進み出て、脇差を抜き逆手に持ち、左手で長い黒髪を握って掻き首に切り落した。

検使がいる訳ではないから、実検というのはおかしいか、古式に則るつもりか、会員に最後の対面をさせるつもりか、X二十七号は小夜子の首を取り上げて血糊を拭い、鼻紙二十枚程を三角に折ったものを右手に持ち、首の切口をそえ、右膝を立てた上で支えて会員の方に向けた。正式の首実検では横顔を向けて正面を見せないし、又検使は扇の骨の間からそのくのが法とされたが、小夜子の切首は正面から会員に向けられた。

眼は閉じ、血の気は失せてきたが、念入りに化粧した顔にはまだ生の余光が輝き、紅ばらのような唇は又開いて物を言うのではないかと疑われる程みずみずしい。激痛に身もだ

えした苦悩の蔭は消えて、思ひなしか満足し切った安らぎの表情が見える。

だが何という恐ろしさであろう。造物主の傑作ともたたえられた美しい女体が今や二つに引きさかれ意識のない物体としてそこに横わっているのだ。X二十七号は小夜子の首を倒れている胴体のそばに置き、一礼してステーションからおりた。会員は荘厳な死の祭典の興奮に陶醉し切っていたが、はっと我に返って敬虔な祈りを捧げた。生と死との対決という複雑な課題が、解けない謎として、一人一人におおいかぶさってきた。

「みなさん」と会長が立ち上っていった。「Y三四号の壮烈きわまる退場はこれで終りました。全く御覧の通り立派なものでありました。わがクラブ史にもかつてない程美事なものでありました。御本人もさぞかし御本望だったことと思います。実は私はさき程も申しましたように仕損じることを心配していたのであります。徳川時代の例などを見ましても女性が切腹するのはごく珍しいことでありまして、それも多くの扇子腹といって短刀は使わず扇を腹に当てたとたんに首を切るといった、切腹とはいいい条打首も同様なものが多かったのであります。しかるにY三四号の本日の切腹はまことに正真正銘大の男も及ばぬ立派な切腹として故人に深い敬意を表するものであります。女優であった彼女のおそらく、

これが生涯の最高の演技ではないでしょう。みなさん、それでは今夜はこれで閉会いたします。」

会が終わっても一度に席を立つことなく、これも会の規約と見えて、一人ずつ一、二分の間隔をおいて、室外に、そして夜の町に消えていった。

会員が全部いなくなると、会長はバーテンとボーイを指図して死体の処理にかかった。まずうつぶせに倒れている小夜子の胴体を仰向けに直し、ぱかっとあいた切り口からはみ出している小腸を中におしこめ、外科用の針で傷口を手早く縫合せる。ひしやくの柄のようなもので首を胴体につなぐ、血糊を拭い、着物の前を合せ、帯をしめ、手を合掌させる。

十八世紀の銅版画には、貴婦人が寝台に横たわり、巨大な浣腸器を手にした侍女に浣腸をしてもらっている光景が、ときどき見られる。むかし、丸木砂土氏はこれを説明して、あの時代のヨーロッパでは豊かな腎部をもつ女性に尊重されたので、これらの絵はそうしたヒップの美を誇張するために描かれたのだとした。また、これと逆に、栄養を豊富にとる貴婦人たちは、ふとるのを防ぐため、つまり美容上の目的から、ひんぱんに浣腸をおこ

五ミリ厚位のステンレス板で作った両端が角になっている、ちようど六角形をおしつぶしたような形の箱が隣室から運びこまれる。

これがクラブの棺だ。三人がかりで小夜子の体を棺に納め壁につけたコックにビニール製のホースをつないで、栓をあけ液体を中に流し込む。これがさつき会長がいった永遠に最期の姿のままで死体が保存される薬品である。棺一ぱいに液体が入ると、コックをしめ同じくステンレス製の蓋をのせる。すり合せがよく出来ていてびったりしまる。今度は電孤熔接機を持ち出して、蓋と身の熔接にかか

る。これは大仕事で、大分時間もかかったが蓋はもう絶対に開くことはないであろう。蓋の上にはY三四号と刻んだ径十センチ位の名札がとりつけられる。露木小夜子はもう

永遠に地上から消えて、物体Y三四号となつてしまったのだ。

会長が窓の下に作りつけになっている小箱を開けて中のハンドルを引くと驚くべきことには窓の下壁の一部が観音開きになり、川の臭気がふんとおってきた。そのすぐ下は川で機帆船が一隻もやってある。船頭がふなべりに出てだまって歩み板をこちらにさし出す。中から三人がかりでこの奇妙な鉄の箱を歩み板にのせ船に積み込んだ。

これで終りだ。明日、東京湾に出た機帆船は海底に鉄箱を沈めるであろう。その中で小夜子は、いやY三四号は世界の終りの日まで悦虐の夢をいだいたまま眠り続けることであろう。

(おわり)

なったのだという説もある。

以前、こうした銅版画を収めた風俗史の書物を所有していたが、焼失したのでお目にかけれないのが残念である。ところで、文学のほうで浣腸を扱ったのはきわめて少ない。ここに紹介する『跪いた勲爵士』というコントは、大山定一・谷友幸両氏訳編、『恋愛学講座』（昭和二十四年、世界文学社）に収められている。作者は不明の由であるが、前に述べた十八世紀の女性風俗と共通しているこ

とは明らかである。

グラッセ夫人は二十二才の美しい未亡人。金持の老人と結婚して五年たって、夫と死別し、莫大な遺産を相続したばかり。彼女の美貌と財産をめあてに結婚しようとする男が山のように集まる。ダルジャンクール勲爵士もそのひとりである。機会のあるごとに彼女に近づこうとするが、さっぱり効果がない。ついに、じか談判を決意して夫人の家に乗りこ

む。ところが、ふしぎな場面に出くわす。ここが問題のシーンである。

女の住居に着いてみると、奇妙なことに入口の扉が開け放してあった。そのみか、人らしい影も見当

らぬ。これでは来訪を奥へ通じてもらおうわけにもゆくまい。やむをえず、ダルジャンクルはそのまま真直ぐ内へはいった。そうして部屋をつぎつぎと通り抜けてゆくうちに、ついに奥まった寝室で当の美女が異様なすがたでいるところへ出くわしたのだった。

つまり侍女が女主人のために身体を軽くする薬剤を調製し終えたところらしく、女主人の寝台わきに据えた椅子のうえには、部屋のなかをほのかに照らしているローソクとならんで、それに使う道具が置いてあった。寝帳も半分ほど撥ねあげられて、若後家が顔を壁のほうに向け、緩下剤を入れるまぎわのかっこうのまま、夜の臥床にあらわに横たわっていた。あいにくと侍女のほうは洗濯したての肌着を持ってくることを忘れたので、屋根裏の物置部屋へ急ぎ引返したところである。

『跪いた勲爵士』の物語

—文学作品に現われた浣腸—

菅 道 夫

眼のまえに現われたこの思いがけない光景にはひとかたならずたまげたが、この勲爵士うつくしい寡婦の御役に立つこうした好機をけつして逸したりはしなかった。眼に映るなまめかしい情景にまどわされずに、そつと道具を手を取った。うやうやしく、いとしい婦人の臀部のまえで片ひざをつき、手とりばやく器用に侍女の役目を果たすと、すぐ帳を元どおりにおろし、道具を椅子のうえに返して物もいわずにすばやく部屋を立去った。侍女が息せききつて取りに行つた肌着を持ってきたとき、かれのほうはもう階段を半分ばかりも下りていたのである。侍女は寝室に駆けこみながら、女主人に向つて遠くからこう叫んでいた。「お待ちさせて済みません。丸出しのままです。冷たくなつたので、どうも心

配です」——「たしかにおまえはどうかしているよ」と夫人が答えた、「二度もつずけてやれというのかい？」すでに侍女のほうは道具を頬に当ててみて、冷たくからっぽになっているのに気づき、これはきつと女主人が自分でなさつたにちがいないと、かんぐつていた。

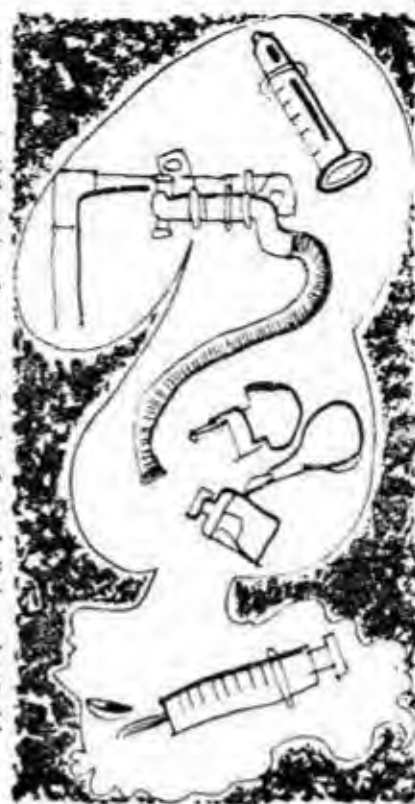
こうして、女主人と侍女とが云いあいをする。しかし、侍女がやったのでもなく、未亡人が自分でやったのでもないことが明らかになると、二人とも気味が悪くなる。そこで、二日まえに死んだ向いの薬屋が、あの世から女主人の御用命を果すために、亡霊となつて出てきたのにちがいないということに、おちついた。この話を伝えきいた当のダルジャンクル青年は、「死んだ薬屋の主人より」という名目で、恋心を打ちあげた。美しい未亡人は、これを本当と信じこみ、あげくは、自分に浣腸してくれた薬屋の主人を憎からず思ひはじめた。その後、青年はいろんな手を用いて、「薬屋の主人の亡霊」というのが実は自分であることを、すこしずつ夫人に悟らせることに成功した。そして、ついに二人は結婚するという段取りになる。

(終り)

△ 告 白 ▽

アヌス自虐体験記

保 月 定 吉



奇クを読んでいるうちに私も一度自分の体験した事柄を文章に綴ってみたいと思うようになりました。しかし、元々、小学校を卒業しただけの私には文字や筆法もわかりません。ましてや雑誌に投稿しようなどとは夢にも考えて居りませんでした。唯私は自分の生々しい体験をとにかく文章にして、自分の手元に保存しておこうと思って綴ってみたのです。だが、書き上げてみると、手元に置くだけでは何となく物足りなくなってきました。誰かに見てもらいたい欲望が頭を持ち上げてくるのです。と、いっても、自分の肉体的な秘密が赤裸々に綴られたこの告白文を誰彼な

しに見せるわけにはゆきません。やはりこうした事に理解のある奇クを選ばざるを得ませんでした。しかし、送って見ても笑いのものにされるだけかもしれません。やはり止めておこうかとも思いますが、思いきって送稿致します。若しこんなものでも奇ク誌上に活字となって飾られることがあれば、それこそ望外の喜びです。

私が初めてアヌスに対する自虐の喜びを知ったのは十六才の事でした。

当時、私は小学校卒業と共に、或る酒屋へ丁稚小僧にやらされていました。場所は大阪の松島遊廓の近くで日暮時ともなれば、沢山の遊客達が廓に入る前のひとときを、安上りの酒屋でコップ酒をあふるのです。程よく酔も

廻った頃、きまって惚気や猥談がとび出します。こうした色街の近くでこんな雰囲気の中で酔客の相手をし、時には相槌の一つもうち乍ら酒を売って居るのですから、人より一倍早く思春期の目ざめを知ったのも当然のことだと思えます。

私の店では八の日が休日になっていました。その日、早朝より番頭さんと一緒に朝湯に参りました。脱衣場で着物を脱いでいる所へ若い女の人がこちらへやってくるではありませんか。あら男湯を女湯と間違えて入ってきたのか、と思って見ていると、その婦人は私の目の前で平然として着物を脱ぎかけるのです。私はあきれて見つめていました。湯文字一枚となった時、さすがに気がひけて、そ

れ以上正視できませんでした。私が後向きになつて猿又を脱いでいる時、その婦人は私の横を通つて、さっさと男湯へ入って行くのです。私は自分が間違つて女湯へ来ているのかと思ひ直して、あたりを見廻した程でした。番頭さんも居りますし、確かに男湯に違いありません。中にも二人程男の人が入浴して居ります。私もそれでやっと安心して入ってゆきました。

私は目はいきおい先程の婦人を探して居りました。ところがどうでしょう。物腰といひ、顔かたちお化粧の仕方、髪に至るまで、みんな完全な女であるのに、身体の方は男ではありませんか。それに驚いたことに、言葉づかいまで女性そのまななのです。私はあきれ果てて湯に浸るのも忘れて、ぼんやり眺めていますと、番頭さんが私の手を引き、耳元で「あれがオカマと云うんだ」と囁やきました。まだ小学校を出たばかり、しかも田舎からぼつと出の私には、天地がひっくり返つたやうで何のことかわからず「なに、なに？」と何度も聞き返えしましたが、後は何も云わず番頭さんは、せつせと身体を洗つております。帰ってから番頭さんが笑いながら、いろいろと説明してくれました。そんな変つた人がこの世の中に居るのか。私は不思議でなりませんでした。番頭さんは最後に、「定吉さんも可愛い顔をしているから、ぼ

んやりして居るとオカマの親分にさらわれて、あんなオトコオナにされてしまうぞ」とおどかされました。けれども私は不思議と恐ろしいとは思いませんでした。それどころか、なんとなく、そんな風にされてみたいやうな気持ちにさえなるのです。若し、本当に人買いにさらわれて手足を縛られ、そんなことを無理に強制させられたら、どんなにだらうか。私はいろいろと空想を描きます。さらわれる。目かくし、倉庫の中、ざらざらとしたコンクリートの床。

手足を縛られている。いつの間にか美しい女の着物を着せられている。着物はお店のお嬢さんのものだ。白粉のにおい、お化粧、コツコツという靴の音、背後に迫る人の気配……等々。

私の空想は、夜、人が寝静つた頃は勿論のこと、日中でも、仕事の合間など数かぎりなくひろがってゆくのです。こんな空想に耽つていけるうちに、いつしか私はアヌスに対する自虐の喜びを知るようになっていました。

(編集部註、自虐の方法について相当詳細に記述がありました。公開不相当と認めましたので約五十字に亘つて削除しました) ああ、此の広い世の中に、此の広い大阪、これだけの人の動きの中に、このような楽しみを持つて歩いている人間があるでしょう。自転車に乗つて走る時も、お得意廻りに歩く時

も、思わず口笛が鳴り、唄がとび出してくる程です。

しかし、慣れてくるに従つて私はだんだんこれも物足りなくなつてきました。更に、もっとも強い刺激を味つてみたい欲望にかられます。今のやうに奇クという本があれば、私は浣腸という自分の欲望を直ちに満してくる方法を簡単に知る事が出来たでしょう。が、当時は、そういった本もなく、長い間、物足りなく思ひながらも、此の方法で我慢していたのですが、遂に私は商売用の道具を利用して或る種の浣腸法を発見したのです。

現在、私は田舎に引込んでおりますので、都会の方の酒商の実体は知りませんが、当時は小売店でも、其の酒店の登録商標に依る酒を発売しておりました。灘や伏見で二級品三級品の酒を樽詰で買い取り、いろいろと調査して、その店独特の味を出す酒を登録商標のマークによつて売出すのです。従つて瓶詰にする必要上、相当数の瓶を毎日洗わねばなりません。この瓶洗いが私の仕事のひとつでした。酒の倉庫は店から一丁程離れた所がありました。更に瓶洗場は倉庫の一番奥で、正面から右へ折れた片隅で酒樽の蔭になっていて入口から覗いても絶対に見えない所です。七月の末の暑い盛りです。私は猿又一つになつて、ずらりと並んだ一升瓶を懸命に洗っていました。人気のない絶好の秘密境、又ぞ

る例の悪魔がささやき初めたのです。広い倉庫の中は私たった一人きり、そして、この瓶洗場は、どこからも孤立した秘密の場所です。私は悪魔のささやきが次第にざわめきと成って、自分の耳に迫ってくるのを覚えしました。水に濡れたまま林立する瓶の口が、私には、まるでそれがアヌスのように見えるのでした。水道のカランに取付けられたゴムホースは凄惨な勢で口から水を迸らしています。私はネジを捻って少し水勢を弱めて期待におのきなながら……

(編集部註、不本意ですが、以下数十字に亘って削除することをお許し下さい)……

私はこれが後日、出戻りの勝気な、そして美しいお店のお嬢さんの弄り者にされる元になろうとは、夢にも知りませんでした。

店のお嬢さんはその時二十五才でした。二十才の時、一度結婚されたのですが、先方の男が氣にいらず帰って来られたのだそうです。なにしろ美しいお嬢さんの事でしたから、離婚されてからも是非嫁にと望まれる方もあったようですが、旦那様や奥さんがいくらすすめても皆断って、それ以来、ずっとお店の方を見ていられました。旦那様も奥さんもやさしい良い方で、私たちにも親切にしてくださいましたが、此のお嬢さんだけは番頭さんに至るまでピリピリしている程厳しいのです。娘さんがそのようにしっかきしているの

で酒屋の方は、ゆくゆくはお嬢さんに譲られるつもりらしく、一人の息子さんは写真が好きで別に市岡の方でカメラ店を開いてずっとそちらで寝泊りしていましたから、酒店の方はお嬢さん任せになっていました。

叱られるのは使用人に落度のある時ばかりです。止むを得ぬというものの、旦那様なら笑ってすまされるような些細な事でも、お嬢さんだったら、きついお小言なのです。奉公人達の陰口では出戻り娘と思って馬鹿にされると、殊更威張っているのだということでした。ところが、或る事件から、この氣の強いお嬢さんが、私にだけすっかり頭が上らなくなってしまったのです。

それは或る日の事で、近所の子供が紙鳶上げをして遊んでいましたが、その紙鳶がお店の大屋根の樋の受金に引っかかって取れなくなりました。丁度、私が店先の掃除をしていた時でしたので、「取ってあげよう」と、お店の横に屋根すれすれに電柱があり、トランスの上っている電柱で下からずっと足掛がついていますので、その電柱を伝って庇の屋根へ行つてゆきました。鳶の引っかかった樋の方へ庇を腹這いになって伝いながらお嬢さんの部屋の前へ来て何の気なし、ひよいと首をあげた私は、思わず釘付けになってしまいました。二階はお嬢さんの居間になっていたのですが、表側の窓はその向い側が土蔵

になっていて何処からも覗くことが出来ないようになっていたのです。だから、その窓を人が覗くなどとはお嬢さんは夢にも考えなかったでしょう。其処で私は思わぬ女神を拝ましてもらったのです。(編集部註、以下数十字削除します)……出戻りとはいえず上流家庭のお嬢さんなのです。私は我を忘れて見つめておりました。しかし折角のこの夢のような楽しい一ときも、下からの子供の声に惜しくも破られました。

「兄ちゃん、早よう取ってえナ」

子供達のこの声にお嬢さんは、ひよいとこちらを向かれ、覗いている私の視線とばったり会ってしまいました。「あッ」その時のお嬢さんの驚きようは如何ばかりでしょうか。その場の着物を掴かむより早く、隣の部屋へ駆け込み、ピシヤッと障子が閉められました。たとえ嫌な夫にしろ、一旦夫婦の契りを結び男の身体を知ったお嬢さんとしては空気に耐えられなかったのでしょう。然し、私にとっては思わぬ目の正月はしたもの、後でどんな叱責をされるかと思うと恐ろしくて落着いていることが出来ませんでした。お店の酒を酒温器に入れるや一気にぐっと飲み干しました。

意を決してお嬢さんの部屋へ入ってゆきました。折檻される前に暇をとろうと思ったのです。しかし、間もなく私は心も晴れ

として降りて来ました。あんなしおらしいお嬢さんの姿を見るのは初めてでした。

「定吉とん、あんな恥しい姿を見せて、もう顔合わされへんわ、でも定吉とん、お願い。誰にも云わんとおいて、この通り頼むさかい」

お嬢さんは私の手を取って、更に畳に手をつかれるのです。私は只呆然として黙っておりました。激しい叱責を加えられた上、直ちに出てゆけと云われる事と思っていたのが、余りにも意外なお嬢さんの言葉にどうしていいのかわからなかったのです。お嬢さんは、私が黙ったままなので困り果てたような顔をしておられました。つと立ち上って机の抽出から五円札を一枚掴みだし、黙って私の手に握らせました。

「これで何か食べて、今日はもう休んでもいいから好きな映画でも見てきいな。その代り本当に誰にも云わんといてや」

と云ってじっと私の目を見つめるのです。

私は思わず目を伏せて、こっくりとうなづきました。その時、私の給料は住込で一カ月三円でしたから五円といえば、私にとっては大金でした。それからというものは、私は他の奉公人達と違ってお嬢さんから特別に扱われるようになりました。何も知らぬ先輩や同僚は「定吉とんはお嬢さんの気に入らやから得や」と羨やんでいました。又、特に云い難いことは私に押しつけて私からお嬢さんに云わ

せるようになりました。又、自由にお嬢さんの部屋へ出入り出来るのは私だけでした。私はそれを良いことにして、かねてからの願望である女性への憧れを、お嬢さんの留守を狙って楽しみました。衣紋にかけてあるお嬢さんの体臭をそのままに包んだ派手な着物を身につけて一人悦に入りました。

時には外出の時、肌着類一切を着換えて出られることがありました。パンティやブラジャー、足袋に至るまで乱れ箱の中に脱ぎすててあります。そんな時、下着の中に顔を埋めて私はお嬢さんの移り香を鼻一ぱいに嗅ぎ廻るのでした。最後にはそれら総てを身につけて、しやなりしやなりと室内を歩き廻ります。勿論、かって私がこの幸運を掴むきっかけとなった窓にカーテンを引くことを忘れません。白粉もつけてお化粧してみたい欲望にかられますが、白粉を落すために階下へ降りねばならず、この念願だけは果すことが出来ませんでした。

其の後も、公休日等には五十銭一円と小遣を下さいますので、私も気の毒に思うくらいでした。お酒はお手のもので、飲みましたが（それも集金や配達などで余程疲れた時などほんの一口飲む位でした）貰は全然吸いませんし、公休日といっても映画を見て、うどんを食べるのが関の山でしたので五十銭もあれば一日中楽しく遊べたものです。それに公休

日は店としての小遣を五十銭貰いますので、お嬢さんから頂いた分は、そのまま余ってしまふことになりました。そんなわけで小遣も余り要しませんので（今から考えますと、全く欲のないことですが）お嬢さんの部屋で二人っきりになった時、

「あんな事、気にされなくともよろしおまんがナ、若しワテがそんな事云いふらしたかて、誰も外に見た者があるわけやなし、叱られた腹いせに、ありもせんこと云うとる位にしか取りまへんがナ」

と云って慰めたものでした。これが本当はいけなかったのかもしれない。或は逆にこれが私にとっては幸福だったのかもしれない。お嬢さんもだんだんそんな気持ちになってゆかれたのはたしかです。それが証拠に、しばらくしてから、お嬢さんの部屋へ立入る事は禁ぜられてしまいました。思えば馬鹿な事を云ったものです。折角の女装の楽しみを、これですっかり棒にふってしまったのです。もうお嬢さんの美しい身体を包んだ着物も、かくわしい体臭にむせる下着も、身につけるどころか手にとって眺める事さえも出来ないのです。

いきおい私は、自虐という唯一の遊戯に突進してゆかざるを得ませんでした。

今迄だったら瓶詰の前日になるまで貯めておいて洗わなかった空瓶を、二十本でも三十

本でも貯ると、「瓶洗いに
行ってきます」と寸暇をさ
いて倉庫へ出かけました。
私一人の秘密である唯一つ
の遊戯のために。

けれども以前のように長
い時間をそれに費すことは
出来ません。と云うのは、
今迄は三百本から五百本位
の空瓶を洗うのですから、
三十分位遊戯のために時間
をさいても、少し馬力をか
けて洗えば、すぐ取返えせ
たのですが、二十本や三十
分の空瓶では、とても、そ
んな時間を捻出する事は出
来ません。そこで初めて私
は遊戯のために少しばかり
の元入れをしました。

三ツ又のパイプと瓦斯に
使うより一寸太目位のゴム
ホースを十尺程買ってきま

した。三ツ又の一方をカランに取付け、一方
に今まで使っていたゴムホースを取付けま
す。これは瓶洗用です。残りの一方に買っ
てきたホースを取付けます。(編集部註、約百
字省略します)

私のこんな日々を誰知るまいと思っていた



のに、私はとんでもない思い違いをして居た
のです。此の倉庫は、夜間こそ錠を落してあ
りますが、元々空瓶や空樽が入れてあるだけ
の倉庫ですので昼間は鍵ははずしたままにな
っているのです。入口の戸が開けてあれば、
私もよく注意して人が居るかどうかが調べてみ

るのですが、いつも戸が閉っているので何の
気もなく何時でも直ちに悪魔の遊戯に耽って
いたのですが、或る日、お嬢さんが倉庫の中
に入って居られたのです。(これは私の想像
ですが、或はお嬢さんかもしれないかな事を
行う為ではなかったかと思われます。そこへ

私が入って行ったので、あわてて便所の中へかくられたものではないかと)この瓶洗場の横に便所があるのですが、その便所にまで気がつかなかったのは、私の大失敗でした。

しかも軽率なことに何回も見られ、御丁寧に写真までとられていたのです。最初は偶然発見されたのですが、二度目はカメラまで用意して私が何にも知らず「瓶洗いに行ってください」と云うと「御苦労さん」と答えておき、すぐ裏口から先廻りして便所の中にかくれて居られたのです。

その頃、私は再び悪魔の囁やきに誘われて花屋さんから花を一束買っていそいそと倉庫へ向いました。その日もお嬢さんが先廻りして便所の窓から見られているのも知らずに。

(編集部註、以下数十字省略します)

冷たいコンクリートの洗場に両膝を揃え、しかも憧れさえ抱く美しい異性の前にかしこまったまま、私は動く事も出来ず目を伏せて首をたれ一言もなく、只、頭のどこかで「しまった、しまった」と後悔の思いが渦まいているばかりでした。こんな惨じめな私の前でお嬢さんは、いつまでも黙って見つめているのです。私はおずおずと顔を上げ、お嬢さんの顔を盗み見しました。お嬢さんのあの勝気な美しい顔には、勝ち誇ったような微笑が浮かんでいます。私はいつまでも身動き出来ません。まるで見えない縄で縛られているよう

に。時も時、倉庫の入口の方で「御免下さい、御免下さい」と人の訪れる声がします。私は思わずはっとしました。いくら呼んでも返事がないので、こちらへ入ってくるらしいカラコロと下駄の音がします。お嬢さんがさっと入口の方へ走ります。

「小堀ですけど、お酒二本、今すぐ持って来て下さい。お店の方へ行くつもりだったんですけど、ここを通りかかったら戸が開いてたのですから」

女の声が聞えてきます。私はその間、急いで花束を捨て衣服をまといました。けれど、その場から出てゆく勇気などともありません。洗場に立ちすくんだままです。間もなくお嬢さんが戻って来られました。すでに衣類をまとった私の姿を見て、

「小堀さんとこへ、お酒二本持って行ついで、早よう帰ってくるんやで」

そう云い捨てて倉庫から出てゆかれしました。私はお嬢さんの後から、しおしおとお店へ帰りました。お酒二本持って小堀さんのお宅へ行く途中も又帰り途も、私にはこのように重苦しい灰色の空気に包まれた思いをした事はありません。いっその事、このままどこか遠くへ行ってしまうかと思いましたが、仕事着のままで一銭のお金も持っていないせいで、重い足を引きずって、やはり私はお店へ帰らねばなりません。それでも、大体

の方針は心の中で決めました。お店へ帰ったら直ぐ貯金通帳を持って郵便局へ行つて、多くもない貯金ながら全部引出す。その夜の中に荷物をまとめて、とにかく一旦故郷へ帰ることにしよう。両親には何と云って帰るか、それは汽車に乗ってから考えることにしよう。

が又、このようにも思いました。こんな行為を取ったのは私一人ではない。あんな美しいお嬢さんだって、かつて私に見つけられたように、あんな事をしておられるのだ。私はお嬢さんの事を一言も他人に喋らなかつた。私もあの時の事を皆に告げると云っておどかしてやろう。そうすれば相手は女性の事だから、私以上に困って私の事など全然出さないかも知れない。

こんな事になるのだったら、私もあんなに彼女の弱味につけ込んで我ままにふるまうのではなかつたと、心から後悔するのでした。今の私にはこの二つの途しかない。どちらになろうと、郵便局が閉るまでに貯金を引き出しておこう。私はこのように決心して店へ帰りました。もう既にお嬢さんは店の者にも話して笑い者になつていたのでないだろうか。お店が近づくにつれて私の心は再び動揺してきました。そつと店へ入りうかがうように人々の顔を見ました。お嬢さんは帳場に座つて、何か調べ物をしておられます。他の者

も皆忙しく立働いています。私の方などぶりむきもしません。私はほっとしました。お嬢さんは、ちらッと私の方を見たり一言も口をきかれませんか。私はすぐにも予定の行動を取りたいのですが、私の居間にあてがわれている三帖の小部屋は帳場を通らなければ行く事が出来ないのです。とてもお嬢さんの横を通る勇気が出て来ません。もじもじして居ると客が来ます。売場の一番近くに居た私は重苦しい心を抱いたまま愛想笑いを頬に浮かべて客の応待をしなければなりません。四時まで、もういくらの時間ありません。コップ酒の立吞客が来ます。私はいらいらしてききました。たまらぬこの気持を少しでもまぎらす為、私はお嬢さんの目を盗みながらコップにドクドクと酒を満して一気にぐつとあふりました。何と味気ない酒でありましょうか。もう一杯ぐつとあふります。温酒器によって温められた酒は、少しづつ私を大胆にしてくれます。あれ程重苦しかった気持がやわらぎ、立吞客に対する応待も平常と変わりなく出来るようになります。けれども、これも長くは続きませんでした。客が帰って誰も話相手がいなくなると、やはり重苦しくのしかかってくるのです。四時は、もうとくに過ぎていきます。私はたまらなくなり、つかつかと帳場へ行き、思いつめた口調で叫びました。

「お嬢さん、お願いです」

お嬢さんは、「何やいな」と云って私の顔を見つめています。帳場の近くには、政吉とんと春吉とん、それに女中のお雪どんが、レツテル張りやら包装に余念がありませんでした。私の思いつめた顔を、不思議そうに見つめました。「何や、早よう云わんかいナ」私の云おうとすることは、よくよく承知のくせに、こんな意地悪を云うのです。

その顔には、まるで猫がネズミをなぶる時のような残酷さが現れているように、私には思えました。それ以上私は言葉が出ません。黙って突っ立ったまま私の頬を涙がポロポロとしたたり落ちました。それを見るとお嬢さんは、すぐ腰をあげ、「一寸、定吉とん、倉庫へ来て」と云いすて先に店を出てゆかれるのです。私のその後へ従って、あのいまわしい倉庫、だが又一面、なつかしい楽しみの場所でもあった倉庫に入りました。

お嬢さんは瓶洗場にある空箱に腰を下されました。私は必死の思いで内密にして下さるよう頼みました。お嬢さんは一言も喋らず私一人に喋らして黙って私の顔を見ているのです。いくらお願いしても何の答もないので、さすがの私も腹が立ってききました。

「お嬢さん、こんなお願いしても皆に告げて私に恥をかかせるおつもりですか。それなら私は故郷へ帰らせて貰います。そのかわり、私もあの時の事を皆に喋ってから帰りま

す」

これが私の最後の手でした。きつと、お嬢さんも、この私の言葉で思い止ってくれると思つたのです。しかし、これが返ってお嬢さんの気持に油を注ぐことになりました。

「定吉とん、云うのなら云うてみいナ、誰もそんな事、本気にしやへんで。定吉とん、ええもん見せたるか」

こう云いながら懐から出されたのは、三枚の写真でした。私はその写真を見て、思わず恥しさのため頬が真赤にはてるのを感じました。いつの間に撮られたのか、それはあきらかに、私の例の悪魔の遊戯の写真でした。便所の中の事は全然知らなかった私は、このような写真がお嬢さんの手にあるとは、夢にも思わぬ事でした。

「下手な写真やけど、それ誰のやわかつとるやろ。云うなら云うてみいナ、わてはこれ、皆に見せたるさかい、定吉とん、国へ帰るんやったら、たつた今からでも出てゆきいナ、わては一寸もかめへんで。この写真の原版あんのやさかい、何んぼでも焼増して定吉とんの家へも送つたるし、番頭さんの家へも送つたるワ、それでもよかつたら帰りたいナ」

私は顔から血の気がひいてゆくのが、自分でもはつきりとわかりました。番頭さんというのは、私と同じ町から来ているのです。番頭さんの弟と、私は同級生であり、そんな関

奇譚クラブ旧号の在庫案内

☆復刊号の分

- 復刊第1号 (30年10月号) 二百円 (送16)
 復刊第2号 (30年11月号) 〆売切
 復刊第3号 (31年4月号) 二百円 (送8)
 復刊第4号 (31年5月号) 二百円 (送8)
 復刊第5号 (31年6月号) 二百円 (送8)
 復刊第6号 (31年7月号) 〆売切
 復刊第7号 (31年8月号) 二百円 (送8)
 復刊第8号 (31年9月号) 二百円 (送8)
 復刊第9号 (31年10月号) 二百円 (送8)
 復刊第10号 (31年12月号) 二百円 (送8)
 復刊第11号 (32年1月号) 二百円 (送8)
 復刊第12号 (32年2月号) 二百円 (送8)
 復刊第13号 (32年3月号) 二百円 (送8)

係もあつて番頭さんのお世話でこの店に奉公するようになったのです。若しこんな写真を国元へ送られたら私は一体どうなるでしょう。今後はあのなつかしい多くの同級生達に会う事は勿論、故郷へなぞ到底帰ることは出来ません。私には、もう目の先が真暗になって何の思考力さえなくなっていました。そんな私の耳元でお嬢さんのやさしい声が囁やくのでした。

「定吉とんの好きな事、わてにやらしてくれ」
 たら誰にも云わんといったげるワ」
 私は自分の聞き違いかと、思わずお嬢さんの顔を見ました。お嬢さんの顔にも恥らしいのためか、ぼつと赤らんでいました。
 私に異存がある筈はありません。たとえ、どんな目に合わされようとも、内密にさえして下さるのなら、今の私にとっては何でもないことです。(編集部註、以下約百字削除します)……この美しいお嬢さんの為ならどんな事をされてもかまわない。たとえこのま

- 復刊第14号 (32年4月号) 二百円 (送8)
 復刊第15号 (32年6月号) 二百円 (送8)
 復刊第16号 (32年7月号) 二百円 (送8)
 復刊第17号 (32年8月号) 二百円 (送8)
 復刊第18号 (32年9月号) 二百円 (送8)
 復刊第19号 (32年10月号) 二百円 (送8)

【代理部だより】

○本誌の復刊号は上記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お申込下さるようお待ちします。三冊以上まとめて御注文の節は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の本誌の旧号は殆ど売切れておりますが、只今、昭和30年2月特大号から同年5月特大号まで、若干在庫しておりますから、お申込下さい。各冊一部百四十円(送料十六円)です。右以外は全部売切で

ま殺されてもいいという気持ちにさえなってくるのでした。

そしてその晩、私はお嬢さんの部屋へ呼ばれ、十六才にして童貞を捧げさせられましたのです。私には何の後悔もありません。こんな美しいお嬢さんと一緒に暮せたら、と憧れていたのですから、私にとっては、それは実に望外の幸福でさえあったのです。

すから悪しからず御辛抱願います。

○アルバム、第一集、第二集共売切です。

○三条春彦画、「時代物責絵巻」未製本の分が若干残っておりますので、御希望の方はお申込下さい。八枚一組一揃 百五十八円(送共)です。

○代理部分譲品総目録の残部がなくなりましてので、この機会に以前の分は打切りといたします。但し特に御希望の方に限り当分の間、焼増はいたします。

○新しい目録は都合により延期となりましたので、お申込下さいました方は暫くお待ち下さい。出来上り次第お送りすることに致します。時期は只今のところ未定です。それまでは本誌に発表の目録により御注文願います。

—あらびやの奴隷市—

—泉 かよ子—

編集長様

昨夜の不思議な体験を申し上げます。いいえこの前のように被虐に憧れた私のはかない夢物語であるかも知れませんが、でも現在尚、私の手首にはうっすらと縄の痕跡すら残っておりますから、あながち夢物語とばかりは限らないのでございます。

会場に着くまで全然、予想もして居りませんでした。

女学校時代のお友達で今演劇の方に出ている良子さんが突然訪問されて長いことおしゃべりの末、何気なく土曜日の晩に演劇関係者の内輪のパーティがあるから遊びに来ないかと誘われました。私はどちらかといえば、余り賑やかなことは嫌いですが、良子さんの上手な誘い方と、それに男優のAさん達も出席するということで、(Aさんは亡き夫に面影がよく似て居り其の舞台は出来る限り観て居ります) つい出席する気になりました。

普段着のままといいますが、そこは女のことでですから最近作った白のアンサンブル装身具も出来る丈派手にしました。約束の六時に良子さんが自動車で迎えにきました。良子さんは商売柄、垢抜けのしたカクテル・ドレスです。

自動車の中で良子さんは始めて今夜のパーティの趣向を洩しました。会場は或るお金持のパトロンの別荘です。メンバーは男子十人程と婦人六、七人で全部仮面をつけるのです。それから会場の中では名前を云わないで仮称がつけられてそれで呼びあうのです。それから会場では絶対に接吻やそれ以上の動作をしてはならない。若しこの禁を破る者はその紹介者も閉出されるのです。

「何だか恐いみたい」

「大丈夫、ヨッコ、私にまかせておき」

(ヨッコというのは私の学生時代のアダ名です)

自動車は郊外の豪荘な邸に着きました。

玄関を入ると老人のボーイに奥へ案内されました。奥の間の中央のテーブルに金色の美しい仮面が置かれています。良子はそれをとって私につけました。私も真似をして良子の顔に仮面をつけました。仮面の下に良子の形のよい鼻と真紅に色どった唇が浮出るようで魅力的でした。

さっきのボーイが造花のリボンを差出します。ひとつ手にとりますとVIOLETと記してあります。良子のはLILYでした。

「今夜はあなたはバイオレットよ、妾はリリイ、もう名前を呼んでは駄目よ」

それから更に奥へ導かれますと、そこは食堂で私達が入るとそれをシオに皆がテーブルに着きました。

参加者は全部で十五人で男子十一人、女子は私達を含めて四人でした。

それからぜいたくな食事をしました。

男子はみな立派な服装の紳士で、顔はわかりませんが、四十代から五十代の人が大部分のようでした。Aさんらしい人は私の斜め向いに座っていて、ときどき私の方を眺めます。

女子は私達の外に三十代位の婦人で、立派なカクテル・ドレスに豪華なアクセサリをつけています。私は自分の貧弱な服装に恥しくて小さくなって居て、食事も余り進みませんでした。隣席の紳士「OZ」と名札をつけている人が色々優しく飲みものを奨めてくれますので、少し洋酒をいただきましたら度胸がつきました。良子は紳士二人隔てた席でおしやべりをしています。

「婦人が淋しいので今日はお友達を誘ってきたのよ。真面目な家庭のお嬢さんですから大切にあげてよ。若しバイオレットを連れて来なかったら私達三人ボッチになるところよ、本当によかったわ」

「本当よ、助かるわ、リリイ」

ROSEの札をつけた婦人が応じました。

もう一人の「HEIDI」さんもうなずきました。私一人が新入生ということで皆さんの視

線が集中し、仮面の下で真赤になりました。

デザートになって幹事役のELEPHANT氏が立上って簡単な挨拶をしました。それから今夜の遊びの趣向をきめるのに、バイオレット嬢に籤を抽いてもらいますと宣言しました。

拍手に送られて私は立上ると、命ぜられた通りテーブル中央の盛花の中から一輪抜きました。茎に白い紙片が巻きつけてあります。

それを外して扱げますと

「さあ、皆さんに聞えるよう声高く読んで下さい」

「ハイ、あらびあのおんな……」思わずハツと声をのみました。

「つづけてよんで下さい」

「あらびあの……おんな……どれいいち。」ワツという歓声と拍手が湧き上りました。

「いやねえ、おんなどれいにされるの？」

「私なんかもう売れないわよ」

婦人達はそういいながらも何か楽しそうでした。

エレファント氏にうながされて婦人は別室に入りました。

「どうなるの？ 良子」

「シイ、リリイよ私は、さあ早く仕度しまし

よう。今夜は私達は白色奴隷になるのよ。アラビアの市場で奴隷商人に売買されるの」

良子が説明をしている間にローズさんとチエリさんの二人はさっさとドレスを脱ぎ始めました。

エレファント氏から渡されたスーツケースを開きますと中から美しいコスチュームを取り出してお互に手伝ってつけあいました。

「さ、私達も早くよ、バイオレット」

良子はさっさとカクテルドレスを脱ぐと下着までとって腰には美しい縫取りのあるベルトをまとい、キラキラ光る乳当をつけました。

「背中とめてよ」

乳当を背中とめてあげると首や二の腕に美しい金色の輪を嵌めました。みる／＼うちに三人のアラビア風の美女ができあがりました。

「サア、バイオレット、早くなさいよ」

「こわいことなんかなくてよ。私達が一緒にやるんですもの」

「サア、ぬいで」

女達はサッサと私のブラウスに手をかけスカートを外しにかかります。私はちよっと身もだえして抵抗しましたが、女達の意外の強い力にあって、次々に剥がれてゆきました。

「まあ素敵なお肌ね、キレイ！」

そんな事をいい乍らぐんぐんブラジャーの
スポンジの上から乳当をされました。パンテ
イをぬがせるとすぐ小さいバンドのようなも
のを付けさせて其上から同じように可愛い縫
取のあるバンドを纏わせました。
私は恥しそうに身をすくめ乍らされるまま
にしていました。

コツコツ

扉を叩く音がきこえます。

「未だかね、ずい分永いな」

「未だよ、あけちや駄目。だって今日はニ
ールックのお嬢さんがいるんですもの、とて
も手間がかかるのよ」

「手伝おうか」

「とんでもないこと、私達で優しく着せかえ
させてあげているところよ。おとなしいお嬢
さんだから本番でも乱暴しちや駄目よ」

「早くたのむよ、あと五分、それ以上待たせ
たら侵入するよ」

「いやよ、あと十分、未だお化粧も直してな
いのよ」

女達は声をはずませ乍らお化粧を直してい
ます。私も良子に促されて鏡の一つに向って
お化粧を直しました。

真白い肌が少し上気して自分の姿をみるの
がこわいようでした。

それから数回男達の催促とやりとりがあつ

てから

「さあゆきます。皆さんあっちを向いて、見
ちや駄目よ」

チエリイさんの号令で薄いチュールを被る
と、扉をあけて一団となって広間に走り込む
なり室の隅の上にかたまつてうづくまりまし
た。

音楽が始まりました。電蓄から流れるメロ
ディです。室の薄暗い照明が次第に明るくな
りました。広い洋間の壁は厚い緞帳で窓もな
く包まれています。向うの壁際にアラビアの
ターバンを頭に巻いた半裸の男達が思ひ／＼
の姿勢で座ったり腰かけたりしています。皆
先刻の金色の仮面をつけています。

房々としたつけひげをした男——エレファ
ント氏と思います——が立上りました。芝居
がかった口上を始めます。

「全智全能のアラーの大神の御恵みと、勇武
仁愛のカリフの大王の特許によってこの奴隷
の市を開催する。凡そ奴隷にはその種類いろ
／＼あるが、本日の市に供えるものは真白く
柔かき肌と赤き唇をもつ白色女奴隷である。
世界各地の王宮深窓より連れ来りあつめた世
にも珍らしき女ども、大王様のハレムにさえ
たぐい稀な逸品揃いじや、さ、カシム、仕度
はよいか」

「ハッ、これから女奴隷どもに鎖を嵌めます
る」

「何じや、まだ鎖を嵌めてないのか。逃亡を
企ててけがでもしたらどうする。アリも手伝
って早く女どもに鎖をはめい。」

カシムとアリは奴隷商人の召使でありまし
よう。私達に近づく、いきなり私の手首を
とり鎖のついた鉄の輪を両手に嵌めました。

鎖は三〇釐程の長さがあって前で嵌められて
いますので可成り自由がきます。ローズさ
んも同様に鎖を嵌められました。チエリイさ
んと良子さんは後手にして鎖の間隔を殆んど
なしで鉄の輪を嵌められました。それから良
子さんの鎖に別の鎖をつけてそれを私の鎖に
チエリイさんの鎖に別の鎖をつけてローズさ
んをつなぎました。二人宛一組に繋がれると
今度は私の左足首に鉄の輪を嵌めて鎖でチエ
リイさんの足に繋がりました。

「立て」私達は、良子さんと私が手、私とチ
エリイさんが足、チエリイさんとローズさん
が手を鎖でつながれて四人一つながりになり
ました。

二人の男達に前後を守られて私達はゆっく
りと室内を一周しました。足の鎖がうまくさ
ばけず何度か転びそうになりました。其の都
度、私はころびそうになりました。ピシリと
音を立てて床を鞭が叩きます。



オリエンタル風の音楽がつづきます。

室を一廻りするとセリ壇の下に座らされま
した。

音楽がやみました。エレファント氏の奴隷

商人が壇上に登ると、また先程のセリフを繰
返しました。

「全智全能のアラーの大神の……」

その間女達は首うなだれてじっとしていま
す。良子さんのチュールが外れて肩がまる出
しになっていますが後手に輪を嵌められてい

るので直すことが出来ません。
私はチュールをかけ直してやり
ました。ローズさんはチエリイ
さんが足を鎖で引張られて痛が
るのを、座り直させてやりまし
た。その外は皆じつとうつむい
ていました。

「サア、では口上は此位にして
本物を御目にかける。よく見て
おくれ。」

奴隷商人ハッサンが手下のカ
シムとアリに目くぼせしますと
先ず最初にローズさんがチエリ
イさんから解き外されて——両
手首の鎖はそのまま——カシ
ムとアリに両腕をかかえるよう
にして壇上にのせられました。

「さあ、これは西の国の百万長
者ダラーのひとり娘じや、百万
長者の娘がどうして女奴隷市場
で売られたか。大王様の特許を
受けたわしの手に一たんかった以上は金で買
戻した上で大王様の特別の命令、奴隷解放の
許可がなければ再び自由の身にはなれないの
じや」

壇上のローズさんは両手で顔を覆うと身も
世もなく泣き伏しました。

「女を立たせい。顔をよく一同にみてもらうのじゃ。」

カシムとアリは無言でローズさんを引き起しますと両腕をかかえます。ハッサン——エルフアント氏の役名です——はローズさんの頸に手をかけて顔をあげさせます。肩で泣いているローズさんの演技は中々素晴らしいものでした。見物の男達から嘆声と口笛がひびきます。

「サアいくらいくら」

「金貨五十枚」

「金貨七十枚」

「金貨五十枚と酒五十樽」

「金貨七十枚とラクダ一頭」

男達は思い思いに値をつけて、せりあいます。それは楽しそうで、壇のきわまで立寄って仔細に身体を眺めたり、色々の物をかけたりにしてしばらくたのしんだ末漸く、金貨百二十枚と酒七十樽と肥えたラクダ三頭でクロコダイル氏が落札しました。

クロコダイル氏は壇上に上るとローズさんの腰に太い鉄の輪を嵌めて錠をかけました。鉄の輪には鎖がついていて鎖の先端はクロコ氏の帯紐につながっています。クロコ氏はアリから鞭をとると激しく壇上を叩きました。その勢にローズさんが倒れました。クロコ

氏はローズさんを抱き起こすと金の面の上に接吻しました。これが女奴隷落札のマナーなのです。

其の時は知りませんでした。あとで聞くと金貨百二十枚というのは現金で支払う会費で、酒は飲み物、駱駝等は食物をある量提供するのだそうです。

女奴隷を落札した人は自分のとなりに座らせるだけで、別に触ったり何かはしないことになっています。

次はチエリイさんでした。

チエリイさんは後手に縛られたままで壇上に立たされました。

「さあ次は東の国の舞姫じゃ、この美しい肢体にあこがれて何百何千の若者が身をあやまったり、その恨み、その報い、今は鎖につながれて女奴隷市の壇上に立つのじゃ、さあ、この女を買取って、何百何千の若者の恨みを晴らす人はいか」

チエリイさんは身をもんであばれ出しました。

「強情な女だ、柱につなげ」

カリムとアリはチエリイさんの後手を壇の柱にくくりつけました。チエリイさんはせつなそうに身をもだえました。男達の嘆声、口笛。

「金貨五十枚」

「金貨五十枚と絹十巻」

「金貨五十五枚と象牙一本」

また男達の楽しいセリ市が始まりました。結局レオバード氏が、金貨百二十枚と絹二十巻と象牙五本で落札しました。

レオバード氏は黒い皮手袋を用意して居りカリム達に手伝わせて革手袋をチエリイさんの手にはめさせ、両手を前にして其の上から手錠を嵌めました。

激しい鞭打ち、嫌がるチエリイさんを抱きしめて仮面に接吻、ヤンヤの拍手がおこりました。

三番目は良子さんのリリイでした。

良子さんも両手を鎖に繋がれたまま壇上にあげられました。

「両手はちゃんと動くのか？」

という野次がかかりました。

「何を言いなさる。このハッサンの売る女奴隷に不具者や病人があるうか。疑うなら御目につけよう。」

と叫ぶと彼女の両手首を解き放しました。突然身体が自由になった彼女はヒラリと壇から飛び降りて逃げ出します。

「逃がすな、それつかまえろ。」

男達は総立ちになって良子さんを追駆けま

すが、それは真剣なものでなく、じやれるように彼女がスルリ／＼と男達の手の下をくぐりぬけ腕をつかまれてもすぐにふりほどきます。

動かないのは女奴隷を買った二人だけでこの人達は夫々の買物が逃げないようにしっかりとおさえ乍ら此の追かけっこを楽しそうに眺めていました。

いい加減逃げまわった末、良子さんは力つきたという風にバツタリ倒れました。男達によつてたかつて手取り足取り壇上にかつきあげると、ハッサンは彼女の首に鎖をつけて犬のように柱につながしました。良子さんは壇上に倒れ伏して美しい頸や背中——せまい乳当の紐が肌に喰込んでいます——を見せて泣いています。

「余計なことをいうからとんだ大手数じや、わかったか、手も足も牝鹿のように元氣であらうがな。これは北の国の貴族の娘じや、後宮に飼いならせば、こんなたのしい女はないぞ」

「金貨五十枚」

「金貨五十枚と真珠二十粒」

せりは金貨百二十枚と酒十樽と絨壇五枚でキヤメル氏が落札しました。

キヤメル氏は今の逃亡でこりたともいう

のでしょうか、細くて長い絹紐で肩から腰までぐるぐるまきに縛りあげました。良子さんは今度は素直に縛られキヤメル氏に抱かれて仮面に接吻され、そのまま縄尻を引かれて壇をおりました。

最後は私の番です。先程からの次々の昂奮の連続で私はすっかり上気して息をはずませ手首にかけられた鎖を握りしめていました。

「さあ、これで三人売れた。あと一人じや、之は又とっておきの逸物。皆さんが見るのが今日初めて香くわしい乙女、南の国の姫じやさあ、姫をここへひきずりあげい。」

私はカリムとアリに両腕を支えられて立上り壇上に引立てられました。私とチエリイさんをつないでいた足の鎖はチエリイさんを解いたままなので、私の片足について居る鎖は歩きたびにガチャ／＼と音をたてます。

私は壇の前方に立たされました。男達の目が一せいに私の肩や腰や足や手首等に注がれてその視線が痛いようです。若し金の仮面をつけていなければ私はとても、そのまま立っていられたかったです。

私は恥しように両手で顔をおおいました。手首の鎖が重くゆれます。

「どうじや、姫の此美しい足」

私は顔を覆っていた手を離して、いそいで

膝頭のあたりを押えます。

「どうじや、此のふくよかな胸は？」

私はあわてて乳当を抑えます。

「どうじや、此のかわいらしい唇」

私は又いそいで顔をおおいます。ハッサンの声につれて身体の各部を両手でかくすむなしい恥じらいの仕草に絶讃がわきました。他の人達のように壇上で手荒いことをされない私はただすくんでいるだけでは興が薄いので「金貨五十枚」の声がかかると同時に恐怖のあまり失心して倒れました。皆さんは本当に氣を失ったのかと、驚いたようですが、エレファント氏のハッサンは流石によく見抜いて、軽く人を制してセリを続け、結局。

「金貨百五十枚と駱駝三頭と香料一樽と絹十巻！」

で落札したのはライオン氏でした。ライオン氏とタイガー氏——俳優A氏——は激しくせりあいましたが、ライオン氏が勝ちました。他の三人より私の値段が高かったのは、其の日の新人にお愛想して下さったのですがとても嬉しうございました。

ライオン氏は氣を失って倒れている私を抱き起すと両手の鎖を外し、其の代りに金色の細い鎖で両手を前に縛って下さいました。

今度は鎖の間隔がせまいので前のように自由がききません。激しい床に対する鞭打ち。仮面に接吻。ライオン氏に助けられて壇を下

りようとするはまだ片足の鎖が引きずられま
す。アリが近よって足の鎖を外してくれまし
た。ライオン氏に連れられてやつのことで
室の一隅に座りました。

両手を絹紐で縛られた良子さんが小声で
「素敵よ」

とほめてくれました。

「アラーの大神の恩恵と大王の特許による女
奴隷のせり市は終わった。幸運にも女奴隷を買
取った客人達よ、先ず今日の買物を大神の壇
に捧げて大神の恵みに感謝し、各々の館に連
れゆかれい。女奴隷に鎖と鞭を忘れるな。」
厳かに宣告してハッサンと二人の手下は一
隅に退きました。

第一にクロコタイル氏と三人の男がローズ
さんを担ぎあげました。ローズさんは腰に太
い鉄の輪をはめられている丈で手は縛られて
いません。背すじをびんと延ばして、高々と
男達に背中、腰、足を担がれ、腰から下った
鎖をクロコ氏が保持して会場をゆっくり一周
して控室に消えました。

次はレオパード氏が三人の男とチエリイ
さんを担ぎあげました。チエリイさんは革手
袋の上から縛られた手を頭の先にぐんとつき
出し、ローズさんと同じように人形のように

身動きもせず担いでゆかれました。

三番目の良子さんのリリイは絹紐でぐるぐ
る巻に縛られています。これを其儘、丸太で
も担ぐように担ぎあげて会場をゆるく一周し
て別室に連れてゆきました。

買主以外の男達はすぐ戻ってきて次の運搬
に参加します。

最後は私です。男達三人で手をつないで馬
になりました。ライオン氏達が私を抱いて其
上にまたがらせました。金の鎖で両手を縛ら
れたままです。そうしてゆっくり会場をひと
まわりすると別室に連れてゆかれました。

別室ではクロコ氏達が各自の女奴隷の縛し
めを外していました。

ライオン氏も私の手首の金の鎖を外してく
れました。そして手の甲に接吻すると、

「失礼しました」

と挨拶して去りました。私はぐったりして
コスチュームのままで長椅子によりかかって
いました。

「どう？面白かった？でもかよ子素晴し
い演技ね。驚いちゃった。いつ覚えたの？」

良子さんが声をかけましたが、返事するの
も物憂くただじつと微笑しました。

良子さんが、葡萄酒を一パイもってきてく
れました。グツとのみほして一言、

「良子、ひどい人。」

でも、目は感激で燃えていました。

× × × × ×

入浴をした上で良子さんに送られて帰宅し
たのは十九時すぎでした。今日の演技賞だと
いって化粧品セットと上等のストッキング
をおいて帰りました。

私はその品々を枕許に置いていつ迄も眠れ
ませんでした。

いけないかよ子。いけない良子。チエリイ
さんやローズさんはどこの方でしょう。そし
て、あの猛獣の名前の紳士達、編集長様。あ
なた、あの中に交っていらっしやったのでは
ありません？ライオン氏？クロコタイル
氏？キヤメル氏？

— 完 —

（お断り）雑誌の購入や分譲品の申込或
は編集者への面会などにて直接発行所を
訪問される方がありますが、理由の如何
を問わず固くお断りいたします。尚本誌
では文通の幹旋や投稿者の住所をお知ら
せする事などは一切致しておりませんか
ら左様御承知願います。返信料封入の御
照会に対しては回答出来るものだけ御返
事することに致しております。（係）

△ 現代責風景 △

不良グループの私刑

本 田 由 郎

小雨がしとくと降り始め、路面電車のレールが青白い光を投げていた。政子が初めてあの男に会った日は、このような小雨のそぼ降る夜だった。政子は比較的恵まれた家庭に生れた一人娘で、豊かな少女時代を過ごした。少女時代といっても、政子は現在十八才になったばかりだから、今でも少女と云えないこともないのだが、十八才の早春に、会社の重役をしていた父がぼっくりと死亡したことから、彼女の不幸は始まったのだ。政子の父と母は良く世間の金満家に有り勝ちな、年令が親子程の開きがあった。母は画に描いたような美人で、父はこの美貌に惚れて結婚したのだった。母はいつでも若作りの姿を整えていたので、政子と並んで歩くと姉妹かと思われ位だった。この母が、父が死亡して四十五

日も経つか経たないうちに、若い男を家の中に連れ込むようになった。父の生きている時でも、つまらぬ噂が立ち余り身持のよい方はなかった。しかし父のいなくなった現在、平然として若い男を家へ泊めるのであった。金持の未亡人、その上、目も覚める程の美貌の持主とあっては、正に女王蜂のような存在だった。そして色々な若い男が出入するようになったことが、政子の潔癖な心を痛ませずには居られなかった。母があのような不倫な生活をするのなら桃色グループに入って母を困らせてやろうと思った。政子は同じ学校の不良グループの学友に、適当なグループに紹介してくれるように云った。

政子は小雨の降る中を、傘もささずに指定された場所に出かけた。そこには、学生服に

○大の大きなバックルのついた皮帯を締めた男が待っていた。

「貴女ですか、私達の仲間に入りたいと云う人は？」

その男は政子に近づき乍ら云った。政子は相当の覚悟をして来たのだが、正面切つて男に問われると返事に困ってしまった。

「K学園のTさんから話のあった人は貴女なのでしょう？」

「えーそうです」

政子は二回目の男の声で、やっと返事をすることが出来た。

「そうですか、それでは私と御一緒に来て下さい」

男はそれだけ云うと、政子など全く無視したような身振りで街の中を歩き出した。政子は仕方なく男の後に従って歩き出した。先刻より降り続く小雨は、煙るように二人の背に降りそそいだ。それから三十分近くも歩いただろうか、街の燈が遠くに見える場末に来てしまった。この街には政子は永い間、住んでいるのだが、こんな処にこうした建物があることなどは知らなかった。終戦後、廃校になっている小学校の跡である。この小学校跡の地下に、大きな防空壕がそのままになっているのだ。

「さあ、この中ですよ」

男は政子にこう云った。しかし政子は、ど

のようなが自分が自分の身の上に待っているのかと想像すると、身をすくめるのだった。

「さあ、早く中に入らんかい。今更、尻ごみすることはないだろう。早く入りな」

男は急に乱暴な口調に変わって、政子が無理矢理に地下の防空壕に連れ込んだ。防空壕の中には電灯がなく、カーバイトランプが点されていた。それを囲んで学生服とアロハの男の一団があった。

「おす」

「おす」

「お前の後にいるめすがこの間Tから話のあったすけかい」

「そうだ、こいつだよ。」

上玉だろう」

「うん、ちつといけるすけじゃねえかい」

「そうするてエと今夜は、そのすけの入団式かよ」

「そうさな、今夜は手つとり早く入団式を済ましてしまおうかい」

「よう、その前にあれをこのすけに見せてやれよ」

「そうするか、俺達の掟がどんなに厳しいか見せてやろう」

政子は手を取られて燈のとどこかない暗い処

に連れて行かれた。

「おう、上を眺めろよ」

政子は云われるままに顔を上に向けて天井を見上げると、何か黒い大きな物体が吊してあった。

「おう、暗くてこちらの御嬢様には良く見え

ねえらしいぞ」

ランプを持って来られると、政子は思わず「アッ」と驚きとも悲鳴ともつかぬ声を出した。大きな物体と思ったのは、一人の女性が縛られて吊されていたのだった。子供の頃、良く絵本で見たカチ／＼山の狸のように、両手両足を縛られて天井から吊されているのだった。顔を上げる元気もないのか、頭をだりりと下げて髪の毛が乱れて長く垂れていた。

M.K

「この女は俺達の掟を破りやがったんで、ちよつと仕置をしてやっているとこだ。もう少し痛みつけてやるから見ていなよ」

男はこう云って吊された女の下に転がっている竹の棒をとり上げ、その棒の鞭で吊された女を鞭打った。棒で打たれるたびに今まで死んだようになっていた女は、「ヒーヒー」と悲鳴を上げて苦しみ悶えた。

「おい、ただ打つだけでは面白くない。何か変ったことをしようじゃねえか」

「どうするんだい」

「まあ、俺に任しときなよ」



「どうする気だい、縄を解いちゃって」
「えへ、どうなるかは後のお楽しみだよ」
両手を解かれた女は完全に逆さ吊りとなつてしまった。全身を支える両足首は、痛ましまでに縄が食い込んでいた。政子は、この女にこれからどのような仕置が加えられるのかと思うと、余りの痛ましまさに顔を手で覆った。

「お嬢様、これから面白い処が見物出来るんですぜ」

男達は政子の手を振り払ったので、嫌でも女の痛ましい姿を見なければならなかった。逆さに吊られた女は、男達の手で着ている服

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフオトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

をズタズタに破かれて脱がされた。暗いランプの光に逆さに吊られた若い女の裸身が青白く照らされて、この世の出来事とは思われぬ無惨にも痛ましげな有様である。「ビシリビシリ」と鞭打ちが前にもまして激しく加えられた。「ウウッーウウン」呻めく女体、悶える白い肌、狂ったように乱れ波打つ黒髪。女の憐れな悲鳴が防空壕の中に響き渡った。こうして女の仕置は長々と繰り返されたのである。その後で政子の入団式が行われた。

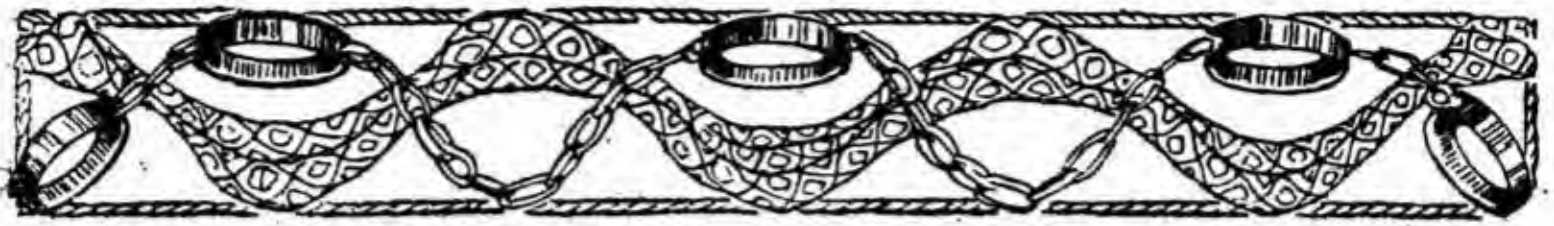
そして太股に会員の標として桜の入墨がされた。白い太股の肉に針が刺され血が噴き出す。その上に墨が入れた。出来上ると色艶をよくするために、蒸しタオルを押し当てられた。その時の痛さは身を切られるようだった。政子は歯を喰いしばって我慢していたが、余りの痛さに思わず「ウー」と声を上げてしまった。こうして政子は、このグループの正会員になったのである。このグループには政子の他に、十数人の女会員がいた。政子は会員になってから半年位たった頃、持前の美貌と気風でグループの姐御株にまでのし上っていた。しかし会員の女達からちやほやされる、むしろように気が立つのを感じた。結局、政子の生い立ちの良さが、悪の世界に染まなかったのだ。

政子は木枯の吹き荒ぶ寒い冬の或る日、グループから退団する決心をした。しかし退団

するには、このグループの掟から仕置を受けなければならなかった。政子が入団の時、見た女のように厳しい私刑を加えられるのだ。政子は服を脱がされ頭から袋をスッポリ被された。そうして男女の会員が政子の周囲をとり囲み、或る者は皮バンドで或る者は棒切れで鞭の雨を降した。視界を奪われた盲目同様の政子は、多くの鞭の下で素肌を晒さなければなかった。鞭責が終わると待ち兼ねていたように政子の体は地面に転がされた。そして足首に細引が強く巻きつけられ、その一端を天井の梁に通された。細引が男達の手で引き始められると、政子の体はズル／＼と地面を引摺り、やがて政子の両足は一寸、二寸と小刻みに地上を離れていった。そして遂に完全に梁の下に逆さ吊りとなってしまった。それから政子の身体に、この世のものとは思われぬ地獄絵さながらの責めが展開されたのであった。しかし責められている政子の白い肉体は神に捧げる殉教者のように晴々しく又、美しくもあった。

自分から望んでこの苛酷なリンチに身を晒そうとした政子であったから肌に喰い込む縄目の痛さも、肉が砕けるかと思う鞭打ちの辛さも甘んじて受ける覚悟であった。そしてその肉体的な苦痛が次第に恍惚とした境地に到達して政子は初めて自分の身体を知った。

(完)



アブ・モード・オール・スクラップ

矢 桐 重 八

トルコ風呂

——てべそを探すアメリカ人——

……流し台に坐ると、女が、私の全身を洗ってくれる。私は赤ん坊のように、からだを相手にあずけていればよかった。この作業のあと、私はいまだ一度浴槽につかって、そこを出ると、ベッドの上に腹這いになった。ここでも私は、女にからだをあずけておればよかった。女の指圧が程よく私のからだを揉みほぐしてくれる。たまに女の指の力が、強く加わる。しかし、私は、男の体面から、じっと我慢していなければならぬ。

背中が終ると、腹匍いから仰向けの姿勢になる。女の頭がまともに見られる体位である。私の腹のあたりを揉んでいた女が、ふと手を休めて、
「あらッ」
と小さな叫び声をあげた。

「どうしたの？」

私が、心もち首をおこすと、

「だって、お客さんのおへそ、とてもいいおへそなんです」

「きみ、からかっちゃいけないよ」

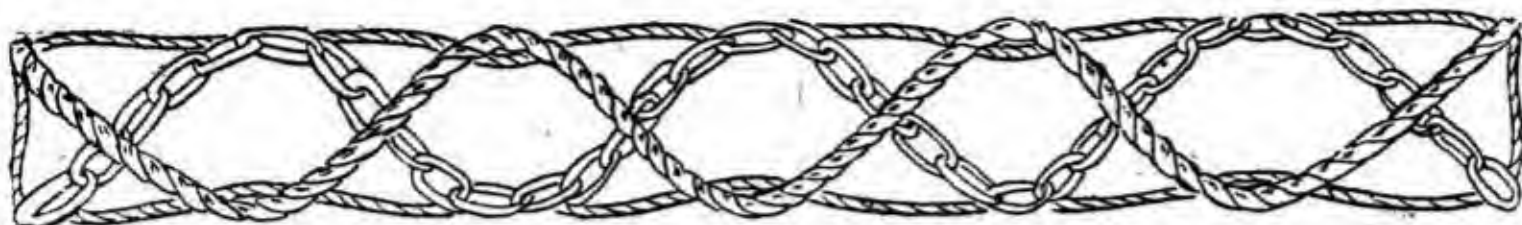
「ほんと、お客さんのような恰好のおへそは、とてもお金がたまらんですって……。人から聞いた話だけど、ほら、このところよ」云われて、私は、女に指さされた部分を覗くために、ベッドの上に起きなおった。

「どこのところ？」

「ほら」

こういって女は、私のおへその下の部分を指先きでおさえた。

「そこを土堤と云うんですって。それがせきになって、お金がたまらってわけよ。あたしのなんか、流れべそと云ってその土堤がないのよ。だから、折角入ったお金もすぐ流れてしまわうんですって」



「へえ！へそにもいろいろ種類があるんだね。君のその流れべそってのは、どんな恰好？」

私が、そっと覗きみようとすると、

「いやよ」

女はすばやく身をひいた。

「後学のため、ちよっと見せて貰いたかったんだがなア」

てれかくしに云って、私は再びベッドに横たわった。

「後学と云えば——」

やがて私の足許に身を寄せて再び私のからだを揉み始めた女が云った。いくらか親しげな調子と身のこなしであった。

「こないだ、ここへおもしろいアメリカ人が来たのよ。それが実に変っているの。日本に来たそもその目的というのがおへその研究って云うから変ってるでしょう。なんでも、こちらに進駐していた兵隊が、あちらに帰って、日本には、出べその人間がいるって話したのね。アメリカでは、子供にも出べそってのはないそうよ。それが、日本には大人にも出べそがいるときいては、そのアメリカ人、もうじつとしてはいられなかったんだわ。そこで、日本には渡ってきたが、誰が一体出べそなのか、銀座を歩いて、浅草を見て歩いても、つかまえてどこかはありはしない。どだい発見なんて出来にくいしろものよね、ちよっと。——考えあぐねた末、こちらに見えたんですって。頼むから、と、そのアメリカ人真剣なによ——こちらにくるお客さんの中で、若しそれに該当するおとなに出くわしたら、僕に知らせてくれないかって——」

「でみつかった？」

「いないわ、仮りにいたとしても、わざわざ見せにくる人なんかいないわよ、恥しくって」……

(機械社発行 越智信平著「随筆十五分」より)

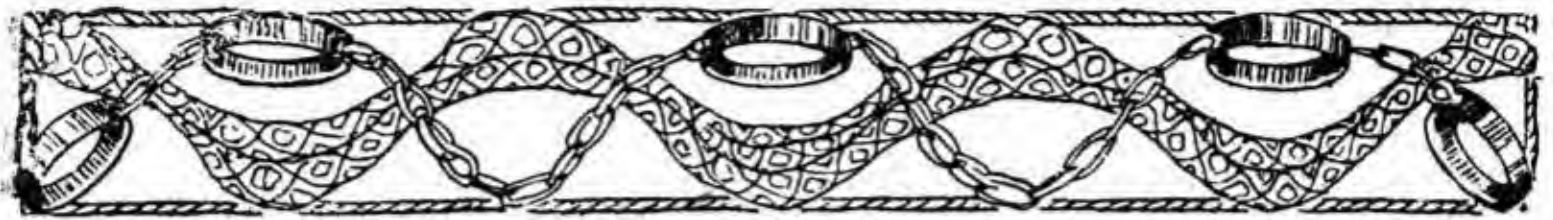
(矢桐註)

これは「随筆十五分」という単行本の中の「トルコ風呂」という章である。この本は、一小市民の飾りけのない生活がユーモアとペースをもって描かれている。この中でこの章はほのかなエロチシズムが感じられる。トルコ風呂の女が語る、へそマニヤの話がおもしろい。そういうアメリカ人は実際に居るのだろう。奇巧の寄稿家の中にも、この方面に詳しいベテランが居るのだから、それをもし知らせてやったらそのアメリカ人も喜ぶことだろう。もし、そのアメリカ人が医者か何かで、研究のために日本へ来たのだったら、なにもトルコ風呂に頼まなくても、医者仲間の連絡でそのような資料はすぐ手に入るだろうから、やはり、へそに対してアブノーマルな興味があつて、トルコ風呂へなんかきたのだろう。しかもアメリカから海を越えてくるなんて、まさにマニヤである。この随筆がもっとハッキリ、「でべその女を探すために」とでも書いてあったら、益々面白いのだが。

学童五人にお灸

——岡山、教室内で女先生——

【岡山】学校教員の暴力制裁が相ついでいるおりから、こんどは女の先生が教室内で児童五人におキユウをすえるという不祥事が岡山市で起った。同市富山小学校「大森義雄校長」の代用教員富岡保子さん(二四)はさる十二日、受持の四年ろ組で理科の授業中、生徒の徳川康雄君(九ツ)が笑ったこと



に腹を立て、同君を教壇に呼出し左手首におキユウをすえ、さらに「手は痛いぞ」と口走った山下博司君(九ツ)にも「生意気だ」と同じようにおキユウをすえた。また十三日にも「宿題を忘れた」理由で、吉岡徹君(九ツ)ら三人の左ヒザにおキユウをすえたことも明らかにした。(サンケイ紙八月一日)

山下君の母文江さん(四四)の話 まったくひどい先生です常識のないのにもほどがあります。一週間程度水ぶくれになって毎日痛みを訴えていました。(サンケイ紙八月一日)

(矢桐註)

なんとまあ、サジスチックな女の先生であることよ。

「女性の敵」スカート切り魔

ナイロンのブラウスに、腰の線を強調したタイトスカート肩から胸のあたりまでをムキ出しに胸や腰にはパットを入れ夏姿の悩ましい季節に入った。ところがこんな女性美を強調するあまり、刺激される男性が、満員電車や、人ごみをネラって、連日のように出没するモモ切り魔だ。彼らは若い女性を見ると、発作的に切りたくなる。デパートで買物に熱中している女客のおしりを物色、モモ切り刃物をもった変質者がスカートの感触をたのしんでいるとしたら——あなたも油断はできない。この男は、芸術写真家を夢みながら、DP屋に住込んだが、モード写真の現像焼付をしているうちに、肉体の幻影にとりつかれてしまったという。モード写真の流行と街にハンランする悩殺服装がこの男を変質の世界に追いやってたわけだが、若い女性も刺激的な服装は極力さけるべきではなからうか。

探し当てたグラマー

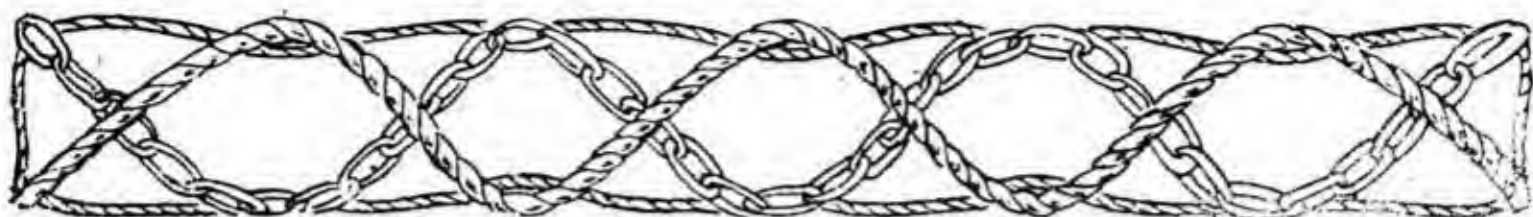
「伸びゆく電波電気通信展」が開催されていた五月三十日の日本橋三越(東京都中央区日本橋)七階は、それを見る若い人々でごった返していた。みんな科学の驚異に眼をみはり、熱心に参観しているのに、展示品も係員の説明も上の空の一人がいた。二十四、五歳の青い顔をした男で、うつむきながら、若い女のあとばかり追っかけている。そして彼の眼は、彼女たちの後姿に集中して、異常に輝いているのだ。

男はよごれたダスター・コートのポケットへ、両手をつっこんでいたが、右手には刃物が握られていた。汗ばんだその右手は、ぶるぶると震えている。ようやく、これぞとネラった女性にめぐり会ったのである。

男がひかれたのは、顔ではなかった。胸の隆起は、パットを入れたものではない本物らしいし、よくしまったウエストそしてヒップの張りは、いま流行のグラマー。男はデパート内を三時間も歩き回ってようやくにして、目的の女性を眼の前にした、とおもった。

彼が、三越の店内に入ったのは午後二時ごろ。買物のためではなく、自分の欲望を満たしてくれる若い女性を追って、入りこんだのである。エレベーターにも、エスカレーターにも乗らず、一階から階段を一步一步のぼったのは、階段をゆく女の腰の動きにひかれてのことだった。スカートの下からチラチラする下着の白いレースも魅力をもった。しかし、彼の欲望をみたしてくれそうな女は一人もいなかった。「きようはシケだなア」

階段の女性を物色しながら、とうとう屋上まできたとき、閉店予告のベルが鳴りだした。五時半である。彼は追いつめ



られた焦燥にシリシリしながらふと、いましがたのぞいた七階の催物場へいつてみようとおもった。「やっぱり、ここにいた！」

テレビを見つめている一人の女性を発見したとき、彼は一階から屋上、そしてまた七階と歩き回ったことが、ムダではなかったとおもった。その女は白いナイロンのブラウスに、ピッタリしたタイト・スカートをはいていたが、体つきが目をひいた。「この女は、オレが想像していた女だ。逃さんぞ」

もう一度、モモ切り刃を握っていよいよ実行に移す段取りになったのである。

スリルと快感の一瞬

彼の眼は獲物をネラう獣のように血走っていた。刃物を握った右手が、静かにポケットから出た。そして、いよいよスカート切りにとりかかった。

「女も、客も、みんなテレビの相撲に夢中だ。感づかれる心配はまずない」

自信のある一步を踏みだして、そつと女の背中へ、自分のからだを寄せていった。

彼は、左手で女のスカートをつまんだ。相手は全然気がつかない。

自信を深めた彼は、いよいよ右手の刃物を、女のしりのところへもっていった。スカートの切れる感触が刃物をもった右手に伝わってくる。もう夢中だった。

女は、相変らずテレビに熱中してまだ気がついた様子がない。「この人混みだ。わかりっこはないさ」となおも大胆な行動に移ろうとしたそのときだった。彼の手はザラツとした

大きな手に握られてしまった。振り切って逃げようにも、はずせない。いや、彼はまだ異常な興奮の中からさめていなかった。身動きができなかった、というのが本当だったろう。

「ちよつと、いっしょにきてください」

低い、命令するような口調でこういったのは、日本橋署の佐藤孝光巡査で、男が三越へ入ったときから、眼を光らせていたのだった。

佐藤巡査は、電波展を見るために私服でやってきたのである。

すると妙な男を発見した。店内をキヨロキヨロ、女のあとばかりついてゆくネコ背の男がいた。

「奴っこさん、スリかな」

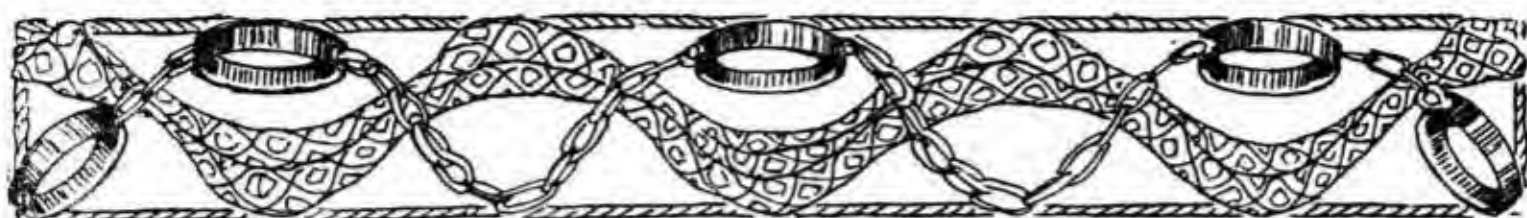
第六感というのか、ピンときた。「よし尾行だ」と男のあとから、階段をのぼりだして、同店の保護係に目くばせ、なおも尾行をつづけた。ところがスリではないらしい。

「すると、何だろう？」佐藤巡査は七階の電波展まできてやつと、モモ切りと断定、男の一挙一動から眼を離さなかった。

果せるかな、男の眼が、一人の若い女のしりに集中、異常に輝きだした。

「やるぞ」とおもったときは、女の紺のスカートから、まっ白なシユミーズが眼に写った。

現行犯で佐藤巡査に捕まったこの男は、山本三郎こと松橋和之(二一) 東京都品川区品川四九自称写真技師。スカートを切られた女性は、電波展会場に出品していた川端産業のマネキンガール直井寿子さん(二一) 東京都中央区馬喰



町三ノ三日粧内だった。直井さんは展示品のそばにいたが五時半の閉店予告ベルをきいて、テレビの相撲中継をのぞこうと人ガキのうしろへ立つての災難だった。

背後に、男の気配を感じたが、「テレビを見ようとして、背伸びでもしているのだらう」ぐらいに、大して気にもとめなかった。佐藤巡査に肩をたたかれて、はじめてスカートが十五センチも切られているのを知って、ビックリしたという

秘密のある暗室

この男松橋は、昭和三十年春、青森市浦町から、田舎で習いおぼえた技術を生かして、芸術写真家になろうと上京、品川区の某写真屋に住込んだ。田舎から見ると東京は花やかだった。とくに女性の美しさは格別だったが、彼は住込みの身わずかにお客から頼まれるフィルムを現像したり、焼付けたりしながら美人を発見することで心を慰めていた。そのなかでもヌード写真は、彼のよるこびの最大なものだった。現像液の中で、次第にハダカの女が浮び上ってくるときの興奮は強かった。

暗室でこの秘密をたのしんでいる山本は、いつか変態性欲にとりつかれ、終日、暗室に入り浸っていたが、もうそれだけでは、我慢できなくなっていた。

そんなある日、新聞をひらいた彼は、大きな活字で、モモ切り魔ヒンビンと出沒、府中競馬場、後楽園球場、国際見本市と矢つぎ早やの記事に眼を奪われた。異常な衝動にかられた山本は、両刃のカミソリの刃を拾った。新聞記事とこのカミソリの刃が結びついた。

下宿に帰ってきた山本は、拾ってきたカミソリの刃を、三つの穴を一直線にしたまん中から折って、ちょうど指の間に

入る。モモ切り用刃物”を作製、持ち歩いた。女のしりが目につくと、山本はポケットの刃物を指の間に装備して、ゴクリとツバをのんだ。

「切ろうとおもえば、すぐ切れるんだ」

そして切ったときの快感に胸がうずいた。山本の変態性欲は、かくして実行に移す段階に近づいて、五月三十日は最高潮に達していたらしい。

この種の犯罪は、山本逮捕で解決したわけではなく、世の中に変質者がいる限り尽きないわけだが、彼らを挑発させるのは最近の女性服装にあるともいえる。夏を迎えて、胸から胴、そして腰と、あまり強調することも危険をよぶことになる、と当局は警告、若い女性の夏姿も程々と反省をうながしている。（「週刊東京」六月二十二日号）

（矢桐註）

前号にひきつづいて「スカート切り」の記事。もちろん犯人は別人である。

この種の犯人に共通する性格は、その殆んどが、気の弱い善良な男だということ。抑圧された性の誘惑に勝てなかった心の弱さが、このような犯罪になるのである。もし彼らが、適当に性を発散させるだけの金銭的、精神的な余裕があったら、こんな事件はひきおこさなかったであろう。

盗みや殺人とは、本質的に異なる犯罪である。

と言っても、私はいささかも彼らに同情するものではない。否直接行動によって犯罪をひき起す彼らの浅はかさを憎む、何故平和的な方法によって昇華させなかったのであろうか。

（終）



「女武者自刃」

此の間、九州を旅行した時のことです。或る町で、フット目についた旅芝居の看板。

××大一座、×月×日一日限り、「新説播州皿屋敷」「紅桜女腹切」「お富与三郎」

もちろん私の興味は第二の「紅桜女腹切」に集中しました。

「紅桜女腹切」?

どんな芝居なのか気になって仕方がないので日程が一日のびたのを幸に、S劇場を覗いて見ることにしました。

S劇場の入口まで来て、私は、ハッと立ちどまってしまいました。そこに描かれた極彩色の絵看板には、若武者のような鎧姿の女性が、歯をくいしばって腹一文字にかき切つて

女はらきりの夢

藤 山 秀 緒

いるではありませんか、足を組んで、右手に短刀、左手に血みどろの臓腑をつかんだ其の女武者の凄惨な姿。

私は、ふるえる手に切符を受取ると、矢もたてもたまらず、かぶりつきへ陣取ってしまいました。

芝居は「播州皿屋敷」という古風な怪談物のはじまって居ましたので、それを一幕見て「女腹切」の開幕を待ちました。

長い休憩を置いて、いよいよ待望の腹切劇のはじまりました。私は、またびっくりしました。それは、「奇ク」三十一年十月号に私がのせていたといいた「女武者自刃」と殆ど変らない筋なのです。あの作中の、幸村の娘雪路は、この芝居には出ず、重成の妹志津が死んで行くところだけを出していました。原作

と多少違うところは、茶白山本陣の庭前で自刃するところを、捕えられてすぐ死ぬように改め、苦悶のクライマックスに家康が出て、その死をたゞえ、幕になるのでした。

先ず幕があくと、後向きに、鎧姿の志津が立っています。後は簀だたみで、疲れ果てた女武者が息をついている場面です。

「あゝ、我が運命も、もはやこれまで。名もなき者に討たれるよりは、この場に於ていさぎよく自害しよう。」

心にうなづいて鎧をぬぐうとすると左右から陣笠をかぶった雑兵が打ってかゝります。それと戦ううちに、次第に人数がふえて、遂に志津は取りかこまれてしまいました。

「この上は死に物狂い……」

志津は太刀を振りかざして、大立廻りとな

ります。志津に扮しているのは、のぼるとい
う旅芝居にしては珍しく美しい女形でした。
敵を追い散らした志津は、血刀を杖にして
四方を見廻し、やがて、

「お相手はなきか。この上は、女乍らも腹か
き切り、武士の自害の手本を見せましょう。
方々、よう御覧下さりませ！」

と云います。左右の軍兵が、ワーンと声を
あげて志津を取り囲みます。

志津は、ゆっくりと鎧をぬいで、小刀を前
に置き、静かに両ヒザをついて胸元をくつろ
げはじめます。

客席は、この時一寸ざわめいたようです。
「ほら、あのお姉ちゃん、これから死ぬ
のよ。」

隣のおかみさんが子供に教えています。志
津に扮するのぼるといふ女形は、ジツと唇を
かんで、切腹の用意をととのえています。

女形ですから素肌は見せず、白無垢の下着
をのぞかせて、短刀に双手をかけます。

ぐッ／＼と突込んだのぼるは、がばと体を
のめらせて、

「あ、あゝゝゝ……」

と口走りながら、マユをひそめ、肩であえ
ぎます。

「そこだ！」「しっかり！」

客席から声がかかります。のぼるは、じつ
と虚空をにらんで、再び悩ましい裏声で、

「あゝ、あゝゝゝ……」

と呻きながら、刃を引廻しはじめました。
のぼるは体をのめらせて、短刀をシリシリ
と右へ引いて行きます。しなやかな上体。

「あゝゝゝ……あゝゝゝ……」

短刀は右脇に引廻され、いかにも旅芝居ら
しい、つゝこんだ苦悶の表情がつゞく、

やがて彼女は、のたうちながら短刀を腹か
ら引抜き、胸へ押しあてます。

「あゝ、あゝゝゝッ！」

鳩尾へ突込んだのぼるは、なよ／＼と体を
ひねりつゝ腹を縦に切り下して行きます。

こんなところにも、本当の女には出せない
妖しい色気が漂って、私を不思議な陶醉境に
誘うのでした。

のぼるが苦しげに喘ぎつゝ、短刀を下腹ま
で切り下して、二、三度はげしく息をつく時
座頭の扮する家康が出、その死をたゞえるの
で、志津は、大御所様に、女武者の、はらわ
たを御目にかけます。という意味のことを
とぎれ／＼に云って、短刀を口にくわえると
右の手を、ぐつと腹へ突込みます。

「むうッ！」

のぼるは、顔をゆがめ、倒錯美に輝くばか
りの舞台を見せてくれました。

血綿をつかみ出して、のぼるは苦しみ悶え
ます。家康のセリフがあつて、やがて、志津
は辞世を咏み、膝をワナワナふるわせ乍ら、

助けられて立上りつゝ合掌して幕になりました。
た。なぜ断末魔の彼女が立上るのか、理由は
わかりませんでした。サディステイックで
すぐれた演出だと思いました。

幕がしまつても、私はしばらく息をつめて
いました。スラックスも汗でじっとりとしめ
っています。私は、夢中で売店へ行き、のぼ
るさんへお菓子を届けさせてしまいました。
果して、のぼるが、お礼にやってきました。
舞台よりはずっとふけて、二十六、七にもな
りました。丁寧にお礼を云って、

「あゝ、あゝゝゝ、お好きですか？」

とジツと私の顔を見ます。（あの芝居
の原作者は私です。）いまのいまゝで、そう云
うつもりでいたのに、私は、ハッと押し黙っ
てしまいました。

「エ、あのう。あのう、とてもきれいでした
もの。……一度拝見したいわ……」

これだけがやつとでした。のぼるは、ニッ
コリと笑つて、

「有難うございます。夜の部でもう一度いた
しますから、よろしかったらどうぞ。」

「えゝ、では……」

これで二人の会見は、あつてなく終つたの
でした。私は、夜の部までねばつて、もう一
度見物しました。気のせいか、昼の部よりも
もっと突込んで、凄惨な舞台でした。

腸を引きずり出す処では、くわえた刀を落

として、口から一筋の血を吐いたり、

「う、うゝつッ、ウゝツッ！」

と、女形らしい悩ましい呻きをあげるのでした。私は身をひきしめて、ジッと舞台に見入っていました。腸をつかんで体をしごくのぼるの息づかいが、本当に真にせまって、はげしい迫力を帯びて来たのに気がつきませんでした。もしや……。

あゝ、私の想像は適中したようです。のぼるは、ハッとためらいの色を見せたかと思うと、思い直したように、右手を腹中で大きくえぐり込み、しばし体を硬直させて、

「ウ、ウゝゝッ……」

と呻きつゝがばと俯伏せに倒れたのです。のぼるの髪ふりみだした襟あしの白さ。

私は、宿へ帰っても、眠ることができません。なぜあのとき、「きれいでしたわ」などをつまらないお世辞を云ったのだろう。なぜあの原作者は私だ、あなたの切腹では、不充分だ、私の処へ来てけいこをしなさい。と云わなかったのだろう。でも、もうおそい。私はジッと物思いに沈んで行きました。

調教

「駄目よ。そんな事では。もっと突込んでおやり！」

私は、のぼるに向って命令します。

「は、はい。ではもう一度やりますから」

のぼるは、鎧姿で目もさめるような女武者のいでたち。私は乗馬ズボンに乗馬靴、乗馬服を肩から羽織った調教師のスタイル。

「あ、あゝゝゝ……」

「だめね。もっと、きりっとした呻きでなければ。いゝこと。……ア、アゝゝゝ、あうッ……」

私は腰をかゝめて、突立てる動作をしてみせます。のぼるは、うなづいて、

「ア、アゝゝゝ、あうッ——フッ——」

「まだ足りないけど。引廻す処をやってみるのよ。」

「あゝ、あゝゝゝ……」

「まずいなあ。こうするのよ。——ア、アゝゝ……く、くゝゝゝゝゝ……」

「ア、アゝゝゝゝゝゝゝゝ……」

「もっと、うつむいて！」

私は乗馬靴で、のぼるの首すじをふみつけます。

のぼるは、うつぶせになりながら、必死に刃を引廻しています。

「あゝ、うゝむ、お、お、女乍らも、武、武士——い、いさぎよう……討死。こ、この通り……ウ、ウゝツ……」

「のろま！ そんなことで腹が切れると思うの！」

私の鞭がのぼるの背中へ。

「ア、アゝツッ、ウムツ、ゆ、ゆるして！」

もう一度……もう一度……

「大根！ いゝこと、よく私の腹切りを見るのよ。こうするのだわ……」

ア、アゝゝゝゝゝゝゝゝ……

うゝむ、お、お、おんな、乍らも、武、武士……い、い、いさぎ……よう……う

う、討、死。こ、こ、これ、此の通り——

——ウ、ウゝゝッ……」

繰返し／＼稽古するのぼる。でも私は満足しない。

「馬におなり！」

私は、やにわにのぼるを突倒すと、乗馬ズボンで、ぐっと首をしめつけます。

「いゝこと！ あんたに跨って、お手本を見せてあげる！ よく見てをくのよ。」

私は完全ののぼるの首を両足にはさみ、首すじへ腰かけた姿で、用意の短刀を引抜きます。短刀は無気味に光り、私の心をかき立てるのです。私は右手に短刀を握り、左にムチを持って、息をつめます。

ピシリ！

ムチがのぼるの腰を責めるや、のぼるは、

「あゝツッ！」

といって体をひねろうとします。そこを、そうはさせず、ぐっとしめつけた姿で、私は

「むうッ！」

と短刀を左脇腹へ突立てるのです。

本当の九寸五分を力一杯腹にたゝきつけた

のですから、なんでたまりましょう。私は、ぐっどと体をのめらせ、痛さを泳いで息をつきます。

「あゝ、秀緒さん！ ど、どうしたのですか？」

のびあがろうとするのぼるを、乗馬ズボンがぐっどと抱きしめ動かしません。

「く、く、ク、ク、ク、ク……」

私は唇を噛んで引廻して行きます。がぼがぼと流れ出る血汐が、のぼるの首すじから床の上へ――。

「あゝッ！ 秀緒さん、な、なにをするんです！ 誰か来て……」

「シ、静かに！ な、なに、こんしきに。お、女乍らも、は、腹を切って、シ、死んで行くの。のぼるさん、よ、よく見るのよ！ わ、わたしの、さ、さ、最期を！」

私は、のぼるを抑えこみながら、

ウムー、ウムー……

と泳えかねた呻きと共に、乗馬ズボンの腰をうかせ、見事に腹一文字にかき切ります。

「秀緒さん！ 秀緒さん！」

のぼるは必死に叫びつづけます。若女形姿ののぼるは、返り血に染って凄艶な姿で、私の足下にうづくまっています。

私は、

「う、うっ……」

と刃を引抜くと、

「の、のぼるさん！ 十、十文字腹の、呻きは、こ、こうして！」

と叫んで、短刀を鳩尾に突立てます。

「う、う、う、う、ウムムム……む、む、む、ウーッ、ウーッ――ク、ク、うううッ」

もう乗馬ズボンの両肢は、のぼるを抑えていることができません。

のぼるが、はね起きると同時に、私は、ど

っと前へのめって、血の海へ俯伏せに倒れます。烈しいめまいと悪心がおそい、気を失うばかりの苦しさです。でも刃は私の意志通り小さきみにふるえ乍らも、腹を縦に裂いて行きます。

「お、お姉様！」

のぼるの絶叫。

あゝ、女装の男と男装の女が、血の海の中で、ひしと抱き合う姿。

「う、う、ううむ、ウーッッ！」

泳えかねた断末魔の呻き。――

いつしか、私の幻は消え、夜のしゝまが旅館の一室を包んで、我に返った私の乗馬服姿を姫鏡台の鏡がむなしくうつし出して居ます。

私の、つたない乗馬ズボンの女腹切りは、こうして、つきぬ想いをこめて綴られて行くのでございます。

雑報と雑感

沼 正 三

一五八 ロベール・メルル著村松剛訳『死はわが職業』

一五九 ラッセル著大沢基訳『人工地獄』

一六〇 藤枝静男『犬の血』

この三つは、手帖第百十六項、百十七項の参考として読まれたい一六〇は第百十六項で引いた同名作品が単行本に入ったものだ。

一六一 山本幹雄『アメリカ黒人奴隷制』（創元歴史選書）学術書だが、速報二六で引いた菊池謙一氏の著書などより手軽で、一般人に親しめる。南部の黒人奴隷生活の概観など大変要領良いものなので、ゴータの奴隷制小説「ネロ令嬢」の紹介に先立って、本書を手帖の一項として扱うことになるかも知れない。マゾヒズムを離れても、例えば「風と共に去りぬ」の理解を深めるのなどにも役立つだろう。

一六二 吉田精一・南博対談「谷崎文学に描かれた女性と倒錯心理」(国文学解釈と鑑賞七月号谷崎潤一郎特集号) 心理学者との対談という点に多少の期待を繋いだのだが、いかにせん南先生は倒錯心理は非専門で、ちつとも要を得た返事ができず、つまらぬものになってしまった。「青塚氏の話」の人形恋着 Pygmalionism を感違ひして書籍狂 Biblio mania の語を使って話し合ってるんだから恐れ入る。これに比べれば、文芸臨時増刊「谷崎潤一郎読本」掲載の文士が谷崎を囲んだ座談会の方がホンモノだった。

一六三 高木卓「むらさき物語」作者は芥川賞を断って有名な人戦前「女騎士」と題する巴御前を扱った作品があつたと記憶する。

このむらさき物語は爛熟した王朝文化の頹廢を背景に、大納言三条公美という二十才位の男装の美女とそれと同腹同年の尚侍三条玲子という女装の美少年を設定して、筋を展開させた異色ある小説だ。

主に前者が活躍する。女でありながら、章子という妻も持っている他にも時の帝がやはり男装の美女である。丁度ブルーストの「失われた時を求めて」の「ソドムとゴモラ」を読んで、上流社会の至る所に同性愛者がいる様な筋立に少々疑問を抱かされるのと同じ様な感があるが、とにかく「とりかえばや物語」を生んだ王朝は貴族男子の女性化が極に達した時代だから、一度その設定さえ受け入れれば、あとは、例えば、馬上の貴公子実は男装美女の騎乗図といった美しい場面を気楽に楽しめる。「倒錯者のために書かれたものでなくて倒錯者にも楽しめる作品」(本誌二九年二月号「人耶馬耶」の解説参照)の好例として推薦しておく。

一六四 氷川浩「世界一の悪女」(30の読物九月号) 血の伯爵夫人エリザベス・パトリイ(パトロロイとあるが誤りだ)のことを簡単に紹介している。このサディスティンのことは近く手帖で扱う予定である。

一六五 朝山晴夫「恥かしき告白」(傑作クラブ鎖夏増刊) 女が

ら夜忍んで来いと云われ、喜んでゆくと、第一夜は家族の尿瓶の内容物をぶっかけられ、第二夜は「家人に知られる」と女に云われて長持の中に潜んだところ、女は自分の恋人を迎え入れ、男は長持の中で一晚中睦言を聞かされる。物音がして恋人が不審がると、女は「ねずみとり」にねずみがかかったのよ」と男を騙る……といったマゾ的な筋。但し筋書に止まって、感興を喚ぶに至らぬ。

一六六 女の国西ドイツ(七月九日附読売夕刊) 戦前は子供・台所・教会の3Kを守らされた独乙女性が、現在ボン議会議に四八七名中四九名の婦人議員を出し、大学生男子五万に対して女子二万五千西独中の商社三百二十五万中、女性が社長たるもの実に六十万社、最高裁判所判事にさえ四名の婦人判事がいるという。一寸驚く。日本でこの数字を見る迄にはまだ大分かかるだろう。我々マゾヒストは、須らくフェミニストと同盟して、女権のより一層の拡張を目指すべきだ。

一六七 映画はこの頃故あって殆ど見られない。例の(雑報一〇七)ますらお派会合ものが二篇製作されたと聞いたし、筋書で「カルタゴの女奴隷」にマゾ好みのする総督令嬢が出るのを知った。マゾヒスト必読の名作「高野聖」の映画化と聞けば、大分原作は歪められたらしいが、「白夜の妖女」も見なかった。浦路洋子が男装の美剣士になる「三日月秘文」も、ただその故に見なかった。縛り場面の故に全巻を見るサド派諸君の少なからぬことは、本誌の誌面で明らかだが、マゾ派にも同じ様なことはあるのだ。しかもマゾ好みのする場面は、縛りより少いから、稀小価値がある。右のような映画を見られない私は大変辛い思いだ。御覧になったマゾヒストの方の感想を誌上をお願いしたい。

一六八 「男に加えた女の魅惑」(週刊サンケイ7月28日号)

一六九 「ブラウスを着た男」(小説公園九月号)

これは浦路洋子とは反対の男の女装。今評判の丸山明宏だ。既に

本誌十月号一一〇頁以下でも矢桐重八氏が、男性のお化粧の記事などど並べて、この倒錯性態歌手のことを論じておられる。週刊誌では女装その他すべて演出として割り切っていたが、一六九の方によると、本質的に倒錯者だという見方もある様だ。シスターボーイか、ゲイボーイか。とまれこの美貌の人の写真は、私の同性愛者的な面を奇妙に刺戟することは否めない。

沼正三だより

(十月号を読んで)

(一) (十月号誤植訂正) 七一頁下欄一行「首輪の外の部分」は「首輪の下の部分」が正しい。(全身中唯一の被覆部だから羞恥感と結合するという意味です)。七二頁下欄三行「南極飼育所」の振仮名はサウスポール・ヤブナリー South Pole yaponetry です。七五頁下欄末尾より二行タークアン Targuan とあるのは、タークアン Targuan が正しい。前後のタークアンも、全部タークアンとして、ターカンに近く発音して欲しいのです。誤植は他にもありますが、推察できる所は挙げません。

(二) (挿絵訂正) 挿絵については、どうせ空想の新奇の事物なので作者の意図通りに描けなくも当然、むしろ良くここまで描いて貰った位に思っています。十月号七三頁の絵は次号にも関するので一言。本文にある様に鱗一郎は手錠を解かれていたのです。そして潜穴から首を出すのに潰された蛙の様に腹這いになったのです。挿絵とは違います。又黒奴は、すべて、頭蓋内蔵受話器を、従って金属鉢（ヘルメット）を巻いているのです。

(三) (ヤプーの作者として) この小説は註が多くて、我ながら他人様には読み難い作品だろうと思います。読者を厭でも自分の世界に引

ずり込む丈の力量を持たぬ私としては、然し、敢て読者にお願ひしなければなりません。この外見上の近寄り難さを積極的に克服して入り込んで来て下さい、と。それには、煩を厭わず挿入した参照箇所を指示通り当って見る労を惜まない様にして下さい。何と云っても空想の産物たる新奇な事物ですから、そうやって繰り返すことで新事物に親しんで貰わないと、それらを素材にして積み上げてゆく私のマゾ幻想を充分に味わって戴けないことになります。又色々の伏線が設けてあるのです。例えば第十七章の冒頭の夢に三三九度の（カサ）盃を思わせる三つの茶碗と二つの銚子が出て来ますが。この茶碗が実は下盃（ビス・カサ）（隷属のシンボルとして主人がヤプーに尿を与えるのに使うもの）であり、銚子が実は尿瓶だったということとはじき分つて来るでしょうが、夢の場面自体が、結婚に際して持参畜を配偶者にも隷属させる為、新婦の尿、新郎の尿を三つの盃に交互に注ぎ、各盃を三口宛で飲ませる三三九度の下盃（ビス・カサ）という儀式を予見したものであったことは、ずっと後になってから分ります。二人の指輪も後章での用途と照応します。この種の伏線に、充分な効果を發揮させる為にも、読者がある程度の努力を払って、この小説の既発表分に親しんで戴くことをお願いしたいのです。

(四) (波路洋氏に) 五六頁の「女靴」、手帖の一項に申し受けたかった位、面白く読みました。犬皮の靴のことで連想したことを一つ。とうに御存じかも知れませんが、ドストエフスキイの「死の家の記録」この第二部に、クリチャーブカという、人なつこい毛の多い犬が出て来ます。徒刑場の慰めなのですがそれが姿を消したと思ふと、実は、皮なめし屋の囚人に殺されて、法務官の奥様の穿くピロイドの半長靴の裏毛皮に張られてしまっているのです。この小説は笞刑鞭刑を愛するサディスト刑務所長や、列間撻刑という残酷な刑罰の描写などで、むしろサド派の諸君の読物ですが、この犬の条りは貴方を喜ばせるのではないかと思います。私自身、戦前読んだ

時は何のことでもなかったのに、戦後マゾヒストとして再読した時は、このクリチャーブルカのことと心が疚いた経験があります。——私も犬に生れ代りたいと願う方ですからね。——まだお読みでなかったら、お勧めします。

(内) (天野哲夫氏に) 鋭敏な感性と豊富な文藻に恵まれた、あの「暗い欲望」の作者の奇クへの登場は、私には喜ばしい限りです。貴方と私とは、マゾヒズムの傾向において非常に似ていることを、お書きになったものを拝見して、常に感じていました。連載される「いざない」、その意味で大いに注目しています。尚貴文冒頭に拙稿中「雑報」のことだけが出ていますので、全部はお目に留ってなかったのかとも疑われますから、念の為、貴稿を取り上げた箇所を掲げておきます。速報一、二一〇、六五、手帖本文第九十四「幻炎」の三箇所です。——尤も、貴方からの影響はそれだけでなく、例えば「ヤブー」の中に出て来る水中自転車のカップは顔がそのままサドル化しているのですが（九月号十六章二）、これは貴文に今回再録されたあのサドルへの感想を意識しつつ書いたものです。もっと正確に云えば、貴文に影響されて、女性の乗る自転車のサドルに対して平静でいることができなくなり、その姿を見る毎にふっとあの文章を連想するのが常になってしまった私が、自分の実感から理想化して、あのカップを案出した、というわけです。

(出) (乗杉貴代子さんに) 古い奇クの小説で未完のまま終わったものがいくつあった中、一番私の気懸りになっていたのは、貴女の「ダイアナ夫人」——尤も、ダイアナと乗馬との結び付きは、私には気になるのです。神話のダイアナつまりアルテミスは狩猟の処女神、で峻烈さはマゾヒストの憧憬に値しますが、犬を連れ弓矢を持って山野を駆ける丈で、馬に乗ることはないのですから。然し大したことではありません。——でした。これは私丈の感じてなく、多くのマゾ派諸君の共鳴されるところでしょう。もう復活されぬも

のとあきらめていたところへ、十月号で久々の発言を承ったわけですね。偶然同号の手帖（八二頁）で「ダイアナ夫人」に触れていたのも、面白い暗合でした。ところで、続編の執筆の時は、ひたすら貴女の乗馬体験そのものの叙述を志して下さい。前回人妻期の終りの方の人間馬の記事が虚構^{フィクション}かどうか私は存じませんが、少くとも、その前の真物の乗馬の記事におけるような迫力ある説得の力に欠けていたことは、目のある者には分りましたし、折角その前の部分迄の滔々たる乗馬心理の叙述の感興が、そのため削られるような思いで残念だったのです。マゾヒストが貴女に求めるのは、徒らに奇を追った場面ではなく、乗馬を愛する女性の心理の明細なのです。サド女性も幾人か登場されましたが、まだこの分野で貴女の今迄の文章に迫るものを書いた方はありません。どうか、この点で私達の渴を医して戴きたい、と願います。

(内) (高木良二氏に) 三七頁の「マゾの男の見分け方」以下は、前に似たものをどこかで読んだような気がして搜したら、風俗草紙二十九年十二月号西島実「どんな男がマゾヒストか」というのと殆ど同じですね。貴方が西島氏と同一人であるか知りませんが一度他誌に出た記事を、こういう風に無断で利用することは奇クにとってプラスでありませんか、投稿者として慎むべきでしょう。（他誌の良い記事を文責を明らかにした上で引用することは、文献誌としてむしろ歓迎すべきだと思いますが）

(出) (真木不二夫氏に) 「黄色オラミ」は「ヤブー」が終ってから、ということでしたが、ヤブーは十月号までで、第一部（地球篇）の約三分の一を越した位に過ぎず、腹案では、クララが麟を自分の所有として畜籍登録後、高天原、蛇蛭富士、南洋竜宮、南極飼育所等を歴訪しますし、一方麟の脱走、再捕獲などがあり、完全な家畜リンの誕生は前途遼遠です。そこで、お願い、こんな悠長な小説の完結など待たず、少し宛でも、メリール国の消息を洩らして下さいませんか？

終^{しゆう}戦^{せん}奴^ど隸^{れい}

(後篇)

△或る勤労働員女学生の手記より▽

△前号の梗概▽

日本の敗戦が決定的となった昭和二十年八月、北海道の R Ⅰ 鉦山には女学生が勤労働員されていた。敗戦の日、事務所組の七人は、斎藤という道庁の世話係に、日本はまだ戦争を続けていると欺まされて、山の中で闇に売るワイシャツ作りをさせられる。余りの酷使と軍が使うのにワイシャツを作る不審さに七人中で一番しつかりしている愛子が斎藤に訊したことから、仕事をなまけるといつて仕置を受ける。仕置の最中、愛子は斎藤の顔に唾を吐きかけたので、怒った斎藤は愛子を滝壺の中へ磔にする。その夜、昭子と瑠子の二人は、愛子を助けようと、秘かに梯子を持ち出そうとした。

私が思った通りでした。梯子があったのです。私達を屋根裏部屋へ追い上げた後でガタさんが作って持って行き、又持ち帰ったのでしよう。いきなり、滝壺へ連れて行け、と言ったところを見ると斎藤さんには村王の様な趣味があつて、前からあの妖気立ち籠るばかりの滝壺に、私達を裸で磔にするという惨酷な想像を楽しんでいた

雪^{ゆき}俊^{とし}遙^{はるか}

のかもしれない。昨日の仕打を考えると、これはそれ程の外れでもない様に思えます。

そんなことを考えていたのが悪かったです。暗い中で大きな梯子を動かしたので、私はうっかり、その端をコードに引掛けてしまいました。お風呂の電球が壁か何かにぶつかって割れたらしいガチャンという音がしました。一瞬、心臓の鼓動が停りました。耳を澄ますと母屋の方で誰かが起きたような気配がします。しかし心臓のどきんどきんと激しく脉打つ音に妨げられて、それが何の物音であるかはつきり確認出来ません。あの目を覚めた人が早く寝ついてくれれば良い。祈りたい様な気持で私達は梯子を斜めに支えたまま、じいっと身動きもしないで立って居ました。何時間もうしていた様に思いましたが、案外五、六分位の間だったのではないのでしょうか。それっきり母屋の方がひっそりしているので、私達は拔足差足そろそろと又梯子を運び始めました。戸口の所まで来た時、いきなり障子があきました。梯子をかくしている暇などある筈はありません。梯子を壁に立てかけるなり私達は身一つで暗い納屋の奥の方へ

逃げ込みました。が、納屋には柱以外何の隠れ場所もないので電気をつけられ、ばそれでお終いです。私達は斎藤さん達の部屋に連れ込まれました。衣類を手荒に剥ぎ取られて下着一枚のまま麻縄で後手に縛り上げられました。

「珠子は俺が引き受けた。お前達は昭子を二人で連れてゆけ。」

何ということでしょう。田舎の子よりは綺麗で男に魅力を感じさせているだろうという秘かな私の自惚れは見事に粉砕されてしまいました。それは、四尺八寸、十一貫強の私と、五尺強、十三貫の珠子さんとは肉体の豊満さが段違いですし、愛子さんはちよつと初々しくて可愛いというだけなのに、妹の珠子さんは色が白く、丸い顔も半円形の眉毛も仏像そっくりの上、目が近代的でとてもよく動くので、男好きのする顔だとよく言われていました。それでも私は自分の理知的な美貌の方が問題にならぬ程上だと思っていました。肌の白さだって啓子さんを除けば私が一番でした。それなのに実にあっさり、斎藤さんは私を捨て、珠子さんを選んだのです。でも女の性は何という怖ろしいものでしょう。こんな場合にまで、まだこんなことにこだわっているなんて――。

コバさんが私を抱き起しました。後手に縛られたまま横坐りに坐った私の身体を挟んで、コバさんとガタさんがジャンケンを始めました。真剣な表情で「はい、はい」と掛け声を出して拳をしている二人の傍で、私は、なんとなく膝が、がくがくするのを覚えました。ガタさんが勝ちました。私はこれから、どんなことになるのかと、ガタさんの顔を見上げました。私の顔はやつとガタさんの鳩尾の所までしかないのです。厚くて巾の広い胸、毛むくじやらの腕、コバさんが盛んに煙草を吸っている横で、私はガタさんに肩をどんと突かれました。後手に縛られているので、私は仰向けにころりと転りました。

丁度その時です。「ヒイヒイッ、ヒイヒイッ。」只ならぬ金切

声の悲鳴が隣の部屋から何回も聞えました。神経を引き裂くようなその悲鳴に私は思わず「アッ、アッ、アッ」という咽喉声が無意識に口を突いて出しましたが、途端に悲鳴は止んで、暫く静寂が続きました。あんな只ならぬ悲鳴のあとだけに訳のわからぬまま息も詰まるような一瞬でした。ガタさんが漸く立上ったので寝返えりを打って身体を起して隣の部屋の珠子さんの方を見ると、押しこめられた珠子さんの真白いお腹の上に、丁度お臍の横側へ煙草の火を押し当てられているのでした。熱さに悶える珠子さんの姿をじつと見ている斎藤さんの顔に浮んだ皮肉な微笑！

それからすぐ私達は後手に縛られたまま再び滝壺へ連れて行かれました。愛子さんが礫に架けられたままで心配そうに見守っていました。梯子が掛けられました。私が想像した様に崖の上にはなく崖の中腹の鋭い岩の突起の狭間へ、ガタさんが珠子さんを横抱きにして梯子を渡って行きました。珠子さんが足をバタバタさせると、肉づきのよい白い指先が、木の間を洩れる陽にまぶしいように輝くのでした。ガタさんが抱いている珠子さんを揺すり上げて凄味をきかせました。

「コラッ、静かにしないと落っこつぞ。」

長い梯子は弓なりに撓んでゆらゆら揺れます。本当に落されると思ったのか珠子さんは静かになりました。私は岸にべったり正座させられたまま、斎藤さんの遅い手でガツシリ肩を押えられています。逃げない様に、と言うのでしょうか。しかし、このように後手にしっかりと縛られていては如何に足が自由だからといって、逃げられる筈もないのです。

珠子さんは愛子さんと背中合せに礫にされました。背丈が殆ど同じで、顔や身体つきも姉妹らしくどこか似通っているのです。此の礫刑は仲々見事でした。豊満な珠子さんのお尻のピークが、可愛い愛子さんのお尻のピークに密着しました。

次は私の番です。私の両手首は後で括られていたのですが、更に両腕は背中では合せられ、その上の方、二の腕の下部に麻縄を掛けられました。腕の付根がジーンと痛み、肩は後に反り、胸がぐっと張って乳房が引き締まりました。その乳房の根本の方に麻縄が廻され、若い男二人掛りでぐいぐい引張られて「巾着縛り」にされました。此の言葉は指図をしていた斎藤さんが使っていたのです。痛くて私は大声で「痛い、痛い」と泣きました。でも滝の音に消されるのと開け放しの戸外です。泣声は幾らも響きません。縛られ終った私のお乳はくびれ上って本当に巾着そっくりでした。岸に近い滝壺に梯子を立て私は梯子の後側へ愛子さんと向き合って吊されました。乳房を縛った縄は梯子の最上端の横木の両端に巻附けられ、縄が長いので梯子の背後を一周して下の横木に巻附けた上、縄尻を両足首に結びつけられました。

「これなら巾着の紐がほどけても流される心配はないが、その代りお水位はたっぷり飲んで頂くことになるかもしれないナ」

他人事のように、そんなことを言いながら斎藤さんは梯子の間から手を入れて、縄目のゆるみをたしかめた上、

「さあ、もう一眠りしよう。逃亡を企てた罰は明日、仕事を休んでゆっくり加えてやる。」

こんな晒者にされた上、私達は明日、改めてもっと痛い目に遇うらしいのです。巾着にされたお乳を上に向け、胸から上を背後にのけぞらせた姿勢で梯子にぶら下げられたまゝ、斎藤さん達の足音が滝の音に消されて行くのをなさない気持で聞いていました。痛いのを我慢して無理に顔を起すと、礫台の愛子さんの心配そうな顔が目に入りました。きっと彼女の目にも苦痛に歪んだ私の顔が映っていることでしょう。珠子さんの顔を縛った縄が、愛子さんの耳殻の中央から目の下、鼻の上に新しく喰入って、結び目の先が下張れの頬の上にぶらぶらしていました。

大丈夫よ。私はそう大声で言ってみてやりたかったのですが、お乳が痛くて痛くて、息を吸うのがやっとで、呻き声しか出はしません。今迄耳に響いていた轟々という滝の音が次第にすうっと遠退いて、何か耳の底で別の物音がキンキンとひっきりなしに響きます。耳鳴りです。同時に夜目にも白い愛子さんの大の字を描いた身体がぼやっと霞んで行きます。肩や腕やお乳の痛みが嘘のように感じられなくなり、暫く（と言っても極く短い間だったのです）私は恍惚とした気持で吊下っていききました。身体が天空に舞い上るような、うっとりとした気持、何か鼻に良い匂いを嗅いだようにも思いますが、何んだかはつきりわかりません。

頭と胸に冷たい水をかけられ、私はうつすらと意識を取戻しました。耳許がガヤガヤ騒がしく、私の身体は何か固い台の上に仰向けに寝かされてる様でした。夢現の状態で、私はふと滝壺から流されてどこか下流の方で救助されたのだと思いました。周囲の物音がだんだんはつきりして来て、アラ、あの滝壺の音、と気附いて無理に目を開けた途端、再び冷水が私の顔と胸にかけられ、鼻と口



からガバツとお茶碗半分程の水を飲み込んでしまいました。私は固く目をつぶったまゝ叫びました。

「もう水をかけないで下さい。すっかり蘇生しましたから。」身体はすっかり冷くなっている、歯が恥かしい程ガチガチ鳴るのです。私が載せられていたのは、夜中に持ち出したあの梯子で、頭と足の先が切株に載せられ、両手は梯子の裏で後手に縛られ、落ちない様に両脚と胸も梯子に結むすきつけられていました。

縄を解かれながら顔をのけぞらせて頭の先を見ますと、青草の上に田鶴子さんが、ズロース一枚の裸で立っているのです。顔が合いそうになると彼女は恥かしそうに下を向いてしまいました。腕は背中(うで)に廻まわって居ます。きつと縄か紐で手首を括くわられているでしょう。

豊かに盛り上った胸の隆起はユデ卵の白味のように、その白さの上に、晩夏の陽光が遠慮会釈もなく照りつけているのです。彼女は五尺三寸五分、十六貫五百という、私達の間では飛び抜けていゝ身体を持っていました。

私は一瞬、あのおとなしい田鶴子さんまでが逃亡を企てたのかと不審に思いました。しかし、これは一体何としたことでしょう。彼女の先には喜代子さんが、そして愛子さん、珠子さんまでもが後手姿で立たされているのです。一番向うで文子さんが滝壺での愛子さんに、そっくりの姿勢を取らされています。その前に立った斎藤さんは鉛筆をなめながら手帳に何か書込んでいます。私の顔に水をかけたガタさんが棒を手にして、手足を拡げて立たされた文子さんの後へ廻りました。

「よしッ、今度は後。」

「後向きになれッ。」
ピシリッ。



文子さんが躊躇していると、節くれ立ったごつい手が荒々しく肩先へ延びました。

「一つもないなあ。」

近附いた斎藤さんが、恥しがっている文子さんの濃い黍餅色の粗肌あらだまを、肩から背、腰と見て行き、「あつたあつた。」と言いながら鉛筆の先でお尻の膨らみをつくのです。そこには大きな黒子が鮮やかに見えていました。文子さんのお尻の鉛筆の当った部分の肉が摺

鉢型に柔かく窪んでいるのが私のところからよく見えました。

足の裏まで調べ上げられた文子さんは又、ビシリッ、とお尻を叩かれました。それが終りの合図なのです。ガタさんは直ぐポケットから白布を取り出して文子さんの両手首を腰の裏で縛ってしまいました。今度は啓子さんが後手に縛られた白布を外され、棒で撲たれながら斎藤さんの前で両手を水平に伸ばしました。ガタさんはその布で私を後手に縛りました。それは見返布みへしぬのと言ってワイシャツの釦と釦穴をつける所に当てる、長さ四十五糎、巾五糎程の布なのです。

全身の黒子や痣や種痘の痕まですっかり調べ上げられ、両手の指紋を取られ、最後に足型まで取られました。足の裏に墨を塗られて片足ずつ白紙の上に乗せるのです。私達はまるで踏絵をさせられる女キリシタンのように、後手に縛られ、ズラリと並んで一人ずつ呼出されました。足首を邪慳よこしまに持ち上げられて足の裏に筆で黒々とたつぷり墨を塗られる擦ったさ。それでも私達は後手に縛られているので、身をもがくことさえ許されないのでした。

「さ、これならお前達が逃げ出して、たとえ顔を焼き潰してかくれていたって、俺達はその気になれば、みつけ出すことが出来るのだぞ。」

斎藤さんはそう脅して私達を睨み附けました。

田鶴子さん達は縄を解かれ衣服をつけることを許されましたが、私と愛子さんと珠子さんはそのまゝ納屋へ引立てられ、土間に引据えられました。斎藤さん達は入口の縁えんの上に向き合って坐り、私達を裁判しました。誰が主として逃亡を計画し実行したか糾明されたのです。私はお便所へ行こうと自分が珠子さんを誘い出したことにして全責任を負いました。珠子さんが怖れでぶるぶる震えているのが可哀想でしたから。私達はビシビシ鞭打たれ本当の事を白状せよと責められましたが、最初から終いまで供述が変らなかつたので斎藤さん達は信用しました。

「お前達は皆有罪だ。昭子が主犯で珠子が共犯。愛子は二人の計画を察していたながら引き止めなかつた。一番罪の軽い者から順次に処刑する。コバ、愛子を轡吊りにしてやれ。」

「オイキタ。」

ツーと言えはカーという言葉がありますが、斎藤さんの巾着縛りだの轡吊りだのという言葉が、そのまゝですぐ通用する此の人達は一体何なのでしょう。鉾山では今迄ついぞ見掛けたことのない人達です。斎藤さんは私達の知らない別の仕事を何か持っていて、その面で手先の様にしていた人達なのだろうと想像しましたが、何れにしろ彼等の言葉つきから察して相当親密な間柄に違いありません。コバさんは家の中から発電小屋で使った針金の余りを持って来ました。

「愛子、舌を出せ。」

愛子さんは口をあけて可愛い桃色の舌を出しました。その根本の方をコバさんが針金で二巻、三巻、と縛って行きます。私は愛子さんのあの小さな白い歯がコバさんの指を嚙切りはしないかとハラハラしながら見て居ましたが、流石の愛子さんもいじめられ続けですっかり反抗心を失ったと見え、じっと目をつぶったまゝ舌を出して素直に括られています。

「よし、引っ込めろ。」

愛子さんが唇を合すと薄い小さな唇の両端から針金のはみ出ししました。背後へ廻ったコバさんはそれを三、四回、ぐるぐると後頭部から唇へ廻し、最後に力一杯キュウツと引っ張って後頭部で固くねじりました。

そのまゝ愛子さんは土間の梁に吊上げられました。太い丸太の梁から粗い藁縄で吊されている愛子さんの身体は完全に近い垂直でした。僅かに頭部がやや前に傾いて居ましたが、爪先が私達の頭上でビーンと下を向いていた位に高々と吊下げられているので、かえっ

て顔はまともに見える位です。

私だけではなく、文子さんや啓子さんまでが、一寸抓らせてよ。などと冗談を言っていたあの柔かな下服れの頬は、細い針金で横に割られて頬が四つに分割してしまった様です。額の真中と目の下には昨夜の縄の跡が赤く残っているの、一層いたわしく見えました。両脚も縛られて身動き一つ出来ず。勿論顔をうつむけることも出来ないのです。呻き声以外は声も立てられず、そのまゝぶら下っている愛子さんの目からみるみる大粒の涙が溢れて来しました。

愛子さんを吊し放しにして斎藤さん達は、私と珠子さんを發電小屋の方へ引き立てました。そこは低地なので小川を挟んで荒れ果てた田圃の跡があちこちにあります。その一つは、まだこれらの田が荒れていなかった頃から灌漑用水の溜りにでも使ったのだらうと喜代子さんが言っていました。四角い田形に区切られたまゝ、かなり深そうな泥沼になって、所々浅いところには野芹が密生していました。私達はその畦に坐らされて麻紐で縄を掛け直されました。「こゝへ入れ。入らないとほうり込むぞ。」

縄尻をガタさんとコバさんに取りられ、私達は諦めてそこへ入りました。水は生温くて濁の水みたいで冷くはありませんでしたが、ぶうんと泥くさい臭が鼻をつきます。足の先が気持ち悪くぬるぬるしてみるみるうちに、足首、脛、膝と柔かな溝泥の中へのめり込んで行き、どんより濁った汚水が膝頭まで来しました。片足に力をいれるとそのまゝ傾いてゆきそうなので両足に均整をとりながら珠子さんを見ると、私より背の高い彼女もずるずると、泥の中に立ったまま、のめり込んでいて、私よりも一層柔かい所に立たされたのでしょう。白い太腿が半分近く泥に埋っています。水の中には子負虫の様なやら、蛆虫に長い尾が生えてる様なやら、みみずを思いきり小さくした様なやら、色々気味の悪い虫が一杯泳ぎ廻っています。私は途端にゾオッと身内が鳥肌立ってきました。

右手の畦に田鶴子さんと啓子さん。左手の畦に喜代子さんと文子さんが坐らされました。もんぺを脱がされてズロース一枚のまゝ素足を水中に入れ、一齊にバタバタやらされました。小さな三角波が無数に立って私達の方へ打ち寄せてきます。私は股の方まで上ってくる泥の波を少しでもよけようと思いますが、こらえている足の拇指と第三指の間を泥が、にゆるにゆると通ったかと思うと、腰のあたりまで、泥に浸ってしまいました。おへそのところへ汚い泥水がひたひたとひたっています。もうこれ以上、泥の中にめり込んだら窒息して死んでしまうかもしれません。そういった恐怖の心が兆すと後手に縛られているという心細さで気が顛倒してしまって、右足を踏み込むと同時に、肩から胸を泥に浸して右側へ倒れてしまいました。

私は夢中でもがきました。とたんにズブズブと水の中に右半分頭が沈みました。後は無我夢中。水の中で溺れかゝって何回も泥水を飲みました。

後手の縄を背後から掴まれて引上げられた時はホッとしました。お乳の上と下に濡れた麻紐が喰込んでとても痛かったのを覚えてます。目をあげると、臉が濡れて輪郭のぼやとした視界に、後手の縄を掴んで引上げられている珠子さんの姿が目に入りました。膝から下は泥で真黒く汚れ、ムッチリした固肥りの太腿にベッタリと青い藻がついています。名前の通り珠の様なお乳の上と下に麻紐が胸内に埋って喰込んでいます。畦の上に投げ出されると珠子さんの蒼ざめ濡れた顔がぐったりとこちら向きになりました。口の端と額の所に気味の悪い小動物が三、四匹蠢いていました。

私は近くの楊の根本に坐らされて縛り附けられました。腿の上に水を吐くと、たった今、胃から吐いた水の中に小さな赤い虫が二三匹動いているのです。お腹の中にはもっと居るに違いありません。何というヒドイ目に遇わされなければならないのでしょうか。

目の前で珠子さんが、い
ろんなことをされました。
ぐじゃぐじゃの泥の上に跪
かされ、お河童の後髪を搦
んでぐいぐいと泥の中へ顔
を押附けるのです。後手に
捻り上げられた腕がお尻よ
りも低くなった位でした。
尤も珠子さんのお尻は私達
の間では田鶴子さんに次い
で大きかったのですが。

次は引き起して仰向けに
させたり、横向に捻伏せた
りして身体に泥をまぶしつ
けました。それから泥の上
に大の字に寝かせ、首から
下にすっかり泥を盛り上げ
てしまいました。その上、
田鶴子さん達四人をハダシ
にして立たせ、暴れられな
い様にしておいてから、み
んなで寄ってたかって、肉
附きの良い珠子さんの鼻翼をつまみ上げて鼻腔を大きく開かせ、眉
間の下まで鼻がふくれ上る程泥を詰込む残酷さです。可哀想に珠子
さんは口を開いてヒイヒイ泣きながら、やっと息をしていました。
「こう泥まみれじゃ、どうにもならん。珠子、川の中へ入って自分
で泥を落せ。」

珠子さんは泣きながら起き上って歩き出します。私も楊に繋がれ



ていた縄を解かれ、後を追って引立てられました。真黒く泥で汚れ
た豊満な丸いお尻が、ブリッ、ブリッ、ブリッ、と左右へ揺れる度
に、泥の滴が、汚れた後太腿やふくらはぎに滴り落ちるのでした。
浅い川水に首までつかると、珠子さんは直ぐ、元の真白な美しい
裸身に戻りました。ガタさんが珠子さんの両脚を別々の麻紐で縛っ
て、流れに逆らって十米位、その紐を引張って歩きました。うっか

りすると足を取られる程流れは早いので、その間一杯の空気も吸えないのでしよう。縄を手繰りよせ、濡れた髪の毛を驚嘆みにされて顔を起されると、「ハア、ハア、ハア」と苦しそうに大息をついて、一杯開いた口で呼吸をしています。丸い肩が二寸も上下している様に見えました。泥の黒点は洗われ崩れていきます。呼吸が平静に戻るとガタさんは又縄の端を掴んで珠子さんを流し、後からついて行きます。

「コバ、代って呉れ。水が冷くて足がしびれてしまった。」

北海道の少し高い山は真夏でも雪がある位ですから、そこから流れて来る川水の冷たさは想像以上のものです。珠子さんはその水に全身を浸されたまゝ何回も流れを上下させられ、氷の様に冷えきってぐったりとなつてしまいました。水の冷さに加えて、鼻、口から、それを飲み込む辛さ。水底の石に肌を削られて、その傷口に冷水のしみる苦痛。想像しただけでも珠子さんの受けた拷問の程が偲ばれます。

ぐったりとして川岸に寝かされた珠子さんの全身の擦り傷からにじみ出た血が、まだ乾かない水にぼやけて肌の上をひろがってゆきます。

今度は私の番です。母屋の窓の横に大きな穴が掘られ、穴底に杭を打ち込んで、私は立ったまゝ手足を縛り付けられました。それから顎まで土で埋められました。晒首にでもされた様に、私の首だけが土の上に出ているのです。勿論身体は全然動かせません。背中その後には小さな杭を打たれ、私の髪は縄で束ねられ、その杭に結びつけられているのです。厭でも顔が斜め上に向きます。斎藤さんが私の前に立ち、泥だらけの靴の先で、頬、口、鼻の下、と私の顔をぐいぐい押すのです。強い力でした。それから屈み込んで、どうすることも出来ないでいる私の耳朶や顎に煙草の火を押し当てました。

「熱、熱、ヒートツ。許して下さい。もう逃げたりしません。ヒイ

ツ。ヒートツ。熱。」
「コバ、木の枝の小さいのを持って来て、昭子に目張りめかんねと口門くちんをしてやれ。」

又しても私は斎藤さん独特の言葉の怖しさを思い知らねばなりません。コバさんが小さな枝を私の両眼の上下の瞼の間に張渡し、それよりは大きいのを歯と歯の間に、口を一杯に拡げさせて渡し込みました。

「当分、昭子は罰として、こゝへ生埋めにして置く。その間、便所で小便をしてはいけないぞ。必ずここへ来てしろ。それでは残りの時間、仕事に掛け。」

皆立ち去ってしまいました。逃亡を企てたというだけでこんなにまでひどい仕置を受けなければならないのでしようか。泣き悶えながら私は札幌の母のことを思いました。一寸した財産こそ遣して行って下さいましたが、父には支那事変中に死別れ、出征した兄は沖繩に居た筈ですし、弟にも先立たれているのです。たった一人残った私の行方を母はどんなに案じていることでしょうか。でも、私が今こんな惨めな姿にされていることを知るよりは、只行方を心配しているだけの方がどれだけ良いか解りません。私が女学校へ入ったばかりの頃、あの家族が揃って楽しく東京で暮らしていた時に、数年後の私のこんな姿を誰が想像出来たでしょうか。

三日間、私は首だけ土から出して埋められていました。一日に三回か四回、愛子さん達が連れて来られ、斎藤さん達の監視の下に、食事を運んで来たり、水を持ってきたりしました。皆、気の毒そうな顔をしていましたが、文子さんだけは目をキラキラと妖しく光らせ、顔を紅潮させてじいっと私を見ているのです。愛子さんが始めて鞭打たれた時にもあんな顔をしていたのを私は思い出しました。一番無邪気で子供っぽい人だと思っていたのに、彼女は酷い目に遇っている同性の身体を見て気の毒とか哀れとか、いう気持が起らな

いのでしょうか。他の人が余り晒者になつてゐる私のところへ来たららないようなのに、彼女だけは好んで食事を持って来ました。口の中へ入れられた御飯を咀嚼している間、木片で、腐つて柔かくなつた頸の横の土を分けて、私の裸の肩を露出させ、感に堪えた様な表情で、その肩を木片で突いたり叩いたりしました。終いにはバケツの水を私の顔にざあざあ掛ける様になりました。顔の汚物を流してやると恩にさせて。

愛子さんは一番私に親切にしてくれました。その優しい心根がとても嬉しかったのですが、同時に文子さんに苛められることも不思議に私に悦びを感じさせました。私にはこれも一種の愛情だと思えました。女には誰かに愛されるということが最大の喜びなのです。

北海道では八月の末になるともう朝早く吐く息が白く見える様になる位です。土の中に立たされている私は、朝、目が覚めると全身が冷く冷えきっていました。お腹を悪くして、私は一時間置き位に軟便を洩していました。それはそっくり私のお尻に附着します。おしっこも垂れ流し。運悪く又丁度此の時月の物が訪れていました。何のことはない私は汚物の中に立っていた様なものです。それは湿気が多いので、朝、土よりも酷く私の身体を冷えさせました。三日目の終り頃には腹痛はひっきりなし。衰弱は加速度的に激しくなり、土の上に出している首も、ぐったりとして頸が土の上にのるのです。

丁度その頃、トラックが来たのです。運転手さんは土から弱りきつた首だけ出している私をじろろ見ていましたが、斎藤さんに何か言われて空車のまゝ走って行き、何時間も経たない内に又戻って来ました。なんと彼はカメラを持って来たのです。真先に私が撮されたことは言うまでもありません。それから田鶴子さん達が一人一人写真に撮られたようです。穴の中へ埋められたままの私にも気配でわかりました。しかし、どんなポーズでどんな写真を撮られてい

るのかは、わからう筈ありません。只、彼女たちの悲鳴や男たちの怒鳴り声を聞いて想像を逞ましゆうしているばかりでした。あとで聞くところによると、このときの写真は全身の黒子を調べたのと同じような意味があるとのことでしたが、面白半分に写したとは思えません。

その翌日、私は漸く赦されました。スコップで周囲の土を掘り返され、次第に身体を露わさせられて行くと、急に腰の周りの汚物が出て来ました。その時の恥しさは今でも忘れることが出来ません。皆が穴の上から見て居たのですもの。後手にまだ杭に縛り付けられ腰からは泥と汚物に塗れたまゝで、太腿から下はまだ穴の底に埋まっているという所で又一枚撮られました。

すっかり泥を除けられ手足の縄を解かれると、私は滝壺へ連れて行かれました。米俵の荒縄で両足と髪を括られ、両手も後手に括られました。後手の縄は例の長い竹竿の先につけられました。竹竿は斜めに立てられ、私の身体は爪先立ちになつたまゝ、滝壺の方へ歩かせられました。髪も上に吊り上げられているので顔は前を向いたきり動かすことも出来ません。竿が前に倒されると私の身体はやつと自由になつて、水の中の深みへ徐々に浸ってゆきました。身体が水面下に没したかと思うと、竹竿を引いて上げられ、上ったかと思うと、又、水の中につけられ、吊り上げられ、又つけられました。そんなことを数回繰り返されました。

「もう綺麗になつたろう。上げてみる。」

私の身体は釣られた魚のように竹竿に吊られて、爪先立ちで叢の中へ下されました。ドヤドヤと男の人達が近附いて来ました。先頭の運転手さんはまだカメラを持っていました。竹竿にぶら下げられた私の姿も何枚かの写真に撮られたに違いありません。

「ワアッ。まだ臭えや。親分、こいつは滝に打たせなけりや駄目ですよ。」

手足を縛られたまま、叢に俯伏せになっている私の身体をくくん、嗅いでガタさんが言いました。

五米の崖から落ちて来る水の塊に全身を打ちのめされる痛さ。骨まで砕けてしまったかと思うほどでした。もう二、三本の竹竿が伸びて来て、私の身体は滝の中でひっくりかえされたり、横向きにされたりしました。顔を上向きにされてまともに滝に打たれた時は、息がつけぬばかりか、鼻から口から容赦なく水が入ってきて、むせかえる辛さは言語に絶するものでした。

今度気がついたのはお風呂の中でした。熱湯に茹でられて、腰の周りと肩から上の毛穴という毛穴から、身体に沁込んだ汚物が噴き出て悪臭を発するので、皆鼻をつまんでいます。二回お湯を取換えるのぼせてふらふらになってしまいました。最後に頭から何杯も、悲鳴を上げる程熱いお湯をかけられました。私は疲れきった両手を一生懸命伸して掌で全身を支えていましたが、その恰好が面白いと言つて、そのまゝの姿でその辺を這わされ、写真を写されました。それが最後のフィルムだった様でした。

私はすっかり衰弱していたので一週間も寝たきりでした。その間に仕事はどんどん進み、やがてさしものキヤラコも肩布の山を残してすっかりなくなりました。私達は今度こそ札幌へ帰れる。怖い鞭の懲罰から解放されると喜び合いました。

仕事の終わったその晩。田鶴子さん、愛子さん、喜代子さん、珠子さんの四人が斎藤さん達の部屋へ呼ばれました。そして翌朝真蒼になって帰って来ました。私達は皆黙っていました。前の晩は又運転手さんが泊って、男の人達も四人だったのです。

「昭子さん。軍から次の命令が来るまで此のまゝでここに居るんですって。」漸く田鶴子さんが力のない声で言いました。「そう」と返事をしかけた時、珠子さんがひきつれた様な声を出しました。

「貞操を捧げるのも軍の為なんですって。ホホホホ。だから姉さん

自殺なんかしちや駄目よ。」

私達はビクツとして一齊に愛子さんを見ました。愛さんは下を向いたきり顔も上げません。

翌晩は田鶴子さんと啓子さんと文子さんが呼ばれました。啓子さんと文子さんが最後に残っていた人でしたし、田鶴子さんは肉体的に一番豊満だったからでしょう。

私達にはワイシャツ作りに代る仕事が待ち受けていたという訳です。逃げ出さない様に私達は夜寝る前に手足を縛られました。寝巻姿になって両足を伸し、両手を腰の後で重ねて蒲団の上に坐って待っている。ガタさんとコバさんが一人宛麻紐で縛って行くのです。それからその日の犠牲が三人か四人、連れてゆかれることがあります。そんなとき、後に残った者は、思わず顔を見合して身憐いするのでした。肩布を使って私達の締めつける紐を作られた日がありました。それは長方形の布の端に紐をつけたような簡単なものでしたが、前布には飾りに房と縫い取りをつけました。

私は身体がひどく衰弱した上、三日間も土中に埋められ放して雨に打たれたりしていた為、肌がぶよぶよになって、色も艶も全然ない不気味な白さで、斎藤さんに、「人間のもやしだ。」などと言われた位です。此の紐を締めさせられたのは大分後のことでした。

私と一緒に締めたのは文子さんと啓子さんでした。文子さんは四尺九寸、十一貫五百位で私に次いで身体が小さく、肌も黒くて粗い方でしたが、顔が可愛く、声も銀の小鈴を振る様に美しかったので、斎藤さんが好んで呼んでいました。禪一本で梯子を降りる私達を男の人達は下からじっと見ていました。座敷ではなく納屋へ連れて行かれ、行くといきなり斎藤さんが、文子さんを後手に縛り上げてしましました。余り手早く縛り上げましたので、啓子さんも私も、何のことかわからず、ぼんやりしていました。驚いた文子さんが戸口の

方へ逃げ出そうとしましたら、斎藤さんの右足が伸びて、文子さんの出足をすくったので、それはきれいに文子さんは、頭を下にしてひっくり返りました。斎藤さんは足首を揃えて括り、背中をエビのように曲げて頭の先の方で床につけて、足で踏まえました。文子さんの足先はすうりと伸びて床に押しつけられています。私達は次は



自分の番ではないかと、恐ろしい気持ちで見えていました。他人の責められる姿は快く見えても、自分が責められ、ばやはり痛いのでしよう。文子さんの顔は苦痛に歪み、血が頬に上ってみるみる紅潮して来ました。斎藤さんは心地良げにじっとそれに見入っています。文子さんのコミカメには太く血管が浮き上りました。頬や額は血が噴出る程真赤になり、それでもそのまゝで必死にこらえています。下敷になった手首が痛いのでしよう、盛んに上体を右へ左へよじっています。暫くして、

「おい、ガタ、一寸手を借せ」

今まで私達の背後で監視するような恰好で突っ立っていたガタさんが、「合点だ」と後手に縛られている文子さんの二の腕の裏に手を入れて、ヒョイと文子さんの上体を起しました。斎藤さんは素早く縄をさばいて膝の裏へ縄をかけて首と連ねてしまいました。両方のお尻が高々と帆立舟のようです。文子さんの首をぐいぐい床に押えつけ、胴体を巻く様にして肩まで入れると、手早く腕縄をほどこい

て両腕をぐるっと太腿の後へ廻し、脛を固く縛りました。文子さんの顔は自分の両股の間へかぶるようなので、お腹がどこかへ行ったように身体全体が曲っています。斎藤さん達は、文子さんのお尻を押えついたり持ち上げたりして、縄を締め直してゆきました。文子さんの身体は、まるで荷造りされたように、二つ折りになりました。

私達は真蒼になって見て居ました。文子さんの全身は真赤になったかと思うと、汗がにじみ出てきました。両膝の間からお尻と同じ高さくらいに出た顔は、目は吊り上り口許は苦痛にゆがみ、汗の粒が一ぱいうかんでいます。斎藤さんは小さな鼻をつまんで、振った、持ち上げたりして楽しんでます。

ガタさんは文子さんのお尻の上に乗って更に締めつけようとしています。これには、今までこらえにこらえていた文子さんも初めて「ひい、ひい」と悲鳴を上げました。文子さんの身体は腰のところまで二つに折れてしまいかもしれません。やっと、こゝで斎藤さんが声をかけました。

「もう許してやれ。」

縛しめを解かれて土間の上に寝かされた文子さんは、ぐったりとボロボロでも投げ捨てたように転っていました。

此の怖しい「逆さ海老責め」の拷問を見せられたことが再び私に逃亡の決心をさせました。放っておけば私達は皆廃人か不具にされてしまいます。いや、もっと悪ければ全員斃殺しか、自殺してしまいかもしれません。まさか軍が私達をこんなに無茶に扱う様斎藤さんに命じている筈は絶対にありません。訴え出れば斎藤さん達が罰せられ、私達は助け出されるでしょう。そのとき私はそう思いました。

たまにトラックが来るあの道は千米も先の本道から別れた所からずっと廃道なのです。それはきつと三年前からそうなのでしよう。

廃道の行停りが此の家なのです。悪いことに此の道の三分の一近くは斎藤さん達の部屋の窓からすっかり見通しです。裏は崖。右手の荒地の先は道もない山で、私の丈よりずっと高い虎杖や路や熊笹が密生していて、とても逃げおそれそうにもありません。前の小川に沿って逃げるよりほか途はないのです。併し入口が一つしかない此の家をどうやって脱出できるでしょうか。

名案が浮びました。三日後に私はお風呂を焚き付けていましたが、ふと便意を催して御不浄へ入ったのです。しやがんでいる私の目に汲取口の蓋が少しずれているのが見えました。身体の小さい私なら、あそこから這い出すことは、どうにか出来そうです。併しどうやって降りたら良いのでしょうか。こゝのお便所は大きな箱みだいにノッペラボウで、東京で見慣れていたお便所みたいにコンクリートの縁がないです。冬中、下肥を溜めておく為に大きく作ってあるのだと喜代子さんが教えて呉れましたが、この比較的大きな汲取口が今の私にとって唯一の逃げ口です。しかし、うっかりそのまま下に降りたら私は又汚物の上に首だけ出して居なければなりません。が、その時私はお便所の入口に立て掛けてある材木のことを思い出しました。

斎藤さん達が入浴し田鶴子さんが入り、次が私の番です。持金は全部ポケットに入れ、行き掛けに私は風呂上りの斎藤さん達が花札に興じていることを確かしておきました。手頃の板を持ってお便所へ入り、その先で汲取蓋を裏から突くと簡単に外れました。上から下へ汲取口の方へ斜めに渡した板を、私は四ッ這いになって頭の方から渡って行きました。口を抜ける時、お尻がちよっとつかえました。が、いじめられ続けてお尻の肉が大分殺がっていたのは、かえって私の為に幸いでした。荒地を大廻りして小川の下流に出、浅い所は流れに入り、深い所は岸辺を伝って、私はどんどん走りしました。命懸けです。弱った身体の割にスピードは出しました。

コッポリと視野が開けて刈入れの済んだ広い水田に出ました。遠くの方に農家が見え、その手前で二、三人の人が佇んでいました。あそこへ飛込んで救いを求めよう。二三歩、その方へ行き掛けた私は慌てゝ小川に戻り、岸の楊に身をかくしながら又下流へ走りました。食糧を買いに行った時、斎藤さん達がどんなことを言っているか解りません。此の辺の農家の人達には姿を見られることさえ危険かもしれないと思ったのです。

私は走れるだけ走って、すっかり日が暮れきってしまったぬ内に駅のある小さな町に出ました。函館本線の〇I駅でした。ここから札幌までは汽車で一直線です。小娘の迂闊さで斎藤さんの言葉を信じきっていた私には、車内の空気は意外なほど平和でした。最悪の場合札幌や小樽では市街戦さえ演じられて居るかもしれないと覚悟して居たのですもの。札幌の家々は明るい灯火を戸外に洩らしていました。家の戸を開けると母が出て来ました。

「昭子、お前、どこか身体でも悪くしたのかえ。」

母の顔は心配そうでしたが、行方不明の一人娘がひよっこり帰って来たという驚きと喜びの色は少しもありません。RI鉱山の動員学生が昨日帰札したので、私達も近く帰ると思っていたというのです。終戦間もない日に道庁から斎藤さんの名で通知があつて、終戦の為事務所の仕事に暇になったので、前から申込まれていた農家に廻す。と二月分の援農の報酬として僅かながらお金まで前払いで送って来たのだそうです。勿論戦争は終っているのです。私は呆然としてしまいました。

その晩から私はどっと床に就いてしまいました。高い熱が出て夢現の状態が随分続きました。私達が素っ裸で斎藤さん達の鞭に追いつて立てられている夢や逆さ礫にされたり、水責めにされている夢を見ました。そして、夢の中でも又多少意識を取戻してからも、早く愛

子さん達を救い出さなければとそればかり思っていました。漸く熱が引いて意識が明瞭になった時、枕許に愛子さんが坐っているのに驚きました。

「昭子さん有難う。貴女が逃げたので斎藤さん達、必死で後を追ったけど捉えられなかったのよ。そして私達を放り出してどこかへ逃げてしまったの。私達、昨日札幌へ帰って来て道庁へ行ってみただけで勿論居やしないわ。終戦の時、軍から道庁へ移管されたキャラコをトラック一台分横領してから、ずっと姿をくらましているんですって。きつとあのシャツ、札幌や小樽の闇市に流して儲けたに違いないわ。私もどうも軍隊でワイシャツを使うなんて変だと思つてたわ。」

「やっぱりそうだったの。」

「私達、昨日約束したのよ。若し赤ちゃんが出来ても、その一人の責任にして今度のことは絶対他人に喋らないって。そうじゃないとこんな恥かしいことが公けになったら、お嫁入りや何かで皆困るでしょう。昭子さんも約束して呉れる？」

「ええ」

心配した様に赤ちゃんは誰にも出来ませんでした。半年も経たない中に、あの身体の大きな田鶴子さんが結核に罹つて、あつという間に骨と皮ばかりになって亡くなってしまわれました。お葬式の後で私は愛子さんと狸小路の闇市をぶらぶらしました。

「サア、今時珍しい純綿のワイシャツだよ。これだけの物は北海道中探したって絶対みつかりっこないよ。」

若い闇屋の売り声を聞くと、私達はその方を見向きもせず慌てゝ逃げだしてしまいました。



マゾヒズムへのいざない

(第二回)

天野 哲 夫

最初私はこの一文をしたためるにあたってまずどのような題名を附したらよいものか、すこし許り迷いました。題名なぞすくなくとも此の場合さして重要なものではないと思つたのですが、やはり多少は氣をつかうものです。私自身の氣持から言えば余計な粉飾はさけ、ただ単に「マゾヒスト」とするつもりでした。「マゾヒズムへのいざない」といつた一種の物欲しげな字句は出来る限り避けるつもりでした。第一、私の表現力からして、他人をしてこれに「いざなう」だけの力は不足だと思ふのです。私が書けることと言えば一人の現実に生きるマゾヒストの自分自身をみつめる名状しがたい一種の感慨であつて、それ

以上の専門的分野にわたる研究や強固なる信条にもとずいての説得なぞ思いも設けぬことで、やはり「マゾヒスト」とだけするのが最も妥当だと思つたのですが、それをしも「マゾヒズムへのいざない」とあえて題名を附せざるを得なかつた激しい渴きを私は如何ともしがたかつたのです。いざなわれゆくのは私自身であつて決して読者諸賢ではない。これはあくまでも私の一人よがり、それによりかり自分自身の感情だけに甘えようとした一種の責任のがれの言い草、それが「マゾヒズムへのいざない」という題名を選ばしめたのです。ともあれ、私は強いて平静をよそおいつつ先を語りつづけることにします。

遠くすぎ去つた昔、記憶はうすらぎ、それはきれぎれに千切れ、何のつながりもなくそれ故に玉のようにその一つ一つが輝きをまして私の頭の中で生きているイメージの数々、遂には霞がかつた模糊とした彼方に消え去つて帰らぬ昔、トルストイの『最初の思い出』という一文から抜き出してみよう。

わたしはいつ始つたのだろう。いつ生き始めたのだろう。……ほんとに私は、見、聞き、理解し、話すことを学んでいた時、ねむり、乳を吸い、胸に接吻し、笑ひ母をよるこぼせていたとき、生きていなかったのだろうか。私は生きていた。きわめて幸福に生きていたのだ。現に私の生きる

たつきとまっているすべてのものをその時わたしは身につけたのではなかったか。それこそ多くのものを、それこそすみやかに身につけ、私は残余の全生涯においては、その百分の一も身につけはしなかったと言えるくらいではないのか。五才の子供から私までは、ただの一步だ。赤子から五才の子までの間には、恐しい距りがある。胎児から赤子までの間は、深淵だ。ところで非在から胎児までの間をへだてるのはすでに深淵ではなく、捕捉を絶するものだ。

いやそれどころか、空間とか時間とか原因とかいうものは、思惟の形式であって、人生の本質はかかる形式の外にあるのだ。が我々の生全体は次第次第に己にかかる形式に従はせて行き、やがて再びそれから解放されるといふところにある。

私は幼なかりし頃のことどもを、いろいろと思いかえしてみる。原因を求める為ではない。精神分析を行うためではない。為すことあらんと編集された私の過去は既に私のではない。無整理のまま散然と散りばめられた私の足どりこそ私を今日のように生かしているずっと幼い頃、私は体格の良い、愛嬌があつてひどくいたずらな子供だった。それだけでいい、もうそれ以上の説明は出来ようがない。この子供の状態そのままが、愉快で応擧なよく人に可愛がられるその子供のすべてが

原因なのだ。錯雑した意識の中のそのどれか一つだけがきわだってきたということ。それほど騒ぐ必要はない。外面、無邪気で陽気な坊やが、後年マゾヒストになったということは、異常な事例ではないのだ。一体異常さというのとはどんなことか、私にはどうしても理解出来ない。それがありうるとすればそれは人間自体、そのものをこそ云うのではないのか。動機なぞありはしない。坊やが同じ幼稚園の女の児のうがいをして吐き出す水を手を受けて飲み干しながら、あわててそれを押し止める先生の顔をキョトンとした風に見上げたあの時の風景、今でもはっきり記憶に残るその時のことに動機はない。ただ飲んだ事実があるだけだ。何が彼をしてそのような事実をうましめたのか。それから先は頭の遊戯だ。こじつけにしか過ぎない。人間の行為や感情の動きを、すべて動機や原因によって規定する習慣を持つ人達はあわれむべし。人間の生命そのものが動機や一切の原因を規定し総てを内包することを人々は何故弁えようとししないのか。

私は冒険小説が好きでチャンバラ映画に猛獣映画の愛好者だった。その頃少年雑誌と言えど講談社から出てた「少年倶楽部」が殆んど全国を風靡し、他の雑誌のことは知られてもいなかったし、それを手にする子供はあまりいなかったようだ。今のようになんとも似た

りよったりの多くの雑誌の乱立はなく、選択の手段ひまがはぶけたということになるのだが、それにしてもあの頃の「少年倶楽部」は全く素晴らしい魅力を具えていた。目次を拡げてみよう。南洋一郎の「緑の無人島」大仏次郎の「花丸、小鳥丸」海野十三の「浮かぶ飛行島」吉川英治の「天兵童子」江戸川乱歩の「二十面相物」どれもがみな夢をはらみ希望を吹きこみ子供達を夢中にさせた。樺島勝一のペン画等をあかず眺めながらあの新鮮な活字の臭いに浸りきっていたあの時代こそまことによき時代だったと言えよう。私は決して特異児童でなぞありはしなかったのだ。すくなくとも最初のころは……。

何時だったか、たしか小学校四年生位の頃か、私の遊び仲間山中という医者の子がいた。全部の児童が丸刈にしていた中で彼だけが髪を長くのばしていた。お医者のお坊っちゃんであつたわけだ。ひどくまかせていてどこか女臭いところがあり大変に我儘だった。友達というものはお互の人格などというものによつて左右されるものでなく、本能的な嗅覚によつて選り出され、そこに一種の愛着を感じ合うようになるものだ。私は彼を尊敬していたわけではない。心の隅ではむしろ嫌悪をおぼえるようないやなところを感じていたにもかかわらず、私は彼とよく遊んだ。学校の帰り放送局の裏の空地の中を通る。広い

大通りやなにかのきまりきった道は妙に退屈なので、こうした空地や細い露地や時には低い塀などを越したりして帰る。その時、道連れは山中を加えて四、五人いた。私達は空地でランドセルを肩からはずし、石投げなどした。横たわっている黒いドラム罐がゴン、ゴン、と手応えのある重い響きを伝えた。コールタールが中には一杯つまっていた。そのうち山中がいきなりボタンをはずしだったのでどうしたのかと思った。小便するわけでもなくドラム罐の外側に附着しているコールタールの柔いかたまりを丁寧に塗りつけているのだ。私も又とつさに彼にならった。なんと軽々しいお調子者よ。真黒にそまったその先を皆にひけらかすとヤンヤの喝采、私は満足した。私は感じやすい子供だった。その場の空気をゴチなくすることを極度におそれる。「道化の花」を書いた太宰治のあの純粋なそしていたましいサーヴィス精神に心ひかれてならない。

山中は無茶なことをとつさにやる。そのときもそうだった。コールタールでは飽きたらず、あたりを見まわしていたが、そこにいい獲物を見つけた。ひよこだった。直ぐ近所の家のひよこだったのだろうが、二匹ばかり空地の中へさまよい出てピヨピヨ、ピヨピヨ、可憐な声をあげていた。山中は煉瓦を拾ってきて私を招いた。私はひよこを押さえにかか

った。手の中で柔い感触がさかんに揺れ動いてくすぐったかった。大きな煉瓦がひよこの上に擬せられ、そのままその上におかれた。煉瓦と敷石の間にもう空間はなかった。しかもそこには二匹のひよこがいたはずなのだ。彼と私と、それから他の子供達が皆かわるがわる煉瓦の上に飛乗っては下りた。昼下りの空地はしずかであった。

その夜、夜っぴて私は火傷のあとみたいに痛んでねむれなかった。コールタールのあとがまだのこっていた。コールタールはいたいね。私は秘密の、その痛みにしかし堪え抜いた。ひよこを虐殺した私は山中にならない、幼くしてサジストだったのか。そうじゃない。後年の私がそれを証明する。

その頃、同じクラスにひどく目立たない子がいた。かなりな低脳児だった。名前などまったく忘れてしまったが、その子のやせぎすの臆病そうなあの顔は未だに記憶にはっきりしている。お昼休みの時間、私は中庭の方から校舎と手洗場の間の細い通路を通過してグラウンドの方へ出ようとした。そこでばったりとその子にあった。その子はいつも一人であったし、その時のその子のおどおどした表情を見れば誰の身内にも一つの慾情が芽を出すだろう。私は意識はしなかった。ただ変に興奮してきて無言のまま近づいた。誰も見てはいなかった。私は脊骨をつくるなり、力一杯そ

の子の頭をなぐった。ぜんぜん力を加減することもなく……

私はその後の永い年月を通じてみて、此の時の異様な興奮が不思議でならない。私は決してサジストではありはしないし、石の下にひよこを圧しつぶしたことに一種の嫌悪をかんじながら、しかもその時その子の頭を力まかせになぐりつけたことには言い様もない興奮をおぼえたことは、一体何を意味するのだろうか。子供の意識というものはあらゆる方向へ、そしてその一つ一つに無限の傾向をひそませていくものだ。そして特にもっとも原始的なかたちでのサジズムが彼等の一時期を支配する、これは昆虫に対しての子供等の所行をみても分ることだし、そのことについては後で又述べたいとも思っている。ここで私は「暗い欲望」の中から次の一節を御紹介しよう。

その頃私は小学校の五年生だった。或る日の放課後学校の空地で近所の権原という男の子と私は上になり下になりしてふざけ合っていた。権原はたしか二級程の下の子だったと思う。とにかくその最中、それまでボンヤリとしてまだはつきりしたかたちをとらないまま私の意識の中にうずくまっていた一つの欲望が突然私をばげしく突き動かした。私は故意に下になり、私の胸

に馬乗りに跨った榎原のあどけない童顔を仰ぎみながら云った。

「ネッ、榎原君、こうしよう！」

「エッ、どうするの？」

「相手をどんな目に合わせてもいいってこと、……顔を足でふんづけたり、その上に跨ったり、とにかく相手が降参するまでやっつけるの」

「いやだあ、僕の方が弱いもの」

「だからさ、僕はそんなことしない。しかし君は僕にどんなことしたっていいってことにしようよ」

「うん、そんならいいや」

榎原は愉快そうに頷いてみせた。僕はそれで心臓がドキドキと高鳴り、頬がポーツと上気してくるのを感じた。よし、ではっ、うんこらしよ。力を入れて榎原を胸の上から振りおとそうとつとめてみせ、体をねじったりしたがそれもそういう素振りをしただけで、あくまで私は胸の上に榎原を乗せたままだった。そして榎原をはねかえそうと私が体をはねたりねじったりする度に彼の上半体は小刻みに前方へ移動し丁度私の首と顎のあたりに跨った格好になった。彼は一寸きまり悪そうに一、二度後へ腰をずらしたが、又私がずり返すのでとうとう私の鼻先へ彼のズボンのボタンが触れるか触れないかの状態になり、そして少しの間

二人共じつとしていた。私の鼻腔に酸っぱいアカじみたにおいが漂ってきた。私は心持ち首を上げ力めてそのにおいの中へ鼻先を突きこむようにした。彼は又腰をひねって後ずさりしようとしたが私の両手が下から彼の腰をしっかりと支えるように掴まえていたので、彼は思う通りに動けなかった。

「ネッ、榎原君」

「エッ。何なの」

「あのねッ」

と、私はネッという言葉に力を入れ、一口唾をのみ下すと思いついて言った。

「相手を降参と言わせる為には、そうだね、こうしよう。これをね、……中略……」

でもいいってことにしようよ」

「わーっ、きたない」

「だからいいんだよ。直ぐ相手は参るよ」

「でもおかしいな」

「僕はかまわないよ。やってごらんよ」

私は感動のために目先を血走らせていた彼はフフと甲高い声で笑った。

「よし。じゃ、やるよ。いいね、……どうだ、参らぬか。これでも参らぬか」

彼は私の襟首を小さい両の拳でしめつけてきた。

「参るものか、そんなこと位、なんともないよ」

「なんともない！よし。それじゃ……」

「わーっ、それは参った。でも君には出来っこないよ。やれないくせにおどかしたって駄目だ。やれるものならやってみろ」

「なに、僕やれらい。やってみようか」

「そんなこと言ったってダメだ」

「いったな、ではっ、これでもか」

私はとっさに顔をそむけたが彼はそうした私の様子に挑撥されでもしたかのようににかさにかかって……中略……てきた。私がいよいよ唇を固くすると彼もむきになって……中略……くる。

「降参か、どうだ、参ったと言え」

「まだまだ……」

私がそう言って唇をゆるめたとき、彼は……中略……こんだ。それはかすかに甘酸っぱい垢の臭いがした。

「まだ降参しないか」

私はかぶりを振ってみせた。すると思いがけないことがおこった。すーっと音もなく……中略……が感じられたのだ。私はハットして起き上ろうとした。その時すかさず彼は私の体の上から飛びのいて

「やーい、哲っちゃん、のんだ、のんだ」

と言って離れ立て、私が上体を持ち上げる頃にはもう手の届かない遠くへ走っていった。

この件は私にとって重要な意義を有する誰



下 着 通 信

山 下 眞 一

にならったのでもない、どんな本を読んだというのでもない。まだ何も知らぬ少年の心の底にしかし一つの智慧がおのずから吹き出したのである。私がマゾヒストとしての自覚と行動は、まだまだその後十年以上も経ってでなければ現れないのだが、それまでに至るかとの状態における不安定な意識とおそれと、又このような不測の行為は徐々に或る一つの形態に向って次第に加速度をましながらすべ

り出すのである。右の一件はたしかに現在の私自身を暗示する最初の出来事と言える。しかし、それはあく迄結果からみてそう言えるのであって自分より非力の子供に力づくでもそれを強いられたいという心の動きを示した少年の将来を、そのことだけでどのような風にも臆測は出来ないのである。私の意識の動きがそのような一件を生んだのは事実だが、少年時代のこうした不測の出来事は、ただ人

間一般の意識の面での一つの可能性を示したというに止まり、その少年（私）はその面だけでなく、まだまだ未知の広大な精神の分野をその心に蔵していた筈だったのだ。

（未完）

〔註〕引用文の中で公開が適当でないと思われる箇所は編集部に於て省略しました。

最近、新聞や雑誌に、下着についての記事が多く掲載されるようになり、すでに本誌にも阿川準氏等によって多数の例が紹介されて

おりますが、私の手許にも若干の資料がありますので、発表させて頂きましょう。

先ず最近のものから御紹介しますと、

パンツ百選 グラビア写真

「主婦の友」八月号二六頁——二七頁

「一口にパンツといっても、下穿から海水パ

ンツまで、種類の豊富なことは驚くばかり、最近では下穿にも色ものや模様ものが使われるようになり、子供ものも、大人ものの影響を受けて、多彩になってきました。サイズは大人ものでS（小）、M（中）、L（大）、O（特大）とあり、子供ものは年齢別、または二才ごとの寸法になっていて、体に合ったものが求められます」との書出しで婦人もの十五種、女児もの四種、男子もの七種、男児も

の四種、その他で、写真についていちいちと簡単な説明がしてあります。

夏の下着のすべて 「主婦の友」

五月号八七頁——九六頁

九十頁まではグラビア写真入りでスリッパ五種、ブラジャー六種、コルセット三種、ウエストニッパ一種、ガーターベルト二種、オールメンワン一種、肌着三種、パンティ十一種が紹介され、それぞれ簡単な説明と選

方や使用法、更に価格まで附記してあります九十三頁からは「ベチコート」、「下着の着方」、「特殊体型の場合」、「経済的に揃えるには」、「洗濯と手入れ」、「子供の着」
「男子の下着」と絵や写真を入れて文字通り下着のすべてについて詳述されています。

貴女スタイルをもつと美しく
する洋装下着 「主婦の友」四月号

三七八頁——三七九頁

これは主婦の友社代理部のカタログですがブラジャー、コルセット、ウエストニッパ、ガーターベルト、スリッパ、パンティ、キヤミソル、ベチコート等、多数の洋装下着がモデル装束の写真で紹介されています。

特集「優雅」エレガントな雰囲気
を作るアンダーウェア集「スタイル」

五月号九三頁——一〇〇頁

スリッパ四種、フレヤーパンティ一種、キヤミソル一種、ベチコート一種、スリーマ三種、ショーツ一種、パンティ二種、ブラジャー二種、ガーターベルト二種、スリー・イン・ワン一種、パンティ型コルセット一種、アメリカのスリッパ二種、等がすべてモデル装束の写真で紹介されており、価格も付記されています。

以上はすべて洋装下着についての記事ばかりでありましたが、次に和服の下着であるお

こしについての記事を御披露しましょう。

最近では和服を着る場合でも洋装下着を着用するようになり、雑誌におこしの記事が掲載されるのは非常に珍しいのではないかと思います。

きものの小物「おこし」おこしも新型がある

「きもの読本」スタイル増刊第十二号

百十九頁

「ひと口におこし」と云っても、さらしやガゼで出来たじかにつける所謂おこしと、その上に巻く、色のついた絹や人絹で出来たけ出しとか据除けとか云っているものとの二種類があります。ガーゼやさらしのは洋服の下着で云えばパンティで、け出しは、スリッパとでも云うのでしょうか。しほの大きい上等の縮緬やデシン、ナイロン、夏なら絹やレースなど、いろいろとお洒落なものが出来ています。

据除けは、東京と大阪ではちよつと違い、大阪のは裁ち切りで、ふちが縫ってあるだけ東京のは長襦袢のように一寸五分の衿がついています。長さは四尺裁ち切りですから大阪のはほぼ四尺、東京のは衿を折り返してありますから三尺五寸になっています。巾は広巾いっぽいの上部に、四寸巾の新モスを縫いつけてありますから二尺四寸が標準となっています。この上部につけた新モスは、お腹に巻

きつけたあと、三角に尖った部分をはきみんでおきますと、この部分は帯の下に入りますから、はさんでおくだけでしつかと止ります。細い紐をつけて結んだりするより簡単ですし、紐がゴロゴロしたりすることもなく、形よく着物をお召しになることも出来るわけ

です。
据除けの変型としてはスカートのがありますこれは四尺の布を輪に縫ってから、上部の処々に浅い襷を寄せ、新モスやガーゼを縫いつけて両方の端に細い紐をつけてあります。このスカートは和服を着なれない方で、据がはだけて困るような方に喜ばれています。また一面には普通の据除けですと、前が充分深く合わりますので腰から据が細くすっきりとお召しになれますが、スカートは同じ巾のものを、前を重ねないではくわけですから、どうしても腰から据がずんどうになつてスマートな着付けが出来難い欠点があります。また、その代り風が吹いた時によく据がめくれ、脚が丸出しになつてしまふというような心配はないわけです。

このスカートを改良したものに東スカートというのがありますが、これは普通の据除けの衿と衿の間に一尺ほどの別布を橋渡ししてある。据除けとスカートの合の子のようなもので、両方の長所が取り入れられています。この橋渡しした布は上下ともゆるい曲線でえ

ぐつてあり、下を向いてもたらっとたれて来ないように工夫されています。これは前が深く合わされる上に、どんなに足を開いても脚部が見えませんが、日本舞踊の方は皆さん愛用していらつしやるようです。

据除けの形の種類は大体以上のようなのですがこれを生地別に分けますと、

正絹の縮緬 一五〇〇——二〇〇〇円
 ペンブルグ縮緬 三八〇円
 正絹デシン 一〇〇〇円
 ペンブルグデシン五〇〇——五五〇円
 ナイロンデシス九〇〇——一〇〇〇円
 ナイロンモス 三〇〇円
 アセテートデシン 六五〇円
 おぼろ(ガーゼの直か巻) 三二〇——三三〇円

(東スカートは、生地、仕立の関係から値段が二割高となります)

というように生地の種類は沢山あります。どれも、すべりのよい、据さばきのよい生地ですが、このうち今、一番よく出るのは、正絹デシンとペンブルグデシンです。少し前までは、大しほの縮緬が一番よく出ていましたが、しほの高いものは汚れ易く、また縮みやすいところから、この頃はデシンに押されています。

色はうすピンクが圧倒的に多く、二十才前後から四十五六才の方は殆んどうすピンクを

使つて居られます。赤はお嫁さんか、花柳界の若い方が稀にお使いになる位に少く、また水色は、中年の、それも粋筋の方がお使いになるだけで、一般の方には殆んど使われていません。最近、うすねずのものも出て来ましたが、これも下着としては余りに地味にすぎ御年配の方なら白をお使いになる方が多いようです。

以上、全文を書き抜いて見ました。

次にもう一つ、

春の和服設計「主婦の友」四月号二二五頁標題の記事のうち下着の分だけ書き抜きますと、

『下着』肌着は洋服のものを使うとして、ペンブルグデシンの襦袢と蹴出しを二組用意する。ピンクなど淡色の下着が出廻っているが袖口や裾からは、やはり赤い色がチラツと見えるのが和服の捨てがたい味わい。汚れが目立たない点からもよい。一ヤール百八十円くらいのペンブルグデシン三ヤールで袖と蹴出しは、後合せにつけると、階段の昇り降りや風の強い日に裾が乱れず重宝』

以上、私の本箱の中から拾い出したものですが、下着マニアの方々の参考にもして頂ければ光榮です。

(終)

◎北原純子責画傑作選◎

〔女学生の羞恥責め〕 (略号女学生)

大中判印画紙焼付 四枚一組 五百円

純情可憐な花も羞らう制服の女学生が、正面向いて、あられもなく後手に櫓に縛りつけられ、片足を水平よりも高く無理矢理上げられたり、スカートをまくり上げられたり、まことに大胆きわまりない制服の女学生に対する責構図四態。

〔ハートの的、女体洗滌室〕 (略号はあと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

ハートの的にされた全裸の豊満なうら若き女性に対する奇想天外な責め、縛られて身動きも出来ない全裸の女体の隅々まで、余すところなく洗滌せんとしている構図。

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕 (略号ぬうと)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石等の小道具を用いて緊縛されたヌードのポーズに変化を求め、十六の優美な縛りポーズの一つ一つが、平凡さを脱して私達の目を楽しませてくれる。

○ 図書・雑誌通信 ○

特異な角度から (3)



九 雅 節 夫

第一部 折檻と拷問

十九、川村公人「盆栽記」

(本文省略) 三十二年四月号本誌八三頁参照。麻生保氏が提供せられた一文であるが、さていつものお仕置が始まった。から九行を、私のこのコレクション中に加えて頂きたいと思う。

第二部 成熟と未熟

六、湯浅真沙子「歌集秘帳」

かんちき かんちき
かきちき どん

村のお祭賑やかだ(中略)

かんちき かんちき
ちきちき どん
屋台のうしろの芋畑で
お尻まくって

びっぴっぴっ
おしっこついでに
前のぞきや
ぼっちりむくれて

毛が生えた
かんちき かんちき
ちきちき どん
はあれうれしや
毛が生えた

ちい子もそれならひとりまへ

(歌集秘帳 湯浅真沙子作、川路柳虹編。
有光書房版一七一頁)

右にあげたのは、ただこの項のテーマに添うものを一篇あげたに過ぎないので、以って集中の代表作と断ずることが出来ないのは勿論である。むしろ、集中、八三頁のその乙女十七となるその宵の肌と柔毛のさはりよきかな

などを挙げるべきだったかも知れないが、何しろ迷いだしたら、集三百首をすべて挙げねばならぬ、私としては正直に、一番魅かれる一篇を挙げたのである。

この歌集の最初の上梓は昭和二十六年であつた。

七、菊池 寛作 (題不明)

(本文不明)

筆者の浅学の故か、この短篇の題も本文もよく判らない。

ある大名の小姓であつた美少年が、城の亡んだために、山野を逃げさすらい、野武士に捕つて衣類をはぎとられて、白い裸体に褌一つの変で歩み去って行く、というストーリーである。殊に裸の美少年が夕陽を浴びて痛む足をひきずってトボトボ消えてゆくシーンはさながら絵のようであつた。これだけの紹介で諸兄諸姉が、一つのイメージを思いうかべて下さったとしたら、私

のこの一文にも自から意味があったことになろうか。しかし筆者としては諸兄姉中の誰かが、この貴重な短篇小説の全容を、本誌上に紹介して下さるのではないか、とそこに期待しているのである。

八、若杉 慧「エデンの海」

南条は巴のはだけられたユニホームの間にほんのりと桃色をおびた乳房をみた。(中略)すると、瞳は二三度またたいて、

「あらア、先生。わたしおしっこが出てるわ」と声をおとした。(中略)

両手で顔をかくした。(中略)

「ええ、戸棚の中の草色の革のついた行季がわたしのです。ブルーマと、それからズロース」と指の間から云った。(中略)

がらんとした寄宿舎に運動靴のまま飛び込むと、行季を引きずりおろして、蓋をとる。春のもの、夏のもの、意外にキチンと畳んだ衣類の中には、気の遠くなるような匂いがある。南条は思わず顔を埋めそうになった。

(若杉慧「エデンの海」角川文庫版 No. 298 二六頁～二七頁)

この小説は、かつて鶴田浩二、藤田泰子の主演で、松竹によって映画化されているが、引用箇所が映画に現れなかったのは勿論である。しかし、藤田泰子のポリウムのある海水着姿が裸馬にまたがったのは、中々壮観であった。

九、徳永 直「他人の中」

①不意にどっかから、ツルの悲鳴がきこえて来た。ひくい庄しつぶされたような彼女の金切声がきこえてくる。

私は半分開いたままになっている蔵の中に入って、米俵の蔭から梯子をのぼっていった。急にツルの叫び声やら、男たちの笑い声やらが近くに聞こえた。ツルは男たちにかこまれて板の間にころがされていた。

「——ちきしよッ、ああッ、お内儀さア……」

彼女の叫び声はきれぎれに、手荒くおしつぶされている。

②「おめえ、生えたかい？」私は急に怖くなる。(中略)

「裸にしてやれ」咄嗟に私の頭脳に、いつか蔵の二階で裸にされたツルのことが泛んでくる。(中略)

「ワッハハ、まだ駄目だない」

私はここで再び唇がしめられて、蔵の戸蔭へ行って涙を拭かねばならない。

(徳永直、短篇集「はたらく一家」より、新潮文庫、九一頁前後、一一三頁前後)

十、ケストナー「少女の嘆き」

あたし達は裏の建物の五階に住んでいます。あたしは腋の下にもう毛があります。弟はときどきあたしのスカートの下から覗こうとします。

今度の七月であたしも十四才になります。

あたしが好きなのはギンター先生です。体操の時間には下にできるだけ着ないようになっていますわ

昨日だって先生はみんなの前であたしの棍棒の振り方をほめて下さいました。

誰もいないときはあたしも安心して聖書の中で愛について書いてあるところを読みます。

おととい丁度そこへお母さんが入って来ました。

この時は幸いお前何をしているとも何とも云いませんでした。

しかし時々これッ何をしていると訊きます。そのときにはあたしはひどくぶたれます。

(河出書房版「世界風流文学全集」ドイツ篇

「特集文芸、増刊(三月)一五九頁

ケストナー作石川道雄訳)

独の文豪ケストナーの戯作?の風流詩。コケットリーな味が中々佳い。しかし、考

えると、ケストナーがこんな詩を作っているというのは一寸ユカイなことである。こ

の他に八篇の詩が訳されているが、未だ未だ傑作がありそう。この「世界風流文学全集」は、ただ七巻を刊行したのみで、

先般の河出書房の倒産から、中絶してしまつたのは実に残念なことである。詩中、聖書を読んでいて母親にぶたれるというのは一寸変な話であつて、別の解釈が必要かと思われる。

第三部 臨床と羞恥

十二、川端康成「水晶幻想」

①婦人科医であつた彼女の父の診察室。手術台の白いエナメル。

腹を上にした、大きな大きな蛙……。

②顔も赤らめない令嬢。女。内診鏡。スベキユラム……。婦人科用診察台。雙手触診。

これは前回の引用と関連しているから、興味のある方は参照して下さるといいと思う。(本誌三月号、七三頁上段) 解説すべきことも、前回につきてゐる。ここでは「水晶幻想」が昭和六年に書かれた小説で、川端の頭脳の鋭敏なことは、殆どこの一作のみに表面に出ている。現在では、一般的な流布本になつてゐないが、選集、全集には収められていること、のみ記せばいい。又、「水晶幻想」には美しい少年のバタックスに対する讃美を書いた一節もあるが、第二部の中の一項として引用すべきかどうかは未だ決めてない。

十三、ヴォルテール「カンディード」

(池田薫訳)

たちまち彼らは猿のように裸にされました。それから母も、わたしたちの侍女も、それからわたしも。この紳士たち(海賊)が人を裸にする時の熱心なことを云つたら、全くびっくりするほどでした。しかし、それよりもわたしの驚いたことは、彼らが、わたしたち婦人が通常注射器しか当てさせない所へ、一人も残さず指を突つこんでみたことです。

(河出書房版、池田薫訳「ヴォルテール」第十一章)

かつて公刊された *Gloomy Experience* 中にも登場する、このカンディードがなぜ、あんなスキヤンダルを起す原因となつたのかは、今日の常識では判らない。歴史的解释が必要である。しかし、ただ確かなことは、このヴォルテールの「カンディード」には、サディズムの臭が相当強い。この点が、あの慈悲ぶかいアリスの継母の嫌悪し給うた所かも知れない。この池田薫訳で、注射器とされている所だが、私は原文に當つてみたわけではないが、これは明らかに誤訳である。天星社版では浣腸器とされてゐたが、岩波文庫版によると、洗滌器である。この点の相違は、考えるまでもなく、非常に微妙な違いだ。博学の吾妻新氏あたりの御教示が欲しい所である。

十四、井伏鱒二「本日休診」

娘は居心地わるそうに手術台の白いリノリ

ウムに片手をつき、ストッキングをはいた両脚をしっかりと組み合せていた。(中略)「では、診察。パンツとつて」「いやです」と娘は意外にもはつきりと云つた。(中略)

娘は手術台から滑りおりた。いまにも泣き出しそうな顔をして両手をたらんと垂れ、人を見る目が恨めしげである。

(井伏鱒二「本日休診、通称隊長」角川文庫版、No. 686 四五頁～五二頁)

十五、小山 清「夕張の宿」

看護婦の見習が二人連れ立って入つてきて、順吉の寝台のわきに立った。みると、一人は手に剃刀とちり紙を持っている。彼女は順吉に命じて軽業のような恰好をさせて、もの慣れた顔つきで器用に剃毛をあつかつて毛を剃りおとした。用事をすますと、彼女たちは又つれだつて部屋を出て行つた。澄ましたものであつた。おすぎは目をそらしていた。

作者独得の坑夫ものの一篇である。作者は太宰治の弟子だが、太宰の厳しさはない。本篇は、新潮文庫「落穂拾い、聖アンデルセン」に収められている。又、この作者には「犬の生活」と題する短篇もあり犬の肛門で検温する条りがあるので一言、言及しておく。(筑摩書房版「犬の生活」)

十六、石坂洋次郎「暁の合唱」

「ねー、手術って着物を脱がなきゃいけない

んでしよう?……」

「ホホ……、まあそんなこと心配してたの。貴方は生まれたときにも着物を着ていたかしら? お莫迦さんね……」

「でも私、お嫁になるまでそうしたくないと思うの……」そう烈しく云って子供のようにベシヨベシヨと哭き出した。

十七、五味康祐「色硝子が降る」

啓子は無表情に医師の前へ出た。先ず何ヶ月かを内診せねばならないと彼は云い、寝台に彼女を仰臥させた。断っておくがこの医師の内診するのは遮蔽物のない普通の診察室だ。彼女はさすがに踏った。観念して目を瞑じた啓子のスカートを恭々しい蔽いでも除るようにそろそろとつまみ上げた。啓子は両膝を立てるよう、そうして股をひろげるように彼に注意され、(中略)今度は啓子は手術室へ連れられていった。先ず恥部の消毒をされるのだ。この消毒に看護婦の見せる無感動さは一種特別のものだった。やがて啓子は子宮鏡を挟まれ、医師は丹念に中をのぞく。

(別冊文芸春秋第五十八号一六七—一六九頁)

五味氏は、この文章中でも「柳生武芸帳」的なドギツさを見せる。この描写はまだまだ続き、照明の下で臍のあたりが苦痛の呼吸で上下しているという凄さは、女性読者なら思わずギョツとするかも知れない。(真

に女性的な女性には実在していないというのは私の意見であるが)

附記

- 第一部 折檻と拷問(未完)
- 第二部 成熟と未熟(未完)
- 第三部 臨床と羞恥(未完)

一、前に御紹介した、河出書房——彰考書院の協力による「サド選集」全三巻は無事に刊行を終えています。普及版なので、誰でも手に入る値段です。(二八〇円)

又、サドの作品は、同じく河出の「世界風流文学全集」第五巻に、中篇が二つほど収められています。既説の如くこの全集は全十二巻の内七冊が目の目とみたきりで中絶してしまつたらしいのですが、既刊の七冊は手にいれたので、本稿の続篇にも登場させる予定です。

講談社で「トルストイ全集」に次ぐ良心的企画であった「サド全集」は、当局の弾圧を考慮してか、中止になりました。何しろ本家のフランスでも最近、そのケースがあったものですから仕方がありませんが。二、別冊週刊サンケイ「怪談スリラー特集」中に、森島恒雄「魔女狩奇談」があります。が、あまりに、残忍で、ロマンチックの一片もなく、不満でした。ここに一言、言及しておきます。

三、みすず書房から「人工地獄」としてナチスの暴虐を描いたルポルタージュが出版されましたが、先に「いたましきダニエラ」を紹介したときに言つた如く、この種の書物が世に迎えられるには百の反省と千の祈りとが、不可欠であり、興味本位にまではやされたり、無批判にのみすごされてはならないというのが、私の信念です。

四、おくれませですが、フックスの「風俗の歴史」第四巻を入手しました。この巻の末尾の風俗画は、エキセントリックな浣腸図二葉です。

五、各種の映画雑誌の海水着美人——それも日本女優に限ってですが、海水着の下から、純白な下着がよく出ています。こんなことに興味のある人がいるとしたら、よく注意してみてごらん下さい。(ビキニスタイルなど、着こなせないのもムリはありませんネ)

後書

一、四月号に、川村公人「益哉記」を御紹介下さった麻生保氏に御礼申し上げます。

二、東一郎氏初め数氏から激励をいただいています。有難うございます。

三、甲斐仁参氏から、お貸し下さってもよい本は、是非みたいのですが、今の所は、連絡方法がありません。

四、石川達三の「深海魚」の御紹介を諸兄姉

をお願いしておきましたが、その後本書を入手したので、次回にでも登場させます。

五、丘与志夫氏から、プロ文学亡べりとは早計」と御批評をいただきました。私はプロ文学に、反感を先入感として持っているわけではないので、どちらでも、よいのですが、かつて、小林多喜二、蔵原推人らの思想に誠実な行動、(それは例えば「党生活者」に描かれています)と較べてみると、中野重治、壺井栄氏らが、軽井沢に別荘を持ち、一方では、人民と共になどという偽善者ぶり。かつての宮本百合子事件の際の主体性を失った左翼「文学者」の右往左往ぶり、などを思うと、やはり、そう云わざるを得ないので。

六、本誌編集部及び私の名を記憶しておいて呉れたる諸兄姉にお詫びせねばならないのですが、私が、この文献集を、特異な角度から」として本誌に掲載を乞うべく予告していたのですが、意外におくれてしまいました。それは一つに、私の病気のせいでした。次回からは、勿論ウンと馬力をかけます。私としては、第一部折檻と拷問の部をもっと馬力をかけて充実させるつもりなのですが、それには、三一書房の「日本プロレタリア文学全集」全九巻を入手したいのですが、費用が乏しく、多少おくれるかもしれません。

余話

九雅節夫自身の事件

既にのべたように、私は、この二月から四月まで入院生活を送り、特異な角度からの稿も半年近くのびてしまったのである。でお詫びまでに、この間の記録を出来るだけ簡単に報告したいと思う。個々の話については、要求があれば又くわしく書いてみる。

告白の第一行はきまりきっている。

若い身空のさびしさから酒を飲んだ。——のである。それも少い量ではない。かくてその翌朝は激しい発熱と全身のいたみにおそわれた。姉はかかりつけの開業医をすぐ呼んで来た。この人はその職業にも似合わぬ福々しい大柄の美人で、体つきも容貌もまだ四十近い人とは思えぬくらい若々しかった。彼女は聴診器を使い、次にツと手をのべて腹をさぐった。

彼女は何も(異状が)ありません、といったが、何にしる四十度近い熱だ。

彼女は私の姉(は家庭をもったばかりで、私はそこに下宿しているのだ)に命じて、イチヂク浣腸を買ってくるようにといった。そうね三つもおきましようかね」という女医の口調は今も覚えている。

何しろ私は十九という若さだし、雑誌などで両脚をもち上げられている幼児の写真くら

いは知っていても、さて、現実に——となると大いに弱った。イチヂク浣腸が来る。女医はチンマリと丸いその尖端に、添付された針で穴をあけている。一つ——二つ——三つ。三つの丸い桃色のセルロイドが、彼女の黒い診察カバンに立ってかけられて並んだ。私は目をとじた。

私が十分ほどあと、排泄したのは、黒い血便だった。血便はいくらもいくらも、止めどもなく出た。

一ヶ月後、私はおとろえ、病院の一室で力のない身を横たえていた。殆んど食べ物らしいものは口にしていけない。

とうとう手術にきまった。手術ときまると連日、腕にはブドウ糖、足には輸血、腿にリソゲルと、どんどん注入された。それも苦痛だった。

手術は三月某日、午後二時になった。

その前日の夜、下剤をのまされた。明け方やは何も食べないのに便が出た。私が若いので、坊やと呼ばれて看護婦にはチャホヤされたが、その晩のサービスはいたれりつくせりで、湯タンポが入る。マクラも代えてくれるなど気味のわるいくらいだった。いやたしかにそのことで初めは私は、手術がされるんだ」という実感がわいて来た。

午前四時、もう手術の準備がはじまる。帽子かけのようなスタンド(それを何かと

呼んでいたが、私は覚えなかったが、ベッドの右に立てられる。運んできた大人しい見習看護婦の蒼白い顔に「輸血？」と聞くと、彼女はそれを否定し、あいまいな微笑をうかべて去ってしまった。大きな手術のある日の見習看護婦はまごまごしていると、先輩に叱られるから、おどおどして緊張しているものだ。

婦長代理の、三十才ぐらいの看護婦が現れる。

「眠れましたか」と改って私の顔をなぞた。

「心配はいりませんよ——。今、第一回の浣腸をしますからね」

スタンドにかけられた白透明の液体。黒いゴムパイプがだらんと下って、又上へのび、その先が、中堅クラスの看護婦の右手に握られている。先端に黒い嘴がいやに太く思われる。まだ若手の看護婦が二人で私の体位を作る。白いネル地の腰巻を取り去られる、私の下半身は露出してしまふ。腰が九十度まわされ、右膝を抱く。とたちまち、もう嘴は挿入され、冷い液は流れこむ。

夜が明けると段々順序だてて準備がすすみものものしくなる。医師も一寸顔を出すし、中堅クラスの看護婦が三人、見習は十人くらいぐるとベッドのまわりに人垣をつくってしまった。姉の顔がドアの外に見えた。

やがて剃毛作業が始められた。両腕を毛布

の上に出させられる。ジユバンが脱がされ、二の腕から剃刃があてられる。二人がかり三人がかりである。たちまち肩も腋の下も、あつというまにクルクルそり上げられる。うつぶせにされる。腰巻は今朝とられたきりだから、二重にした寝巻をとられると、最早全裸だった。背中——腰——臀部——脚の裏。

次に上向きに向き直されたが、その時、吐気が起り、黄色いものを少し口から出した。

「そつと扱いなさい」と声があるので、見るといつのまにか大きなマスクをした婦長代理が、一番前に来ていた。私はもうまみになれとばかり、そのままの他はなかったが、内心は女ばかりの円陣の中で、変態的な興奮を表すまいとして一心だった。幸に最後までこれには耐え得た。

胸から始めて又剃毛が続いた。実にたんねんに一つ一つ毛穴をほじるように剃刃をあてて行くのだった。さっきから、ヨードチンキのピンを胸の処に持っていた見習看護婦が、太い綿棒にその液体を染ませて、そつと婦長代理の顔をうかがう。気の立っている彼女は、その手から綿棒をさつと取り、私のおへそへグリグリとねじ込んだ。それは相当痛かった。作業がだんだん下の方へ行くと、婦長代理が代って剃刀をとり、今までより相当荒っぽくごりごりやっていたが、その部分にかかる小さなガーゼの一片でおさえたり、片寄せた

りして見習に要領を教えた。

「〇〇科の方だと、ずっと下までやるんですがね」

すると誰かが

「婦長さん、全部やるようにと指示が出ます」

「ああそうなの。宜しいよ、やりましょう」

と婦長代理が云うと、誰かの手で私の両足頸が合され、腹の方へぐいぐいと押しつけられる。自然両膝は左右に拡げられて、剃毛をつづける作業者の顔は自分の足に妨げられて見えない。——

第二回目の高圧浣腸——。

全身消毒——。

そうして手術場へと運ばれたのだった。

手術後も四、五回浣腸された。中でも、「お浣腸をしましょうね」と云って、いつかのときヨーチンを、大事そうにささげもっていた見習看護婦の、その云い方は印象に残った。

それはグリセリン浣腸だった。

浣腸がすむと、私の羞恥心をおこさせないようにか、彼女は用具と尻の下に敷いたゴムで急いでおおいをしてしまった。しかし、私はその執務台の上の、小さなガラス製の浣腸器、二十センチぐらいの赤いゴムパイプ、小さなピンに入った殺菌オリブ油と、それを塗布する細い筆と、グリセリン液の少し残っ

ている瀬戸引のボールとを、みてしまつてい
た。彼女は頬を染めた。

(三十二、七、三十一)

(九雅節夫氏へ)

当方からの呼び掛けに対してお返事があり
ませんでしたので、いささか心配しておりま
した。今後御都合のつく限り引続いての御送

稿をお待ちいたします。貴稿に対しては多く
の読者の方々がたいに期待しています。

(編集部より)

『演 出』

——我若し映画監督なりせば——

牧

高

志

文・画

露地に面してぐるりと高い黒板塀、松の枝
が垂れ下っている。人っ子一人通っていない
子の刻、処は江戸——。

「いいね、最初はテストで行こう。君はこの
女の縄尻を右手で持ち、左手で女の肩を小突
きながら外に出す。黒装束だけど眼は光って
いなくて駄目だ。君は技身をこうひっさげて
辺りを窺いながらあとに続く。それから拐す

三人組がほとんど一緒に出るとして、中の君
は女の眼の先に刀を突きつけて女に添うよう
に出た方がいいだろう。表の露地で震えなが
ら駕籠を置いて待っている君達は飛んだ頼ま
れ物だと云わぬ許りの顔付で時々半開き
のくぐり戸の内をのぞく。いいね、その汚れた
赤ふんどしは判つきりそのまま写るぜ、きゅ
うと締めていて呉れ給え、特にカラーなんだ

から——。それから——と、主役の君は一寸
猿轡で苦しいだろうが、夜陰にまぎれ無理矢
理に拐される怖ろしさと邪慳に小突かれ、後
手に捻じ上げられた縄目の痛さに苦悶の表情
たふぶり、中ば逆らうように縛られた身体を
ゆすって白足袋の足先を爪立てて——こう云
う風に、そうしないと、この場の感じは出な
い。アップに近い撮影だから念入りにやって
下さいよ。照明は寢室からここまでフルであ
とはカットカットでスポットに絞る。ようし
——さあ、位置について、カメラは少し左に
寄せて呉れ給え——」

——ト云ウノガ私ノ全クノデ、スクプラン、
素人映画演出ノシカモ傍若無人妄想ノ一幕デ
アリマス。喋ッテイル監督ノ言葉ハ勿論自己
流デ撮影所ニハ一切通用致シマセン。ケレド
モ私ハ私ナリニ充分楽シイ劇作ヲ大胆ニモカ
ラーで撮ロウト試ミ、持チ前ノ凝性ヲ執拗ニ
喰イ下ガラセテイル辺リヲ洵ンデ戴ケバ本当
ニ幸デアリマス。

『こらッおとなしくせんかッ、行く処に行ッ

たらず楽にしてやる！ それッ」

「一寸待った。この最初の場面はね——据放しのカメラからロングで撮るんだから仕草はどうでもいいんだけど、移動でずっと表の扉のところで続く序の幕なんだから矢張りその通りの雰囲気があると盛られてないとまずい。目的の娘は縛った。それッ出る——と雨戸をスーと開けて女を庭先に突き降ろす処が先ず大切だ。子の刻に娘が盛装でいるのはおかしいけど、折角のカラーだし理屈抜きに着物のいい処で行きましようや。その君が廊下から庭へ突き飛ばされる時はもう両手はちやんと後手に縛られているんだよ。だからと——んと突かれて庭石——この踏石の上へ降りてからあらぬ方向へ逃れようと一足二足馳け出そうとする処を縄尻をビーンと曳張られるから、たじたじに後退りした方がいいかも知れない——が何れにせよ、身を悶える処が見えんと万事約束事になる。娘を曳き立てる以外の君達二人は灯のついた部屋の方へ顔を向けて家人の一人でも起き来て見る、忽ち斬って捨てるッという気構えで刀を一振り二振り振るのはどうか——このシーンはN・Gもないだろから後に廻わそう。

じゃ、ロングで庭に曳き出された処から、ハイッ、庭石を二つ三つ伝って——盗賊君の方はいいが貴女は足袋はだしのまま砂利の上を、さっきも云った通り嫌や嫌やッと科を作

って——そう、そう、それでいいんだけど、惜しい、残念裾の方がまる切り死んでしまった。長い裾は砂利の上でも少し色っぽく捌かんと艶消しだね。この場合は恐怖が先立ってからのつとめて暴れるように突張ったり腰を折り曲げたりすると自然と本当の裾の乱れが出るんだが——。

一つ勇敢に庭の真中まで曳かれて来た時に横倒しに——仰向けは一寸酷いかな——倒れるのは一刀浴びた恰好で矢張りまずいね。まあ小突かれ小突かれ、短い距離だと必死になつて逃れようとしてはたぐり寄せられ、抱きすくめられた恰好で黒板塀の処まで来た方がよからう。じゃ、君の裾をね、右左に一杯に、そう、そうして呉れると緋縮緬の色が鮮かに出る。その場合、後手の右の手首がダラリとしていちや気抜けだ。少し緩るんでるね——締めるだけ縛ってない——真似事でなくてさ、おい盗賊君！ 見てばかりいないで、もう一度この娘さんを縛り直して呉れ給えよ。その黒襟の処、そのすぐ下を、いや乳房の上に掛けてもいいじゃないか。主演者なんだから一寸我慢して——そうして、その細引を順序が逆になったけど後ろに廻わして娘の両手を合わせて縛る。そうだと身体向きによつちや、ここも写るからしつかり本縛りに縛つて呉れ給え。それから、と豆絞りの猿轡の本当は中にもう一枚布があると口の中へ押し込

むんだが、まあ、これを顔半分を覆うようにすると——このままウーとかスウとか云って御覧！ 云えない？ これで充分だよ。そう、そこで男結びに少しひねって固く縛る。本式に縛られて一寸せつなくなつて来た？ カメラはすごく正直だから、今は酷でもスクリーンで文句が出ない方が貴女でも安心するでしょう。ハイッ、今一度このところテストで行こう」

「やいッやいッ、静かにしないか、どの道高く売られる柔らけえお宝様だ。素直にしねえと宿場の女郎にたたき売って……」

「お調子に乗って余計な事を云わないで呉れ給え、アフレコで合わなくなるから。そこで思い切つて娘の肩をと——んと突く、よし、よし、仲々真に迫つて来たぞ、おい、カメラマン、ここんとは入っているかい？ 駄目か——そうすると一つその事、このシーンは娘を担ぎ出すワンカットにふり替えると変化があつて面白いかも知れん——が、こうしよう、あのね、廊下から踏石へ飛び降りてから、娘がどうしても素直に歩こうとしないので業を煮やした——君！ 君でいいだろう。君がこの女の脇の下……帯の横から手を突込んで帯諸共抱きかかえるようにして娘を庭の真ん中あたりまで曳きずつて行くんだ。その時は君は子供のオシッコ見たいにすうッと抱かれて行っちゃ駄目だよ。赤い蹴出が捲かれてふく

ら脛から太もものあたりがちらついて見える位に演らんと実感が出ん。

左手一本で抱くとすると少し重すぎるがまあいいだろう。」

——トマア、コンナニ長ク監督カラ物云イガ出ルヨウデハ本式ニ猿轡サレ後手ニ縛ラレタ娘サンハ盜賊処力当ノ監督サンノ私ニ折檻サレルヨウデ本当ニオ氣毒トハ思ウガ娘役ノコノ女ニソノ心構エガアレバ何ンデモナイ拐カシ場ニ過ギナイダロウ。余計ナ事ダケド一寸猿轡ヲ咬マサレ胸ニ喰イ込ムヨウニ細引デ後手ニ縛ラレタコノ無名黄八丈ノ女ノ姿ナンテ云ウモノハ振ルイツキタイ位ダトハフアインダーカラノゾクカメラマンノ話。ソレハサテ置キ、次ヲ急イデ続ケナイトフィルムガ廻転シナクナル。

「いいね、娘を半抱きに曳きずつて行く、今少し裾の処が乱れると——反抗はするんだけど娘らしい恥ずかしさが現われてないと、何度もう云う通り天然色は勿体ない。カット、カットの継ぎ剥ぎだらけのフィルムだけど、ハイツ、ここん処大いに演技を振るって、おいッ、セリフ！ 矢ッ張りせりふを云わなくちや困るね——」

『地駄馬駄するんじやねえ、静かにしねえか、素直に観念して行くんだよ』

「そうだ、諦めの悪い女つ子だ、と、ぐっと半抱きにする。暴れて、力一杯もがいても」

と、もっと、そう、そう、ちよい待ち！——

あのね、抱くのはいいがそうカメラから逃げちやまずいいね。観る人は帯から下に眼が行くんだから——緋縮緬の長襦袢がすぼんで折角の赤い蹴出しが、たたまれた恰好だ。今日はパンティしてるの？ してない——。そりやまた大胆な、いや、道理で、いいよ、その心懸けは満点だ。それだけに羞恥さがたつぷり溢れる。大丈夫、昔の娘さんになったつもりで演って下さいよ。じゃ、もう一度！ ハイツ、スタート、笑わないで——、そうだッ、その意気、うん、うまい、そのまま、そのまま無惨に曳きずつて行つて——。ハイツ、よろしい、今のは上出来だ。どうだい？ カメラマン、娘さんの恰好は？ 上品に云って姿態美は？ 肝心の腰から下に影が多い？ 暗部が出ないってライトが足らんのかないか、うんと照てて呉れ給え、遠慮せずにタツブリと——庭先の方はどうでもいいんだ。よし、処で愈々ラストだ、ここで一息つくことにしよう。小休止！ さあ一寸休んで呉れ給え。おい、おい、盜賊君達、娘さんをそのまま放つたらかしちや申訳けないじやないか——縄を解いて、猿轡を脱ぎして、そう、いや御苦勞様でした。あと一カットありますから一寸身体を楽にして下さい。どうでした？ 苦しかったでしょう？」

ココデ素人トハ云エ眉目麗ワシキ女優君ト

ノ会話ハ映画撮影以上ニ是非必要デハアリマセンカ。何故ッテ、聴ク方ガ野暮デスヨ。

「あの——先生、御期待外れじゃ？ とてもあたし——仰言ってる通りに身体が、どうしても……」

「いやあ——あれでいいんですよ。セットがセツトだから、それに借り衣裳だし第一監督が絶対広告なんぞに出ない僕なんだから。がまいませんよ。ただ、天然色に撮ろうとするからうるさくなるんです。特に貴女に着て貰った長襦袢や赤い蹴出しはそのつもりで新調したバリバリ、どうです？ 黄八丈の裾がこぼれてチラチラするのを御自分で眺めて、恥ずかしい？」

「皆さん、本式に演技なさるんですもの。お話を私をお縛りになることは伺ったんですけど片手で抱いて頂いて曳きずられる時は、それはもう——とっても恥ずかしくって、思わす……」

「そうなれば、いやもう立派な熱演ですよ。思う存分御自分を忘れる処に観客が沸きますからね、どうです？ 一つ、表の駕籠屋に引渡される前にこの人達に——」

「どうだい、兄弟、こゝらで一責め責めて駕籠にぶち込んだら？」 『そりや面白い、どうせ、先きで泣くんならお初の涙を頂戴しようじやねえか』 てんで、君達もそれがいーんじやないのかい？ よかったら演り給え、娘さ

心の了解をとくと得た上で——。台本はプラス、アルファ付きた。アハハッハッいや、これは僕の思い付冗談ですよ。いいんですか？ 演っても？ 一寸待って下さいよ、そうなると貴女はただの恰好じや駕籠に放り込まれませんか。少くとも刀の鞘で捻じられたり、土足で蹴られたりするんだから襟元をぐっとはだけ、黄八丈の裾がもろに捲かれて……

一寸演って御覧なさい。地べたに坐って、そう、思い切って、膝小僧のところを横に崩して、左前の長襦袢の裾をぐっとは後の方へハネル、赤い蹴出しは太ももにからみついていないと検閲がやかましいでしょう。勿論、両手は後手に縛られているんですよ。まあ、こう云う恰好で責められる、云う事をきけとか云って、カメラはアップに近い方がいいでしょう。観客本位なら少し斜め右横から近づいて、眼で悶える貴女の肉体を中心にくるっと移動する後手の縛られた処が判つきり写ればもうストリーイもへったくりもありませんよ。出来れば手首の処をうんと大写しに撮り度いですね。序でに今スケールで計って演って見ますかね、かまわない、そうですか。いや、大いに恐縮です。じゃ、プラス、アルファだ。御



面倒でも少し着物をはだけてそのまんま、も一度後手に縛られて下さい。おいッ君達、いざとなったらサッパリだね。折角のこの女が承諾したと云うのに、大いに役得を發揮して責め役になるんだ。そりや、駕籠屋の荒縄なんだらう？ いいのかい？ そんなんで縛っ

て、まあこの方が本当はいいのかも知れないが、おい、おい、駕籠屋まで出て来て、成る程、頼まれ甲斐ある赤ふんだ、よろしいッ」
頸で合図。

「ヘッヘッと眼でサインして心得えたりと赤ふんが娘の腕を後ろに廻わす、よかろう、お

「と、そんな処に縄を掛けちゃいけない。それは止めとき給え、上映禁止物だ。何んだい？ それは、ひどく薄汚ない汗拭き絞りの豆が消えてるじやないか、一寸気の毒だね、猿轡をそんなに二重に噛ませて、成る程、君は玄人はだしの腕前だね、三文芝居で演つていたんじやないのかい？ いやいや恐れ入りました。仲々の力量で、監督は何も申上げる処は御座いませぬ。そう？ それで仕度は出来た、と。じゃ、娘を曳きずって来た盗賊君は交替して、今度は君！ 君演り給え、つまり嫌がる娘をここまで連れ出して来たがどうしても云う事をきかない、そこで鬨るつもりだろうが軽い折檻を行うんだ。一寸しつこいが或は受けるかも知れない。さあ？ タイムで二、三分と云う処だね。本当に打ったり捻じ上げちや駄目だよ。その時貴女は怨めしげに黒装束をうるんだ眼で見上げる、いいですか？ 本当に打いても？ 本当に痛いですよ。そうですか、じや軽い処で刀の鞘をここに通して、一寸退いて呉れ給え、これは本番で撮ろう。アップなんだから、カメラ、いいね？ ライトを一杯に、裾はそのまま、あとでカメラが後退する処で乱れて来れば自然でしょうから、縄尻は君が持つんだよ。おつと待った！ 黙って鞘を突込んじや駄目、そう。」

『どうしても云う事をきかねえんだな斯うして呉れるッ、アッハッハッハッ。』
「鞘の先を縛った手首の間に挿込む、ぐうつと上に捻じ上げる。一人は娘の顔にビタリと抜身をつけてヒタヒタと頬を撫でた。もう一度、ぐつとよじる、——で貴女は、そう、そう、上半身をそらしながら思わず左のものが立つ、カメラは移動出来ないから早くッ、素早くその縄尻を一回転だッ、ハイッ娘はこつちを向いて、黒装束の盗賊の顔をじつと見詰めて、そうです、本番でフィルムは廻ってますよ、そらッ縄尻を曳いた、一発肩の処を、君が打くんだった、遠慮せんで、そうだ、ハイ、もう一打ち、娘さんは怖ろしさと痛さから、斜め横、斜め横に、そう、そうして裾がお留守じや困りますよッうんと、思い切つて、赤い蹴出しが出ました、出た処、そう、眼が死んだ、きつとなつて、にらむように、しかし痛さに静かにうなだれる、いい処だ、ストップ、上出来！ 乾盃だ、ハイ、御苦勞さん一汗拭ぐって下さい」

ル写真？ イヤ素描キヲ御覧ノ上今暫ク御辛抱願イマス。
「じゃ、大詰めに参りましょうや、ラストへビー、大いに頑張つて、処で今度は赤ふん両君活躍の巻だ、いいね、美しく酷たらし縛られた大家の娘御の身柄を引取るんだぜ、君達の位置は一人は駕籠に頬杖をついたふざけた恰好で豆キセルを吹かしている、も一人の相棒はへつぱり腰の尻丸出して黒板塀のそばから——つまりぐりぐり戸の開いた処から黒闇の庭内をのぞいている情景が愛嬌があつて面白からう、処へ降つて湧いたように哀願する後手の娘さんが現われると云う寸法だ、盗賊の諸君は初めに云つたように、そうだね、もう意気揚々と娘御を曳き出せば任務終りなんだから多少あせり気味の風態があつても小面憎く演つて頂くと零囲気が出ていいと思ひます、サア始めますかな、その前に肝心の娘御を後手にしなくちや、いいですか？ 少し場が経かないけど手取早く荒縄で行きますか、今度は僕が縛りましょう、一寸の辛抱ですから、前の責めのシーンを忘れちやつて縛り方が間違っているかも知れないでしょうけれど、痛いですか？ 手首は案外どの映画監督もいい加減にし易いから、特に今日は、大丈夫ですね？ 一寸苦しいでしょうが我慢して下さいよ、猿轡を嵌めますよ、責められた後ですから少し前をはだけて白足袋も泥をつけ

た方が、蹴出をぐんと出しても、もうかまいませんよ、散々放ら苛められ折檻された挙句何処かに連れ去られるシーンですから。

ようしッ、用意、準備、オーライ？ O・K
カメラマン！ 駕籠に放り込まれてぐるぐる巻き、かついで五六歩行った処でフェードアウトだ、いいね？ 皆さん！ 頑張って下さいその前に一つ、アフレコだから今回は云いたい放題喋ってかまいません、じゃ、ハイッスタート！

「さあッさつさと立ち上るんだッ、立てねえのか？ こりや」

「兄弟、兄弟、壊れ物なんだぜ、叮嚀に、そら見ろッ、真白いふくら脛が紫色にむくんでらあ、娘御、もう斯うなったら俺等の云う事もきくもんだ、何あーに、一寸の辛抱だ、先様首を長くしてお待ち兼ねよ、そう、そう

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。

来なくっちゃ、それッ、

「駕籠や！」

「ほう、びっくりした、へいはい、三番町の承知致しやしたとも、おッ、相棒！ 早いとこ、合点だ」

「ストップ——、娘さんの取扱いが零だ、てんでに分れ分れに動作して娘御が放ったらかしだよ、それじゃ、もう少し主役の女性を中心に、つまり囲んで行くようにしてさつと散って身構え駕籠屋を刀の先きで威すだから此処でも貴女はとーんと突かれてヨロヨロと駕籠の担ぎ棒に崩れるように当って、くるつと半廻転し胸から下を駕籠にしな垂れ掛つてもいいんですよ、その時、君は持っていた縄尻をポーンと駕籠やへ投げてやる、」

「行けッ」

「おッ 相棒！ 承知の助、」

「と来りや情景は満点だ、こんな要領で今一回……もう撮ったの？ そうか、それじゃあ——と、ラストのラストになっちゃったけど、さつきの駕籠にぶつかってから駕籠の中へ入れられる処だけ撮影してあとはこの次にします、今度はカメラはうんと近づけて下さい。雲助君は毛ずねと太い手の指先きが写れば充分だ、貴女はこの位置からあの駕籠に向ってパタパタッと突きやられる、いいですね、盗賊君達は刀のきつ先きが一駒の左隅に写れば

と云っても縄尻を握った右手首だけはカメラから逃げないように、さあ、始めましょう、ハイッ」

コノ場面ハドノ映画ヲ御覧ニナッテモ、マルデ娘ト云ウ娘、女ト云ウ女が全部ト云ッテモヨイ位ニ待ッテマシタト云ワンバカリニ進ンデ駕籠ノ中ニ素直ニ入ルカラ奇妙デハアリマセンカ？ ツマリココニ至ッテシツコイ演技ハ許ルサレナイノカモ知レマセンガ無名監督ノ良サハココニ在ルト思ウノデス。ソノ証拠ニ熱狂シタ僕ハ

「そうだッ、ぶつかって、そう、そう、後手首を見せて、こちらへ向きを変え、逃げ出そうとしては縄尻を雲助が曳いたッたぐる、太い指が掛かるッ、ふくら脛も露らわにそる処を襟首を掴んで、ホラッ、ぼやっとなんで相棒が娘の身体を、そう、無理矢理に押し込んだ、間髪を入れず垂れをバラッ、序でに早いとこグルグル巻、O・K、上——出来、アップ！ 完了」

ト怒鳴リ散ラシタコトカラデモオ判リニナッタデシヨウ。コノスナッパ時代劇ニ進ンデ出演シタ娘サンハ実ニ得難イ人デスシ今後モ喜ンデ協力スルコトデシヨウ。何ンナラ、御紹介シテモカマイマセン、イツデモ静カニ私ノ頭ノ中ニ眠ッテイル彼女ナンデスカラ……デハ、モウ朝ニナリマシタ、ドナタモ御ユックリ御寝ミ下サイ。——終り——

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤブー

(第十一回)

沼 正 三

第十八章 畜舎のドリス

一 予備檻へ

広々と舗装された騎馬並木道を美少女ドリスを肩にして畜人馬アマデイオは疾駆し続けていた。葉を落し始めた両側の樹列が飛ぶように後へ流れ、見る見る水晶宮が大きくなった。切子玉形の楼閣の斜面の一つが朝日に燦めいた。

ドリスは馬上で霊茸(※)を頬張った。水晶宮まで来ると、

馬は正面広場の左手の馬場の隅にある既に帰ろうとするのを、右耳の方向手綱をグイと引き絞り、裏手の生畜舎に通ずる小門の方へ頭を向けさせる。「生畜舎へ」と一言命令しておけば、放っておいても良いのだが、彼女は女傑クアドリー伯爵の流儀で、言葉より手綱で自分の意志を伝えることにしている。知能指数では彼女より高い賢い馬なのだが、彼女に取っては知性のない愚かな旧馬と選ぶ所は

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤブーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人犬畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ボーリオン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たボーリオンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやつて來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤブーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細

かく迎るのがこの小説の第二の狙いである。

全裸を強制する皮膚強化処置を受けた麟一郎は、逆上の極無理心中を試みて失敗し、去勢されて予備檻に移され、畜籍局の技師コラン博士の手で朝から家畜適性検査を受けているところだ。早朝海岸で一刻を費したドリスは河童を随えて帰途にある……

ない。いや、bee と haw (馬に対して、右、左という時の英語) さえ使わぬ点では、この、教育に恵まれれば立派な哲人となる素質を持った頭脳の持主を、旧馬にも劣る動物として取り扱っていると云えよう。

(※註。 チューイング・マシム 霊茸 は他星植物であるが、これを噛んで汁を吸うと疲労回復の特効があるので運動家に愛用される。繊維は不消化なので、無理して食べぬことはないが、普通はチューイングガムの様に、噛みかすは吐き捨てる。黒奴には禁ぜられている。尤も白人からその噛みかすを貰うことは差支えがないとされているので、実際には黒奴の口の中でもう一度噛まれた末食われるのが常である。

生畜舎の入口前に来ると、口手綱を引き、マシム 霊茸を含んだまま、低

く
「ungko。」

馬が蹲む時の反動を利用し、両膝を開き、後斜上方に両足先を挑ね上げながら、全身を後ろに引き、両足を揃えて、一旦肉踏台に靴底を下し、その反動で、もう一度軽く跳ねて、ポイと地上の人になった。あふられた真紅のマントが大きな翼の様にふうわりと下って身を纏う。カッパのピューは、馬が蹲位になると同時に、早や下り立っている。

「厩にお帰り」

とアマデイオに命令し、鉄扉の開かれている生畜舎の玄関口へ、つかつかと入って行く。ピューは当然のこの様に随行する。

厩には黒奴馬丁も従者もいるのだが、此処には急に来たわけだから、誰も待っていない。中に通って当直の黒奴係員に足蹴礼で応えつつ、

「予備檻のヤブーは？」

「は、唯今、博士コランが適性検査中で……」

「博士コラン？」

「は、畜籍局の方で……」

「フーン、馬鹿に早く来たんだね」

「お呼び致しますか？」

「ううん、一寸行つて見るわ。案内はいいの。分つてゐるから」

マシム 霊茸を噛み噛み廊下を進んで、予備檻と表示のある扉を開いた。土下座するB2号には足蹴礼。平民の貴族に対する敬礼として片膝ついて低頭するコラン博士には手肩礼(片手で相手の肩を軽く叩く)部屋は二十畳敷位、中央一段高く檻があり、ヤブーが潜穴から首を出してペロペロ夢中で赤クリームを舐めている。

「どう適性検査の結果は？」

「唯今精神検査を実施中でございますが、仲々優秀な様で……」

「良い舐めぶりね」

「はい。舌の使い方がまだたどたどしいございますが……」

「初心初心しくて却って可愛いよ」と言いながら、性能表に書き込まれた数字を眺めている。

その時コラン博士が送声器に向つて

「おあずけ」

ときびしい声を吹き込んだ。が、ヤブーは舐め続ける。と見る、

急に舌を引いた。黒奴の操作する電気針が身を貫いたのである。針
 といつても有形物ではない。U字金具から放出する一種の刺戟電流
 である。



「よし」

待っていたといわんばかりにヤブーが舐め始める。博士は壁の性
 能表の電気針服従度の欄に1と書き込んだ。それを眺めた女は、鞭

の先をピタリそこに当てると、男に
 「電気針服従度1、これは低過ぎない
 ？ 妾のは今迄大抵2以上だったよ、
 初めから」

「は、一度丈ですから正確ではありませんが
 せんが……」

「何故繰り返さないの？」

「は、これからお飼いになる貴族達のお楽しみが、洗脳手術による服従度の
 向上にある（第十三章五）わけでござ
 いますので、そのお楽しみを減らしま
 すことのない様に、ほんの一通りの調
 査に止めますのが畜籍局の慣例でして
 ……手前もそこに籍を置いていますの
 で……」

「でも、学者としては詳しく知りたい
 んじゃない？」

「勿論でございます」コランは力強く
 答えた。「実験用に手に入れた時は徹
 底的に試験します」

「このヤブーも、もう一度位試して良
 いわよ。…妾がやるわ。一寸退いて」
 適性検査の手伝に子供っぽい好奇心を
 湧かして、我儘な令嬢は、口を動かし

ながら、博士の立つ位置へと近ずいた。一見素裸に見える畜人皮から発散する性的魅力にコランは眩しそうに俯向いて席を譲った。黒奴は慣れたるから割合平気で電気針の鉤を押えて待機する。この時カップのビューが退屈して悪戯し、スイッチの一つを弄ったのを三人共気附かなかった。

二 電気針服従度試験

——美味しいクリームだ。材料は何かしら、美味しい、実に美味しい……

夢中になってる所へ、又もや

「おあずけ」

と声が掛った。先刻と違って若い女の声だ。お預け、だが、我慢できず、思わずもう一舐め……電撃はない。今の中とペロペロ舐め続ける鱗一郎。

「全然、言うこと聞かない。電気針にも平気だなんて……」とドリスは呆れ返った。

「不思議でございますな」と博士も頭を捻る。

実は電気針の電流は、カップのビューの悪戯で止っているのだ。ヤブーは見る間に井を空っぽにした。U字金具が同時に元に戻り、ヤブーは首を引込め、胡座して考え込んでいる。

クチヤクチヤ霊茸を噛みながら、それを眺めたドリスが、

「赤クリームはもうないの？」

「は、今ここにはございませんが……」と黒奴。

「赤クリームじゃない方が却って良いかな……余まり不思議だからもう一度やって見たいの……そう、これにしよう」

餌皿を引き寄せて、口中の唾と一緒に霊茸の噛みかすを吐き入れ

檻の方へ送る。

先刻から、噛みかすは自分が貰えると思って胸中期待していたB2号は、泣きそうな顔をした。ビューはそっと例のスイッチを元に戻した。

井が又何か入れられて戻って来たのに気附いた鱗一郎は、先程の美味を忘れかねて、早速また潜穴から首を突き出した。今度は変なものだ。噛みほぐして汁を吸ったあとのするめ見たいで、唾としか思えぬ小泡がついた小さな塊が入っている丈である。

——何かしら？

——と思った時、やはり女の声で、

「よし、お食べ」

声は掛ったが、一瞬躊躇した。途端にビリリッとする。慌てて両唇で啣え上げ、口中に含むと同時に、U字金具が下って首筋を拘束した。附着した唾が冷たかったが、思い切って一口噛むと、かすかに口中に快い芳香が拡った。味は爽快である。と、又もや

「おあずけ」

——どうすれば良いのだろう？

ビリリリ……と責められ、迷った末、吐き出すと電撃は止る。暫くして

「よし」

又啣えて噛む。

「おあずけ」

——犬見たいに仕込まれてるのだ、俺は。

我身の浅ましきを感じようとする暇もなく、ビリリッとする責められ、吐き出す。電撃に追われて、反省する心の余裕が持てない。

「よし」

急いで啣えると、噛めばまだ噛んでいられそうだったが、良い加

減に嚙み込んでしまった。こんな状態から早く脱け出したい……

食べてしまったのにU字金具が解けない。ふと気付いて、井の底に残る泡の消え掛った液体——人間の唾に違いなかった——を舐め取ると、同時に首筋が楽になった。井の中味とU字金具が何かの仕掛けで連動してゐるらしい。首を引いて胡座をかいた。そういえば、先程から裸の尻に金属が冷たく感じないのが不思議だった。

と、急に女と男の話し声が聞えて来た。

「今度は言うことを聞いた。電気針にも反応したし、やっぱり普通だわ」

——昨日聞いた声だ……そう、円盤に一番に飛び込んで来たポーリンの妹の声だ。たしかドリスと云っていた……

「左様でございますね。電気計服従度の評点は、少し増しておきます」

「もう少し仕込まないけど、検査の手伝が度を越すと、自分の訓練の楽しみがなくなったなんて、飼主に恨まれるのが落ちだから、止しとくわ」

「おや、お嬢様がお獲りになったのだと思っておりましたが、検事長様ので……」

——検事長？ ポーリンは昨日そう名乗ってたぞ、確か。

「ううん、姉様でもない。姉様のお客様の獲物なの。目下此処に宿泊中よ。登録の時見て御覧。素朴で淑やかなそりや良い方……」

——姉様のお客様？ やッ、クララが生きてるのだろうか？

「手前は検査を済ませますと登録の係員と交替で帰りますので、その貴女にお目通りできませんです。残念ですが……何とおっしゃる貴女で？」

「嬢……おや、ビュー、何悪戯してる、そのスイッチは吸音装置と……」

ブツリと音が絶えて静寂に戻ると同時に、井のある側の空間に、突然、異様な光景が展開した。

光の壁から河童が現れたのだ。逃げる様に飛び出して来た奇怪な小男は、濡れた肌の緑色、尖った口吻、頭の皿、背中の甲羅……絵本で見た河童に違いない……

目を睜^みつた彼を更に驚かせるかのように、続いて現れたのは……燃える真紅のマントを纏った全裸の女体である。乗馬長靴を素足に穿ち、右の素手に鞭を持っている外、何も身につけていない。恰好のよい臍、ふっくらとしたヴィナスの丘、毛は剃つてあるので、丁度ギリシヤ女神の彫刻の様な。

「止れ、ビュー」

河童は檻を廻って逃げようとしたが、忽ち追い附かれた。女は長身、河童は子供の身の丈、歩幅が違うのだ。ビシッと鞭で横撲りにし、ひるむ所を蹴倒した。檻のすぐ傍の出来事。見ていた麟一郎が思わずハッと程の邪怪な蹴り方だった。

美しい憤激の表情だ。象牙の頬は俄かに紅潮し、金髪は波立って逆立つかと思われる。目尻が釣り上って、キラキラと碧い眼が光る。美少女は心底から腹を立てているらしい。

「ビュー、今日の悪戯は承知しないよ」

その云う声は、確かに今し方のドリスの声である。然し、麟一郎は不図妙な事に氣附いた。首から上は白人としか思えないが、マントの下の全身の肌は黄色いのである。

——ドリスは混血児なのかな？ それにしても何故素裸でいるのだろうか？ 露出狂？

ヤブーの皮が衣服になるとは知る由もなく怪しんだ彼の目の前でドリスの右長靴がもう一度躍って、土下座して詫びようとした河童を仰向けにひっくり返し、その儘顔の真上から靴底が舞い下りて、

クアツと悲鳴をあげさせ、ぎゅっと顔を踏まえた儘靴を前後させて首を右向かせ左向かせした後、靴底で額を擦りながらサツと前方水平に迄爪先を宙に蹴上げた。勢で河童の顔はその方向にゴロリと半廻転する。スラリと前に伸びた右脚の先で長靴の拍車がキラリと光った。蹴上げた反動で力強く戻ってくる右踵をこのまま左踵に引き附ければ、拍車は横向きになった河童の顔面に正面から激突し、眼球の一つを潰して飛び出させてしまふだろう。

左右両脚の成す九十度の角は丁度鱗一郎の真正面にある。肩の赤マントは背中にひだを寄せたまま垂れて殆ど身体を覆わず、長靴の外はバタフライもブラジャーもない完全なストリップで、バレリーナさながらの逞しい脚線美を示す金髪的美少女の足許に、倒れたまま恐怖にすくんで声も出せぬらしい緑の畸形児。この刹那の凄艶な情景は、鱗一郎に檻の中にいることを忘れさせるほどだった。

右足が振り下げられようとする一瞬の間隙を縫って、鱗一郎が叫んだ。

「嬢ドリス・ジャンセン、お願いします」

三 ドリス対鱗一郎

未訓練の土着ヤブーから話し掛けられることは珍らしくないが（第十五章二）、姓名まで知っているととは思わなかったし、第一、憤怒の余り、ヤブー檻の傍に立っていることを忘れていたドリスには、横から声を掛けられたこと自体が意表外だった。ハツとして檻の方を見る、その拍子に脚が下って、往きと同じ様に拍車ではなく靴底が顔を擦って通過した。狙いが狂ったのである。

顔面に拍車を当てられる恐怖にすくんだ様になっていたビューはこの隙に素早く跳ね起きて逃げようとした。その小さな身体に何処からか飛んできたもつれた黒紐の塊りがぶつかかった。動きほどける。

蛇か？ 蛇にしては平たく細く真田紐の様だ………すると片足に巻きついたと思うと、クアツツという河童の悲鳴の消えぬ中、黒い蛇体が縦横にその緑の肌の上に交錯して幾重にもなっている。普通の蛇が一方方向にぐるぐる巻くのと異って、罪人を縛る縄の様に巧みに交叉して結び目を作ってゆく。刺つて床に這った蛇体の上半身が鎌首を拾げるのを、ドリスが近寄ってむんずと掴み事無げに、檻の中から眺める鱗一郎の方へ向き直った。何という奇怪！ 後手に河童を縛り上げ、その背中から引いた縄の端を片手で握っているとしたか見えない。又もやイース世界の魔法、黒蛇が黒縄に化してしまった。

これは飼畜者の蛇 *Yadpoole's snake* と称ばれる人工合成動物（第十五章三）で、ボケットの中では唯の真田紐の様だが、ヤブー系動物に投擲されると命中した途端活潑に動き出して縛り上げてしまふ本能がある。三匹かれば巨大な畜人馬でも緊縛されるという畜舎勤務者の必携具の一つだ。今のは勿論飼育係のB2号がドリスに助力して投げつけたのである。

生きた捕縄の正体を知らぬ鱗一郎はあつけに取られるばかり、今朝の悪夢の続きを見るかの思いだ。

そんな彼の心中には無関心に、ドリスは馬や犬を買う時の目附で、このヤブーの肉体を視察検討していた。今し方の一声で出鼻を挫かれたことが改めて彼女の興味を唆ったのである。自分で剣術を相当やる丈に、彼女にはあれが一つの気合として自分の行動を狂わしたことがよく分った。達人の気合だ。

——ジュウドウが強いという話だったけど嘘じゃない。決斗士にしたら優勝牌が取れるわ（※）。問題は体重階級ね……肉附は良いけど背が低いからバンタムかフェザーね……

（※註。畜人決斗は飼主同志の勝負である。競馬の馬主などと同じ

く、良い動物を持てば飼主はうんと儲る。決斗はヤブーがして優勝は飼主と
いうことになる。

と――

「嬢^{ミス}ジャンセン、お願いというのは」とヤブーの声が彼女の想念を乱した。「私はどうしてこんな目に合わされているのか分らないのです。それを教えて欲しいのです。一体何の罰です？ 私が何をしたというのです？」

「何の罰でもないよ」美少女は笑って答えた。「ヤブーには罰というものはない（※）お前が、何をしようが、しまいが関係ないよ」

（※註。処罰^{シツバツ}、ということは責任^{セキニン}即ち人格^{リョウカク}ある者の非行^{ヘイコウ}に対する概念である。白人と黒奴には刑法がある。既に触れた様に（第十二章二註）黒奴刑法は峻厳^{ジュンゴン}苛酷^{カコ}だが、少くとも黒奴を罰するにはこの刑法によらねばならない。これに反してヤブーには処罰^{シツバツ}ということがないビューの悪戯^{アクギ}のようなヤブーの非行^{ヘイコウ}に対しては、機能不全としての調整^{テウセイ}――それができねば壊すだけだ――あるのみ。狂った時計と同じことだ。ドリスがビューを拍車で折檻^{セツガン}しようとしたのは、怒の発作で時計を地面に抛^なとうとした様なもので、処罰^{シツバツ}で



はない。逆に云えば、畜人刑法^{シヨウジンケイホウ}などいうものはないので、ヤブ

「一に対しては非行とは関係なしに、どんな取扱でもできるのである。」

「じゃ何故こんな所に入れられねばならないのです？」麟一郎は追及した。

「お前がヤブーだからさ」平然と答える。

「それで何時までもここから出さないというのですか？」

「いや。お前の飼主が、お前に一番ふさわしい居場所を決める迄さ。これは予備檻だよ」

「飼主って、ああ」麟一郎は心の動揺を隠そうともせず、

「それはクララですね」

「妾かも知れないさ」ドリスは笑いながら云った。クララからこのヤブーを貰う気があるのだ。

「嘘だ！」麟一郎は、鉄の格子棒を両手に握って、胸を乗り出してビタリくっつけながら絶叫した。

ヤブーの極端な昂奮と焦燥を見ている中、ドリスは、畜生虐弄の衝動に襲われた。動物園で猿をからかって、猿が怒るほど快感を覚える、あの心理である。

「妾の方が良い飼主になれそうだよ、多分」

「とんでもない。僕はクララを待ちます。彼女はきっと救助に来て呉れる……」

「お前に殺されかけた人がそんなことをすると思うのかい、お目出たいヤブーさん？」

「彼女は赦して呉れますとも！彼女の寛容が、彼女の愛情が、貴女見たいな弱い者虐めする人に分るもんですか！彼女は僕の婚約者なんです！」

「その時は気が変になってたのさ」記憶喪失中のクララの行動を、ドリスは自分が理解してる通りに表現した。

「何を云うのです！クララの様な立派な淑女のことが貴女見たいな露出狂に分ってたまりますか！」

全裸女体と信じての精一杯の侮辱だった。

「あッはッはッは」

吹き出したドリスが光幕の外へ河童を牽きながら出てゆく後姿に麟一郎は浴せた。

「裸ダンサーめ！」

誇り高いイースの淑女として、こんな罵詈雑言が人間半人間の口から出たら、唯置く彼女ではないが、今ドリスは少しも気を悪くしていなかった。九官鳥にバカと云われて怒る気になれないのと同じで、家畜のヤブーからいくら悪口や皮肉を云われても、名譽感情は少しも傷かず、全然怒る気になれないのだ。決闘士を求めている彼女としては、こういう態度は却って嬉しい位。

——勇敢で向う見ず、氣に入ってたわ。クララに頼んで貰おう。

先刻の邪魔も今の侮辱も、麟一郎が氣負ってる丈で全然勝負にならない。ドリスは数段高い所から、家畜の麟一郎を見おろしているのだから、業のかかりようがない、勝負以前なのだ。

四 恋人から女主人へ

両棲畜人は悪戯するし、光幕の向うで立廻りは始まるし、適性検査に必要な行動観察がちっともできやしないと、内心苦り切っていた畜人学者コラン博士は、氣儘な令嬢がこのヤブーを虐弄て呉れたお蔭で、慕主性（旧主を慕う気持）や勇敢度などを測り得て喜んだが、まだまだ測定すべき諸元は沢山残っている。だから、この氣儘な令嬢が、

「博士、お邪魔したわね。帰るわ」と応揚に差し伸べた片手の指先

に、片膝ついて恭しく接吻した。畜人皮と承知はしていても、面と向い合うと素裸の様に思えて来て、正視出来ない、立ち上ってからも下を向いている。

黒奴の方を向いたドリスは、微笑んで、

「先刻は御苦勞。接吻を許す」

蛇のお礼だ。黒奴に対して白人貴族が接吻といえど勿論足接吻のことである。B2号は両膝ついて長靴の先に唇を当てたが、破格の光栄に慄えて歯がガチガチと鳴った。賤しい飼育係の黒奴にとって今日は生涯の最良の日となるであろう。お嬢様の靴に接吻した日！ビュを縛った蛇の端と鞭の柄とを片手に握り、何か鼻歌を唱いながら、畜人皮のジャンセン侯爵令嬢は部屋から出て行った。

適性検査再開。精神諸元の調査継続。

然し、麟一郎の頭は今し方確めたクララのことで一杯だ。

——クララ、君は死ななかつたんだね。今どこにいるのだ。昨日のことをお詫びするため、一刻も早く逢いたい僕の気持が君に通じないだろうか……

検査の合間もいや最中も、そんなことを考えずにはいられない彼だつた。

気が散っているせいか、再開後の成績は余り芳ばしくない様だ。

精神評価のための諸検査は間もなく終って、彼は檻の外へ引き出された。何事？

今度は肉体諸性能の調査なのである。担荷力、挽曳力、疾走力、

……等の作業性能から、両脚をどの位開けるか、前後に背中をどの位彎曲できるかといった肉体そのものの屈撓性の極限等、各種又各様の、麟一郎にとっては、まるで拷問としか思えない検査が、機械

を使って次々に彼の身に加えられて行くのだ。

「苦しい！……クララ！……君はどこにいるのだ。僕を助けに来て呉れ！……昨日の僕のやり方は僕が悪かった。謝るよ。早く助けに来て呉れ！」

麟一郎は又もやクララに呼び掛けざるを得なかった。それも昨日皮膚窯の中で心に祈ったのと違って、号泣しながら大声で叫んだのだ。

彼はクララが来れば事態は好転すると信じて疑わぬ、ドリスの脅かしで、昨日の行動は謝れば赦して貰えると思っている。

だが、昨日皮膚窯の中で彼女を求めた時に比べると、心理状態に於て変つて来たところがある。ドリスに対しては「彼女は婚約者だ」と見得を切ったが、今の彼は、婚約者という言葉に執着して、それにふさわしい態度をクララに責める気持は殆んど持っていないのだった。彼が今号泣しつつ求める彼女は恋人としてよりも、救主としての面の方が遙かに強い様だ。それが証拠には、今朝程夢にまで見た、あの恋敵の美青年のことが、今はそれほど彼を苦しめなかった。美青年を伴つてでも、彼の救主であることに差支はない様だった。——現実には、彼女が「救主」として現れるかどうか、それはさて置くとして、こういう彼の心理こそ「女主人」乃至「飼主」としてのクララを受け容れる最良の準備状態になっているではないか。女主人が、妻として彼女の夫を愛していることを認めつつ、次元を異にしてその女主人を飼主として慕うことができるのが犬の愛だ。それがなべての家畜心理の根本だ。麟一郎は、今や自分からその家畜化への道を歩んでいるのだった。

肉体検査は今や最高調——

だが私達は、既に余りに長くこの予備檻の傍に滞在し過ぎた様だ。

苦悩する麟一郎を見捨てて、私達はクララ——彼がそんなにも待ち望んでいる女——の寢室を覗いて見よう。

(次号予告)

「次章では、クララ、ウィリアム、ポーリーン、セシルの四人の白き神々の起床後の有様が描かれます。新らしい生体家具の色々の紹介を御期待下さい。」

短 信 往 来

編集部 編 V

○切腹○ 切腹し内臓をひき出す (病苦にたえかね) 「毎日新聞六、二四日夕刊」

二十四日午前九時半ごろ江東区南砂町七、松崎鉄工所長松崎良雄さんの妻やえさん(四九)はハサミで腹を切りさいた。家人がすぐ近くの病院に収容したがやえさんは二十センチも腹を切っており、内臓の一部を手でつかみ出しているので重体。江東消防署の話だとやえさんは胃カイヨウで病床にあり、苦しきから発作的に腹を切ったもの。(江東区在住の某氏より送られた新聞の切り抜きから)

○禪○ 『へこかき祭り』眠う

【久留米】久留米市高良大社恒例の「へこかき祭り」は一日午前十時から開幕、近郊の善男善女約一万名が雨にもめげず押しかけてにぎわった。ことし七つと六十一の男女が赤ふ

(以下次号)

んどし赤腰巻で参拝すれば長寿間違いなしという珍しい伝えがあり、赤色の下着をぬぎ捨てた老若の参拝客でさしもの境内を埋め尽した。△西日本新聞の切り抜きより▽

「へこ」とは福岡地方でふんどしや腰巻をさして言います。例えば、越中ふんどしを「えちちゆうべこ」赤い腰巻は「赤べこ」と呼んでいます。「へこ」をかくと言えは、ふんどしや腰巻を着けるという意味です。(提供者 山下真一氏解説)

○下着○ 下着専門ドロ捕まる

女性の下着類を専門に盗んでいた変態男が十日千葉署に捕まった。この男は千葉市亥鼻町五八無職成沢弘雄(二六)で、十日午前一時五十分ごろ千葉市亥鼻町三一三千葉大付属病院看護婦寮第二晴輝寮洗たく干場に干してあった下着類を盗もうとしたところを、守衛の板垣尚さん(三九)に発見され捕まったもので、昨春秋ごろから同寮の看護婦五十名近くが、同様の被害を受けているところから千葉

甲斐仁参案
四馬孝画

『涙のダイヤモンド』(略号)(なみ)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌 ヒマシ油責

△詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。▽

署で追及したところ五十余件の下着専門ドロを自供した。同署では余罪相当あるものとみて取調べている。なお成沢は、盗んだ下着を自分が着用するという変態ぶり、捕った際も下着二枚を着用していた。(「産経時事」六、十一日付千葉版、岩井安夫氏提供)

実に四十六枚の女性用下着を盗み回り、それを着込んで悦に入っていた変態男が、六月十日朝千葉署に捕まった。この、女性の敵?は二十六才の独身青年で、おふくろさんと二人暮らし、昼間は真面目な人柄だが、夜になると君子ひよう変。九日の夜も千葉大付属病院の看護婦寮に忍び込み、物干台からシェミーズなどを盗もうとしたところを警戒中の守衛さんに発見され、四十七枚目の夢を消されてしまった。千葉署で調べたところ、この男、自分の下着の代りに盗んだ女性用のを着込んでおり、自宅の押入れから盗品がゾクゾク、あきれた変態男と判って千葉署の留置場へお興入れした。(「千葉日報」より)



〔通信〕

最近号の感想と批評

近 藤

大変長らく御無沙汰続き、お便りをするのにも朝帰りの敷居の高さを感じていました。

その間にも編集部の方々から変わらぬ御厚情を賜わり、衷心感謝に堪えません。七月号以降、思いつくままの感想を纏めて御無沙汰のお詫びのしるしにしたいと思ひます。

〔七月号について〕グラビア中の圧巻は花坂嬢のフオート（就中右ページ上のもの）と北原嬢の麗筆です。私の好みに合致したという意味で圧巻という言葉を使つた訳ですが、異見をお持ちの方々も多いことでしょうが、それにしても素敵だなあと感嘆しています。

甲斐氏のローソク責めのアイデアは二葉

とも素晴らしいですね。泉かよ子さんの「恥しい夢」些かロマンティックに過ぎるようですが、あの挿絵の見事なこと、ブラジヤーのストリングが喰い込んだ豊かな背中の肉づき、ぶっくりと盛上った下腹部、充分に張った腕や尻など何一つ缺陷のない絶品と思います。佐川増夫氏の「L・T商会」は佳境に入りつつありますね。飯田靖子さんの告白は私の憧憬の的である古川裕子さんを想い起させるものでありました。私の徒然の作が思いがけず掲載の榮に浴して、思わずどきっとした程です。私はスポーツの持つ峻厳さが好きで、何ということもなくあの文を纏めたものですが、地味なばかりの厳しい生き方を愛する同好の士はないものでしょうか。

〔八月号について〕グラビアのトップは四馬氏の絵、革の手袋と被虐の美女が素敵なコントラストです。縄目の喰い込んだ女体の線の一本一本が指先の苦悶まで細心に描かれて余ます処がありません。日下絹子さんの体験記は母となる辺りや坊やのために屈辱に耐える辺りがじんと胸に迫るものを持っています。次回を待ち兼ねています。「L・T商会」の佐川氏にも大いに頑張つて頂いて誌上を飾って下さるようお願いいたします。吉野氏のイメージはそのまま画帳のアイデアにもなりそうですし、一一三頁の挿画の良さは何とも云えません。土路草一氏の力作「潰滅の前夜」は文字通り息もつかせぬ迫力があり一気に読了して果てしない空想を娛しんでいます。

読者通信で北原純子さんからのお便り拝見して冷汗ものでした。先便で些か云い過ぎたものと後悔していたところでしたのでどう考えても北原さんのお便りが皮肉として受け取れてしまうのです。もしお気にさわった箇所がありましたら御容赦願いますしかしこんなことから北原さんに親しさを感じましたので北原女史をやめて北原嬢にしたのですが如何でしょう。

仙台の花村ミチ子様、千葉の浜田佳子様、貴女方の御希望が叶う日の早からんことをお祈りしています。

「九月号について」グラビアでは萩嬢のウエストの緊り具合と、腰部の曲線美に惚れ惚れしました。白金氏の「和装教室」、九月号はこのシリーズでも最高のものと思います。滝女史の麗筆も本文にマッチして活き活きしているではありませんか。私のお送りした記事が九月号にも三頁余りのスペースを与えて頂いて感謝に堪えません。私もKKファンの一人として唯の惨憺なだけの誌風は排して頂きたいと希っています。社会に生きる者としての平和を愛し、何らかの拠り所となるものをKKに求めたいと思います。筑紫美弥子さんの通信、貴女がサドの客体になればよかったのに、と残念でした。土路氏の「潰滅の前夜」、本当に

娛しく読ませて頂きました。いろいろと華々しい責めのパレードのあと救いも適当なものでKKに恰好な記事であったと思います。読者通信の神戸山村氏の御提案も誠に至当なものと思います。原由貴子様、寺本葉子様、お互いに末長く私達のKKを愛して行きたいものです。

「十月号について」グラビア中の第一位は「地獄花」の京マチ子さんの被縛フォトだと思います。あのヴォリュームのある身体に喰込む縄目がはっきり見え、表情も流石です。前号に予告が出た雪俊遙氏の「終戦奴隷」は序とも云うべき段階で、今後の発展が楽しみです。各種の雑誌に労作の発表を続けておられる氏の、この長篇に対してはそのファイトを驚くとともに、時間の余裕を持たぬ私は羨望を禁じ得ません。本田氏から「大陸暴行列車」の御紹介がありました。ロック座上演時のあの素晴らしい舞台の雰囲気は少しも感じられなかったのは残念でした。木口房代さんの「製糸工女」少々マゾヒズムが強過ぎるものではありませんか。十六才にして鼻環まで甘受できる人しかもスポーツに生き甲斐を求める人に逢ってみたいものです。

麻生和夫氏の告白、私はこれを十月号の記事の第一等に推したいと思っています。尤も

あくまで私の好みに基く尺度によるのです。……挿画と本文とのズレは、挿画を二葉にしさえすれば無くせたのではなからうかと、それだけが僅かに残念です。「ヒツプ受難」を書かれた花田育子様、妻を母にすることのできない夫との生活を形だけの夫婦と云うのはKKの存在を識らない人々の言葉ではないでしょうか。精神ばかりでなく二つの熱い血の通った肉体があり、貴女に「熱意と忍耐の愛の至誠」がある限り造化の神秘に酔って人生の幸福を味いうる信じますが如何でしょうか。

読者通信の森シズ子様、貴女にKKの真価を示すことのできる方が出現するようにお祈りします。中津由紀子様、羨しいお便りを書いておられますが中富啓子さんはS傾向と名乗っておられましたから貴女も被縛の経験くらいお持ちになったのではありませんか。

処で以上の四号では、やはり最近号の十月号が最上の出来でした。「鼻いじめ」「地下倉庫」の見事さ、記事の中でも真崎伸一氏、白金紅次氏、嶽収一氏、久留木栄氏、山梨参次氏の各氏の力作は私の好みにも合致して楽しいものでした。お世辞でなくKKの再起進展が現実になっていることを想い、編集部諸氏に深く感謝すると共に一層の御努力をお願いしたいと思います。



読者通信

十月号では、終戦奴隷。製糸工女美容病院の三つの大作がそれぞれ読みごたえもあり、空想の余地のある楽しい小説でした。殊に美容病院は今後の筋がどのように展開してゆくか、私自身の予想を相俟ってこれからの御誌の発行が待たれてなりません。

(滋賀、本川生)

古い読者の一人として御誌の発展を心から祈ります。気が弱いというのか。良き友の得られぬがまま独り心の中で色々と空想を描いては消して遊んでおります。空想とは楽しいものです。誰に制約されることもなく自由にあらゆる場面を展開し、その中に遊ぶことが出来ます。最近の御誌では私の空想の根源となる好ましい作品が多く喜んでおります。特に九月号で例をとれば津々一平氏の「赤い煉瓦の家」のように極端に省略された文章は、その美しい描写と相俟って私達に甘美で豊富な空想を働か余地を与えてくれます。私の空想は作中の人物、小夜子やマリの上に縦横無尽に馳せてゆきます。

森シゲ子様へ、私達大阪の者ばかりでクラブをつくり、月一回位会合の場をもうけ、話し合ったり実験してみたりしたら、どんなにか素晴らしいことでしょう。個人的な交際になりますと、どうしても感情的に割り切れなかったり、又人間としての醜い面が出て来たりして、そのことがお互いの人生を破壊に導くことになりかねません。それが一つのグループとして、或る程度の規約を設け、お互いの名前も職業もそして身分も一切知ることなく、単に人間対人間の交際として過せるようにしたら、お互いの将来も傷つけず、しかも日頃反吐が出る位塗りつけているメッキをはいで裸の心で人に接することが出来る楽しい一日となるでしょう、勿論グループをつくるからには誰か中心となって事務

的な仕事をする必要です。その人だけは他の人達の一切の秘密を握ることになるのですから、十分信頼の出来る人をあてなければならぬでしょう。若しお差支えなかったら、貴女が中心となつて、又お仕事いやお家のことで手がまわらないとか、或は気が進まないというのでしたら誰か適当な人を貴女がお選びになつて、その任に当らせたらどうでしょう。

(大阪市淀川区 H・T生)

最近の都会では六尺褌の常用者は殆どありませんが田舎へ行けば

まだ相当見る事が出来ます。今夏東関東を旅行しましたが千葉県九十九里浜一帯の漁師町で相当見かけました逞ましい壮年の漁師の禪姿、土地の高校生らしい清純な少年の禪姿等、上総一の宮、上総片貝などの水泳パンツをはいているのは東京からの遊び客ばかりで土地の青少年大半は白の六尺褌をしまっていました。少数乍ら赤褌、青褌も混っていました、既に滅び去ったと思っていた六尺褌は矢張り田舎で生きていたのです六尺褌常用者を沢山発見した歓びはその土地の素朴な人情と共に忘れるこ

【新版】女体緊縛フオート ◎分譲◎

R組 六十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円	R1	柔肌と荒縄 (須川令子)
五組五枚	四〇〇円	R2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
十組十枚	七五〇円	R3	床間の飾り (佐賀美智子)
二十組二十枚	一四〇〇円	R4	高手小手 (花坂道子)
三十組三十枚	二〇〇〇円	R5	海老縛り (萩千恵子)
四十組四十枚	二四〇〇円	R6	後手猿轡 (須川令子)
五十組五十枚	三〇〇〇円	R7	後手足縛り (村田那美子)
六十組六十枚	三五〇〇円	R8	鏡うつし (伊吹真佐子)
		R9	股間しばり (須川令子)
		R10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
		R11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

とが出来ません。来年の夏も又房
総へ出かける予定ですが。揮マニ
アの諸兄の中で房総のように六尺
揮常用者の多い所を御存じの方は
是非お知らせ下さいますようお願い
いたします。(大阪、中井光夫)

○ 沼正三様、大兄の学識と情熱に
はただただ感服するばかりです。
大兄は日本の国宝と信じておりま
す。MやF的傾向のあるものの声
はとかく圧迫されてS傾向だけが
大手を振って通るのが普通です。
日本国中には投書などに現われた
数の何十倍何百倍のMSマニアの
いることをお忘れなく。いまの編
集はやはりS偏重です。鷹野めぐ
み様、小生ある女性に六年間訓練
された結果、いまや「じようご」
なしでその女性や友人の婦人達の
御用を足しています。一度御試用
された上、食の方もみっちりしつ
けて頂きたいとお願いしております
(東京 サドル)

○ 残暑きびしき折柄編集子の皆様
大変御苦勞様に存じます。まだ日
も洩く貴誌を愛読させて頂いてい
る者の一員ですが、自分のS的な
要求に日頃非常な悩みを持ってお
る者です。小生は長らく貴誌のあ

ることを知らず、ただ僅かに映画
芝居、又大衆雑誌の女の責め場面
を見たり、或は自らなる空想を描
いて自分の要求をおさえてきまし
た。ところが或る機会に貴誌を知
りずつと以前より発行されていた
そうで自分の不明を非常に残念に
思いました。自分もこれを機会に
貴誌の同好の方達との文通の御仲
間に入れて頂きたく、このように
厚かましいお便りを出しました。
尚貴誌八月号の読者通信の中で、
仙台の花村ミチ子様の住所をお知
らせ願えませんでしょうか。小生
もそのパートナーとしての女性と
文通して色々お話しし又大変離れ
ておりますが一度お会する機会を
作りたく思っております。尚、甚
だ厚かましいようですが、京阪神
地方にそのような適当な女性の方
があれば御紹介お願いします。当
方今年廿二才で療養中の者です
が、もう殆ど全快して退院間近の
者です。誌上にのる場合住所は伏
せて下さい。
(豊中、柴田昌雄)

○ 編集部よりV花村ミチ子さん宛
の私信は御本人の希望により、そ
の当時転送しましたが住所の公開
は致しておりませんから左様御承

R 36	R 35	R 34	R 33	R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12
和装責め (藤田節子)	手足逆吊り(伊吹真佐子)	首縄股間縛(坂口利子)	股間縦縛り(中富綾子)	薄羅の緊縛(加賀利江子)	くさり責め(伊吹真佐子)	松樹後手縛(村田那美子)	変型しぼり(萩千恵子)	高手小手(加賀利江子)	逆海老責め(伊吹真佐子)	股間縛後手(中塚文子)	後手吊責め(伊吹真佐子)	逆さ吊り(伊吹真佐子)	椅子責め(佐賀美智子)	強烈梯子責(伊吹真佐子)	帆立縛 (萩千恵子)	いたぶり(春日、伊吹)	足揚梯子責(伊吹真佐子)	緊縛横臥 (厚狭春江)	立木しぼり(村田那美子)	トイレ縛り(須川令子)	猿轡の魅力(伊吹真砂子)	開股しぼり(川辺砂登子)	尻立縛り (萩千恵子)	女学生縛り(須川令子)
R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	
トップモード(〃)	強烈しぼり(〃)	あきらめ(〃)	苦悶の表情(〃)	猿ぐつわ(〃)	後手しぼり(〃)	引き裂き(〃)	のぞき見(〃)	股間緊縛(〃)	雁字搦目 (津森静子)	折檻の魅力(須川令子)	くさり責(川端多奈子)	御開帳 (萩千恵子)	後手しぼり(加賀利江子)	手足緊縛 (萩千恵子)	股間しぼり(〃)	コルセット(中塚文子)	松樹しぼり(村田那美子)	後手猿轡 (萩千恵子)	お灸責め(春日、伊吹)	肉体美誇示(伊吹真佐子)	乳房下緊縛(村田那美子)	後手首縄締(加賀利江子)	仰向悦虐責(川端多奈子)	

○ 知下さい。尚、只今は都合により
一切住所本名の照会及び手紙の転
送は中止しておりますから為念。

○ いつもながら編集部の御努力に
は敬意を表します。十月号は一晚
で読んでしまいました。グラビヤ
のフォトに海外の責写真、それも

女性のパツシイブとアクティブを配したものを是非載せて下さい。真崎伸一様の「女性志願者の夢」はいままでにない新鮮な内容で女性の下着をつけ責められる夢を追う女たちにとってはこよなく興味がひかれ、全く同感といったところ。久留木栄様の「美容病院」も第一回だというのに、すっかり魅せられてしまいました。愛子に対する一カ月間の責めがどのように展開され、どのような責め具が出てくるのでしょうか。次回が待ち遠しくなりません。読者通信欄の白根敏夫様、どうぞよろしく御交際の程御願います。六月号に告白した私のお恥しい文が目にとまりうれしく思っています。この欄から文通交際、そしてグループの会合まで発展してゆけばどんなに楽しいことでしょう。岸本青柳様のような体験談やその他のグループのお話を非常にうらやましく思います。(神戸T・I生)

○ 始めてお便り致します。私はマゾサドの両方に興味をもつ青年です。ふと店頭で奇巧を手にしてより私と同じ様なことに興味をもつ方々が割合に多いのを見て何となく嬉しくなりました。特に女性が

多い様に見受けられたのも私にとっては何となく意外でしたが……私は昔から女の子に馬乗りになられたり顔を足でふまれたりするのに大変興味をもち小学校の頃など姉の友達に馬乗りになつて縛られたり足の汚れをなめさせられたり時には小皿に唾液を吐いて、それを押えつけられたままのまされたりした時のことを今でも覚えております。しかし中学へ入つてより現在に至るまで、こういった経験もなく誰か年長の婦人にいじめられたいなと思ひながらも、機会もなく今日至りました。はからずも世間には私の様な者をいじめてくださる人もいるものだということを貴誌で知り早速筆をとつた次第です。貴誌愛読の女性の方で(女性に限りません)私のこの望みを叶えて下さる方がおいでになりましたら御一報下さい。又近頃ではサドの方の傾向もでてきたと申すのでしようか、女の人を縛つたり馬乗りになつて苦しめてみたいと思ふ様にもなりました。若し私に縛られたいとお望みの女性の方がおりましたら御一報下さい。お待ちしております。

(東京 松村一郎)

○ 十月号の読者通信で久方ぶりで

最新作

女体緊縛写真

花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことの無い花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。(略号はな1)

◎花坂道子嬢

股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。(略号はな2)
◎以上二集二十枚にて 千五百円

森シズ子さんのお呼び掛けがあつて大変嬉しく思いました。私は自分の経験から女性の愛読者は相当多いのじやないかと思つていました。たが読者通信に出ないので残念に思つていました。私も森さんと同じように会社を勧められています。私も同じ意見ですが、只グループは最初女性ばかりで作つてみては如何でしょうか。その方がきつと楽しく気がおけないと思います。女性ばかりの会でしたら私のお友達で三人ぐらい希望者があります。会が発展してから男性を入れるか入れないかは皆で話合つたらいいと思います。是非森さんに中心になつて頂きたいと思ひます。私、以前、会社の寄宿舎で女ばかりの中で半年程暮したことがありますが、その時の経験から考えて、きつと相当の数の人が会に入つてくれるだろうと思ひます。そして、一月に一回位集つて、ハメをはずした座談会なんか開いたら面白いんじゃないでしょうか。なんでしたら雑誌にそのときの状況をメソバ1の中で筆のたつ方が書いて送つたら皆さんにも喜んで貰えると思

います。女性の愛読者の方、もつとドシドシ元氣を出して顔を見せて下さい。私は何々と堅く傾向のようなものをつけないで自由面白オカシク集れるグループを作ろうではありませんか。同性からの呼びかけをお待ちします

(大阪、忍頂寺静子)

○ 神戸の高峯様、あなたの記事を九月号で拝見させて頂き、あなたの友達になりたくてこの手紙を差し上げます。私も女装マニアです。少し事情が違ひです。私は子供の時から女の子として育って来ました。学校も小学校や中学校女子高校と女の道を進んできました。ですから男性としての資格に欠けるかも知れません。私の生活には男性としての生活が全然ありません。女として考え、女として生活することが極く当然として暮らしています。この女性として何一つ不自由のない私にも、大きな悩みがあるのです。それは女性として最も悲しむべきことです。乳房が高く盛り上り女性的な、すらりとした肉体にはあつてはならないものがついてくることです。このために女学生の時、楽しみにしていた旅行にも出られず、海水浴にも行

けないのです。何度か自分の運命の悲しさに泣きわめき、真の女性として生んでくれなかった母を恨んだかわかりません。それで私と同様の悩みのマニアの方に同情しなぐさめ合うことが出来たら心もなぐさむことと筆を取りました。私、今年で二十二才、現在、銀座のある会社の女事務員として働いています。同僚からも周囲の男性からも、少しも疑われないでいるのです。八頭身スタイルと十人並の容貌で、決して女性として恥かしくない姿をしていると自負しています。でも私には、普通の女性のように出来ないので。秘密を持つて弱身で恋愛の対象を持ち得ない人間の悲しさ、こんな私と知って理解して下さい。年頃の一人娘の私に両親も悩んでいます。親戚や知人から私の縁談が持ち上っています。私に秘密のある手前どうすること出来ません。母も少なからず悩んでいる様子で、父は私を独身で通させるつもりで、でも母の諦めきつた悲しさを見ると立派に結婚して喜ばせたいと思ったりします。女心男体の運命を切り開く決心を固め、手術することを

母に打ち明けますと、それだけは生命にかかわると許してくれないのです。こんなに悩む私の運命をなぜ神が与えられたのでしょうか。女性として暮らしていきながら結婚出来ない悲しさ、女の幸福を得ることが出来ないものでしょうか。私に同情して下さい。男性が私にたなら喜んで交際します。私は女としての幸福に浸りたいのです。立派に人妻として両親を安心させることが出来れば、どんなに楽しい人生が開けることでしょうか。でも今では父の云う通り、独身で生きることに私に興えられた運命と覚悟をしています。マニアの方の中にも、こんな悲しい運命の人はいないでしょうか。今では、女性として社会の人々から見えて頂くだけで満足をするのが私の喜びなのです。皆様の中に交際を希望される方がありましたら手紙を下さいませ。高峯様、御返事頂けますかしら、さようなら

(東京 木村よし子)

○ 御誌には女性に関する責めの記事が多いようですが、余り興味がありません。女は可弱いものなので、残虐な責めには痛ましさとむごたらしさが先に立って、楽しむ

気にはなりません。それにひきかえ男性的な逞しい男の責めは、何といつても素晴らしいものです。沼正三氏の去勢鞍の話など素晴らしいアイデアです。私は男子でも余り若年には興味がなく、二十七、八才から三十才、更に四十才までの壮年がよく、柔弱な男より逞しい肉体の持主が一番です。だから戦争中、軍人や兵隊達に加えられた暴虐の記録を集めています。共産匪や匪賊に捕われた日本兵の拷問などの構想をもっています。越中禪一つにされた若い日本兵が土匪の巢窟の中で水責、火責に遭ったり鬻りものにされる光景は胸が躍ります。又、将校の中尉、大尉級の壮年が捕虜になり、公衆の面前で晒刑を受け全裸の晒にあい、女性の混っている中で男子として最も恥すべき凌辱に遭い、歯を食いしばって耐える情景などいつも想像します。又、時代物では、いつかの天狗松の責めの様なものを最も好みます。イカサマ賭博で捕えられた若い男が粹な姐御の手にかかり全裸で責められ下腹に天狗の面を彫られるアイデアは素晴らしいものです。同じようなもので、若侍が隠密の罪で捕えられ、領主や奥方や腰元たちの面前で全裸にさ

れ、松の木に吊され鞭打たれたり
海老責に責められて苦しむ姿を見
たいと思つています。又、荒縄に
よる股間縛りも見事でしよう。是
非そのような記事や画をのせてい
ただきたいと思っています。

(東京 菅良太)

○ 九月号は大変気に入りました。
第一に表紙を見ると、私なりに或
意味の満足感を覚えます。一寸説
明しにくいのですが、色々な幻想
で頭の中が賑います。それから高
崎勉さんの書かれた「地獄絵巻」
気に入りました。こうして拔書き
されて見ると又、新たな感激が胸
を貫くものですね。乱歩氏の作品
は、私もかなり小さい時から大好
きでしたので、大ていのものは読
んでいきます。紹介された文も勿論
読みました。私は畸形の人に異常
な関心を持つていますから、とり
わけ乱歩の作品が好きなのかも知
れませんが。今後も名実共に「地獄
絵巻」なる作品を御紹介下さい。
大いに期待して居ります。話は違
いますが、先月も今月も鷹野めぐ
みさんの作品が出ていないのには
ガッカリしました。めぐみさん、
どうなさいましたか。何時かはお
逢い出来るかも知れないと、ほの

かな期待を抱いていましたのに；
お逢い出来ないまでもK・Kで
その文面から貴女を感じとること
が出来たら毎月待つていますの
に……何らかの形で御返事下さ
い。K・Kが、どうのこうのと煩
らわしいことは云えませんが、只、
九月号には私の好みが多分多く取
り入れていましたので、柄になく
通信欄を汚しました。末だ書き足
りないことがあります、長くな
りますので今日はこの位で、高崎
さん。めぐみさん、共に元気であ
らうなら(東京 皆川のぶ子)

○ 小生は奇巧を愛読している一員
であります。九月号を早速拝見致
しました。いつもながら私の血潮
を湧き立てる内容は、全く人生の
喜びを満すに足るものと断言出
来ます。最近、アメリカやヨーロッ
パで此の種のプレイが盛んである
ことが、しばしば耳に入ります。九
月号の皆川のぶ子さんの「鞭の線
に描かれて」を何度も何度も愛読
しました。小生も皆川さんの奴隷
になりたいと思ひますが、よろし
く御願ひ致します。私の性質はマ
ゾ的傾向が強く、自分から云つて
可笑しいでしょうが、女性に絶対
服従することは間違ひありません

どうか御文通を御願ひ致します。

(小林景司)

責められる女、責められる場面八態

略号
(ふう)

北原純子画『風流女体アラベスク』
大判判印画紙(タテ十八糎ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

○ 私がKKを愛読するようになったのは極く最近のことです。サラリーマンとして社会に一步を踏み出したのも最近のこと、それ以前四年間の学生生活中は、KKの存在を全く知りませんでした。又、周囲の関係で私のアブノーマルな傾向は影をひそめておりました。で、私には四年間のブランクがあつた訳ですが、サディストとしての私の空想は、あらゆる姿態を描き続けて参りましたので、最近、KKを始め手にした時も、別にどうという感じも起きませんでした。ただ、やつとブランクから解放されたというより、眠つていたサドの意識を取戻すことが出来たといった方が妥当かも知れませんが。私は幸か不幸か常に空想だけでした。そこで九月号の「女性志願者の夢」の中の、空想だけの

マゾ云々……とあるのを読むに及んで、私は空想だけのサドか、と疑い始めました。これは実際にマゾの女性を目の前にしてみなければ、私自身ではどうも解決出来ぬ問題のように思われました。しかも最近、前述したブランクの故かどうか分かりませんが、私のサディストとしての傾向も幾分か弱まり、従つて空想力も貧弱になつて参りましたが、以前の空想がかなり荒唐無稽なものが多かったのに反して、今では現実味のある空想をするようになりました。という事は、とりなおよさず空想力の貧困ということに繋がるのではないでしようか。このような常識的な空想力をもつて小説やイメージを書いたところで、読者諸氏には催眠薬としての役割を果すに過ぎません。あの「潰滅の前夜」の素晴しいストーリーは、一体どうして出来るのでしようか沈滞気味のサディストに刺戟を与え「空想だけの

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

ハ—潰滅の前夜—より（詳細解説は本誌九月号、十月号にあり）

（大中判印画紙）焼付 八枚一組 八百円（送共）

「サド」かどうかとも認識させて呉れるような女性からの呼びかけを希望して拙い筆をとりました。

（東京 大川生）

私は八月号に掲載して頂きまして洋装マニアであります。又、ここに私の好みを少しく述べさせて頂きます。前にも云っておきまして、首飾りと耳飾りに非常に興味を持っており、男性ではありませんが、これ等のアクセサリを沢山集めて、何時も家にいる時は身につけて楽しんでおります。その中で好きなのは、三連の真珠の首飾り、ピカピカ光った水晶の首飾り、それに赤い大粒の緑玉の首飾りが特に好きです。耳飾りはネジを強くしめて、両耳に苦痛を受けて被虐の味わいを楽しんでおります。そして鏡に写る自分の異様な姿をじっと見つめているのです。

奇巧の写真や挿画には余りこの様なアクセサリを上手に使っていないのが残念です。そこで私の所見を申し述べましょう。（一）耳飾りのネジをしめ上げ苦しみもがいている洋装の女性（二）耳飾りを鼻につけて同じく折檻している所（三）上半身を裸にして乳頭に耳飾りをはめ責め抜く場面。特にこの場合は上衣を着けないため美しさが減少するので絶対、首飾りをつけること。又、これ等のアイデアも他の責めと併用すれば尚、効果がありましよう。例えば算盤の上へ坐らせるとか、梯子に縛りつけるとか、天井から吊り下げると云う様に、正面からはつきりと責めの苦しみを分るような工夫をこらして頂きたいのです。洋装といっても飾り気のないブラウスなどでは意味がななくちよつと見て可愛い感じのするものでなければなりません。それがために、ボタンやリボンなどで飾りたてた美しいフレヤーやギャザーのあるワンピースが一番だと思えます。その上に先に申しました首飾りと耳飾りを着ければこの上ないサドとマゾの感じが出るかと思えます。このような写真でグラビアを飾られることを、洋装マニアの一人としてお願い致します。（大阪 森田二郎）

内田様、お手紙戴きましてありがとうございます。先生からお便り戴き夢のような嬉しさです。是非共、ヘコとして使って下さい。一生のお願いです。先生の思っている居られるほど若くはありませんので、使用してもらえらるかどうか心配ですが、正直にお答えすると年令四十五才で現在、漁師です。お返事お待ちしております。（豊橋 SH生）

十月号の奇巧を拝読して痛感することは「縛られた女優たち」の写真、「お加代源三郎旅日記」「和装教室」「残酷芸術展覧会」等々の記述と、これに「お加代源三郎旅日記」「吊し責めの実験」「和装教室」などの挿画は何れも趣味を唆られた。特に「吊し責めの実験」の山田豊子の吊し責めと、「和装教室」の紫矢耕女の縛られた挿画を切り抜いて永く保存することにした。奇談倶楽部員総会で「君の吊り責め実験」の記述よりも、挿画の方が余り程優れていると好評されたのには頗る痛み入った。今後とも良いものを書きたい念願ですから、マア氣永に御期待下さいませ、読者諸兄にお願いする一方、編集同人諸氏に厚く御礼申し上げます。（岸本青柳）

初めて奇巧を愛読する者ですがどうぞよろしくお願い申し上げます。九月号にて真崎伸一さんの「女性志願者の夢」を拝読して身に余るものがありました。私もその様な類似の事もあり同じ心を寄せる者です。姉妹の中に育てられた私ですが、このような文を読みつつ私にもこのような夢があればとも思っています。女性の中で育ったので声や動作も女性に類似しているといふ云われまします。どうかこのことについて続いてお便り下さい。御待ちして居ります。では次回の文をたのしみにしています。（奈良 高田生）

◎次号の本誌は十月中旬発売です

本誌は今後毎月中旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、上旬頃までに誌代のお送りを願います。

はじめに御便り致します。私は二十三才の男性です。私が特に興味を持つているのは、禪についての記事で、私自身はいつも白の六尺禪を締めています。いつか本誌で拝見しましたが、男性の下腹をグツと締めあげ、ふくらみが出ているのはよいものだと言われた女の方がいました。私共、男性にとつては女性の禪姿ほど魅力的なものはありません。今まで女性の方の禪の経験談を色々本誌で拝見致しました、禪クラブを作られた女学生の方、ワンピースの下に赤い禪をしている方、等々。これ等の記事を読むたびに私は胸がどきどきしてくるのです。読者の皆様のお便りをお待ちしています。

(京都 阿部光延)

○一禪亭雑誌は読者通信でも絶賛されている通り、最近号での出色でした。是非、続編を発表して下さい。特に新しく入亭させられた

新人のヘコだけが、強制的に出場させられる公開競技や、変ったプレイのことなどを更にくわしく発表して下さい。(カムサツカ体操とはどんなものですか、機会があったら発表して下さい)内田氏の文字通り迫真的なこの傑作には、唯々感嘆と興奮を禁じ得ません。しかし文中、未だ年若い可憐な少年の弥太吉が裸のまま人間馬にされ、嚙を喰まされ尻を鞭打たれ全身汗とあぶらにまみれ泣きわめき乍ら走り続ける場面は、その光景がありありと見えるようでした。が、余りに可愛想で読みかけの頁を思わず閉じてしまいました。そして若し其の場に自分がいたならば疲れ切っている弥太吉を静かに寝かせて涙や汗を拭きとってやり、ミミズ腹れも痛ましく腹れ上った左右の尻に冷たいタオルをソツと当ててやり、烈しく震えている少年の肩の上に手をおいて労ってやりたい……などと取りとめもないこ

とまで迷想してしまいました。(涙腺過剰と笑う勿れ、心に画く楽しみを知ることは、私も同好の諸兄と全く交りはありません)内田武雄氏は私の推量では三月号の「下関H・T様」のような気がしますが如何?ともあれ今後とも御健闘を祈ります。それから九月号では、私の毎月心待ちしている山口幸一氏の作品が出ていたので繰りかえし拝見しました。此の方のものとしましては始めての時代物、そして相当思い切ったことを書かれましたが、少しも血なまぐさい感じをさせないのは、さすがだと思いました。しかし、美少年の死。それが如何なる形で起るうとも、これ程痛ましく心を暗くさせることはありません。勿論これは私感の価値を動かすことは全くありませんが、この方のものならばやはり現代物で内気で気性のやさしいそしてチョッピリ「エディプス・コンプレックス」を匂わせている美少年が登場しないと寂しい気が致します。「美少年処刑の図」を読んで思い出したのですが往年のフランス映画の傑作。にんじんでは、終りの方で少年が納屋で首をくくって踏み台を蹴り、危機一

発で父親に助けられる処がありましたが、正に「にんじん」になりきった名優演技でした。その子役の名は、ロベール・リナン。今でも忘れた頃に上映されることもあります。同好の士の一眼をおすすめします。近頃、再びなかなか勇ましい風俗誌が出ていますが慎重な態度を続ける奇クの方が遙かに好感が持たれます。今後の健全な成長を心から祈ってやみません。

(東京 SK生)

○奇ク十月号拝受、ありがとうございます。相変らず四馬孝氏の彩筆には魅了されてしまいます。縛られた女優たちのスチール写真は今月号は素晴らしく鮮明ですね。来月号もこの調子で載せて下さい。両氏に深謝。グラマ・ガールのニエースタイルは、どうせ水着を半分濡らすのでしたら、海女のように全身ずぶ濡れの緊縛スタイルの方がよかつたのではないでしょう。か。北原女史の画は、あどけなさがあるが、鎖夏の清涼剤として好感が持てます。私が一番楽しみにしていますのは、やはり何と申しまして読者通信です。愛読者の動

向が面白いからでございませう。この頁が拡大されたら、きつとより多くの読者層に呼びかけるチャンスに恵まれ、奇巧の発展の上にプラスになることと存じます。また編集部で加筆訂正などなるべくしてあげて、拙文の方が思い切つて通信に投稿出来る道を開いてあげられるのも一方法かと存じます。甲斐氏に御礼申し上げます。事情好転いたしました節には、再び筆を執つて頂きたいものばかりです。特に氏の「……関するノート」シリーズは一番、文獻的に好読物で期待しておりましただけに残念です。柳沢吉保様、玉稿誌上で拝見また私の口面を期待されて居られる由、嬉しく存じます。四馬氏、北原女史程ではありませんので遠慮いたしております。若し御希望でしたら、御礼のしるしに私の拙い画稿贈呈いたしたいと存じます。最近、某大病院で気管支鏡検査を拝見いたしました。大変苦しい検査です。患者さんが気の毒な位でした。蛙の口から麦藁を挿入するようなものですからね。貴殿も御存知でしょうけれど、その中に拙稿に纏めてみたいとも考えております。私自身、体験者でございませうから、その節にはまた御批

評下さいませ。芝原修様、私に御関心を御寄せ下さいませようですが、私は東京附近に居住致しております。お目にかかれたらどんなに楽しいことでしょう。アドレス御知らせ下さい。近藤一様、お便り差上げようと思ひ乍ら御無沙汰致してすみません。私の再登場に關心をお寄せ下さいまして深謝。御期待に沿いたいと努力いたしております。最後に編集部の皆様へ——毎号、好読物揃いで、この種の文獻誌としては最適、飽くまで地味な活動が望ましいと考えております。一層自重されて読者層の限らない期待に沿われますよう、十一月号を期待申しあげて筆を置きたいと存じます。(南川和子)

御無沙汰致しました。早や真夏も近くなり毎日雨降りのこの頃でございませう。八月号の白盞さんのシリーズ楽しく読みました。それに加えて牧さんの「お腰アンケード」は、暑さに元気のなくなつていた私に一層の力を与えて呉れたようで大変うれしく思ひました。これから先も続けられることを希望します。滝れい子さんの画は私も大好きで、私の好みの色々を巧みに表わして下さると思ひま

す。先日、お送りしましたつまらない想い出みたいな文章、載せて貰える価値がありましたならばよろしく願ひします。夏になって浴衣姿や白いブラウス等に、黒や紺のスカート姿の婦人の方々が見られるようになります。私は普段着の姿に氣を引かれます。若

◆新版マゾフォト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフォト。本来、某氏の求めにより個人的に作成したのですが、特に御希望の方へのみ焼増いたします。尚従来分譲中のマゾフォトは全部、分譲打ちりになっております。

- | | |
|---------------|---------|
| 第一組 凌辱篇 | (略号 ま1) |
| 大判印刷画紙焼付、五枚一組 | 七百円 |
| 第二組 屈伏篇 | (略号 ま2) |
| 大判印刷画紙焼付、五枚一組 | 七百円 |

失礼しました。

(兵庫 福本時依)

九月号では僅かに藤山秀緒氏の壮烈、大和撫子を以て渴を癒すのみで切腹物の夏涸れであった。私は現代物の切腹は余り好まぬので折角乍ら頂きかねる。法谷氏の切腹曼陀羅第三話の出現を期待する。小生の切腹随想がかなり大きく取扱われたのは嬉しい。望むらくは美しい武家の婦人達が白無垢姿で、思い思いに腹切る様の挿画があつたらと思つた。読者通信には切腹物が一文も無かつたのは淋しい。燈火親しむ秋ともなれば津島比呂史、瀬川泰子等の数多くのベテランの雄筆を大いに期待したい。浜田佳子さんに俄然、人氣集

新作切腹写真『女体自決悦虐図』

(略号 えず)

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大判判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

る?このようにマニア達は相互の親睦を渴望している。男女を問わず切腹マニアの方々は、御便り下さい。

(兵頭庫一)

○ あなたの通信拝見致しました。

あなたが神戸なので御逢いすることとは中々に大変だとは思いますが、せめて文通だけでもして下されなさい。奇巧のあることを知らない前は、この自分の変態的性質が自分だけのようには思え、一人考えこむことがしばしばありました。しかし案外と女装マニアが多数おられるので安心しました。

私はまるでヒロポン中毒者のようにいても立っても居られなくなつてしまふのです。特に絹のあのすべすべした感覚を感じると、女にでも、なつたように思えます。私は女装に必要な、ありとあらゆる物を集めました。着物(イブニングドレス、支那服、和服)も皆、サテン、ナイロン、りんずと絹物を

ばかりです。そしてそれ等を着ては自縛をして自分をなぐさめております。東京都内の方で女装した私を縛って下さる方は居られませんか、それには縛って下さる方も女装マニアで女装して責めて下さい。縛りの責めでしたら、どのような責めでも御受け致します。そして猿ぐつわもしっかりしたものを下下さい。では高峰さん、又女装マニアの方々の御返事を御待ちしています。御便りは代々木局止で、毎月二十日から三十日の間に到着するようにして下さい。

(東京 山里鉄次)

○ 奇巧九月号拝見致し、小生マゾヒストの一人として「鞭の線に描かれて」の一文を寄稿せられた皆川の子様に、心からなる崇敬の念を捧げます。サラッとした軽快な筆致で書かれていることが、サジストの告白記として一層の効果

世にサドの女性もマゾの男性も案外多いようですが、その実際の交流となるとなかなか困難なことと思ひます。我々の日常生活は常識と慣習の世界に閉じ込められております。そして一般の通念からすれば、その枠内にいる限り健全であるといわれます。しかしその単調な繰返しは、人生を無味乾燥なものに陥し入れるのです。多かれ少かれ誰でもその退屈さを味わうでしょうが、体中にアブノーマルな血の多く流れている者程、その感ずる矛盾は大きい筈です。サドマゾの交流が、たとえアブであるうと何であらうと、そこから自己の生命の充実感と躍動とが感ぜられるなら、あくまで善であると私は信じます。ただ自分の環境を全く無視したり、四六時中その観念にとりつかれていたり、又そのために生活自体にひびが入るといふことは、勿論避けねばならぬことです。その意味での自覚、節度を守ることはアブな人間にとって、

絶対必要な前提条件だと思つております。プレイが行われる場合、肉体的加虐には勿論ある限界が守られねばなりません。かと云つていい加減な仕打ちでは、お互の興味をそぐことになりません。丁度プロレスが、いかにも真剣そのものの如く振舞つていても実はシヨウであり、シヨウであり乍ら同時に真剣であるという、あの境地が望ましいと思ひます。それには、お互の呼吸がぴったりとマツチしなければ、チグハグなことになつてしまひます。あらかじめ心伝心のうちに暗黙の諒解がなされてその諒解の範囲内ではプレイ中いかに被虐者が憐みを請うても断乎として責め抜く処に、一層の妙味が湧いて来ると思ふのです。私はこのような状況の下に、気高き女王様の一挙手一投足に自分の全神経を集中させて御意に叶うべく振舞い、しかも尙、御意にそい得ずして罵倒せられ、その鞭下に呻吟することによなき生甲斐を感じ

女体切腹構成案図譜

(略号切腹)

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組 千円 (送共)

ずるものです。皆川のぶ子様初め
嗜虐の諸姉、このような小生に何
かしらの興味を御持ちになられま
したならば、何分の御沙汰をお願
い致します。(東京 吉田慈一)

○

十月号拝見、復刊以来、もう二
十冊近くも出ているのは全くとお
どろきです。最初はとうせ長続き
はしないだろうとタカをくくって
いたのですが、途中で休刊しなが
らも根強く続刊されている御努力
には心から敬意を表します。それ
から、この種雑誌には何度何度
も題名を変えたり内容を変えたり
腰の落着かないのが多いのですが
終始一貫、奇譚クラブという同じ
題号で出されているのも好感が持
てます。どうか、以前のように
充実した大冊として私たち読者を
喜ばして下さる日の一日も早から
んことを祈ります。さて、十月号
では「縛られた女優たち」の京マ
チ子が馬上で縛られるシーンは素
晴しい写真でした。口にくわえた
縄や前手しぼりの縄にやささか緊
縛さが物足りないようでしたが、
それは別として、なにしろ美しい
写真でした。九月号で嵯峨美世子
さんが「ワイド映画の縛りシーン」
の中でこの京マチ子の「地獄花」

を解説しておられるので余けい興
味が深かった。同じく口絵ではグ
ラマー・ガールのニュースタイル
で実写写真がのったが、こういう
モデル嬢の写真は毎月少くとも二
頁はのせてもらいたいものです。

復刊号では以前に比較して、こう
した写真が大変少くなつたのを淋
しく思うのは私一人ではないでし
よう。この四枚の写真はポーズと
いい表情といい全く素晴らしい。只
この中で二枚ぐらいは猿ぐつわを
かましたものを選んではどうだろ
う。お加代源三郎旅日記は久々の
絵物語で楽しかった。藤木仙治氏
は中々腕達者な人で絵も文もうま
いのだから毎月、こういう絵物語
で目先の変わったものを考えられて
私達の目を楽しませてほしい。近
藤一氏の「苦しみを求めて」も好
ましい読物、この文章でもう少し
生活が描かれていたら嘗ての古川
裕子さんの作品に近いものになっ
ただろうにと残念。しかし、とに
かくにも私たちの夢を代弁して
くれた点に於て筆者に感謝しよう
本月号で「終戦奴隷」「製糸工女」
「美容病院」の三大作を掲載され
たので、この号を近來にない素晴
しい月だったと感ながら喜んでい
る。鴉嘔吐夫氏の翻訳「痛められ

し桃の実」毎月一篇位は、こうし
たサディズムの翻訳は是非欲しい
ものだ。余り多いと鼻につき易い
が、鴉嘔吐氏の筆は嫌味がなく流暢
に書き流されていて好感が持てる
この分が完結しても引続いて載せ
てほしいものである。今月は私の
気に入った作品が多かつたので、
思わず讃辞ばかりになつてしまつ
たが時折低調な月があるのは残念
でもあり、又、一層の発展と充実
を願うものである。

(青森 熱狂居士)

○

乗杉貴代子様、いや、ダイアナ
夫人と申しあげるべきでしょうが
十月号の読者通信で貴女の御健在
を知り、文字どおり、おどろき上
つて喜びました。僕にとって、ダイ
アナ夫人こそは、理想の女性像に
他ならないのです。未亡人期——
待望の——を御執筆の由、大いに
期待いたします。貴女の奇巧に対
する御意見は全面的にサンセイで
す。この様な事は出来るだけゼイ
タクに、そして泥くさくなく、あ
くまでもシツクになされるべき事
と信じているからなのです。

(東京 麻生保)

○

もう再び見ることがないので

ないかと案じられた奇巧が新しい
装いのもとに地味な息吹きを始め
てから早いもので三年になるんで
すね。私の、いや私達の秘密の本
箱がそろそろ一杯になつてしまふ
ところまでやつて来ました。二列
の一番左にあるのがバルカンクリ
ーグの載つた創刊号ともいうべき
一冊なんです。それ以前の蒐集は
型が違うので別に保管してありま
す。全部で六〇冊を超す程になり
ました。大判時代の奇巧を探し求
める苦勞から考えてやはり奇巧の
保管に細心の注意を払つてよかつ
たと思つています。読者通信で二
三度紹介された東京神保町の書店
へ行つてごらん下さい。一四〇円
だった特大号は二五〇円でも買え
なくなつてゐるのです。古本屋へ
売ろうとすれば五〇円にもならぬ
奇巧に三〇〇円からの値がついて
いるのですから恐ろしくなります
よ。千葉の浜田佳子様、御希望は
叶えられたのでしようか、私はま
ず貴女の願いは無理だろうと悲観
論を持つてゐるのですが。豊富に
市販されてゐた頃には思いもかけ
なかつた奇巧の入手難は今後は更
に加速度的に増されると思ひます
同好の士として互助の方法を考え
たいものです。私は二十八年一

月号を二部持っていますから御入用でしたら差上げます。グラビヤは川端多奈子（今はどなたの夫人になつていらつしやることやら）が縛られているフोटです。私がお送りした記事について一言申し上げたいことがあります。「マツトに生きる夢」のトレーニングの図は後手の縛りでは困ります。あれでは重心がとれませんし、自転車からおりることができない筈です。ハンドルを握った手首をハンドルに固定し、足首もペダルに固定するわけです。「苦しみを求めて」(2)の図は本文とズレがありますね他の方々の文の中にも時折このズレがありますが、どんなものでしょうか。（東京 近藤一）

○ 我が愛するKK、私も前から色々なプレイを行つて居ります。特に私の恵れているのは美しいサディストが居ることです。彼女はバレエをやっています。彼女の退ましき体で私を責めつけるのです。夏の暑い日、彼女のホルセットやパンティをつけシユミーズやパティコートは何枚も着せられ其の上、冬の洋服を着て縛られます。もちろん下穿を二枚も三枚も口に押し込められ身もたえする私を椅子や

寝台に縛りつけ、そして何回もターンするので。結婚の約束をしながら浮気をしたのだというのが私の責められる口実です。そして今ではそれだけでは物足りなく誰か女性のマゾヒストを浮気の相手としたいと思っています。誰か女性で女性から縛られ責められたい人は此の通信欄に住所を知らせてもらいたいです。勿論私も縛りに絡まれるのですからお互いに二人して話し合つて後の事です。ともかくサディストはバレリーナでもあり特に秘密を守れる人を望みます。そんなわけで私も住所はふせます。（樋口芳男）

△編集部より▽

本誌にては特別にモデルの募集は致しておりませんでした。昨年十二月号の「編集だより」等を見られてモデル採用についての照会を度々受け取りますので、一括してお返事しておきます。モデル志望の女性の方は身長体重路歴記入の上編集部宛にお送り下さい。折返し詳細についてお返事いたします。採用の方は報酬については特別に優遇いたします。御希望の方はふるって御応募下さい。

「編集後記」

○今月号でもって本誌も愈々通刊第百号を迎えました。百号突破記念として種々の企画を考えておりましたが、時節柄何かと支障があつて実現することが出来ず甚だ残念でした。

○然し本誌だけは確実に毎月出してゆきたいものです。これも頁数その他不満だらけなのですが、線香花火的なやり方は永続きしませんから、地味ながら長い目で見て下さるよう願います。

○本誌も復刊以来、早いもので二十冊目に達しました。白い表紙も大分馴染んできましたが、このあたりで新しい形式に変えるもの目先が變つて面白く考えます。よい案があればお知らせ下さい。

○最近東京にて毎夕新聞その他に（M紳士との交際求む当方S女性）といった広告を出しているアブ売春社が本誌の読者通信欄をも利用している気配があるので注意するようにと、三の読者の方から忠告を受けましたが、若し被害を受けられた方がありましたら御一報賜りたく存じます。

○さて、本月号では滝い子氏の久々の傑作が巻頭を飾りました。豊富なアイデアを駆使してサドマゾ取り混ぜ十数枚に亘り揮毫下さったのですが、誌面が十分

でないのが今後引続いて分載してゆこうと思ひます。同じく精緻なタッチで好評の四馬孝氏からも素晴らしい作品が送られてきています。涙のダイヤモンドの残りの分も近々出来上るそうですから、どうぞ御期待下さい。

○秋冷と共に写真部も活躍を開始いたします。新しい感覚を新しいモデルへ吹き込んで皆さまを刮目させるに足る作品を完成しようと思ひ込んでいます。

○マゾ派にとつて誠に貴重な文献「ある夢想家の手帖」が沼正三氏によつて毎月欠さず掲載されていますがサド関係に於ても「手帖」の出現を期待する声の切なるものがあります。どなたか我と思わん者は名乗りを上げて下さいませんか。

○パンフレットに毛の生えたような、まことにささやかな刊行物ですが、よし絶対数は多くないにしろ、毎月切実に本誌の発行を待つて下さる熱心な愛読者、或は本誌により人生に生き甲斐を感じられる方のある事を思ひ、今後よりよき内容に育ててゆきたい決心です。

○読者の方々からの要望に対しての「一々の回答や編集の裏はなし等について申し述べたいことも沢山あるのですが、ここに与えられた誌面は余りにも狭隘です。で次号からは、何らかの形でスペースを貰つて膝をつき合せて語りあいたいと思ひます。